

転生と狐と魔法少女

隣乃芝生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生でもらった特典は人形作製技術に黄金律にサーヴァントセット？何か召喚された先にはどこかで見た不屈の魂を持った少女・・・貴女が私の御主人様ですか？

※素人の初投稿作品になります。クロスオーバー要素・神様転生・オリ主要素などが含まれますご注意ください。またこのキャラはこんなキャラじゃないとかそういう感じもあるかもしれません。

目次

プロローグ	1
召喚	11
強襲と迎撃	27
和解と涙	34
良妻狐と説明会	42
町と案内と一仕事	52
決意	62
日常編・特訓と子狐と朝食と	69
宴と誓いと	79
桜と喧嘩と友達	87
幕間・キャスターの日常	97

月と海賊とチョコレート・前編	106
月と海賊とチョコレート・中編	124
月と海賊とチョコレート・後編	142
パティシエと銀髪幼女	159
銀髪幼女と雑事諸々	177
幕間・それぞれの午後	191
三人娘と転入生	204
四人娘と周りの思惑	221
主と従者	240
番外編・高町家のクリスマス	255

夢と将来	260
問い掛けと魔法少女	276
初陣・前編	291
初陣・後編	308
幕間・アサシンの食卓	324
探索初日	333
サッカーと嫉妬と痴話喧嘩	361
大樹と後悔と	385
お茶会と会談	399
魔法少女と新たな出会い	419
騎兵	443
乱闘と大爆発と少女の出会い	467

プロローグ

『神様転生』という言葉をご存知だろうか？

生前の功績や境遇を神様が考慮して、はたまた神々の戯れで現世の魂を別の世界に転生させる・・・というものだ。

何故そんな二次創作系小説のテンプレートな事を説明しているのか？と思った貴方（貴女？） 良い質問です。

だって今私の前には・・・

『転生特典ルーレット』

なるものが回転していて

「さあさあ！景気よく決めちゃって下さい！」

とか囃し立てる神様がいるのですよ。

何故こうなったのか・・・それは私が仕事の帰り道に事故に巻き込まれた事から始

まりました。直ぐに救急車で運ばれたものの搬送先にて治療の甲斐なく私は人生に幕を下ろすことになりました。

さて、このまま三途の川を渡って閻魔様にお会いするのか、はたまた地獄行きか天国行きかと死後の世界を思っていたところ思わぬお誘いがあったのです。

それは、私が子供の頃からお世話になっていた近所の神社に奉られていた神様でした。

子供の頃から私を見ていた神様は、私の死を不憫に思われたらしくご自分の力で私の別の世界に転生させることにしたそうです。

さてこの神様、神主さんの家によく入り浸っているようでその際に現代日本のサブカルチャーを『学んでいた』との事で他の神様方とも東京の某電気街や年二回の聖戦にも『勉強会』に行かれていらっしゃるらしく・・・そうした関係上私の転生も、

「こういう事は様式美に従わなくちゃ!」

といった理由で二次創作系小説のお約束『創作の世界に転生』と相成ったのでした。なんでさ。

「いや〜でもよく読んでたじゃないですか、携帯小説とか漫画とか。好きでしたよね二次創作?」

でもまさか自分が経験するとか思わないじゃないですか。

「まあ現実問題貴方（貴女）がここに居て、今こうして転生の儀式を受ける訳なんですから。」

まあそうなんですが。

「さあ！このルーレットにダーツを3つ投げてくださいな。」

つまり自分の特典は3つだと？

「正しくは特典を3つ手に入れる『可能性がある』ですね。まあ3つとも外したら特典は無しで転生ですが。」

——死ぬ気であてます。

「死んでますけどね。まあ頑張ってください。今回は王道的に型月系の特典になってます。上手くいけば『王の財宝』『無限の剣製』『直死の魔眼』『約束された勝利の剣』とかを行く世界に合わせた形で手に入れる事ができます。因みに真ん中は全部です。」

ナニソレチート？逆に真ん中当たったら恐いわ。

「あとお約束でたわしと某ワゴン車も入れてます。」

いや何故入れた!？

「様式美は全てにおいて優先されるのですよ♪」

ドヤ顔が腹立つがまあいいです。やりますか。

「パージエ」

様式美はもういいですから！

—— 主人公投擲中 ——

・・・そんなこんなで無事3つ当てることができましたが・・・

① 「空の境界」より蒼崎橙子の人形作製に関するスキル

② スキル 「黄金率A」

まあ我ながら中々の特典だと思います。封印指定クラスの技術に黄金率。かなり来世に期待が持てるというものです。

③ サーヴァントセット「キヤスター：※※※※※」

・・・サーヴァントセット？

「お♪当たりですね。これは文字通り型月作品に登場したそのサーヴァントのスキルや容姿・技術に宝具をまとめて手に入れる事ができるんですよ。」

何かご都合主義というかなんとか・・・

「まあ欠点としてはその特典を得た場合は『人ではなくサーヴァントとして転生する』ことぐらいですかね。」

はい!?

「それではよい来世を〜」

——
変わっていく

——
組み込み、組み換え、組み合わせで『私』に特典が組み込まれていく。

——
同時に——

——
とある英雄の歩んだ道程を受け継ぐ。

——
その記憶を覚悟を後悔を痛みを経験する。

——
人に憧れ人に近付き人を知って人を愛し——

—— 最期には反英雄として人に討たれたその人生

—— それこそが特典を得るという事。ただで英雄たる者達の特典は得られない。

—— 「私」は「彼女」ではないけれど。

—— 「サーヴァント・キャスター：※※※※」として生きる覚悟はできた。

—— さみしい

—— おとうさんがじこでびょういんに、にゆういんして

—— おかあさんもおにいちちゃんもおねえちゃんもお店やおとうさんのところに
行ったりしていそがしくて

—— だからわたしは、なにもおてつだいができないから「いい子」でないといけ

ない

———だけどさみしい・・・さみしいよ・・・

その日も少女、高町なのはここ最近と同じく辛い日々を過ごしていた。父は仕事で重傷を負い現在も意識が戻らない。家も喫茶店を始めたばかりで、母も兄も姉も家事に仕事に学業に病院への見舞いと忙しい毎日である。幼い娘にはさみしい思いをさせないようにと願えど、日々の疲れやストレスといった物は、次第に家庭にも暗い影響を与えていた。

幼いながらに聡明な少女は、せめて自分が邪魔にならないように必死で家族の為に、いい子でいようとしていた。しかし、未だ幼い彼女の心が耐えきれなくなるのはもはや時間の問題であった。

そんな日の夕方のである。自分に与えられた部屋へ向かう途中にふと父の部屋に入ったのは。

今はいない父を思っってはわからないが、何故かこの時ばかりは父の部屋が気になったのだ。

彼女からしてみればいつもは温かい雰囲気のある部屋もどこか寂しく思えた。暗い気持ちのまま部屋の外に出ようとした時、机の上に置いてあった小さな小さな桐箱に目が止まった。

「なんだろう?」

「どうしたんだなのは? 父さんの部屋で?」

「にやあ!」

突然後ろから声をかけられ、驚きながら振り返ると兄である高町恭也が立っていた。

「すまん。気になったもんでな。」

「びつくりしたの・・・」

「ところでどうしたんだ? 何かあったのか?」

取り敢えず気を取り直して気になった事を訪ねてみる。

「あの箱は何が入ってるの?」

「ん? ああ、あれか。」

恭也は箱を手に取り中の物を見せる。

「うわあ・・・すごくキレイなの・・・」

「父さんが前に仕事先でもらった物らしくてな。かなり昔に貴族のお姫様が身に付けて

いたものらしい。」

「お姫様が着けてたの!? すごい・・・」

なのはが箱の中身に目を輝かせているのを見て恭也は自然と顔を綻ばせた。思えば最近はずいずいとおまじな表情を見なくなった。そんな表情を見たのも最後に見たのはいつだっ

たか。だから、

「なのは。これを着けてみるか？」

そんな提案をしたのかもしれない。

「いいの!?!」

「ああ。きつと父さんもそのつもりで出していたんだろう。」

妹の髪にそれを飾り付けると一層笑顔が増した。

「えへへ・・・」

「似合うぞなのは。」

「ありがとうなの!おにいちゃん!」

「さあ、そろそろ夕飯だ。行こうか。」

「うん!お母さんとお姉ちゃんにも見てもらおうの!」

そうして夕食に二人で向かおうとしたとき。

「?」

ふと、左手の甲に何か電気のようなものが走った感じがした。

「どうしたなの?」

「ううん。なんでもなかったの。」

なのはは自分の左手を見たが何も変化はなかった。

そうして二人が出ていき、部屋には再び静寂が訪れる。机の上には小さな桐箱が残されていた。

高町恭也は知らない。これがかつてとある一人の反英雄が身に付けていた別の世界では「聖遺物」と呼ばれるものであり、触媒であることを。

久々に賑やかな食卓の声が遠くから聞こえる部屋で
小さな小さな桐箱の蓋には

『天女の鈴』

と書かれていた。

召喚

S i d e キヤスター

『では良き来世を』

その言葉を聞いた直後の特典のインストールが終わり、私は気付くと何も無い空間に佇んでいた。

「もしかすると、ここは仮の英雄の座なのでしょうか？」

と、すると転生もとい召喚まで今暫くの時間があるようです。

「なら、今の内に色々と確認しておきましょうか。」

まず、自分の姿を確認してみる。

「うわ、本当にキヤスターそのままって感じですねえ。」

露出が多いその礼装だが、余り違和感を感じなくなっていた。

「まあ特典で『彼女』と融合したようなものですからねえ。私は貴女、貴女は私ってやつですかね。」

さて他にも色々見せんと。えーとステータスは・・・

クラス：キヤスター

真名：※※※※※

属性：中庸・悪

筋力：E

耐久：E

敏捷：B

魔力：A

幸運：D↓A（特典により強化）

宝具：B

※なお、契約者や自身の鍛練によって変化があります。

クラス別能力

陣地作製：C

保有スキル

呪術：EX

変化：A

追加特典

黄金律：A

人形作製：A

・・・まあわかってましたけどね。見事にピーキーですねえ。スキルはとても強力なんですから、やはり支援に回るといたしましょう。まだ見ぬ御主人様・・・紙装甲ですみません・・・

宝具も効果は原作と違い、仲間にも影響を与えられるようですからこれでもう『つかえねえ』呼ばわりも卒業です。

さて、あとは軽く技の練習でもしながら身体を動かしておきますか。

——アレ？ 転生先ってどこなんでしょう？

キャスト side out

高町家の父、高町士郎は凄腕の剣術を遣う一流のボディーガードの仕事をしていた。

その仕事の都合上、打ち倒してきた悪漢無頼の輩は数え切れない程である。

今回こそ、とある巨大な闇組織との戦いで深手をおい昏睡しているが、その卓越した手腕で時に依頼人を家族を狙う不屈きな輩から守ってきたのである。

さて、そんな高町家であるが現在も高町士郎の意識は戻らず日々忙しい毎日を通り過ぎていた。先日の一件以来、お気に入りとなつた髪飾りの鈴を鳴らしながら彼女——高町なのはも変わらず、公園や家で時間を過ごしていた。

そして、そんな状況を見逃さない者達がいた。高町家の剣士達により敗北し密かに復讐を誓っていた者達である。

はつきりと言つてしまえば、三下もいいところの小悪党である彼らであるが、高町家により受けた屈辱を晴らす機会を待ち望んでいた。

そんな中で高町士郎は病院で入院。高町恭也もその妹、高町美由希も健在では有るものの多忙により疲れがでていくという絶好の機会を得た彼らだが、正面から挑めば半ば人外に片足を突っ込んだ高速の剣術により前回の二の舞になるのはわかりきっていた。

だから捌め手を使うことにしたことも——その対象が家族皆から愛されながらも一

人、無防備に公園の遊具で遊んでいた末の妹が狙われたことも、或いは当然の流れであつたのかもしれない。

S i d e なのは

どうしよう。

「高町士郎の末の娘は預かった。返して欲しければ——」

「公園であそんでいたらしらないこわい人たちがきて、いきなりもちあげられたとおもったら、しらないくるまにのせられて・・・そのままわたしは古いけど大きな倉庫につれてこられました。」

「おつと警察には連絡するなよ。大事な大事な妹を傷物にされたくなければな。」

「しらないおじさんがでんわをしている。でんわの向こうから、よくきこえないけどお

にいちゃんのおこった　こえがここまできこえてきた。

「さて、お前達もうすぐ高町恭也達がここに来る。」

「いよいよツスね。」

どうしよう。おにいちゃんもおねえちゃんもきつとたすけにきてくれるの。だけどきつとケガしちゃう。

わたしのせいだ。わたしがちゃんといいい子でいなかったから、はやくおうちにかえらなかつたから――

「その前にこの娘には、残念な事になつてもらう。」

！――やだ――！まわりのこわいおじさんたちが近づいてくる・・・いやだ！

いやだ！やだ！やだ！

「ふん。精々我々の退屈しのぎになるがいい。」

――たすけて！

だけどまわりはこわい人に囲まれていて

きつとこの建物のまわりはだれもいなくて

でも逃げなくちゃ！じゃないときつとこわいめに合わされる！――そんなのはい

やだ!!

おとうさんにあいたい！おかあさんにあいたい！
おにいちゃんにあいたい！おねえちゃんにあいたい！
また、かぞくみんなでいっしょにいたい！

——だから、だから——

「——だれか——たすけて!!」

— s i d e キヤスター

「!?——聞こえた!!」

——声が聞こえる

——助けを求める声が

——必死に「生きたい」と助けを求める呼び声が

この座についてどれ程時間が経ったのか。

そんな私に初めて届いた必死に助けを求める声。

まだ幼いながらも必死に生きようとする声が。

どこの誰かは存じ上げませんが

「お待ちしておりました！御主人様!!」

・・・そのまえに、私の御主人様に手を出すような輩はコロコロしちゃいましょう♪

Side Out

「——ツいたい!?!」

わたしがたすけを求める声をあげたあと急に左の手の甲にいたみのはしりました。

「?」

左手にはさつきまでなかったはずのキレイなもようがかんできました。そして

『その魂、ちよお~~~~と待った! 暫く、暫くう!』

「なんだ！だれだ！」

「どこに居やがる！」

そんな声がきこえてきたのです。

『何処の誰とかぜーんぜん存じませんが、その慟哭、その頑張り。他の神さまが聞き逃しても私の耳にピンとききました！』

『宇迦之御霊神もご照覧あれ！この人を冥府に落とすのはまだ早すぎ。』

『だってこのイケメン魂、きつと素敵な人ですから！ちよつと私に下さいな♪』

とたんに目の前に教会のステンドグラスの様なものが浮かび上がりました。

「な!?!何が起きてやがる!?!」

すると突然ステンドグラスが砕け散ると同時に風が倉庫に吹き荒れたのです。

「にやあああああ！」

思わず目を閉じると同時に倉庫のあちらこちらから悲鳴が聞こえました。

「うわあああああ!?!」

「なんだてめえは・・・ぐあつ!」

「ヒイツ!?!来るなあ!」

風の音に紛れて何かがぶつかつたり、倒れたり壊れたりする音が暫く続くとあのこわいおじさんたちの声が聞こえなくなりました。

やがて風が止んだのを感じて、目を開けて周りを見るとそこには、

めちやくちやになった倉庫

あちらこちらに倒れたこわいおじさんたち

そして——こちらに向かって佇む女の人。

きつとわたしは、この光景を生涯忘れないと思う。

倉庫の割れた窓から射し込む月明かりに照らされた、蒼い着物のような物を身に付けて、まるで狐のような金色の耳と尻尾を持つ不思議な女の人。

まるで絵本のお話みたいに現れてわたしを助けに来てくれたわたしのヒーロー。

ただ、佇んでいるだけなのにまだ子どものわたしでも目の前にいる女の人の中で圧倒的なまでの力が渦巻いているのを嫌でも感じ取れました。

そんな時間が止まってしまったかのような世界の中で

やがて、女の方は口を開き――

「謂れはなくとも即参上、軒轅陵墓から、良妻狐のデリバリーにやってきました!!」

.....

「.....アレ?もしかしてドン引きされてます?」

.....

「えーと、パスが繋がってますし、貴女が私の御主人様ですか?」

.....

「……だ……」

「だ？」

「台無しなの——
!!!!」

と、思わず叫んだ私は悪くないと思うの。

うん。色々と思うところはあるのだけれど。

これがこれから先ずつと

私、高町なのはと一緒になってくれた私の英雄。

キャスターとの出会いなのでした。

S i d e o u t なのは

S i d e キャスター

呼び出されたと同時にパスが繋がった御主人様と思わしき少女に群がる輩を取り
敢えず打ち倒し！

いざ御主人様にご挨拶をと思いい改めてそのお顔を見て、この世界が何処なのかを知り
ました。

そのお顔と、そのお声・・・つまりこの世界は

『魔法少女リリカルなのは』ですね。わかります。

目の前で叫ぶ小さな御主人を見ながらこれからの展開に密かに頭を抱えるのであつ

た。

S
i
d
e

o
u
t

強襲と迎撃

騒ぐなのは宥めて落ち着かせたあと、周りに転がっていた誘拐犯を縛り上げてようやくお互いに話始めることができた。

「では、改めて私はこの度『魔術師』のクラスで現界いたしましたサーヴァント、どうぞ気軽にタ——もといキャスターとお呼びくださいませ。マスター」。

「は、はい！ 私は高町なのはといいます。その、助けてくれてありがとうございます！」

慌てて自分もペコリと頭を下げる姿と素直さにキャスターも笑みをこぼした。

「はい御主人様♪契約はここに。我が魔術はこれより貴女様と共にあり。よろしく願い致しますね」

その同性でも見惚れてしまいそうな笑みを浮かべるキャスターに、少しだけ見とれてしまったのはだったが、ふと先程から気になっていたことを訪ねた。

「えっとキャスターさん、御主人様ってわたしのことなの？」

「もちろんですよ♪コンな可愛くてイケ魂な御主人様に召喚して頂けるなんて、このタ——いえ、このワタクシ感激です♪」

「にゃああああー！」

言い終わるとともにいきなり抱き上げられて、なのはの顔が真っ赤になるが構わずに抱きしめる。

「でも、ご無事で何よりです。御主人様があんな変態どもに囲まれているのを見てワタクシ本当に驚いたのですよ？」

「お、下ろしてほしいのー！」

その言葉を聞いて、泫々といった感じで地面に下ろすキャスター。すっかり真っ赤になった顔を冷ましながら、なのはは改めてこのキャスターと名乗る女性を観察してみた。

綺麗な長い桃色の髪を藍色のリボンでまとめ、後ろで二つに分けた髪型。

大胆に胸元と肩と脚を露出した妖艶な藍色の着物。

しかし、そんな目を引く彼女の姿の中でも特に目を引くのが、頭の上で時々ピクツと音に反応する耳と後ろで左右にゆらゆらと揺れる尻尾であり、それが彼女を明らかに人では無いことを物語っていた。

(尻尾がすごくモフモフしてるの……)

思わず尻尾に目がいってしまうのは。その視線を受けて

「本来であれば御主人様の思う存分ワタクシの尻尾を堪能して頂きたいところなのです

が……どうか私の後ろにお下がり下さい。マスター。」

急に雰囲気を変えたキャスターに思わず目を向けると入口の方に向けて警戒しているようであつた。

慌ててキャスターの後ろに隠れるのは。

「かなりの速さで何者かが、こちらに向かつて近付いて来ているようです。この気配の消し方……かなりの手練れようです。」

その言葉を聞いて思わず、先程の恐怖心がよみがえり思わず着物の端を掴んでしまふ。そんな、なのはの頭にキャスターはボンと手を乗せ。

「ご安心下さい御主人様。このキャスター、例え相手が何であろうと御主人様をお守り致します。」

そう言つてからなのはの前に出ると、何も無い中空に手をかざし、何処からともなく鏡を出現させて自分の周りを回るように浮遊させる。

(まるで魔法みたいなの……)

一連の動作に目を奪われるのは。この日は、誘拐に始まりキャスターの召喚と余りに非日常的なことばかりだが、自分を守ろうとする目の前のキャスターの様子と魔法に思わず目を奪われてしまふ。

「?」

目の前にいる正体不明の女性に対し、身体が震える。

それは武者震いであり——否、生物としての根源的な恐怖である。

ここに来るまでに自分達に対し、足止めをしてきた連中等比較すること自体おかしい、明かに自分達とは違う存在に歯噛みする。

(何故、よりにもよってこんな時に化物じみた相手が!!)

とたんに先程の鏡の様な物が襲い掛かって来る。

その一撃を必死で避けながら相手のようすを探る。

桃色の髪をリボンで纏めた、やたら露出した衣装を身にまとった妖艶な女性。

しかし、その頭の耳と後ろに生えた尻尾が明らかに人では無いことを示している。

そして先程、中の様子を探ろうとした自分を吹き飛ばそうとした何かの術と、浮遊し今も自分に襲い掛かって来る鏡。

何より、こうして対峙するだけで伝わってくる相手が内包する力、触れただけで自分等蒸発してしまいそうな力の奔流に自分の身体が本能的に恐怖しているのが分かる。

ふと、奴と目が合う。

「よくもまあ有象無象の分際で、よつてたかつて私の御主人様に怖い思いをさせて下さいましたね？」

そして、目の前のナニカは自分達に向けて

「貴方達——楽には殺しませんよ？」

そう、処刑宣告を下した。

——勝てない。何をしようとするだろうと目の前のナニカに勝てる訳がない。

奴は、『貴方達』といった。であれば外の忍やノエル達にも気付いているのだろう。そして、おそらくこの事件の首謀者であろう『御主人様』とやらも奴がここで待ち伏せているからには何処かにひそんでいるのだろう。

(こいつが御主人様と従う相手だと・・・魔王か何かか?)

だが、例え相討ちになろうとも、大切な『妹』は返してもらおう!

「悪いが、ここで引くわけにはいかない!」

「・・・そうですか。ならこの場で・・・!!」

そうして、互いに決着を着けようとしたとき、

「いい加減にして!お兄ちゃん、キャスターさん!」

「なのは!」「御主人様!」

誘拐されていたはずの妹が無事な姿でそこにいた。

和解と涙

S i d e 月村忍

この状況は何なんだろう。

「誠に申し訳ございませんでした御主人様。」

「済まなかった。なのは。」

目の前の自分の彼氏と狐の耳と尻尾を生やした女性が謝っているのは、
「二人とも怪我したらどうするの!」

と、涙目で膨れっ面をした幼女。

うん。どうしてこうなった?

というか、なのはちゃん。無事で何よりだわ。

倉庫中には犯人とおぼしき連中が、縛り上げられているのだけど、恭也がやったとは思えないからあの女性がやったのかしら?

「女性」という所でまたか? またなのか? といった感情がわいてくるが、その辺の事情聴取はあとですることにするとして。

「なのはちゃん、良いかしら?」

取り敢えず、助け船を出す事にしましょう。

Side Out

「しかし、なのはが無事で良かった。」

何とか、なのはに機嫌を直してもらい、月村家に犯人を託してから恭也が安堵しながら呟く。

一時は、誘拐犯達が余り利口ではないタイプの犯罪者だった事もあり、最悪の事態が何度も頭に過つたのだが、こうして無事であることを喜ぶ事が出来た。しかし、まさか自分達以外の存在に救出されているとは思わなかった。

「だが、なのは。どうしてこんな遅くまで外で遊んでいたんだ？」

だがまずは兄として、家族として、どれだけ心配したのか幼い妹に伝えようとする。

「……ごめんなさ……」

「そこまではです。今の御主人様は大変お疲れです。先ずは休ませてあげて下さいまし。」
すると、なのはの言葉を遮りキャスターが口を挟む。

「む……だが」

「そうですね。桃子さんも心配してるし、早く戻りましょう。だけどその前に貴女は一体何者なのかしらっ？」

忍が、当然の疑問を尋ねる。自分達よりも先になのはを救出し、そして互いの勘違い

とはいえ衝突し、恭也を圧倒した。決してただ者ではない。

「私ですか？ワタクシは御主人様のサーヴァントであり、妻であるキャスターと申します♪」

「つ、妻!？」

「・・・ほう？面白い冗談だ。」

「にやあああ!!違うの!!」

返答もただ者ではなかった。

「え、ええとキャスターさん？でいいのかしら？」

「ええ、キャスターでも若奥様でも構いませんよ♪」

「ほう！だが、なのはは渡さん！」

「だから違うの!!」

そうして取り敢えず迎えるの車に向けて歩き出す。

「それでサーヴァントというのは何かしら？従者ってわけ？」

「そうですね。大体その様な認識で構いません。御主人様と共にあり、時に剣となり、時に盾となり御主人様をお守りするものですが、まあ詳しくはまた明日にでも。今日は御主人様もお疲れですし、どこか落ち着いたところでお話出来ればと。」

「そうね。私も一緒に聞いて良いかしら？」

「御主人様がよろしければ大丈夫かと。ええと・・・」

「ああ、私は月村忍。忍でいいわ。で、あつちが高町恭也。なのはちゃんのお兄さんね。」
と改めて自己紹介しながら、後ろで騒ぐ兄妹をさす。

「なのは、俺は認めないぞ。お前が結婚するにはまだ早すぎるー!」

「だから違うの!!まだ結婚してないの!!」

『『まだ』だと・・・そもそもアイツは女だろうが!』

「にやあああ!?話を通じないの!!」

「しかもこんな所にタトゥーまで!左手に印だど!?婚約指輪の代わりか!?お兄ちゃん許さんぞ!」

「違うの!!よく分からないけど浮かんできたの!!というかお兄ちゃん落ち着いて!!婚約指輪の代わりって何!」

半ば錯乱しながらなのはに問い詰める恭也。

「うっわ・・・重度のシスコンですね。」

「いつもはあんなじやないけどね。つてゆうか貴女の発言のせいでもあるからね?」

流石に見かねて、止めにかかるキャスターと忍。

「まあ落ち着いて下さいまし、お義兄さん。」

「お義兄さんだと・・・貴様にお義兄さんと呼ばれる筋合いはない!!」

「何で火にガソリンかけること言うの!?!というかお兄ちゃんも何でわかるの?」

「ああもう落ち着きなさい恭也!!」

「グハツ!」

取り敢えず忍により気絶させられ車に向けて引きずられる恭也。

「なんとか個性的なお兄様ですね。御主人様。」

「キャスターさんに言われたくないと思うの・・・」

そうして車に向かうなのはの背中に

「マスター。あんな風に、如何に家族といえ、言わなければ伝わらないこともあるのです。ご家族の為に我慢するのも大事ですが、マスターはまだ子供で居ていいのです。御自分の気持ちを素直にぶつけることも大切なことですよ?」

と、キャスターが声をかけた。

「え? キャスターさん?」

「大丈夫。御自分のご家族を信じて下さいませ。」

ふと、なのはの頭にある考えが過る。

「・・・キャスターさん。もしかして・・・」

「ささ、御主人様。お車に乗って下さいませ。」

言葉を飲み込んで車内に入り込むなのは。そんななのはの耳に

「・・・声が届かなくなつてからでは全てが遅いのですから。」
そんな呟きが聞こえた気がした。

暗い夜道を車がまばらに走る。時刻は既に夜の10時を過ぎ、辺りは街灯の灯りだけという程の暗さの中、二人の女性が連絡を受け玄関に立っていた。

車のヘッドライトを見るたびにハツとした表情でそちらを見、違うと分かると目を伏せる。

それを何度繰り返したか分からなくなった頃、一台の車がその家の前に近付いてきた。

目の前に車が止まり、中から息子が降りてきたのを見ると、彼女——高町桃子は息子に駆け寄つた。

「恭也!! 怪我はしなかった!?! なのはは? なのはは大丈夫なの!?!」

「恭ちゃん! なのはは!?!」

「ああ、大丈夫だ。大した怪我はしていないよ母さん、美由希。なのはも無事だ。」

そうして車からなのはが降りてくるのを見ると

「お母さ——」

「なのはッ!!」

駆け寄り胸に強く抱き締めた。

「お、お母さ——」

「大丈夫？ 大丈夫!? 怪我はしていない!？」

「うん。大丈夫だよ。あの——」

「ごめんなさい! ごめんなさい! 一人にしてゴメンね! 寂しい思いをさせてゴメンね! 怖い思いをさせてゴメンね! なのは——!!」

必死で、泣きながら愛娘をさらに強く抱き締める。

事件を聞いた時、生きた心地がしなかった。愛する夫だけでなく愛娘までと思い、全身から血の気が引くのを感じ、周りの人の声すら遠くに感じた。

その後に来るのは後悔、なぜなのはを一人にした? なぜ一人で外で遊ばせた?

なぜ——寂しそうな顔をしながら必死で堪えていたあの子を、仕事と忙しさを言い訳にして一人ぼっちにした?

「なのは! なのは! なのは! なのは! なのは!!」

良妻狐と説明会

S i d e なのは

「……ん」

……まぶしい。意識がハッキリしない頭でそんなことを考えたけど段々と意識が浮かび上がってきました。

目蓋をこすって目を開けると見慣れたベッドと机。

「あれ?……私の部屋?」

しばらく、部屋を眺めていると段々と昨日の出来事が思い出されてきました。

「そうだ、昨日帰って来た時にお母さんに抱き付いて、皆の前で沢山泣いてそのまま寝ちゃったんだ。」

昨日は本当に大変でした。公園で誘拐されて、もうだめだと思ったらキャスターさんが助けてくれて……

「そうだ、キャスターさんはどうしたんだろう?」

お礼もしなきゃだし、あの人（狐?）には聞かなきゃいけないことが沢山ある。サーヴァントとは何なのか、どうして私を助けに来てくれたのか、この左手の模様の事とか。

「たしか、昨日は家まで着いてきてくれて・・・」

「お早うございます。御主人様♪」

「にやあ!？」

突然、ベッドの横にキャスターさんが現れました。

「お・・・おはようございます・・・ビックリしたの。」

「申し訳ございません御主人様。驚かせるつもりはなかったのですが、寝起きの御主人様がかワイクてつい・・・」

「むう〜」

私の事を御主人様と呼ぶ狐耳の女の人——キャスターさん。あらためてその姿をみると本当に綺麗な人だなあと思うの。だけどお兄ちゃんも敵わないくらい強くて、とても優しい人。でも、昨日と違う所が一つあった。

「キャスターさん。そのエプロンどうしたの?」

「これですか? 桃子さんに頂きました。先程まで、桃子さんと朝ごはんを作っていましたので。」

「キャスターさん料理できるの!？」

「はい♪家事一通りは良妻としてのたしなみですから。」

そう言うと、その場でくるっと回り。

「似合いますか？御主人様？」

「うん。すごく可愛いのに。」

「キヤー☆ありがとうございます♪ささ、朝ごはんの前に着替えちゃいましょうか。お任せください御主人様。このワタクシが手取り足取りお手伝いを——」

「じ、自分で出来るから大丈夫なの!!」

何だか身の危険を感じたので取り敢えず離れてもらう。

「くっ！では残念ですが、私は朝ごはんのお手伝いに戻りますね。」

「うん。すぐに行くの。」

「はい、お待ちしております。今日は桃子さんが、御主人様のお好きなものをご用意しましたよ。」

「・・・うーおなか空いてきたの。」

そういえば昨日は、何も食わずに寝ちやったからすごくペコペコなのです。

「昨晩は、色々ありましたから。御主人様、朝ごはんの後に色々と説明をいたしますからね。」

「うん。」

「それでは失礼しますね。」

そう言うのと、さつきと同じようにスッと姿が見えなくなりました。本当に何者なの

か。でも、まずは

「いいにおい。朝ごはんは、何だろう？」

ごはんを食べにいこう。

Side out

賑やかな朝食を終え、まったりとしていた所で忍が現れ、昨夜の事件の事後に関する打ち合わせを終えた所で、キャスターに関する話になった。

「キャスターちゃん。改めて御礼を言わせて頂戴。なのはを助けてくれて本当にありがとうございます。」

「とんでもございません。サーヴァントたるもの、御主人様を守って事こそですから。」

「それでも、ありがとうございます。」

「ああ、感謝する。」

「ありがとうございます。キャスターちゃん。」

「ありがとうございます。」

桃子を初めとし、皆に御礼を言わせて若干照れるキャスター。

「それじゃあ、貴女の事を教えてもらっていいかしら。」

「はい。ではまず、サーヴァントについて説明いたします。」

全員が、キャスターの言葉に集中する。

「サーヴァントとは、本来とある魔術師の儀式で呼び出される過去の英霊です。」

「な!?!」

いきなりの言葉に全員が驚く。

「英霊っていうのは何かしら?」

「その偉大さで名を馳せた英雄は、後の世にまで信仰される、神仏的な存在——英霊つてのになるんです。」

過去に名を馳せ語り継がれた英雄。自分もまたそんな存在だと目の前の女は語る。

「……私はそんな立派な英雄じゃないですけど。そういった神話や物語上のシンボルを再現した姿がサーヴァントなんです。」

「……驚いた。只者ではないと思っってはいたけれど」

「俄には信じがたいが……」

「まあ、私は御主人様の魔力を使って現界していますので例えばこのように。」

というトスツと姿を消し、驚く全員の前でなのは後ろに再び現れる。

「本体は霊体でして、普段はこうして御主人様の負担を軽くできます。」

「じ、じゃあキャスターちゃんは幽霊ってこと!?!」

「にやあ!?!お化けだったの!?!」

騒ぐ美由希となのはの言葉に肩を落とし、

「流石に、お化けとかと同じにされるのは傷付くんですが・・・」

「さて、魔力と言ったがなのはにそんな力があるのか？」

「はい。それもかなり強力な魔力をお持ちです。」

キャスターの言葉に驚く一同。

「じゃあ私も魔法が使えるの？」

「学べば恐らくは。ただ私は余りおすすめ致しませんが。」

「どうして？」

「危険を伴うからですマスター。特に私の使うものは。」

そうして、「続けますね。」と話を反らす。

「それで、呼び出されたサーヴァントは7つのクラスに分けられるんです。」

「クラス？」

「生前の逸話や経験によって、複数該当するサーヴァントもいますが、どれかになりません。セイバー。ランサー。アーチャー。ライダー。キャスター。アサシン。バーサーカー。」

話を聞いてどこかウズウズしている恭也。あわよくば過去の剣士との手合わせができるやもと考えているようだ。

「私のクラスはキャスターです。遠隔が得意な呪術系ですね。」

「あ、じゃあやっぱりキャスターっていうのは偽名で本当の名前は別にあるのね。」

「じゃあ、キャスターさんの名前教えて欲しいの。」

目を輝かせたなのは言葉に全員がキャスターを見る。この目の前の女性は一体何処の英雄なのか？そんな期待のこもった眼差しを受けたキャスターだが、

「えっ？私の真名ですか？そんな、御主人様に真名で呼んでいただくなんて、恐れ多いですー！」

「そんなことないの。」

「私の事はただ、キャスターとでもお呼びください。」

「むう、教えて欲しいの」

「ダメです、きつと御主人様でも引かれると思いますし、いつかお話することもありませんから。」

むくれるなのは宥めるキャスター。そこに桃子が疑問を投げる。

「それにしても、どうして数ある英雄達からキャスターさんが、なのは助けに来てくれたのかしら？」

「そうだよね。佐々木小次郎とか、アーサー王とか」

「そうよね。クーフリーンとか、デイルムツドとか」

「そうだな。宮本武蔵とか、塚原卜朴とか」

「泣きますよ?」

有名な英雄と自分達の要望が交ざった言葉を聞いて泣き真似をするキャスターと慰めるのは。

「召喚自体は儀式にそつたものじゃない偶然かと思いますが（まあ細かい所は置いときましょう）、私を呼んだのは恐らく御主人様のソレかと。」

と、なのはの髪飾りに付いた鈴を指す。

「この鈴?・・・これは昔のお姫さまが着けてたつてお兄ちゃんが言つてたの。」

「そうでしたか。実はソレが私の聖遺物なんです。」

「聖遺物?」

「本来は、マスターと相性が良いサーヴァントが選ばれるのですが、このように英雄と所縁があつた触媒があれば、高確率でその英雄を呼び出せるんです。」

「じゃあ、キャスターさんは貴族のお姫さまなの!？」

驚くなのは。まさか話に聞いていたお姫さまを呼び出してしまったとは。

「まあ、そんな大した事ではありません。ただの貢ぎ物ですし。」

「貢ぎ物をもたらしている時点で大した事なんだが。」

「キャスターちゃんすごいのねえ。」

「本当に何者なのよ。」

こんな時々残念になるスイーツ英雄の一端を垣間見て更にその正体が気になる一同。

「因みにマスターの証が、御主人様の左手の模様。令呪です。」

「これ？」

なのはが左手をかざすと、小さな手の甲に三画の模様が記されていた。

「後で他人には見えないように処置いたします。ソレがサーヴァントのマスターである証にして三度の絶対命令権である令呪です。」

「命令権とはなんだ？」

恭也がキャスターに尋ねる。

「言葉どおり、サーヴァントに対し三度まで強制的な命令をすることができます。例えば、離れた場所にいるサーヴァントを瞬時に自分の場所と呼んだり、サーヴァントの限界を越えさせたり・・・場合によっては私を自殺させることも出来ます。」

「そんなことさせないの!!」

キャスターの言葉に憤るなのはと周りの人々。

「キャスターちゃん？例え話にしてもそれは怒るわよ？」

「申し訳ございません皆様。ただ緊急時等にも使えますし、サーヴァントは絶対に令呪を使った命令には逆らえません。それと曖昧な命令には効果が下がりますのでご注意ください。」

それと、と言葉を続ける。

「令呪はそのまま、マスターであることを示し、令呪を失うとサーヴァントとの契約がとぎれますのでお気をつけ下さい。」

「じゃあ、使わなければずっと一緒に居れるの？」

不安そうなのはの頭を撫でて、

「はい、ずっとお側に控えさせて頂きます。でもでも♪ワタクシ的には御主人様には良妻としてお側にいたいなーと♪」

「にゃあ!？」

ガバツとなのはを抱き上げ顔を胸に押し付けさせる。

「あらあら、なのはは幸せね♪こんな可愛いお嫁さんを貰えるなんて♪」

「まだ早い!嫁には行かさないぞなのは!!」

「お、落ち着いて恭ちゃん!？」

「わ、私は女の子なの!!」

そんな、一気に修羅場と化したリビングを前に

「サーヴァント・・・もしかしたら私達にも・・・」

忍はサーヴァントについて一人考えに耽るのであった。

町と案内と一仕事

キャスターによる説明会が終わり、簡単な昼食を済ませた後、土郎のお見舞いとキャスターに、町の案内をするという話になり出掛ける事になったのだが、

「その格好は、流石に目立つよな。」

「霊体化した状態でついて行きますから大丈夫です。その方が、御主人様の負担も軽くなりますし。」

「わ、私は大丈夫なの。一緒にお出掛けするんだから見えてないと嫌なの。」

というなのはの意見により、急遽キャスターの衣装が用意された。女性陣が張り切つて用意した結果。

「カワイクなつて新登場♪似合いますか？御主人様？」

「わあ、可愛いの。」

ピンクと白の縞模様のパーカーの胸元を開き、ホットパンツといった現代風の衣装に着替えたピンクな狐があらわれた。

「いや、そんな服どこに・・・まあ良いが耳と尻尾はどうする？」

「ああ、ソレでしたらこの通り。」

キャスターがその場でくるつと宙返りすると、先程まで、付いていた狐耳と尻尾がなくなっていた。驚くなのはに

「ああ、見えないように変化したんです御主人様。ほら、ワタクシ狐ですし？コンなの朝飯前です。」

「変身もできるの!?!」

「ええ。ただあんまり使いたくは無いです。」

「?（何かあつたのかな?）」

「もつともく、御主人様が望むのであれば?お望みの姿になって御主人様とアレやコレや・・・」

「キャスターちゃん?まだ、それはなのには早すぎるわ。・・・ちよつとお話しましうか?」

「何でも無いです桃子さん!!」

そんなキャスターに対する教育的指導があつた後、先ずは商店街を案内することに。

——海鳴商店街。世の不景気も何のそのといった感じで賑わう商店街である。

「ここが海鳴商店街よ。」

「賑やかですね。やはり、海に面しているだけあつてお魚も新鮮ですね。」

揃つて歩く高町家とキャスター。普段から利用する高町家も美男美女揃いで人目を

引き付けるが、今日は更にキャスターがいる為に更に人目を集めている。そんなキャスターの手を引くのはは、少し照れながらもキャスターに町を案内しようと張り切っているようだ。

「お野菜も沢山あるの。」

「愛妻料理が作りがいありそうですね♪どれどれ」

と八百屋の中を覗き込む。新鮮な野菜が所せましと並んでいる。人参・ジャガイモ・

茄子・ピーマン・ヒランヤキャベツ・マカラコーン：

「・・・ラインナップは、突っ込んだじゃダメですか？」

「そつとしておくの。」

少し歩いて、美味しそうな香りがするパン屋さんの前を通りかかる。

「家も良くここのパンを買うのよ。」

「とっても美味しいの！」

「本当に美味しそうな匂いですね。何々、本日のオススメは、アンパン・食パン・カレー

パン・ジャム…」

「・・・何かそれ以上はいけないの。」

それからキャスターは高町家に、様々なお店を紹介してもらい、またキャスターを

紹介しながら商店街を案内して行く。最後に花屋にて生花を買う頃にはオマケでもらった野菜やもろもろでキャスターの両手が塞がっていた。

「いやあ。変わったお店も多かったですが、皆様好人ばかりでしたね。」

「キャスターさん皆に凄くオマケされてたね！」

「あらあら、もう商店街のアイドルみたいね？」

そんな風に笑いながら歩いていると、突然キャスターが足を止めた。その顔も引きつっているようだ。

「どうしたの？キャスターさん」

「——ほう。気付いたか。」

「恭也さん。あの店何ですか？」

キャスターが指すその店、一見すると普通の中華料理店のようだ。しかしならばこの嫌な予感は何なのか。

「あの店は——地獄だ。」

「やはりそうですか。こう、耳と尻尾が総毛立つような。ぶつちやけマジやべえつて勘がします。」

「？」

「なのは、知らなくて良いの。でもあの店で麻婆豆腐を頼んじやだめよ？」

「?」

そうして、高町家はその場を離れて病院へ向かった。

——その店は、一見すると普通の中華料理店。しかしその看板メニューを口にしたものは語る。地獄の具現がそこにあつたと。そんな店の名は、

——『大衆中華料理店・泰山 海鳴支店』

「——ふむ、この辛さ。まさに愉悦。」

高町士郎の入院する病院の部屋へ着くと、花を取り換えてから桃子達は担当医に話を聞きに行った。

病室には未だに眠り続ける士郎と、それを見詰めるなのは、そしてキャスターがいた。(事件に巻き込まれ重体と聞きましたが・・・ぶつちやけ良く生きてますって感じですね。)

キャスターは、独自に士郎の体を調べそんな感想を抱いた。キャスターの目で見ても正直な所、いつ生命力が途切れてもおかしく無いレベルである。

ふと、自分の幼いマスターを見る。士郎の武骨な手を小さな両手で握り締め、寂しそ

うに父の顔を見詰めている。

そこへ、暗い面持ちで桃子達が部屋に戻って来た。やはり、容態は変わらず。身体も日に日に弱っている。ということらしい。椅子に座り込み項垂れる桃子、重い空気が漂う部屋に士郎の体に付けられた機械の電子音が規則正しく鳴り続ける。

「——御主人様、魔力を使わせて頂きます。」

その言葉と共に、キャスターが青い呪術師の衣装へと姿を変えると、何処からともなく大きな鏡を取り出す。

「キャスターちゃん…その鏡は？」

恐る恐る桃子が、鏡——明らかに膨大な力を内包したそれについてキャスターに尋ねる。

「ああ、この鏡は私の宝具です。」

「宝具？」

怪訝な顔をする一同に、キャスターが続ける。

「英雄を英雄足らしめる、伝承や逸話。その具現と言いますか、私達サーヴァントはその出自となる伝承を武器に出来るんです。例えば、騎士王ならば『エクスカリバー』といっ

たような感じですね。」

「じゃあその鏡がキャスターさんの伝承に関わる物なんだ？」

その奇跡の具現に驚く美由希。鏡を浮かせ高町家の前にスイと動かして見せると興味津々といった感じで覗き込むのは。

「まあ、真名に関わる物なのですが、名を明かさなければ只の頑丈な鏡なんで普段は鈍器にしてるんですが……」

「……良いのか？ そんな扱いして……」

恭也の間をスルーしつつ、鏡を動かして土郎の上に浮かせる。

「ん。ちよつとだけ、皆様部屋から出ていただけますか？」

「えっ!! キャスターさん。もしかして!？」

今から何をするつもりなのか気が付いたなのは達に軽く微笑みながら、

「——はい、御主人様♪今からちよつとお仕事しますので、お父様にかける言葉を考えといて下さいな。」

そう、鏡から妖しい——しかし温かな光を漂わせながら答えた。

——長い夢を見ていた気がする。

暗く、冷たい正に深淵と言うべき場所で漂いながら落ちていく——否、それすら分らない。

ただ、——落ちる

——墮ちる

——墜ち

——ああ、コレが死というものか。

——覚悟はしていたつもりだった、だが、

——せめて、せめてもう一度——

『そんなにもその場所が気に入った。とでも仰るのでしたら止めませんが、それ以上は戻れなくなりますよ?』

——だれだ?

『良いからさつさと起きてくださいまし。私の御主人様を散々悲しませたんですから。それ以上行くと大切な方全てを泣かせる事になりますよ。』

ふと見上げるとこの闇の中を照らす光が見えた。

そうだ、こうしてはいられない。私はまだ——

そうして、体を向けて光に手を伸ばす。まるで太陽の光を浴びたような心地よさが体を包み込み——

重い目蓋を開く

「……は……」

そう声を出そうとしたが、上手く声が出ない。

見覚えの無い部屋には沈みかけた日の光で紅く染まっていた。

身体中に付いたチューブを見るとここは病院だろうか？恐らくあの後、意識を失い病院へ搬送されたのだらう。長い時間がたったのか体のあちこちが軋んでいる。

ふと気付くと、そばに見慣れぬ女性がいた。露出の多い着物のような物を纏った明らかに人とは違う女性を見たときに——何故か太陽を思い浮かべた。

その女性が目の前からスッと消えたのには驚いたが、その直後に部屋の扉が騒々しく開け放たれ、思わず目を向けると、

記憶より遙かに痩せ、目に涙を溢れさせた妻が

驚きの表情を浮かべる息子が

目を真つ赤にした長女が

どこかふらついているが、こちらを見て泣きながら飛び付いてくる末の娘が

——私が愛する家族がそこにいた。

決意

S i d e なのは

その後は大騒ぎでした。

お父さんが意識を取り戻してから病院のスタッフらしき人達が大慌てで部屋に来て、お父さんに色々説明したり、簡単な検査をしていきました。

殆ど怪我也も治っているかと聞いて、お父さんは退院したがっていましたが、長い間眠っていたこともあるので暫くりハビリと検査入院が必要と言われてたそうです。

これは後で聞いたのですが、この日病院に居た多くの方の病状が（お父さん程ではないが）回復したらしく、病院の先生方が頭を悩ませたそうです。

私はと言うとお父さんに抱き付いた後、魔力の使いすぎで疲れて寝てしまい、その後お父さんの診察が終わった後でキャスターさんも、お父さんに軽く自己紹介してから、宝具の使用による魔力の使いすぎで暫く現界出来ない事を伝えて消えたそうです。

どうやらキャスターさん自身の魔力をかなり使ってしまったらしく次の日は会うことが出来ませんでした。

その次の日の夜、キャスターさんが現界すると申し訳なさそうに耳と尻尾を垂れなが

ら予想より多くの魔力を使ってしまった事を謝ってきました。

「すみませんマスター…もう少しご負担が、掛からないようにできればよかったですか…」

そうして、私の部屋でちよこんと正座しながら元氣無く項垂れる姿は、一昨日までのキャスターさんのイメージとはまったくの真逆な姿でした。

「わ、私は大丈夫なの。ちよつと疲れたけどお父さんが助かったし…ありがとうキャスターさん。お父さんを助けてくれて。」

「とんでもございません。ですがサーヴァントとして失格です…如何にマスターの魔力が多いとはいえどまだマスターは幼児。それなのに宝具の真名解放をするには早すぎました。」

そう言つて、益々耳を萎れさせるキャスターさん。

まだ出会つて間もないけれどこの人は、いい人だと思う。

私を助けてくれて、今度はお父さんを助けてくれた遠い昔の英雄。まだ名前は教えてくれないけど、私を気づかってくれる優しいお姫様。

実際にお父さんもお母さんもキャスターさんには感謝しています。お父さんは少しキャスターさんの事やサーヴァントの事を聞いて何か考えていたけど、次に会ったときに感謝の気持ち伝えたいと言っていました。

ときどきふざけて私を抱き締めたり、抱き上げたり・・・お、お嫁さんだつて言うけれど、きつと寂しがり屋な私を気にして元氣付けてくれているんだと思います。・・・たぶん

そんなキャスターさんが、落ち込んでいる。私はこの人に何か出来ることはないのかな？私弱いからキャスターさんが全力を出せないのかな？・・・あんなに凄いキャスターさんの足を私が引つ張つちやつていいわけがないのに。

「だ、だつたら私が強くなるの。」

「御主人様？」

だから私は一つ決心しました。

「私が強くなつて、もつと体が大きくなつたらキャスターさんが宝具を使つても大丈夫だと思ふの。だから体を鍛えて強くなるの。」

「御主人様・・・御主人様がそんな事されなくても・・・」

「だから、キャスターさんも私と一緒に居て色々教えてほしいの。魔力の事も魔法の事もキャスターさんの事も。」

そこまで言つて私はキャスターさんと目を合わせました。その金色の目は私を真っ直ぐに見詰めていました。

「私はこどもだし、あんなに凄い力を持ったキャスターさんのマスターとして、未熟かも

しれないけど。キャスターさんが、自分をサーヴァント失格だつて言うのなら私が強く
なつて、今度は私がキャスターさんを助けてあげる。」

だから、とキャスターさんに決意を伝える。

「一緒に強くなろう？一人じゃだめでも二人ならきつと大丈夫なの」

そうして、しばらくたつてから俯いていたキャスターさんは、

「……ありがとうございます。なのは様。」

そう言つて、ぎゅつと私を抱き締めてくれました。

「本当に、本当に私には勿体ないくらい、素敵なマスターです。」

「……そんな事ないの……」

「いいえ、私は本来、なのは様に喚ばれていいモノじゃない。……英雄なんてモノじゃ
ないんです。」

「え？」

「……私は英雄に『討たれる側』。反英雄と呼ばれる穢れた存在なんです。」

信じられない言葉を聞いた。反英雄？穢れた存在？

目の前のキャスターさんは、どこか泣きそうな顔で私を見詰めていました。

「そんな事ない・・・そんな事ないの!!キャスターさんは優しいもん。穢れてなんかないもん!!」

「いいえ。実際に私は、そうして人に疎まれ、最期に人々によって討たれたのです。」

「そんな事ないの!!」

キャスターさんは、私の頭を撫でてから、いつの間にか流れていた涙を拭ってくれました。

「ごめんなさい。なのは様。いつか、必ず私の事をお話したいと思います。ですが、きつと優しい貴女様は傷付く事になります。」

「・・・そんな事ないもん・・・」

この人が一体どうしてそんな事になってしまったのか、私には分かりません。ただ嫌いになるなんて事だけは絶対にならないの!

「ただどそれまでは、必ずお側にいます。そんな穢れた私でもよろしければ、御主人様のお側に。」

「キャスターさん・・・」

「一緒に居てくださいいますか?なのは様?」

「なのは……色を知る年なのね……」
「……だから……違うの……」
「!!」

日常編・特訓と子狐と朝食と

早朝、空が明るみ始め、町の人々が起き出す時間。

「も、もうだめなの・・・」

公園にて、一人の少女が息を切らしながら走っていた。可愛らしい白い運動着姿で、息も絶え絶えに走る少女——高町なのはに後ろから桃色のジャージを羽織ったキヤスターが声を掛ける。

「大丈夫です。私が付いています。なのは様ファイター!」

「にゃ〜」

「・・・ダメっぽいですね。」

あの日から約二週間、高町なのはとキヤスターの主従は手始めに体力作りとして、早朝のランニングを始めていた。最初は恭也と美由希がなのはに教えようとしていたのだが、

「あんなのいきなりは無理なの」

「まああの方達は普段から鍛えてましたからねえ。可愛い妹君が、体を鍛えると聞いて張り切っていましたし。」

「だからっていきなり山は無いの。」

とまあ自分達基準で『軽め』の特訓を張り切ってさせようとして、なのはに泣かれ、キャスターに止められ。桃子との話し合いの結果、中止となりかなり落ち込んでいた。

「まあ、あんなグラップラーな人外に片足突っ込んだ方々の事は放っておいて、まずは体力をつけるためのランニングなんですから、取り敢えず今日は神社の辺りまで頑張りますでしょうか？」

「うう、がんばる。」

「お昼過ぎにはお父様もようやく帰って来ますし、さくつとやつちやいましょう。」

そう——あれから、士郎の体も快復しリハビリも進み、とうとう退院の日を迎えている。本人曰く、前より調子が良いとの事で、意識不明だった重傷患者が何故二週間で退院出来るほど快復したのかと、医師たちが頭を抱えていたそうだ。

そんな事を話ながら公園を通過し、今日の最終目的地の神社を目指す。

「それにしても、ずいぶんランニングされたり運動されるかたが多いのですね。」

「うん。私も知らなかったの。始めた頃は少なかつたけど今は沢山の人がいるね。」

二人は知る由もないが、この二人のランニング姿を見るためにランニングやスポーツ

を始めた紳士も少なくない。

桃色のスタイル抜群な美女と、栗色の髪の美少女が早朝にランニングを始めたとの噂が既に広まっており、中にはわざわざこの二人の姿を見るために、この時間帯に隣の区から走っている奴等もいるくらいである。何せ片や傾国レベルの美女が妙な色っぽさを醸しながら走り、片や息も絶え絶えといった様子ながら必死で美女に着いていく庇護欲を抱かせる美少女である。

もつとも、不純な動機で近付こうとしたモノは何故か内股で泡を吹いて倒れるとの噂も広まっており、高嶺の花として遠くから見守られているにとどまっているのであるが。

早朝の町を顔馴染みとなった町の人やランナーに挨拶をしながら走り、ようやっと神社にたどり着く頃には、なのはは息も絶え絶えに鳥居にもたれかかった。

「ぜえ、ぜえ、や・・・やつと着いた〜」

「ふう、お疲れ様ですなのは様。」

飲み物を落ち着かせてから飲ませ、タオルでなのはの汗をぬぐうキヤスター。

「御参りして少し休んだら帰りましょうね。」

「にやあ・・・疲れたの・・・」

「でも、始めてから二週間でここまでこれましたね。」

「・・・うん。少しは体力もついてきたかな？」

飲み物をキャスターに返して訊ねるのは。目的は少しでも強くなる。その為の第一歩がこの体力作りである。

「勿論です。昨日のなのは様より、今日のなのは様はちゃんと強くなってますよ。」

「本当？」

「はい。何事も毎日続ける事が大切なんです。ちゃんと一歩ずつなのは様は進んでますから。」

「だったら嬉しいの！」

そういうと、タオルをしまい二人で賽銭箱に小銭を入れて御参りをする。

「さて、帰りましょうか・・・ところで、なのは様？」

「なあに？キャスターさん。」

「・・・今日は家までおんぶと抱っこ。どっちが良いですか？」

「・・・おんぶ。」

顔を赤くして呟いたなのはの様子を脳内フォルダに保存しながら背中におんぶして帰路につこうとしようとして、ふと視線を感じ振り返るキャスター。

「ん？」

「?どうしたのキャスターさん。」

「いえ、あそこに」

と、なのはがキャスターの視線をたどった先には

「キツネ?」

「です……ね。」

「くう……」

一匹の子キツネが此方を木の後ろに隠れて伺っていた。その愛くるしさに思わず、

「可愛いね。」

「な、なのは様!?わ、ワタクシという狐がいながら他の狐に!?う、浮気!?浮気ですか!」

「くう!?!」

なのはの感想に思わず取り乱すキャスターとその声に驚く子狐。

「ち、違うの!?!単純に可愛らしいねってどうか……」

「な、何ですか!やっぱ若い狐の方がいいって事ですか!?!チキショーこの泥棒狐!!よくもワタクシの御主人様をたぶらかして下さいましたね!?!」

「く、くう……!?!」

取り乱すキャスターの背中にしがみつきながら落ち着かせようと必死なのはと、必死に顔を横に降る子狐。実にカオスである。

「大体、なあにがくうですか!?!可愛らしさアピールですか!?!普通に喋れっていうんです

よ!?!」

「な、何言ってるのキャスターさん落ち着いて!?!」

「お、お客さん落ち着いて下さい!」

「くう~~~~!!」

とうとう通りかかった神社の巫女さんにも止められるキャスターと逃げ出す子狐。その後暫くして、ようやく落ち着いたキャスターは背中のなのはから他所の人に迷惑をかけた事についてお話をされつつ帰路に着くのであった。

「さ、災難だったね。大丈夫?」

「く、くう~~~~」

「でも、さっきの人どうしたのかなあ?」

「くう、人じゃない。」

「え?」

「神様」

「あはは。まっさか〜。」

「くう・・・」

家に着くとまず風呂場で汗を流してキャスターは朝食の支度をし、なのははその手伝いをする。この二週間ですっかり桃子と仲良くなったキャスター。既に商店街やご近所様達からも高町家の家政婦さんと認識されていた。

「キャスターちゃん手際がいいわね。味も良いし盛り付けもキレイね。」

「ありがとうございます桃子さん。ですけどまだまだですよ。」

そう言いながら、くるくるとだし巻き玉子を焼いていく、火の通り具合も良く、いい香りが漂う。

「そんな事ないわ。本当に凄いわよ?」

「いや、友達のウズメちゃんに比べたら大したこと無いですよ。」

「あら、そうなの?」

「ええ、料理教室を開いていますし、歌も踊りも上手なんですよ。岩戸に引きこもった引きこもりを出てこさせるくらいに……」

「まあ、凄いお友達ね。そのウズメさんって人。」

「ワタクシもウズメちゃんに教わったんですが、御主人様に満足して頂けるには私はまだです。でもこうして、愛妻料理を作るのは好きですね。」

「まあ♪なのはは幸せね。こんなお嫁さんを貰えるなんて♪」

「ちよつと待つてお母さん。おかしいと思うの。」

そんな他愛ない会話をしながらテーブルに料理を並べていく。

「そういえば、何時ぐらいにここを出られますか?」

「そうねえ、一応10時位に出て土郎さんを迎えに行くわ。」

「無視?!無視なの!?!」

「では、私もお手伝いに行きましょうか?」

「大丈夫よ。恭也達を連れていくから。キャスターちゃんはお昼の準備して貰って良いかしら?」

「わかりました。夜は快気祝いの宴となりそうですし、軽めのものを用意しておきますね。」

そう言いながら、高町家の朝食が始まる。

「お母さんもキャスターさんも酷いの・・・」

「あらあら」

「申し訳ございませんのは様。拗ねたお顔が可愛かったので・・・」

「むう・・・」

「なのは、強くなるのよ。強くなりたかったら食べないとね。」

「お姉ちゃん・・・わかったの。」

「ウフフ、強くなりましたね、なのは様。ささ、なのは様も、美由希さんも御代わりを・・・つてどうしたんですか恭也さん？頭を抱えて？」

「美由希・・・そんなキャラだったか？」

その言葉に美由希は箸を置くと、厳かに応える。

「恭ちゃん・・・キャラが強くないと出番も無いんだよ？」

「いや、何の話だ!？」

「御主人様はい、あ〜ん♪」

「じ、自分で食べれるの!」

真剣な眼差しで美由希は恭也を見据える。

「只でさえ濃い面子が多い中、出番を勝ち取るには強くないといけないんだよ!!」

「だから何の話だ!？出番ってなんだ!？」

「うー。あ、あ〜ん。」

「はい♪じゃあ次は・・・」

「あらあら♪」

目尻に涙を浮かべながら応える。

「うう、恭ちゃんには分からないんだよ!!」

「だから何の話なんだ!？」

「あらあらケンカはダメよ？」

「はい、あくん。」

「も、もう大丈夫・・・うう、あくん。」

そうして今日も賑やかに、高町家の朝食は進むのであった。

宴と誓いと――

夜、高町家ではささやかながら高町士郎の快気祝いの宴が行われていた。

キャスターや桃子が腕を奮ったご馳走やデザートになのはが目を輝かせ、キャスターがなのはいつもの様にベタつき、それを見た恭也が憤慨する。

そんな様子を見て笑いながら士郎は、ここに帰ってこれたことに感謝をするのだった。

「でね。私、毎日頑張って走ってるの！」

「そうか、なのは頑張っているな。」

「うん。キャスターさんのおかげなの。」

「そうねえ、やっぱりキャスターちゃんのおかげかしらね。」

そして、新たに高町家に加わった新しい住人であるキャスターについて話が進む。折しも本人は飲み過ぎましたのでといって席を外していた。

「サーヴァントだったね。過去の英雄を呼び出して使役する……か。」

「ああ、アイツは『キャスター』のクラスだって言ってたな。」

「でも、恭ちゃんが勝てない位に強いんでしょ？それじゃあセイバーとか他のクラスは

「どれだけ強いのかな。」

「もし、なのはがセイバーとかを呼んでいたら……今頃さぞかし稽古三昧だったろうな。」
そんな話をしているとなのはが急に立ち上がった。

「私のサーヴァントは、キャスターさんだけなの!!それに、キャスターさんは誰にも負けないの!!」

「ああ、すまんなのは。そういう意味で言ったんじや無いんだ。」

「そうねえ、キャスターちゃんが居なかつたら今頃どうなつていたかしら。」

家族をこの短期間に何度も救った蒼い呪術使い。身体や命のみならず、心も救った優しい英雄の姿を思い浮かべる。……まあ、なのはに対してだけやたら頭がスプリングな感じで接する時もあるが……

「しかし、なのはの鈴で呼び出した……か……」

「そうだ、父さんはあの鈴の事知ってるんだよな?」

「そっか。キャスターさんの真名について何か知ってるのかな。」

未だ自分達に、真名を伝えていないキャスター。なのはの頭に付いた鈴が彼女の正体に繋がるかも知れないのなら、士郎が何か知ってる可能性があった。

「——いや、私も詳しい話は聞いていない。ただ……」

「ただ?」

「——時の帝に仕えていた方の物だと聞いていたんだ。」

「み、帝!？」

「と、とんでもない人だったのかな。」

「いえ、大したことは無いですよ。」

「にやあ、いつの間にも!？」

「たった今です。なのは様♪」

そのまま話は進み、尻尾が柔らかさうだとか、なのはとの関係が何処まで進んでるとかといった話になり、なのはが目を擦り始めたところで宴はお開きとなった。

なのはを寝かしつけ、恭也と美由希が部屋に戻り、リビングには、士郎と片付けをする桃子とキヤスターが残っていた。

「キヤスターちゃん。ありがとうね。貴女のおかげで本当に助かっているわ。」

「うふふ。こちらこそありがとうございます。素性の分からない私をなのは様のお側に置いて下さって。」

片付けが、終わり椅子に座る二人に緑茶を注ぎ、自らも座る。

「改めてありがとうございます。キヤスターさん。娘を助けて下さったばかりか、私まで死の淵から助けて下さり、なんとお礼を申していいのか・・・」

キャスターに頭を下げる士郎と桃子。その様子を受けてキャスターも頭を下げる。

「こちらこそありがとうございます。士郎さん。私がなのは様と供に居れるようにして下さり、部屋も与えて下さいました。」

それに、と顔を上げて士郎の目を見据えて、

「——私の真名に気付きながら、それを知らないふりして下さったこと——本当に感謝しております。」

リビングに時計の針の音がやけに大きく聞こえた。

桃子が驚いた様子で二人の顔を見る。

「・・・気付かれていますか。」

「ええ、恐らくはあの鈴を手に入れた際に簡単な略歴を聞かれていたのでは？」

「はい、時の帝に仕え、寵愛を受けながらも追放され——討伐された貴人の物だと。」

湯呑みを手に取り喉を潤す士郎。何とも言えない緊張感が部屋を充たす。もし、自分の推論が正しければ——

「そして、貴女のその姿——狐の耳と尻尾を見て。また、貴女が私に使って下さった鏡の話を聞いて確信しました。」

「……そうでしたか。やはり、この耳と尻尾は隠した方がいいですね。」

——目の前で耳を伏せ、哀しげなこの女性は

「やはり貴女は、いや貴女様の真名は——」

その名前を士郎が口にし、桃子が驚く。その名は悪名として有名なのだから。

「そんな、キャスターちゃんが……」

「……申し訳ございません。」

改めて、高町夫妻は目の前キャスターを見る。とても信じられない。伝え聞くその逸話と目の前の女性の事が——そんな事をするようにはとても。

「申し訳ございません。出て行けと仰るのであれば出て行きます。ですがどうか、なのは様には——」

そこまで言ったキャスターの手を桃子が握り締める。驚くキャスターに桃子は。

「ううん。それでも貴女は、なのはを助けてくれたわ。例え貴女が何であろうと私達の新しい家族であることに変わり無いわ。」

「で、ですが!?!ワタクシは!!」

「そうだ。それに私は貴女様に命を救って頂いたのです。何も出来ませんが、どうかこ

「ここに居て下さいませんか？」

その言葉にキャスターは頭を下げ、

「ありがとうございます」

そう返す事しか出来なかった。

「本当に高町の方々は、いい人達ですね。」

庭に出たキャスターは、一人月を見上げながら呟く。

「なのは様に召喚されて、お父様をお救いして……何とかなのは様を待つ、悲しい運命は回避出来たでしょうか？」

月は蒼く輝き、夜風が髪と尾を揺らす。

「この先、なのは様を待ち受ける数多の試練と出合い。私がキャスターとなつて喚ばれた事での様になるかは分かりませんが、ハッピーエンドを目指していいですよね。」

月下に狐耳の呪術使いは誓う。

「この特典スキルも、私の全ての力も使いなのは様を幸せな未来へとお連れします——
例えなのは様に嫌われても、必ずや」

蒼い月は静かに輝きながら全てを見つめていた。

そして同じ月の下で、もう一人の少女の運命もまた回り始める。

「問おう。お嬢ちゃんがアタシのマスターかい？」

「

本来ならば、この世界に現れる事のなかった筈のサーヴァントという存在。本来ならば出会う筈がなかった出会い。偶然にも手にいれていた聖遺物。そして、少女の願い。

「――はい。」

願いを叶えるための手段を手にした時。もう一人の少女の物語が回り始める。

蒼い月は静かに全てを見つめていた。

桜と喧嘩と友達

季節は流れて春。穏やかな暖かな風が桜の花を舞わす季節。

「さあ、大安吉日のこの良き日。宇迦之御霊神も御照覧あれ!!なのは様の入・学・式でございます!!」

「は、恥ずかしいの」

「ああん♪もう、辛抱たまりませんなのは様!!制服とつてもお似合いです!!小学生な御主人様は最高だぜ!!」

「ムグ~~~~!!」

「朝から賑やかね。」

「止めなくていいのかい?」

この日は、高町なのはの通うことになる私立聖祥大付属小学校の入学式である。その為にキャスター達は正装し、ここ、私立聖祥大付属小学校に来ていた。

「うう、朝からひどい目に遭ったの・・・」

「うふふ、なのは様分はタップリ補給できましたし、張り切つてなのは様のご勇姿をカメラに納める事が出来そうです。てなわけでこのカメラお願いしますね土郎さん。」

「ああ、わかった：しかし、こんないいカメラもそのビデオカメラも何処で手に入れたんですか？」

そう、明らかに某有名メーカーの最新機種と思われるカメラもそうだがキャスターが準備しているのは何処の報道陣だと言わんばかりの大型のビデオカメラである。明らかに凄まじい金額がかかってそうな物なのだ。

「なのは様の入学が、決まり次第に自腹で購入致しました。やはりなのは様のお姿を最も鮮明な映像で残したかったので」

「まあ、キャスターちゃんありがとうね。」

「あ、因みにお金は株と先物で増やしました。商店街の昆虫ペットショップマキリのご隠居さんに色々教わりまして。」

「ああ、ご隠居さんか。それなら大丈夫だな。」

「そうねご隠居さんなら大丈夫ね。」

「それに、周りの保護者様方も似たような準備してますし。」

そんな話をしながら、着々と準備していくキャスター。周りの保護者達も同じようなカメラを用意していた。とても裕福な家庭の多い事で有名な、この聖祥大付属小学校であるが、時折執事やメイドさん達が機材を運んだりしているのを見かける辺り、今年はそのういった家庭が特に多いようだ。

「確かに凄い数の人達ね。」

「まあうちのなのは様が一番カワイイんですけど」

そう、桃子の言葉に返したとたん周りから凄まじい殺気が向けられる。

「聞き捨てならないな。うちの子が一番カワイイに決まっている。」

「匹夫どもが。うちの子の可愛さに削りあいを挑むとはな。」

「うちの子の可愛らしさは世界一イイイイ!!」

「——その言葉は訂正して貰おうか。うちの娘が一番に決まっている。」

「そうね。うちの娘が一番よ!!」

「いや、うちの子が一番カワイイ!!」

「何を言っているのかね? 名門であるうちの娘が一番に決まっているだろう。」

「ふん。うちのすずかが一番カワイイに決まってるじゃない!」

「いーえ、うちのなのは様が一番です!」

「我がバニングス家のアリサ様が一番可愛いに決まっている。」

他の保護者達も次々に言い争いに参加し始め、この後、学校の先生方に止められるまで不毛な言い争いが続いたという。

「は、恥ずかしいよお姉ちゃん。」

「や、やめてよ。パパ！鮫島も参加してないで止めなさいよ！」

(・・・皆苦労してるの・・・)

高町なのは、小学一年生。このカオスな光景を前に早くも学園生活に不安を感じ、保護者に苦労する同級生達にシンパシーを感じるのであった。

「本当に恥ずかしかったの。」

「そうね。パパ達張り切り過ぎよ。」

「あはは、うちも朝からお姉ちゃん達が大騒ぎだったよ。」

放課後、教室で思わず溜め息をつく三人の小学一年生。入学式では、何処の記者会見場ですか？と聞きたくなるような数のカメラとフラッシュに思わず引いてしまったなのは達であった。

「特にあのピンク色の髪した女の人凄かったわね。」

「そうだね。ちよつと自重した方が良いね。」

(キャスターさん…)

何となくシンパシーを感じた同じクラスの友達から自分のよく知る人物の評価を聞いて、思わず机に突っ伏すのは。

「ん？もしかしてあんたの知り合いだったの？」

「あんたじゃないの私の名前は高町なのはなの。それでまあ、うん。うちの家政婦さんなの。」

「あはは♪物凄く愛されてるじゃない！私はアリサ。アリサ・バニングスよ。よろしくね。」

「そうだね。愛されてたね。私は月村すずかだよ。」

「愛が重いのに。」

顔を上げて二人を見る。金色の髪を腰まで伸ばしたアリサと、紫色の長い髪と白いカチューシャが特徴的なすずか。どちらもかなりの美少女である。

「まあ、個性的っていうならうちのクラスも負けてないけどね。」

「自己紹介に歴史上の人物の名前を出すとか何考えてんのよ。しかも、兄妹揃って。」

「二人とも何かスツキリしてたから良いんじゃないかな。」

「まあ、あんた達も目立ってたわよ。その頭の鈴とかね。」

そういつて、なのはの頭の鈴に触ろうとするアリサ。

「にやあ！これはダメなの!!」

「むっ！ちよつとくらい良いじゃない。」

「ダメなの!!」

「仕方ないわね。じゃあこっちで。」

「あっ!?!」

そのまま、隣にいたはずかの頭からカチューシャをさつと取り外すアリサ。そして、一瞬呆気にとられたものの慌ててアリサから取り戻そうとするはずか。その表情は、どこか青ざめているようになのには見えた。

「だ、だめ!?!返して!!」

「?別にちよつと位良いじゃない。」

「おねがい!返してよう…」

もはや半泣きでカチューシャを取り返そうとするはずかに対して、どこか面白がった様子でカチューシャを取り上げるアリサ。その様子を見てなのは、イスから静かに立ち上がりアリサに手を――

「はい。そこまでです。」

突然手を握られなのは、驚いてそちらを見ると空いた片手で、カチューシャをアリ

サから取り上げたキャスターの姿があつた。

「な、何よ！あんた!!」

「全く、なのは様があまりにも遅いので様子を見に来てみれば……」

クルクルと取り上げたカチューシャを手遊びしながら呆れた様子で三人を見比べる。

「あ、あの……」

「ん？ああはい、これですね。はいどうぞ。」

キャスターからカチューシャを受け取り、直ぐにつけ直し、安堵の溜め息をつくすか。

「で、あんたは何なのよ!!」

「その前に貴女は、先ずそちらの女の子に謝ることです。」

「な、何でよ……」

思わずキャスターの厳しい視線と語気に怯んでしまうアリサ。

「女の子なら誰だつて触れてほしくない秘密など、千や二千は有るものです。」

「多すぎると思うの。」

「シヤラップですなのは様。とにかく貴女が触れてしまったのはそういった類いの物です。女の子を泣かせた以上、貴女が先ずすべきは謝ることなのです。」

「あ……」

すずかの顔を見て、やっと自分がしたことを理解する。どこか怯えた表情をしたすずかに向き合うと、

「ごめんなさい。悪い事したわ。」

「う、うん。私もその、ビックリして・・・」

何とか二人が和解したのを見ると、キャスターは今度はなのに向き合い、軽く額にデコピンをかました。

「痛っ!?何するの?」

「何するのは、此方のセリフですなのは様。この手で何をしようと思いましたか?」

「でも・・・」

「喧嘩を止めようとするのはご立派ですが、手を出すのは感心しませんよ?」

メッ!となのはに視線を合わせ叱るキャスター。珍しく怒った様子のキャスターに俯くなのを見て、

「ち、ちよつとなのはは悪く無いわよ!?!」

「なのはちゃんを叱らないで下さい!」

二人がキャスターからなのを庇おうとする。その様子を見て、溜め息を吐いてキャスターが立ち上がる。

「まあ、なのは様に新しいご友人が出来たようですし、今日はこの辺りに致しましょう。」

「で、あんたは結局誰なのよ？」

「私は高町家の家政婦兼、なのは様の良妻です。」

「何言ってるの!?! キャスターさん!?!」

慌てて立ち直り、真顔でとんでもないことを口走るキャスターに突っ込みを入れるのは。

「ああ、さっきの話の家政婦さんだったのね・・・本当に苦労してるのね、なのは。」
「え、なのはちゃんキャスターって・・・というか良妻って、あれ?」

二人がそんな感想を浮かべている間にキャスターはなのはをお姫様抱っこし、教室の出口に向かっていた。

「さあ、なのは様? 今日これから撮影した映像で鑑賞会ですよ?」

「そ、その前に降ろして、降ろして欲しいの!?!」

「いいじゃないですか♪ あ、このまま校内ぐるっと廻ってデートというのも・・・」

「にやああああ!?! アリサちゃん、すぐかちゃん助けてー!!」

そのまま二人が扉から出ていくのを見て、思わず顔を見合わせて笑ってしまう。

「私達も行くのか。」

「そうね。あ、カバン忘れてるじゃない。」

取り敢えず先ずは、出来たばかりの友人を助けるべく、二人はカバンを回収して教室

を後にするのであった。

幕間・キヤスターの日常

「じゃあ行つてきます。」

「後はお願ひね。キヤスターちゃん。」

「はい、お任せ下さい。行つてらっしゃいませ。」

仕事場、喫茶「翠屋」へと向かう高町夫妻を笑顔で見送り見えなくなつたところで表情を引き締める。

「さて、お掃除にお洗濯午後からはお買い物。今日も頑張りますか。」

洗濯籠から衣類を洗濯機に入れ、洗濯しているあいだに部屋の高いところから叩きを使って掃除を始める。

「さて、なのは様が小学校に入学……話の流れ通りなら確か初めの事件は小学生半ば頃、でしたかね？内容までは詳しく覚えてませんけど。直ぐではないはずですね。」

掃除をしながら「今後」について考える。

「ん〜私が『サーヴァント』としてなのは様の側に居るのは、この世界において完全にイレギュラーですから、流れが多少変わると考えて……まあいいか。私は、なのは様のサポートをすればいいですね。」

まあ、手を出した野郎や女は私が潰すとしてと物騒な事を考えつつ拭き掃除と乾拭きを終えて、洗濯に取り掛かる。

「二応、良妻資金の溜まり方も順調ですし、万が一に備えた人形ももう少しで仕上がりま
すし。一応の準備はよし。」

「ご隠居さんマジ感謝です。と商店街の顔役の一人にして、株や先物取引について教え
てくれた恩人を思い浮かべる。今頃は最近戻ってきた息子さんとやらをからかいなが
ら義理だという孫娘達と店にいるのだろう。」

「さてと、次はなのは様のお部屋でお掃除とか色々・・・おや？」

机に確か今日の課題だと、なのはが言っていた筈の国語のプリントを見付ける。手に
取って暫く眺めた後、時間割を見る。

「間に合いますね。ついでにお買い物も済ましちゃいませうか。」

普段着から、割烹着を外して畳むと財布とエコバッグを持ちなのはのもとに向かうの
だった。

私立聖祥大付属小学校の教室で、高町なのはは沈んでいた。昨日頑張つて仕上げた課

題をまさか忘れていたとは……

「なのは、落ち込み過ぎよ。」

「そうだよ。なのはちゃん元気出して。」

「うん。先生の所に行つて来るの。」

と、立ち上がりかけた所で携帯電話にメールが届いた。取り敢えずメールを開くと、

『from:キャスターさん

御主人様♪今、忘れ物のプリントを持って学校に向かっています。だから安心して下さ

いね♪』

そのまま顔を机に突つ伏すなのは。

「ど、どうしたのよ?」

「えくと、キャスターさんが持つて来るんだ。」

なのはからメールを見せられて、取り敢えず課題は安心じゃないかと二人は思うが、
なのはは今度は別な意味で頭を悩ませていた。

「うん。『キャスターさんが』持つて来るの。」

「?なら良いじゃない。」

「……絶対何かされるの……」

「ああ、成る程。」

知り合つて間もないが、高町家の家政婦がどんな人物かは大体理解している二人である。

「まあ、大変よね。」

「とうか、なのはちゃん。嫌じゃあ無いの？」

「別に嫌じゃ無いの。ただ恥ずかしいよう……」

「あ、嫌じゃないんだ。」

「普段どんなことされてんのよ？」

机から顔を上げて普段のセクハラもといスキンシップの事を二人に話す。

「えくと、抱っこされたり、おんぶされたり。」

「その位ならまあ、良いんじゃないかな？」

「抱き締められたり、頬擦りされたりとか、」

「可愛がつてる……って訳……よね？」

「ご飯の時にあーんつてしてきたり。」

「少なくとも家政婦の仕事じゃ無いわね。なのはも断りなさいよ。甘やかされてるわよ。」

「えくと後、お風呂入つたりとか」

「え!?!」「お風呂!?!」

いきなり出てきた内容に思わず聞き返すアリサとすずか。周りのクラスメイトも思わず振り返った。

「朝のランニングの後に入ったりするんだ。」

「あの人と入ってるの!?何やってんのよ!?!」

「え?色々(髪で)遊ばれたりしてるよ?後、私もお返しに(尻尾を)モフモフしたり…」

「な、なのはちゃん大人だね…(モフモフって胸…だよ。あの人凄かったし…)」

「えっ?」

「もう、付き合ってるで良いじゃない…」

「えっ!?!付き合ってるは無いの!!」

顔を真っ赤にした二人。周りのクラスメイト達も顔を赤くしたり、キヤアキヤアと黄色い声が上がったり、何かノートに書き記したりと大騒ぎである。どうにか、友人たちの誤解を解こうとなのはが、口を開きかけたそこに…

「お待たせしましたなのは様♪貴女の良妻がデリバリーにやってきました…って何ですかこの雰囲気?」

かくしてなのはは項垂れ、教室は黄色い歓声に包まれるのであった。なおこの日以降、なのはは忘れ物をしないようになったという。

「とういわけで何故か、なのは様から怒られてしまいました。解せぬ。あ、シュークリーム下さい。」

「うん。なのはが恥ずかしかったからだと思うけど流石にその発言は不味かったかしら？」

商店街で買い物済ませた後、翠屋に立ち寄りシュークリームを買う。どうやらシュークリームでなのはの機嫌をとるつもりようだ。

珍しく店に来たキャスターを見て、桃子が何があつたのか聞くと娘の学校に忘れ物を届けに行き、案の定やらかしたというわけである。まあタイミングが悪かつたというものもあるが。

「でも、流石にお嫁さん発言はまだ早いんじゃないかしら？」

「そうでしょうか？少なくとも数万人単位で求婚者がいそうですから。」

「あら、なのはそんなにモテているの?」

「ええモチロン。正妻は私ですが。」

大きなお友達にという言葉は、出されたコーヒーと一緒に流し込み。可愛いですからねと付け加えておく。というかまだ早いでいいのかという疑問は二人の後ろで話を聞いている士郎しか浮かべていないようだ。

「取り敢えず、なのは様に機嫌を直していただく為に色々用意したんですよ。」

「シユークリームの他にブレゼント?」

言いながらガサゴソ紙袋を漁るキャスター。

「ええ、商店街のレンタルビデオシヨップで借りてきたDVD 『ま○か☆マ○カ』と、この『是非乃枕』で御主人様と親睦を……」

「……キャスターちゃん? ちょっと教育的指導が必要かしら?」

「え、ちよつと桃子さん? 目が怖いんですが?」

「なのはにこのDVDと枕は早すぎるわ。」

「魔力の多いマスターが、いつ白い獣や淫獣やステッキに、『僕と契約してよ。』的な詐欺に合うとも限らないじゃないですか!? だから、これで学んでいただきつつ、怖がった御主人様を慰めつつ、あわよくば既成事実をとかは一切思つて無いわけでした……あ、耳は耳は引つ張らないで下さいませ!!」

「R—18はダメよ。取り敢えず、裏に行きましようか。」

この後、裏で桃子とお話をしたキャスターはふらつきながら高町家に戻るのであった。

なお、高町夫妻に枕は接収された事を追記しておく。

洗濯物にアイロンをかけて筆筒に仕舞い込み、夕飯の支度を済ませると耳をピンと立たせる。尻尾と耳を消し、そのままヤカンでお湯を沸かし、お茶の準備をする。どうやらカップの用意は三つのようなのだ。

「ただいまキャスターさん。」

「お帰りなさいませなのは様♪お待ちしておりました。今日は、申し訳ございませんでした。」

「私もご免なさい。折角持ってきてくれたのに。」

「おじやまするわね。そして、なのは！あれだけ大騒ぎになったのにそれは甘いわよ!」

「あはは、キャスターさん。おじやまします。」

リビングに入って来た、なのはとアリサとすずかを出迎えるキャスター。アリサの剣幕を流しつつ三人から荷物をささっと預かっていく。

「あら、アリサ様とすずか様もいらつしやいませ。ささ、お茶の支度が出来ておりますの

でまず手を洗いましょうか。」

「ちよつと、話聞きなさいよ!!あの後大変だったんだからね!!」

「うん。皆興味深々で聞いてきたし、噂を聞いてきた何か危ない雰囲気先輩たちが、なのはちゃんを凄い目で見てたしね。」

「ああ、何処にでも聖母様に見られてるような人とか居ますからね。」

「妹にならないかって沢山聞かれたの。あ、でも白野ちゃんが頑張ってくれた餡は美味しかったな。」

「思いつきり同情されてんじやないのよ。」

キャスターは三つ分のティーカップに自分の分のカップを加える。どうやらお姫様達とのお茶会には自分も参加しなければならないようだ。主にその先輩方について詳しく。

賑やかに洗面所から戻って来た三人娘とお茶をすべく、今日も彼女はキャスターとしての日常を楽しく過ごすのであった。

月と海賊とチョコレート・前編

——その戦いは、大方の予想を裏切り彼の国に敗北をもたらし、そしてある国を大國へと押し上げた。

海が燃えている。大きな帆船が見るも無惨にあちらこちらでボロボロになって燃えている。

海には沢山の残骸や夥しい数の人が浮いていた。

『見よ、我等の勝利だ!!』

『女王と我等※※艦隊に栄光あれ!!』

『万歳!!万歳!!』

『流石は※※※副司令官だ。無敵艦隊をこうも大敗させるとは!!』

周りの人達も口々に勝利の叫びを上げてる。そんな中で一人、燃えゆく敵船を眺める——格好からして恐らく指揮官だろうか?——その人に私は目を向ける。

『悪魔め。』

『※※※※※めが、海賊風情が太陽を落とすか。』

『栄えある我等の戦いかたではないわ。』

そんな声が聞こえた。敵から、そして味方からも。

『どうして!?!』

敵ならばともかく味方からも悪口を言われなくちゃならないのか。

その人達を見ると嫉妬や恐怖そんな目をあの人に向けていました。まるで人ではないものを見るような——

怖い。どうして、味方にそんな目を向けられるのか。

怖くなってあの人を見て、私は目を疑った。

『どうしてですか?』

敵から悪魔と呼ばれ怨念を受け。

味方からも蔑まれ、疎まれているのに。

『どうして、あなたは——笑っていられるの?』

私の声が聞こえたのか、その人はこちらを向いて――

「――ゆめ？」

朝日が眩しくて目を覚ます。まだブーツとする頭で周りを見回す。携帯電話の時刻は朝の6:48。何時もより早く目覚めてしまったみたい。

「・・・取り敢えず着替えよう。」

パジャマを脱いで制服姿になると私は庭の方に出る。まだ、肌寒いけれど今日は天気がいいし朝早くくて清々しい空気だ。

だけど、私の中ではモヤモヤしたものが渦巻いていました。

今朝の変な夢が私の中で納得できないから、それに――

「もし私が、あの二人に……」

決して、私にとつてあの夢は他人事じゃない。もしも、私の友人達にあんな目を——
を見る目を向けられたら私は……

「おや、何だい？ 今日随分早いじゃないかお嬢ちゃん。こりや今日は雨かねえ。」

……そんな私の気分を壊してくれる人の声が聞こえ、私は溜め息をつく。いつたい
誰のせいだと思つて。

「ん？ 朝からしけた顔してるねえ……スズカ？」

「誰のせいだと思つてるんですか。ライダー。」

振り向くとそこにはエンジ色の服を身に纏つた顔にキズがある——さっきの夢に出
てきた副司令官。

私、月村すずかと契約した英霊——サーヴァント・ライダーがそこに立っていました。

それは偶然。ある日慌ただしく帰つてきたお姉ちゃんが、倉庫から色んな物を引つ張
り出していたときでした。

色んながらくたを触ったりしながらあれでもないこれでもない探し回る姿に引いてしまい。部屋に戻ろうとしたとき、偶然一冊の古い本に目が止まりました。

その上に載っていたがらくた（最初に脱皮した蛇の脱け殻の化石とか人造人間の設計図や何か有名な人のナイフのレプリカ・・・何でこんなのが家にあるんだろう？）を退けて、騒ぐお姉ちゃんを後に部屋に持ち帰りました。

部屋にあった色んな辞書を使って読もうとすると突然左胸にピリツと痛みが走り、驚いて見ると何かの模様のようなのが付いていて、私は怖くなって本を放り出してベッドに潜り込んだのです。

何かの本で見た、悪魔の契約か何かかと思ひ震えながら眠るとその日、不思議な夢を見ました。

ここではない遠いどこかで、大海原にのりだし財宝を見付ける。そんな冒険の夢を。目が覚めて、左胸の模様が消えてないことを見て、落ち込みながらも放り出した本の正体を探るべく少しずつ読んでみました。

「物語じゃない。日記？違う、これ、航海日誌だ。」

所々掠れていたり読めないところもあったけど、どうやらこの日誌の持ち主が、世界一周を為し遂げるまでの日々が綴られていて、時に笑ったり時にワクワクしながら私は夢中になっていたのです。

だって、大海原で自分達だけの力で世界を一周するそんな大冒険なら誰だって憧れてしまいます。それに何故か、まるで実体験しているかのようにその冒険の夢を見るのが面白くって、この不思議な航海日誌を読んでいて気が付けば二週間も過ぎていました。「いいなあ。」

その日、日誌を読み終えた時、自分の部屋から見える月を眺めながら、私は呟きました。

沢山命の危険もあつたけど、多くの出逢いと別れを繰り返しながらも世界一周を成し遂げた大英雄の航海。その英雄の生き様に私は憧れてしまっていました。

私は、実は普通の人間ではなく「夜の一族」と呼ばれる吸血鬼のような、特殊な体質を持った一族なのです。

だから、私はそんな夜の一族なんて柵から私を連れ出してくれる人を———こんな普通じゃない私を、仲間だって認めてくれる人を望んでいたのかもしれない。

「何処か遠くに、私も連れて行って欲しい———」
そう、呟いた時でした。

「まったく、弱虫と泣き虫はアタシの船には要らないんだがね。」

そんな声が聞こえたと同時に部屋の真ん中にステンドグラスのような物が現れたのは。

「まあ、こうして喚ばれた以上は仕事だし？どんな上官でもきちんと副官として、給料分の働きはさせてもらうさね。」

ステンドグラスが砕けると共に現れたのは、とても派手なエンジ色の海賊のような格好をした大人の女の人の。同じく派手な赤い髪に、大きく胸元を見せてるけど何より目立つのがその美貌に斜めに走る傷痕。普通ならマイナスになりそうな傷もその魅力の一つにしてしまっている独特な雰囲気を持つ——しかし、その身に内包している力の渦は明らかに人ではない。そんな人が私の前に立つと、

「ん？聖杯戦争に喚ばれたにしちゃおかしいけど・・・パスは通ってるね。魔力の質も量も良し。こりや当りだったかね。」

そんな、よくわからない事を呟いた後に

「さて、サーヴァント・ライダー。召喚に応じて参上した。」

そのまま私を見据えて、

「問おう、お嬢ちゃんがアタシのマスターかい？」

そう、笑ったのだった。

「お酒くさいよライダー。また朝まで飲んでたの？」

「あん？そもそもアタシは船乗りだよ？飲まない船乗りなんてブリテンの飯がうまいっ

てくらい有り得ないだろ？」

「下戸の船乗りさんとブリテンの人に謝りなよ……」

カラカラと笑うライダーと一緒に朝ごはんを食べる。私と比べて何倍もある量を豪快に、けれど不作法に見えないように食べるから不思議だ。

「まあ前にも言ったけど、アタシらは基本的には食事も睡眠も必要ないけど暇なんだよ。スズカの警護つつても滅多にやること無いし、聖杯戦争が起こってるわけでもない。」

召喚した後、お姉ちゃん達とライダーが話し合い、ライダーは家の警備と私の警護をすることになりました。その時にライダーの事は秘密にすることとライダーに給与を与えることが決まりました。もつとも学校に行くときは私からお願ひして着いてきてはいません。

「でも、キャスターのサーヴァントは居たよ？」

そう、入学式のあの日にアリサちゃんに取り上げられた私のカチューシャを取り返してくれた女の人の。

とても派手な印象のその人をなのはちゃんは、キャスターさんと呼んでいたのだ。その事を伝えるとライダーは、呆れたように口を開いた。

「そもそも本来、陣地に罫張り巡らせて迎撃つてのがスタンスのキャスタークラスのサーヴァントが、派手な格好で出歩いて、普通に家政婦やってるつてのが有り得ないだ

ろ…」

「う〜ん…」

確かに話をしてみるととても明るくて、やさしい家政婦さんで感じだったな。なのはちやんが絡むと物凄く残念だけど。でも、なのはちやんも満更じや無さそうだし良いのかな。

「ま、頭使うキャスターが、大して陰謀張り巡らしてないってことはやっぱり今のところ、聖杯戦争は起こってないんじゃないかね？恐らくはアタシもソイツも偶然呼び出された、つて所じゃないかい？とはいっても用心するに越したことはないがね。」

「…そうだね。」

——聖杯——ありとあらゆる願いを叶えるモノ

…もし手に入れば私のこの体も——

でも、やっぱり戦うのは嫌だな。

「アタシは、休暇と割り切って現界ライフを楽しむけどさ。スズカは何か願いは無いのかい？」

「あるよ。でも、誰かと戦ってまで欲しくはないかな。」

「——ふうん。」

笑いながらワインの瓶を煽る…朝から!?

「お姉ちゃん達がまた怒るよ?」

「良いじゃないか。ちゃんと普段はシノブから貰ってる給金以上の働きはしてんだしや。」

「むう。私がライダーと契約してるのに。お姉ちゃんばかり。」

「ハツハツハ!! まあ、お嬢ちゃんが自力でアタシを雇えたらちゃんとお上官命令は聞いてあげるさね。アタシに払ってる金はシノブから出てんだ。払えるもの払ってこそその一人前だよ? スズカ?」

タダ働きは御免だよ。と言いながら酒瓶片手に席を立つライダー。

「そろそろバスの時間じゃないかい? 遅れるよ。」

「わ、わかってます!!」

本当に、なのはちゃんの所はどうやって言うこと聞いて貰ってるんだろう?

「キャスターさん？初めてあったときからあんな感じだよ？」

「そ、そうなんだ。」

「え、初対面からあんなだったの？」

昼休み、天気がいいので私達は屋上でお昼ごはんを食べています。他愛ない話をしながら、然り気無くなのはちゃんにキャスターさんの事を聞いてみました。

「うん。昔、誘拐されたときにね。助けてくれたの。」

「え？誘拐されたことあるの!?!て言うか助けた!?!」

「つ、強いんだね。キャスターさん。」

「うん。その時に『貴女が私の御主人様ですか?』ってそれからずっと家の事助けてくれるの。」

・・・うん。成る程、なのはちゃんはその時にキャスターさんを召喚したんだね…と
言うかももう少し隠したりしようよ…なのはちゃんがマスターで確定だよこれ。

「あ、怪しいわ。何で見ず知らずのなのはを助けてそのままなのは所に住んでんのよ…」

そうだね。普通ならそう思うよね。

「そもそも『キャスター』って何よ？魔術師って事？明らかに偽名じゃない。」

「え？えくとそ、そうかも…」

「何であんたが知らないのよ〜!!」

「い、いひやい!?!いひやいよ!」

なのはちゃんのほっぺをグニグニ引つ張るアリサちゃん。なのはちゃんの頬つぺた柔らかいな〜。

「アリサちゃん落ち着いて。」

「まったくもう。決めたわ!!次にあの人に会ったら問い質してやるんだから!!」

「う〜痛かったの・・・」

そう言いながらお弁当をつつくなのはちゃん。そのお弁当のご飯の上に『愛ラブなのは様』とか書かれてるのを最早疑問にも思っていない辺り、大分あの人に毒されてるんだなあと思う。

でも、キャスターさんは最初からなのはちゃんに従順なんだなあ。

「でも、どうしたのよすずか?キャスターさんの事を気にするなんて。」

「うん。なのはちゃんとキャスターさん仲が良いからどうやって仲良くなったのかなって気になったから。」

「何よ。誰かと喧嘩でもしたの?」

「ううん。喧嘩はしてないよ。ただ上手くないかなってことがあってね。」

どうしたものかなと伝えた所、

「プレゼントとかは？」

「あ、それいいね！」

「うーん…」

ライダーにプレゼントか…喜びそうなのは、

「お酒とか…金貨？」

「…それは無理なの…」

「何処の海賊よ…」

英国の海賊です。と心のなかで突っ込みを入れておく。

「キャスターさんならなのはをリボンで縛り上げて渡せば済むけど、お酒は難しいわね。」

「そうだね。キャスターさんならそれで済むけど金貨も難しいよね。」

「あれ？二人ともおかしいよね…あ、電話。」

『なのは様!?!何か今素敵なお話をさr…』

「…間違いだったの。」

「…そうなんだ。」

何とも言えないような空気の中、食べ終わって三人で空を見上げる。暫くしてアリサちゃんが、我に返ると、

「つとそうだった。私購買でシャーペンの芯買わなきゃ。」
「購買？」

「私も初めて行くんだけどどうする？」

「行く(の)。」

「こうして、私達は屋上を後にしました。」

聖祥の購買部は、昇降口を入れてすぐの所にあります。私達は一旦、教室にお弁当箱を置いて行くことにしました。

「あ、あった。」

「へえ、結構色々有るわね。」

「本当だね。カレーパンにやきそばパンに・・・プレミアムロールケーキ？」

「制服も売ってるの。校章にハチマキも」

「エーテル？エリクサー？何よこれ？」

「香木に・・・え、刀？」

「クダヨケ・・・根性棒・・・」

「フレームアイズ？スノーホワイト？」

「非売品『カレイドな杖』？」

「ここ、何なの!？」

確かに文房具も置いてあったのですが明らかに変な品揃えに私達が注目していた時でした。

「——いらつしやいませ。」

顔を上げるとソコには、死んだ魚のような眼をした体の大きな、カソツクを着た神父さんがいました。

「これはこれは、中々に愉しそうなお客様方だ。」

そういつて笑う神父さん：違う、明らかにその笑い方はお客様を見てする笑顔じゃない。

「な、何よあんた!？」

「ほう。初対面から中々のご挨拶だな。実に子供らしくて良いことだ。」

「なんですすつてえ!？」

何だろうこの人と、アリサちゃんの相性が物凄く悪い気がする。

「私は、この学校の購買部店長、並びにカウンセラーと非常勤講師を兼任している言峰という。格好を見てわかる通り聖職者も務めている。」

「て、店長さんだったの!？」

「カウンセラー!?!嘘でしょ!?!」

「先生だったんだ…」

何でこんな人が居るんだろう。

「私達は些かこの学校に用事があつてな。私はこうして、この学校で仕事をしている。正直この配置には思うところがあるが、任された以上、最強の購買部を目指すつもりだ。」

「胡散臭い商品並べといてよく言うわよ。」

「これはこれは、ガラス玉の眼をしたお嬢様(笑)は中々に手厳しい。」

「だ・れ・が、ガラス玉の眼よ!？」

「あ、アリサちゃん落ち着いて!？」

この人、明らかにアリサちゃんの反応を見て楽しんでるから!!

「これ下さい。」

「なのは(ちゃん)!?!」

唐突になのはちゃんが、レジに置いたのは…根性棒!?!何に使うの!?!

「温めますか?？」

「温めないの。」

そんなやり取りをして、なのはちゃんは買い物を済ませた。

「ああもう。私もこれ下さい!!」

「シャーペンの芯1つ150円になります…もっと貢献して欲しいものだ…」

「——■■■■■■■■■■——!?!」

「アリサちゃん落ち着いて!?!落ち着いて欲しいの!?!」

「もう何言ってるのか分からないから!?!」

「猛り狂うアリサちゃんを落ち着かせようとしていると、ふとあるものが目に入りました。」

「言峰さん。これは?」

「ほう。中々にお目が高い。これはこういう包装をしたお菓子だ。名店の味に匹敵すると自負している。」

「うーん。こういうラッピングできますか?」

言峰さんにラッピングを説明する。すると言峰さんは頷き、

「別料金になるが?」

「じゃあそれで。」

「わかった。放課後取りにきたまえ。——少女よ。」

急に言峰さんは、顔を引き締め真剣な眼差しで私に口を開いた。

「——温めますか？」

「温めません!!」

ニヤリとしながらまたのお越しをと宣う神父を後に、私達はアリサちゃんを引っ張りながらチャイムの音を聞きながら教室に戻るのでした。

月と海賊とチョコレート・中編

放課後、購買部の言峰神父からラッピングされた商品をもらいアリサちゃんやなのはちちゃんと塾へと歩いて向かう。

「本ツツツ当あの神父苦手だわ！敵よ敵ー！」

「あはは…アリサちゃん本当に神父さん苦手なんだね。」

「さつきもまたからかわれてたよね…」

受け取りに行くときに心配だからと着いて来てくれたけど、私としてはアリサちゃんの胃と精神が心配だよ。そう思いながらなのはちちゃんと二人でアリサちゃんを宥めつつ近道の公園を通っていた時の事です。

「あれ？」

「ん？」

「?どうしたのよ二人とも。」

草むらの向こうで何か動いた気がして、そつと覗いてみると、

「…ネコ？」

一匹の猫が、力なく横たわっていました。

「どうしたのよ二人とも？」

「アリサちゃん、あれ！」

「何その猫？弱ってるわよ。」

猫…にしては何処か不思議な雰囲気猫を抱き上げ、取り敢えず動物病院につれていくことにしました。

「何て種類なのかな？」

「うーん。家にいる子達とも違うね。」

「とにかく急ぐわよ！」

アリサちゃんの言葉に急いで向かうその途中。

「・・・？」

私から腕の中のネコに何か流れ込んだ気がしました。

「「ヤマネコ？」」

「多分そう。町の中に居るのも珍しいけど見たことない種類ね。」

院長さんに診察してもらい、点滴を受けているネコを横目にカルテを書きながら院長さんは、そう私達に伝えました。

「多分何処かから逃げ出したんじゃないかしら？ 外傷は特に無し、かなり衰弱はしているけど随分回復したみたいね。」

「それって…」

「飼い主が現れれば良いけど…それにしても…」

回復が早すぎる。そう呟くのを聞いてヤマネコ？を見ると

「……………」

「じーっ」と目を覚まして此方を——正確には私を見ているヤマネコ（仮）と目があってしまいました。

「あ、ネコさん起きたみたいだよ！」

「本当ね。元気になったわね。」

「うん。そうだね。」

ヤマネコ（仮）さんは、部屋を見渡したあと、なのはちゃんと私を見比べてやはり私の方をじーっつと見つめてきました。

「何かすずかを見てるわね？ネコ好きオーラでも見えてんのかしら？」

「ネコさんすずかちゃんの所に行きたいの？」

なのはちゃんが話し掛けると、驚くことに器用に前足と口で点滴を外して私の頭の上によじ登り、

「にゃあ♪」

と鳴きました。・・・もしかしてこの子。

「人の言葉が解るのかな？」

「え、て言うか頭良すぎでしょ!?!点滴を外したわよ!?!」

「良いなあ…すずかちゃん羨ましいの。」

そんな感じで騒いでいると、

「三人とも…塾はいいの?」

慌てて院長先生にお礼を言つて、私達は塾へと急ぐのでした。

「・・・請求書何処に送ろう・・・」

「成る程、それで家に請求書が届いたのね。」

「うん。ゴメンねお姉ちゃん。」

家に帰ってお姉ちゃんにヤマネコさんを暫く飼ってもいいか聞きに行くとお姉ちゃんから病院の請求書について聞かれました。

「別に家族が増えるのは良いけどね。金額もそんな額じゃないし…ライダーさんが持つてくる請求書なんて…」

どこか遠い目をして乾いた笑いを浮かべるお姉ちゃんに腕の中のヤマネコさんが、ビクツとしたのを感じました。・・・うんヤマネコさん。そんなこの人大丈夫ですか？みたいな目で見ないで…

「まあ月村家の勢力基盤が、あの人のお陰でかなり固まったのは事実だから良いんだけどね。」

「ライダー・・・やっぱり凄いなんだね。」

「そつちの筋の人達に気に入られたり慕われたりしてるわ。本人も荒くれ共を纏めるのは得意だつて言つてたし、彼女が居てくれるとかなり話がまとまりやすいのよ…」

溜め息をついて机に突っ伏すお姉ちゃんに

「当たり前だろう？あの程度の事も出来なきや船長や提督なんて勤まりやしないよ。ア

タシらにしてみりや、シノブの交渉なんざ駆け出し商人に毛が生えたぐらいのもんさね。」

「ひゃあ!?!」

私の後ろに突然現れたライダーが、止めを差した。

「おや、お帰りスズカ。」

「もう…いきなり後ろに立つの止めてよ…」

「細かいねえ…」

カラカラと陽気に笑いながら私の頭を撫でてくるライダー。う…ちよつと気持ちいい…

「フシヤ——!!」

「つと。何だいこりや?」

突然飛び掛かったヤマネコさんを軽く避けて逆につまみ上げるライダー。

「フ——!!」

「珍しいね、ヤマネコかい?」

「うん。学校帰りに拾ったの。」

「へえ。まあこれだけ元気ならネズミも捕れるだろ。」

そう言いながらネコを下ろすライダー。ヤマネコさんは、パツとライダーから離れる

と私の近くに来てライダーを警戒し始めました。

「おや、嫌われたね。これでもネコは嫌いじゃないんだが・・・」

「そうなんだ。何か意外かも。」

「割と失礼だねスズカ。もつとも愛玩目的つてよりかネズミ対策が主だったかね。船の上でネズミが湧いたらそりや大変なもんさね。」

「あ、そつか。」

水や食糧。果ては交易の品物まで駄目にされてしまい、更には病気まで。狭い船の上でそれが発生するともう目も当てられない。当時の船乗りにとってはネズミは天敵にも等しいのだ。

「まあ葉やネズミ取りで対策するところもあつたがね。ネコがいると船員の気晴らしにもなるし。」

「へえ〜。」

ヤマネコさんを宥めながらライダーとネコ談義をする。でも、何でヤマネコさんはライダーに威嚇をしたのかな？

「うー言ってくれるわねライダー。」

「あん？こないだの藤村組との交渉を鑑みるとそんな評価だね。悪いけど及第点もやれないよ。」

「ウグツ!？」

「向こうのペースに乗せられてよくもまあ。暇潰しに偶々着いて行つてたアタシが、口を挟まなかつたらどうなつてたんだい?」

「・・・仰る通りです・・・」

お姉ちゃんが復活したと思つたら早速ライダーに鎮められた。・・・何したんだろう。「つとまあスズカの前で虐めて、なけなしの姉の威厳が無くなるのも酷だからここまでにしとくかね。」

「すずかあ・・・ライダーが苛めるよう・・・」

「あはは・・・」

「にやあ・・・」

「まあ嫌なら他のサーヴァントでも呼ぶこつた。」

「不満はないけど・・・色々試したけど私には令呪が出なかつたの!!」

プンスカと擬音が聞こえそうな怒り方をするお姉ちゃん。確かにライダーを喚ぶために必要だつた聖遺物は何故か家にあつたけど、お姉ちゃんは色々家中探して契約しようとしていたみたいだ。

「一応アレコレ恭也にも色々理由を付けて触らせたりしたけど、私にも恭也にも出なかつたのよね。」

因みに恭也さんとは、なのはちゃんのお兄さんです。世間って狭いよね。

「バーサーカーとか出たらどうすんのさ……」

「私的には、セイバーとかこう……恭也が喜びそうなのが呼べたらなーって……」

「……その雑念がいけないと思うんだがね？一応、アタシらにも相性の良し悪しがあるしね。それに聖遺物が偽物だったり、その英雄との繋がりが弱い物とかだから出てこないんじゃないかい？」

お姉ちゃんのサーヴアント召喚理由に呆れつつも助言をするライダーは、やっぱり面倒見が良いのかもしれない。私ならそんな理由で呼ばれたら宝具の一撃でも当ててしまいかも shouldn't。爆ぜて、お姉ちゃん。

「やっぱり偽物だったのかしら？なら恭也にあげてもやっぱり問題なかったわね。」

「ん？何か譲ったのかい？」

「ええ、倉庫にあった何か切れ味良さそうなナイフを。桃子さんが丁度リングとか果物を綺麗に切れるナイフを欲しがってたそうなのよ。」

「……ナイフでセイバーは出てこないんじゃないかい？出てきてもアーチャーとか、アサシンとかだと思っうよ？」

「でも、私と恭也が触っても何も無かったし。」

大丈夫、問題無いわよと言いながら微笑むお姉ちゃん。うーん。大丈夫……なのか

なあ。

「ところでお姉ちゃん。誰の聖遺物だったの？」

「えくとね、確か——の聖遺物よ。でもやつぱり偽物……ちよつとすずか？何でいい笑顔でヤマネコさんを爪を出した状態で私に近付け……え、ちよ、まつヤマネコさんの爪は危な——!?!」

取り敢えず、明日私も根性棒を買った方が良いのかもしれない。姉とヤマネコさんが戯れるのを見てそう思うのでした。あと、それとなくなのはちゃんに聞いてみよう……

ヤマネコさんによるお仕置きが済んで、食事を済ませ（いつもよりお腹が空いててたくさん食べてライダーにからかわれた）、お風呂に入った後、

「割とエゲツナイ事するねスズカ……マストにロープで吊るす方が人道的な気がしたよ。」

「なのはちゃんの家をメチャクチャにする所だったんだよ!?!お仕置きだよ。」

私の部屋でヤマネコさんを交えてライダーと話をしています。まったくお姉ちゃんてば!

「まあ、出てくる奴を知らないで渡したならともかく……知っていた上でならねえ……」

「そうでしょ。」

「にやあ…。」

「まあ、もう渡しちまったんだ。アレが偽物で、魔力持ちが居ないことを祈るしかないよ。」

「うん。」

「にや。」

「まあキャスターもそこにはいるんだろ？ならよつほどじゃなければ大丈夫だろ。」

「うん。そうだね。」

「にやあ？」

首を傾げながら話を聞くヤマネコさん。．．．何かこうしていると人と話しているみたい…：て言うか相づちうちうってたような…

「さて、もう遅い。早く寝な。」

「あ、待ってライダー。」

部屋から出ていこうとしたライダーを呼び止めてカバンの中から、それを取り出す。

「はい、ライダーに。」

「ん？何だいこりや？」

そういつてライダーは、私から袋を受け取り中身をあらためる。中には、金色の「おや！金貨じゃないか!!？．．．ん？こりやあ．．．」

そういつてライダーは、手に取った金貨を剥がす。

「アハハハハ！何だいこりゃ？こんなのが今はあるのかい。」

上機嫌に笑いながらそれをかじる。

そう、私がプレゼントしたのは大した物じゃない。子供でも手に入る金貨——の包み紙をしたチョコレートだ。よく、駄菓子なんかである物だけど流石は言峰神父の購買部。やたらリアルだし味も良い。

「中々旨いじゃないか。酒のツマミに丁度良いね。」

空いた手で私の頭を撫でながらチョコレートをかじるライダー。

「しかし、成る程。子供にも支払える財宝があるってことかい。確かにアタシは金銀財宝が好きだが……こういうのも悪くないね。」

「砂糖も当時は高級品……でしょ？」

「違う。そういつてライダーはこつちを向いて、」

「さて、スズカが、自分の財宝を与えてまでのご命令だ。何を願う？マスター？」

そういつてくれた。口は笑っているけれど、その目はハッキリと私の瞳を捉えていた。

それなら一つ、ライダーをお願いする命令は決めている。けど、ちよつと恥ずかしい。

「お船…」

「あん？」

「だからね。ライダーのお船…乗ってみたい。」

ダメかな。そう思つて顔を上げると、

ライダーが笑つて頷いていた。

「野郎共!! 錨を揚げな!!」

言いながら、ライダーが何処からか上着を、それも夢に出てきた海賊達の服を私に羽織らせて帽子を被せると私を抱き上げた。

「帆を張りな!! ボヤボヤしてんじやないよ!!」

声に驚いていたヤマネコさんが慌てて私の胸に飛び込んできたのを抱き抱える。

「旗を掲げろ!!」

そのまま部屋の窓を開けて窓から外に飛び降りる！

「ら、ライダー!?!」

思わず私は目を瞑り――

「さあ、出港だ。アタシの船を見せてあげるよスズカ。」

そうして私は自分の体が、落ちていく感覚が無くなり、浮き上がっていくのを感じて、目を開きました。

「うわあ…」

強い風の中、空には月と満天の星々。

眼下に広がる街の光り。

そして、雲海を突き進む伝説のガレオン船。

「如何かねマスター？アタシの船は？」

その光景に圧倒されていた私に後ろからライダーが声をかける。

「すごい・・・凄いよライダー!!」

「そうかい。そいつはよかった。」

思わずライダーに飛び付いてしまうほど、私は興奮してしまいました。

「船がお空に飛んでるんだよ!!」

「まあこいつがアタシの象徴たる船にして宝具だからね。こいつならこの世界の何処にだって行けるさ。さらに奥の手はこんなもんじゃないけどね。」

ちなみにヤマネコさんは、さつきから船縁でポカーンとしています。

「まるでピーターパンの世界みたい。」

「アタシはフック船長かい？ならスズカは囚われのティンカーベルつてところかね。」

二人でそんな話をして月を見上げた。

「くしゅん!？」

「冷えたかい。それじゃあ戻るか…おや…」

「?ライダー?」

いつもと違う雰囲気と声にライダーを見ると空を見上げていた。そしていつの間にか、クラシックな拳銃がその手に握られていた。

「こいつは驚いた。スズカ。この世界にピーターパンが居るみたいだよ。」

「え?」

ライダーの視線の先には、

——此処が、遙か雲の上にも関わらず。

仮面を着けた人が、

——仮面越しからでもわかる敵意を持って、

空に浮かんで此方を見ていた。

月と海賊とチョコレート・後編

海鳴市上空、強い風の中、船の上の私達と空の上の仮面の人が向かい合う。

「・・・単刀直入に聞く。貴様ら何者だ？」

怖い・・・

思わずライダーの後ろに隠れる。

「ふん。いきなりご挨拶だね。ただの地元民だよ。」

「ほざけ。魔法の無いこの世界でその船。・・・貴様ら何処の管理世界の者だ。」

「・・・あん？」

魔法？管理世界？この人何を言ってるんだろう？ライダーも眉をひそめたようだ。

「それを見ず知らずのあんたに言う必要があるのかい？」

「知らないとは言わせないぞ。その小娘と貴様らから感じる魔力・・・それほどの魔力を持ち、この船を操縦する。・・・何処の魔導師だ。」

この人、もしかして何か勘違いしてる？なら、戦わなくても済むかもしれない。止めさせようと口を開こうとした私の口をライダーが空いてる手で塞ぐ。

「んー!!んー!!」

「さて、どこの魔導師だろうねえ？もしかしたらただの一般人かもしれないね。」

「この世界に来る次元渡航者は全てチェックしている。しかし貴様らのような者の情報はない…そして、貴様と小娘の姿。・・・貴様、ロストログア狙いの賊か？」

「・・・おやおや、どうする上官殿。海賊だつてばれちまったよ？」

「・・・海賊はライダーだけじゃない。何だか私が海賊の首領みたいに言わないでよ！誤解解こうよ！」

「そうこうしているうちに仮面の人が船の上に降り立つ。と、同時にライダーの気配が変わった。」

「やはりそうか、この地に居るとは貴様…狙いはあの本だな？」

「何の事かねえ？それと無賃乗船とは礼儀知らずだね。家の船の掟だと…縛り首だ。安心しなよ？丈夫なロープを用意しとくよ。上官殿、下がってな。」

「一歩、二歩と歩きながら私の前に立つ。」

「賊風情が、大方願いを叶えるなんて噂に惑わされた口だろうが、イレギュラーには、ここで消えてもらう。」

「・・・願いを叶える本？そんな本がこの町にあるの？」

「覚悟!!」

「はっ!!」

襲い掛かって来た仮面の人が、踏み込み、一瞬で間合いに入ったライダーへ凄まじい拳打が、蹴りが打ち込まれる。常人には捉えられないその拳を

「よつと」

ライダーは涼しげな顔で全てをかわし、避けて、受け流す。

「すごい・・・」

思わずその戦いに見入ってしまう。ライダーが強いとは、聞いていたけれどここまでとは思わなかった。

一切の攻撃を避けられ仮面の人にも焦りが出てきたみたいだ。

「容易くはないと思っていたが・・・ここまでとは!?!」

「いや、中々の速さだよ。生身でサーヴァントとやり合えてんだ。誇つていいよ。」

「貴様、まさか使い魔か!?!」

その言葉に驚きながらも仮面の人が、攻撃速度を上げようとしたほんの一瞬の隙に「隙だらけだよ?」

至近距離で、いつの間にか両手に持っていた拳銃の引き金を腹部と足に向けて引いた。一瞬だけ仮面の人が何かを展開したけれど、それはガラスのように碎けて弾は仮面の人にめり込む。

「ひっ!?!」

思わずそんな声もれる。人が目の前で撃たれる。そんなの映画やドラマの中の話だと思っていた。

火薬の臭い、苦悶の声、そして目の前の崩れ落ちる仮面の人から流れ落ちる赤い——
紅い——アカイ——オイシソウナ——

「!?ゲホッ！バカな!?たかが旧式の質量兵器に!？」

「ちっ！まだ喋れんのか——スズカ？」

その声に意識が浮上する。そうだ、目の前に怪我をした仮面のエモノがいる。すぐにライダーを止めないと——

——私、今、何を考えた？——

「あ、」

——ダツテアンナニ朱クテイイ匂イガ——

「ああああ……」

——違う。私、そんなこと考えてなんか——

——ウソツキ、ダツテホントウハ——

——違う。違う違う違うちがうちがうちがう!!——

(スズカの様子がおかしい・・・魔力が不安定に、そして目が赤い。マズイ!!)

「どうし・・・うお!」

突然、スズカとライダーを光で出来た何か鎖のように縛り上げた。

「無事か!」

その声に視線を動かすと、目の前の奴と同じ格好をした仮面の男が近付いて来た。

(二人目・・・増援かい。こんな時に・・・)

正直な所一対一ならば、すずかを護りながらも十分な勝機はライダーにあった。しかし、二対一で戦闘能力の無いすずかを護りながら・・・となると話は変わってくる。しかも、相手は両者共に経験豊富な手練れ。

（加えてアタシはマスターが錯乱、おまけに拘束か…さすがが正気なら令呪を使って脱出も出来たけど…）

ちらりとわずかの方を見ると、縛られたまま甲板に倒れていた。先程までの状況を考える…

（初めての戦闘で昂った所に血を見たからか…マズイねえ。シノブにどやされるねこりゃ。）

「油断するな…アイツ…使い魔だ。」

「!?まさか…これ程の魔力を持つ使い魔を御せるなんて…」

「恐らくは…後ろの女の子だ。あの子が主人だろう。」

「その魔導師としての才能は惜しいけど…危険だ。計画の障害になるな。」

倒れたすずかに仮面の男が光弾を作る。

「う…ら、ライダー」

「スズカ!?!ちっ!」

意識を回復させたすずかに、自身の魔力を込めて拘束を砕きながらライダーが叫ぶ。何とか、せめて庇えるようにと拘束を外しすずかに駆け寄る。

「シュート。」

しかし、放たれた光弾はそれより速く無情にも少女の頭を吹き飛ばそうと迫り――

「やらせません。」

それよりも早くすすずかの元に現れた、灰色の女性に阻まれた。

「何だと!？」

「申し訳ありませんが、目の前で新しい主を無くすわけにはいかないのです。」

防壁を貼った女性は灰色の髪をして、何より特徴的な頭の耳と尻尾。

彼女はそう言うその後ろでライダーに拘束を外されたすずかに振り返る。

「え?あの・・・」

「ご無事ですか?」

「は、はい。ありがとうございます!」

「お礼など要りません。先に助けてもらったのは私の方ですし。」

「え?・・・もしかして…ヤマネコさん!？」

「はい。リニスと申します。」

よろしくお願いいたします。と微笑む女性——もといリニスに若干混乱するすずか。何だか今日一日で頭の許容量がパンクしそうだ。

「大丈夫かいスズカ？」

「うん大丈夫。ごめんねライダー・・・私のせいで」

「いや、アタシの遣り方がまずかったんだ。謝るのはこっちだ。それとアンタ・・・リニスだっけか？ありがとうよ。」

「いえ、此方こそ。もう少し早く人型になれば良かったんですが・・・」

そんな会話をしながら仮面の男達に向き合う。

「バカな・・・あのクラスの使い魔を二体、しかもあの歳で使役するだと・・・」

「化け物か何かか？あの少女は・・・」

その言葉にすずかが反応する。

「違います!!私は化け物なんかじゃ・・・」

「ふん。自覚が無いのか・・・SS級の魔導師でもそんな事は出来ん。出来るとしたらソイツは人を辞めたか人の皮を被った化け物だ。」

仮面の男の片割れが、そうすずかに返す。

「違う。違います!!」

「違わない。何より、そんな使い魔二人を使役しながら平然として話せているのが何よりの証拠だ。」

「ちがう…ちがうもん…」

「あなた達…!!」

もはや泣きながら必死にその言葉を否定するすずか。そして毛を逆立て杖に魔力を込めるリニス。

「わからないなら何度でも言いましょうか？ 貴女は」

そう言葉を紡ごうとした仮面の男を

「黙れよ。お前。」

ライダーが殴り飛ばして黙らせた。サーヴァントが魔力と速度を込めたその拳は容易く仮面の男を吹き飛ばし、船外へと叩き出した。

「アリア!？」

「余所見ですか?」

「しまっ!?!アアアアアア!!」

余所見をした片割れに容赦なく雷を浴びせるリニス。しかし、喰らいながらも必死に身体を動かし何とか意識を失いかけて自由落下中の相方の元にたどり着く。

「無事か?」

「ロツテ：ゴメンちよつと無理かも」

「仕方ない相手が悪すぎるわ。」

「く：撤退してお父様に報・・・告を・・・」

「?何を見・・・て・・・」

体勢を立て直し、改めて船を振り返って二人は言葉を失った。

「ちがうもん：化け物なんかじゃないもん・・・」

「すずかさん：申し訳ございません。私が無理に契約してしまつたばかりに」

泣きながら甲板に座り込むすずかに謝ることしかできないリニス。

「リニスさんは：悪くないよ：でも・・・」

「つたく。最初に言つただろうスズカ。泣き虫と弱虫はアタシの船には要らないつて」

「ライダーさん!? 貴女は!!」

泣き止まないすずかにライダーがそんな言葉を投げ掛けた。

途端に普段の大人しさをかなぐり捨てて、すずかは涙が溜まった目でライダーを睨み付けた。

「ライダーには・・・ライダーには分からないよ!!」

ライダーを睨み付けながら、泣きながら立ち上がる。

「こんな体質も力も私は欲しくなかった!! 私は、なのはちゃんやアリサちゃんみたいな、普通の女の子になりたいんだよ!!」

その、叫びを聞いて

「やつと本音を口にしたねスズカ。」

女海賊はそう愉快そうに笑った。

「何が可笑しいの!!」

「願い事を聞いても何してても、引っ込み思案な事しか言わなかったお嬢ちゃんが、ようやくと本音を吐いたんだ。そりゃ嬉しいってもんさ。」

一頻り笑って、ライダーはすずかに向き合う。

「確かにスズカの願い事は、普通の手段や方法じゃ叶わない。今の進んだ医学でも治せやしないだろう。だけどき、スズカが嫌ってるその力もまた、スズカの願い事を手に入

れるのに必要な力だとアタシは思う。そもそも、スズカの力なんてアタシらサーヴァントからしたら可愛いもんだよ。」

「うう・・・」

いつの間にか、すずかは泣くのを止めてライダーの話聞いていた。

「さっき聞いただろう？ろすとろぎあ？だっけか、願い事を叶えるつてもんがアイツらの言い方からして少なくとも一つはこの町にあるんだろうさ。しかも恐らくは他にも有りそうだね。こいつは世界一周した女海賊の勘だ。当たるよ？」

にんまりと笑うライダーのそれは、明かに獲物に狙いを定めた海賊の顔だ。

思わず、すずかも呆れたような笑みを見せる。

「もし、見つからなかったら？」

「あん？そんなときや世界中の海を巡って聖杯でも捜して大冒険さ。心配すんなよ？このアタシが居るんだからね。」

そう言つて豪快に笑うライダーを見て、すずかは少し目を閉じて：決意を込めて目を開きライダーに右手を差し出す。

「私の願いを叶えるために：一緒に居てくれますか？ライダー。」

ライダーもまた、すずかに右手を差しだし、その手を繋ぐ。

「これより我が船、我が旗は貴女と共にあり、貴女の運命は我等の航海と共にある。よろ

しく頼むよ？…すずか。」

そうして、手を離してすずかをリニスに預けて前に向かう。

「さて、アタシらの船での狼藉に加えて、うちの上官殿を泣かせた事をたつぷりと後悔させてやろうかね？」

「ライダー？…どうするの。」

「ん？あんな腹の虫が収まらない事を仕出かした連中には、ありつたけの弾を喰らわせてやるのさ。」

そう言つて船首に降り立つてすずかに

「スズカ。本当の化け物…スペイン共が悪魔とまで呼んだ力を見せてやるよ。」
すずかから貰った金貨を噛み砕きながらそう凄みのある笑みを浮かべた。

先ほどまで居た船から凄まじい魔力を感じ、振り返ると船の周りに波紋のような物がいくつも現れ、そこから船が次々と現れた。

「何い!？」

流星に驚きを隠せない二人の耳と夜空に

『野郎共、時間だよ!』

船首に立ち、此方を睨み付ける女海賊の声が響いた。

「な、何よ…何なのよこれは!？」

「わ、分からないよ有り得ない!!こんなの!!」

船団を率いた悪魔とまで呼ばれた女が謳う。

『嵐の王、亡霊の群れ——』

大空に現れた大船団、その総てから息苦しくなるほどの殺意と濃密な魔力が仮面の男達を縛り付ける。

ここに至り、二人は理解する。

——死ぬ。比喻でも無くどうしようもなく、無惨という言葉すら生温いくらいに。何故ならばアレは、戦争という誰も避けられぬ嵐の——暴力その物の具現だ。

本能の域でそれを感じた二人は防壁を張りながら逃げに徹する。しかし、それは、

『ワイルドハントの始まりだ!!』

轟音と共に次々と降り注ぐ砲弾の嵐の前には、余りにも無力であり遅すぎた。

「……デタラメですね。自身が率いた船団を亡霊として使役。そこからの一斉集中砲火ですか……」

顔を強ばらせて、未だに砲火を放ち続ける船団を眺めるリニス。その腕の中には魔力不足によりフラフラしていたさすが抱かれていた。

「やりすぎでは?」

「はん! 情けなんざ持ち合わせて無いっての。アタシにあるのは愉しみだけさね。出し惜しむのは幸運だけだ。命も弾もありったけ使うから愉しいのさ!」

「ううん……」

そう言うとすずかの頭を撫でる。

「ま、スズカも初陣で疲れたみたいだし、帰るかね。」

「すずかは、大丈夫なんでしょうか？」

リニスが周りを見回すと既に亡霊の船団は掻き消え、漂う硝煙の臭いだけがそこに残っていた。

「さっきのは戦闘の空気に当てられたのと、この子の一族の体質が原因さ。」

「体質……ですか。」

何処からかワインの瓶を取り出して口をつけながら答える。

「取り敢えず、明日でもスズカが起きたら聞いとくれ。序でにアンタの事も。アンタが使ったのとアイツらが使ってた術は似ていた。何か知ってんだろ？」

「ええ、明日必ずお二人に話します。魔導師の事も次元世界の事も私の事も。」

「次元世界か……楽しそうだねえ。」

ワインを煽りながら上機嫌に笑うライダー。

（とは言え、先ずは例の願いを叶える本とやらか。何か胡散臭い気はするんだが……ま、折角だ。マスターがご所望なんだ。派手に略奪といこうか。）

見えてきた月村邸を見据えながらそう方針を決めるのであった。

因みに同時刻——

「!? なんか、急に悪寒が…」

某所に急な寒気に襲われる少女と

「何!? この子達大怪我してるじゃない!! 鮫島あ!!」

いきなり部屋の窓辺に落ちてきたズタボロの猫二匹を助けた少女が居たそうなの。

パティシエと銀髪幼女

香ばしい香りのタルト生地に翠屋自慢のカスタードクリームを絞り、美しくカットティングされた苺やベリーといった果物を載せていく。載せる苺もパティシエ自らが厳選し、良く熟れており、しっかりと磨かれている辺りにパティシエ——高町桃子の基本を決して疎かにしない、プロの心意気が見て取れる。

「流石だな。いつ見ても美しい。」

「まあ、ありがとうございます。」

海鳴商店街一の喫茶『翠屋』。最近では県外からも足を運ぶ客も多くなり、一層忙しくなっている。

そうした多忙な中でも、しっかりとしたスタッフの接客やサービス。店のクリンリネスの徹底。お客様に出す一級のスイーツや珈琲等の品質もさることながら、やはり経営する高町夫妻の人柄も人気店たる理由の一つであろう。

本日の営業も終了し、手伝っていた恭也や美由紀、新人アルバイトも既に帰っており、閉店後の厨房でフルーツタルトを作っていた。

「特に最近は腕が上がったかな？」

「うふふ…恭也と忍ちゃんに貰ったナイフが凄く私にピッタリだね。思ったとおりにも物が切れるの。」

「フム…洋物の刃物には疎いが…良い出来のナイフだな。組織の断面が潰れていない。」
「凄いわよね。」

勿論使い手である、桃子の技量に依るところも大きいのだが、それを乗せる事が出来る道具というのも貴重である。

「それにしても…忍ちゃん大変みたいね。」

「ああ、何でもすずかちゃんが熱を出して倒れた上に、家の事が忙しいからな。」
「暫くは無理ね。ちゃんと休んでもらわないと…代わりにカレンちゃんが来てくれたよかったですわ。」

「ああ、楽しんで仕事をしてきているみたいだしな。」

聖祥大附属高等学校の新人アルバイトだが、物覚えも良く、日々愉しんで仕事をしてくれている銀髪の少女への夫妻の評価は高い。

因みに忍は、先日夜中に起きた海鳴市上空での謎の大轟音と未確認飛行物体の目撃情報処理に追われていた。今や海鳴市は、ゴシップ誌の記者や研究者に溢れ、町はSFブームとなっている。

「商店街の会長さんからUFOスイーツを作ってくれないかって聞かれたよ。」

「うくん考えておくわね。」

苦笑しながら出来上がったタルトを箱に詰めて、片付けと帰り支度を始める。

「そのタルトはキャスターさんにかい？」

「ええ、普段こうして仕事に集中出来るのはキャスターちゃんが、家の事全部してくれてるからだしお礼にと思って。」

「そうだな。」

今も家で家事全般をこなす狐耳の家政婦を思い浮かべる。毎日高町家の家事をそつなくこなし、商店街の店主達からも評判の家政婦（主に男衆）である。自分の主人であるのには対してだけは非常に残念ではあるが、彼女のお陰でかなり暮らしも楽になっている。

「・・・なあ桃子・・・」

「どうしたの？あなた・・・」

桃子を後ろからそつと抱き締め士郎が何か囁く。

「桃子・・・」

「士郎さん・・・」

閉店後の店内で二人の男女の影が重なり――

——こどもが欲しいの？——

「!?!」

突如聞こえた子供の声に慌てて離れる。

「何だ？」

「何かしら？」

周りを見回すが、誰の姿も見えない。

——こどもが欲しい？——

再び聞こえたその声に驚くが、桃子はその声に何処か、悲しさを感じてしまった。

「あなたは誰？」

——私たちは誰でもない——

——ただ、かえりたい。かえりたいの——

——おかあさんにかえりたいの——

悲哀の籠った声に思わず手を差し出す。

「ええと、確かに子供が欲しいけど…」

「桃子!?!」

——わかったよ。契約しようおかあさん（マスター）——

「なつのはさま♪」

「うにゃく抱き締めないで欲しいの。尻尾のお手入れしてるんだから。」

「んふふく良いじゃないですか♪」

一方、高町家では、狐耳の家政婦ことキャスターが膝になのはを乗せ、膝の上ではなのはが櫛を持ち、キャスターのモフモフとした尻尾を一生懸命鋤いていた。

「恭ちゃん。このブラックコーヒー物凄く甘い気がする。何も入れてないのに……」

「俺もだ……キャスター、何だか今日は随分積極的だな。」

「いやく何だか最近とことん出番が無かった気が致しまして……ナノハミン補給中です。」
「？」

「具体的にはく豆腐メンタルで計画性のない作者のせいでは？」

「何の話？」

「さて？ワタクシもそんな気がただけで。という訳でムギュー」

「うにゃくだからやめてく。」

恭也はなのはに押し付けてられているキャスターの双丘から目を反らし部屋の時計

を見る。

「二人とも遅いな…」

「何かあったのかな？」

膝の上のなのはをハグしながらキャスターが口を開く。

「多分、近々なのは様にご兄弟が増えるのではと。」

「「ぶっ!?!」」

「本当!?!」

「ええ、だって恭也さん達が帰ってきてからこんなにも時間がたつて…きつと閉店後の店内で二人でくんずほぐれつ…痛い!!恭也さん美由希さん何するんですか!?!」

「小学校低学年に何て事吹き込んでんだ淫乱狐!?!」

「変な想像しちゃったじゃない!?!」

いきなり竹刀での突っ込みに抗議するキャスターと顔を真っ赤にした恭也と美由希が喧嘩する中、一人自分の弟か妹を想像するなのは。

「私がお姉ちゃん…えへへ♪」

「いきなり竹刀とか!!うう…父上(ナギ)にも母上(ナミ)にもぶたれたことないのに!」

「あんたといいカレンといい…もう少し慎みとか持つてくれ!頼むから!」

「確かにあのバカツプルに子供が増えないのが商店街七不思議になってるけど!!」
「なるけども!!」

なのは放つてギャンギャンと騒ぐ三人によりカオスになった所に

「……ただいま。」

「……ただいま。キャスターちゃん居るかしら?」

「おや、おかえりなさいませ♪お楽しみでした……か?」

帰ってきた高町夫妻に全員が顔を向け、

「……おかあさん（マスター）、おとうさん。この人達だれ?」

側に現れた少女——乱雑に纏められた銀髪、右頬と左目の傷跡、アイスブルーの目の少女。しかし、その言葉と姿に全員が言葉を失った。

「おかあさん……つて」

「父さんこの子は?」

「あ、ああ実は……」

「ね、ねえスカートは?」

「?ひつよう?」

「必須なの!!」

なのはが、指摘した通り上に黒い革製の服は着ているが、スカートが穿かれていない。

代わりに複数の刃物の鞘を吊り下げている。

「・・・桃子さん。どういう事ですか？」

驚ながら問うキャスターに実は…と困ったような笑みを浮かべて桃子は応える。

「アサシンのサーヴァントと契約しちゃったの。」

「[[[はっ]]]」

「という訳で今日からキャスターちゃんと同じく我が家の一員となるアサシンちゃんよ。」

「・・・よろしく。」

「よろしくじゃねーですよ銀髪幼女。あーもーマスターのお母様が仕事から帰って来たと思つたら、サーヴァントと契約して帰ってきたんだが…と。何を言っているのか分からねーと思うが私も分からねー。」

「キャスターさん落ち着いて…」

改めて全員が席について話し合う。

「しかし、何でまた母さんがサーヴァントを？」

「何でもアサシンちゃんが言うには、恭也が桃子にくれたナイフが聖遺物だったらしい。」

「嘘お…」

「まさか…忍の奴知ってたのか？」

「忍さんエ…」

まさかの二体目の召喚に頭を抱える士郎、恭也、美由希、キャスターを尻目に、

「アサシンちゃんタルト美味しい？」

「うん♪おかあさん（マスター）。とても美味しい。」

「むう…」

ご機嫌斜めになったのはと一緒タルトをフォークでつつく銀髪のアサシンとそれを見守る桃子。大物である。

（…ワタクシのせいですねー。本来この世界に居ない筈のサーヴァントという存在を呼び出す仕組みを作られたが為に…ワタクシをなのは様呼び出した時と同じく、聖遺物と魔力、そしてその英雄が応える願いがあれば、サーヴァントとして呼び出せる…ってことですか。しかし、よりにもよって桃子さんが…）

と、目の前——桃子の横でフルーツタルトに美味しそうにかじりついている銀髪の幼

女に目を向ける。

（『アサシン』ですか。）

暗殺者のサーヴァント、アサシン。本来なら山の翁ハサンを指す言葉だが、卓越した殺しの技量や宝具の域まで達した武術を持つ英雄もこのクラスに該当する事がある。だが：この少女はそれとは違う——キャスターの目をもつてすればこの少女がそんな者ではない事はよくわかった。

「そもそも、何で魔力が殆ど無い桃子さんと契約したんですかアサシン？」

「もぐもぐ……？……ねえキャスター、そのタルト食べないの？」

「他人の話を聞きやがれっつてんですよ幼女!？」

「むっ。ちゃんんと聞いてるもん。だっっておかあさん（マスター）がわたしたちの触媒持ってたし、やさしそうだったもん。それに魔力なんて食べればいいじゃない。」

「ちよつと、貴女まさか魂喰らいするつもりだったんですか？」

「うんっ。」

こくんと可愛らしく頷くアサシンを見るキャスターの表情が強ばつたのを見て、恭也が声をかける。

「キャスター、魂喰らいってなんだ？」

「私たちは霊体だから、基本的にマスターからの魔力補給で現界してます。他にも霊脈を使ったりすることで魔力補給が出来るんですが、一番手っ取り早く魔力を補給して、自身を強化する方法が魂喰らいなんです。」

「何だか嫌な予感がするんだけど。」

「早い話が他人を殺して、魂や心臓といった霊核を直接補食するんです。まあ真つ当な英霊ならマスターからの命令が無ければやりませんよ。真つ当な英霊なら。」

顔を青くする高町家の面々を見ながら、キャスターは自分を睨むアサシンに問い掛ける。

「貴女、正体は暗殺者ですらない殺人鬼。それも数万を越える子供の怨霊の集合体ですね?。」

「うん。でもそれはあなたも同じでしょ? わたしたちと同じか、それ以上に穢れた反英雄のサーヴァント。」

嗤いながらアサシンは応える。

「だから真名を教えてないんですよ? さつきから皆にクラス名でしか呼ばれてないもん。ねえ。嫌われたくないから隠してるんですよ?。」

一氣にリビングの空気が張り詰めた物に変わる。

「ちよ、二人とも!?!」

「キ、キャスターさん？」

「なのは、下がりなさい……恭也!!」

「ああ。さあ母さんも早く……母さん？」

傍観していた高町家も避難を開始しようとする。

「……言ってくれるじゃないですか、纏めて消えたいですか？悪霊の塊風情が。」

「……そつちこそ、毛皮を剥いでおかあさん（マスター）のマフラーに仕立ててあげる。安物だけど。」

互いに立ち上がり得物を構える。キャスターの周りには鏡が浮かび手には呪符。アサシンは自身の腰に巻いた六本の鞘からナイフを二本、両手に構える。あわや高町家のリビングで大惨事となりかけ…

「二人とも？」

その声に二人とも……いや全員がビクリ、と身体を震わせる。ギギギ…と油が切れ

た機械のように首を向けると

「座りましょ?」

にこやかに——けれど凄まじいプレッシャーを纏いながら、高町桃子がそこにいた。

「お、おかあさん（マスター）?」

「桃子さん……で、ですが……」

若干プレッシャーに身を震わせながら桃子に答えるサーヴァント二体。

「座りましょ?」

「はひ……」

「うう……」

顔が青ざめたキャスターと涙目のアサシンが、自然と自分の前に並んで正座したのを見て桃子は頷くと、

「それじゃあ」

にこやかに——綺麗な微笑みを浮かべて

「私とお話ししましょ?」

さて、その頃の月村邸

「つつかれたわ〜」

「お疲れ様です忍。」

「あーありがとうございます。」

月村邸忍の自室にて月村忍は、ようやくと仕事を終わらせる事が出来た。「すみません。私が初めから結界を張っていたらここまでの騒ぎには…」

「あー大丈夫、大丈夫。すずかを守ってくれた結果でしょ？それに途中からでも張ってくれたから助かったわ。」

机の上の新聞や雑誌の一面には、『真夜中の怪音?!海鳴市に現れた謎の飛行物体!!』や『〇〇特派員は見た!謎の幽霊船団海鳴に現れる!!』『海鳴市にUFOの秘密基地か?』といったような普段なら胡散臭いで済まされるような記事で飾られていた。

「とにかく、コネを使い回って何とかこの騒ぎも近日中には収まると思うわ。」

「御苦労様でした。」

「それよりすずかは大丈夫なのかしら?」

寒さと急激な魔力消費で倒れて熱を出したすずかは、暫く寝込んでいた。今はメイドのノエルとフェアリンが様子を見てくれていた。

「ええ、特に身体に異常は見られませんでした。」

「よかったわ:それにしても魔法かあ:」

「私もサーヴァントという存在に驚きました。」

そんな談笑をしていると。

「うーん。やっぱり暫くは現界が限度だね。戦闘は難しいねこりゃ。」

「あれだけ騒ぎを起こしたんだから暫くは大人しくしてなさいよ!」

本人曰く魔力の回復と言うことで、酒を飲み続けていたライダーが顔を出した。

「湿気た花火なんざ誰も喜ばないだろ？アタシは宵越しの弾は持たない主義なんだからさ。」

「だからつてすずかの魔力を遣いすぎでは？」

「アレは相手がかなりの手練れだったからさ。もしかしたら生き延びてるかもねえ？」

「あの砲撃の雨からですか？」

改めて自分達が、相手にした二人組に警戒心を募らせるリニスと忍。そんな二人の肩を抱いてライダーは続ける。

「ま、生きてたとしても使い物になるかどうかは別だけどさ。それよりスズカは当分は体力作りと魔力量のアップをしなきゃだね。このままじゃきつくてね。魔力補給がしなくなるよ。」

「魔力補給？それはどのように？」

何だか嫌な予感がしてリニスはライダーに尋ねた。

「例えば、アタシら霊体だから魂を補食したり…」

「大却下です!!」

「後は体液に含まれる魔力の摂取かねえ…」

「・・・体液？」

ちろりと紅い唇を舌で舐めて、二人を見るライダーの目は既に捕食者の目をしてい

た。嫌な予感がますます強くなった二人は逃げようとするが肩を抱いた手が離れない。

「何だいつれないねえ…夜は始まったばかりじゃないか？ いいじゃないか、食い物も男も女も殺し合いも真つ向勝負が一番気持ちいいんだからさ！」

「ちよ、ちよつと待ちなさい!? 私には恭也が…!?」

「大丈夫。アタシにも嫁がいるから。(史実です。)」

「嫁!? え…もしかして男も女もつてそういう…え!?」

混乱してきた二人を抱き締めたまま、忍のベッドに座らせながらライダーは二人の耳元に囁いた。

「アタシの名前を覚えていきな。寄港地総ての女を落とした女つてな…」

「そんな二つ名知りたくないですよ!? プレシア! アルフ! フェイト! 助けて下さい——

——!!」

「イヤ——!! 恭也——!!」

「お? 良いねえ…纏めて派手にやろうじゃないか!」

「やつぱり来ちゃダメ——!!」

万事休すかと二人で抱き合い、ベッドの上で目の前の悪魔を見て震える二人に

「お姉ちゃん達騒がしいよ? 何して…」

果たして救いの手は、パジャマ姿で目を擦りながら現れ、たつぷり十秒ほど固まり…

「……ごゆるりと……」

顔を真っ赤にして扉を閉めた。

「違うの!! 誤解よすずか——!!」

「待って下さいすずか——!!」

「あつはっは♪初だねえ三人とも。」

すずかを追いかける二人を肴に、ベッドに腰掛けたライダーはワインの瓶を煽るのだった。

「? 誰かに呼ばれたような?」

「母さんも?」

「あら? フェイトも?」

「二人もかい? アタシもだよ。」

「「???」」

銀髪幼女と雑事諸々

突然我が家に現れた新しいサーヴァント、アサシンちゃん。最初はお母さんが取られたと思っただけいい気持ちじゃなかったけど。

「ぐすん。こわかったよう。」

「泣かないでアサシンちゃん。」

こうしてお母さんに怒られて、私に抱き付いて来るのを見たらか妹が出来たような気分になりました。ただ・・・

「アサシンの分際で私のご主人様にイチャコラするなんて…」

「にやはは…はあ…」

向こうで何か準備しているキャスターさんが、こちらを睨んでるのは気付かないふりをしておきます。

「さて、アサシンが桃子さんと契約した問題ですが、一つ一つ懸念事項を潰していきましよう。」

と、キャスターさんはクルッと回転し何処からか紙と筆と硯、墨を取り出してサラサラと書いていきます。・・・何処に仕舞ってたんだろう？

そうして書いたものを見せてきました。

『ナイシヨです♪』

・・・心を読まないで欲しいの。

「割りとなのは様は顔に出やすいので。まあソコが可愛いんですが。」

改めて別な紙を見せてきました。

『魔力不足問題』

一つ目の問題。私は魔力が多いから大丈夫だけど、お母さんは少ないそうです。どうするんだろう。

「まあ、家にいる分には問題無く現界出来ますけど。」

「あら。そうなの？」

「どうしてだ？」

「説明してませんでしたね。実はこの家の下に少しばかり霊脈が通ってまして、そこから魔力を汲み上げて高町家を私がちよつとした工房化してるんです。」

キャスターさんによると私の魔力負担軽減の為に『陣地作成』というキャスターのクラスが持っているスキルを使って色々な事をしてくれていたそうです。

因みに海鳴市で特に霊脈が強い場所は、私達が通う聖祥大学付属小学校やすずかちゃんの家、神社に次いでアリサちゃんの家なんだそうです。

「まあ、性格的に私は向いてないのでランクは低いですけど、その程度ならどうとでもなります。取り敢えず、高町家にいる間は消えませんよ。」

「ありがとう、キャスターちゃん。助かるわ。」

「と、いうわけですからそこな幼女。大人しく屋根裏部屋にでもアサシンらしく込もつてなさい。後、いい加減なのは様から離れやがれ。」

「やだ。」

「このガキヤ…。」

舌打ちしてキャスターさんが用意したのは…大きな私達位の人形でした。

「人形か？それにしては精巧な…。」

「ええ、これを使ってアサシンを擬似的に受肉させます。」

「は？。」

「簡単に言いますとこの人形に霊体のサーヴァントを取り憑かせて擬似的な受肉をさせるわけです。ちつとは魔力削減出来ますし、サーヴァントの身体能力の枷代わりになりますしょう。」

「便利だな。」

お兄ちゃん達とキャスターさんがそんな話をしていましたが、私とアサシンちゃんは人形を触ったりしていました。何だか本当に眠ってるだけの人みたい。

「と、言いましても流石にアサシン用に調節しますんで少し時間を下さいまし。」

「じゃあ、お願いするわね。」

「ないすばでいでおねがい。」

「鏡を見やがれペツタン子。」

「ま、まあまあ・・・」

取り敢えず、人形をアサシンちゃんそつくりにしたたり、調整するので人形を部屋に持つて行きました。

でも、さっきの人形本当は何に使うつもりだったんだろ？と、戻ってきたキャスターさんに聞いてみました。

「万が一。御主人様とご家族の皆様が命に関わる大怪我をされた時に差し出がましい真似とは存じますが、お助けになれるようにと・・・」

・・・本音は？

「それは勿論、聖祥小学校に忍び込んで御主人様とイチャコラ学園Loveライフ☆を楽しむためですよ♪人形相手なら変化のスキルで借体成形しても罪悪感はありませんし・・・あ・・・」

「根性棒・・・」

『Yes master.』

「ちよっ!?!なのは様ストップです!!DV反対!きゃああああ!」

暫くして復活したキャスターさん。何であれで魔力が少し回復するんですか、アサシンに使ってくださいよとか言いながら次のお題を書いています。

『名前とか呼び方』

確かに。キャスターさんは普通に呼ばれてるけど人前で「アサシンちゃん。」とは呼びにくい。

「まあ、名字は高町家のをお借りしまして・・・」

また、サラサラと半紙に書いています。今度、書道の練習を一緒にしてもらおう。

『高町一夏』

『高町一刀』

『高町一誠』

『高町朝子』

何か・・・女の子の敵って感じがする名前を提示してきました。

「ふむ・・・一刀かな・・・」

「えく女の子の名前っぽく無いよ。」

（この名前に対する親近感は何だ？）

肝心のアサシンちゃんはどうと、唇を尖らせてました。

「何かやだ。」

「朝子辺りで良いじゃないですか。」

アサシンの朝子：流石に適當すぎると思うの。それにアサシンちゃんは日本人じゃないし外人さんっぽい名前の方が良いと思う。

「あ。そういえばアサシンちゃんの真名って誰なの？」

「そういえば聞いてなかったな。父さんと母さんは知ってるのか？」

お姉ちゃんとお兄ちゃんが、聞くと何故かお父さんは顔を曇らせて、お母さんは困ったような感じになりました。

「ああ、召喚された時に聞いたんだが・・・」

「そうね・・・ちよつと悪い意味で有名なのよね。」

悪い意味で有名な人？ どういう意味なんだろう。

「私たちの真名？」

と、アサシンちゃんは可愛く小首を傾げて聞いてきました。

「ああ、教えてくれないか？」

「教えてくれる？アサシンちゃん。」

「うん。わかった！でも、日本だとあんまりゆるーめーじゃないと思うよ？」

そう言うのアサシンちゃんは

「私たちの真名（な）は、
■■■■■■■■■■。」

私でさえ知ってる有名な殺人鬼の名前を口にしました。

「いやいやいやいや!？」

「めっちゃ有名じゃない!？」

「そうなの?」

その後は大騒ぎで男の人じゃないとか、医者が犯人じゃなかったんだとか、お兄ちゃんが忍さんに電話して喧嘩したりとか・・・とにかく大変でした。

結局、アサシンちゃんの名前は真名を女性名に変えて

『高町シル』

で呼ばれることになりました。

「あー驚いた。でも、アサシンちゃん……じゃなかったジルちゃんはそれで良いの？」
「うん。美由希おねえちゃん。私たちは元々名前なんて着いてなかったから、名前を貰えるってことはスゴく大事なことだし嬉しいことなんだよ。」

アサシンちゃん……もといジルちゃんの一人称が『私たち』なのは、ジルちゃんがキヤスターさんが言った通り子供たちの霊が悪霊と化して大量に集まっているからなんだそうです。どうしてそうなってしまったんだろう……。それはそれとして、
「キヤスターさんの真名は？」

「私はナイシヨです♪ただ、キヤスターとお呼び下さいな。」

むう。やっぱり教えてくれない……。でも今回少しだけヒントが手に入ったの。

『私たちと同じくらい穢れたサーヴァント。』

つまり、キヤスターさんはジルちゃんと同じく悪名が有名な人が正体なはず。それに狐がモデルとなつていてということは、何かしら狐がキヤスターさんの話に関わっているはず……。調べてみるの。

再び筆を取るキヤスターさんを見る……。そういえば、お化粧や習字で使う筆つて動物の毛から出来ているそうです。アリスちゃんも学校でそんな筆を使つてました。そういういい道具を使えば、少しは上達するかなあ。

・・・動物の毛かあ。

「——なのは様？何か不穏な事考えてませんか？」

「な、何でもないので!!」

じと目で見られて慌てて目を逸らしました。頼んだら分けてくれないかなあ。

『性格矯正』

軽々と、命を奪うことを考えるアサシンちゃんをどう教育するかという事らしいです。

「それについては、私と桃子が何とかしよう。」

「と、言いますと?」

「私達と一緒に御神の剣を習って貰おうと思う。」

「はい?」

つまり、一緒に稽古をすることで心身を鍛え、そういった事の大切さを自然と学ばせる・・・といった考え方です。

「二応申し上げておきますが、幾ら人外に片足突っ込んだ剣術を身に付けても、剣の道を学んでもアサシンはどこまでいってもアサシンですよ?そうそう人の在り方なんて変わりません。特に彼女達は。」

少し目を細めてお父さんと話すキャスターさん。真剣なキャスターさんはカッコい

い……い

「ああ。だが少しでもアサシンの為になることもあるだろう。それに俺達にも良い刺激になる。」

「恭也さん……まあ、簡単には変わらないと思いますが、手加減位は学べるでしょう。死なないように注意してくださいませ。で、桃子さんは……」

お母さんの方を見ると。

「あらーやっぱり似合うわね♪」

「こんな格好したこと無いから……分からないよう。」

私の予備の制服をいつの間にか、ジルちゃんに着せてました。あ、何かスゴく照れるけど可愛いのに。

「な・に・をされてるんですか桃子さん!?!」

「え? 何って……ジルちゃんも学校に通わせようと思つて。」

「何処に殺戮幼女の真名聞いて入学させようって人が居るんですか!?!」

「え〜大丈夫よ。ね。ジルちゃん♪」

「うん! おかあさん(マスター)と学校の人を襲わない約束したし。悪いことしないもん。」

ねーといつの間にか、意気投合してるし。大丈夫……なのかなあ。勉強とか。

「それに人間関係とかを学ぶなら学校が一番よ。」

「それはそうかも知れませんが……」

「それにね。娘の事を信頼してこそその親よ？大丈夫。ジルちゃんならちゃんとやれるわ。」

ジルちゃん物凄く照れてる。

「入学の手続きとか明日してくるわね。」

「早えよ！せめてアサシンの体が出来るまで待つて下さいまし。」

その後、色々な打ち合わせをしてから解散になり、キャスターさんは部屋に片付けに行ったり洗い物をしたりして、私とジルちゃんは二人でお話してました。こうして話していると可愛いし、楽しくって仲良くなれました。

「そういえばジルちゃん。今日は魔力大丈夫なの？」

「んー、召喚されたばかりだからだいじょーぶ。でもちよつと欲しいから……」

そう言うのと、何かを思い付いたような顔になり、

「おねえちゃん。ちよつとじつとしててね。」

「え？」

そう言うのとジルちゃんは、私に抱き付いてそつと唇を近付けて――

「やらせねえよ!？」

「ちえつ。」

「にやあ!？」

キャスターさんの鏡が飛んできてジルちゃんは、サツと飛び退きました。

え、私今キスされようとした・・・えええ!？」

「マジ油断も隙もねえ。私でさえデコチューまでだつっのに何をしようってんですか。」

「ちよつと魔力補給しよーとただけじゃない。あなたみたいに欲望だだつもれなことしないもん。」

「ちよつと?？なのは様の唇は安物じゃあないんですよ!あと初めては私の物って決まってるんですよ!」

決まってるじゃないの!!

「大体私の何処が欲望漏れてるってんですか。この貞淑な良妻に向かって失礼な。」

「全然てーしゆくじやないよ、おばさん。」

「あはははは・・・ぶっ殺す。くたばれ。」

助けてくれたのは嬉しいけど、さっきからキャスターさんは、ジルちゃんと喧嘩しすぎなの。再び喧嘩が始まりそうになったときに、

「なのは。ジルちゃんとお風呂済ましちやいなさい。」

「あ、はい。ジルちゃん。行く。」

「うん。おねえちゃん。」

「ちよ!?!なのは様!?!」

お母さんに言われて、ジルちゃんの手を引いてお風呂場に向かいます。

「なのは様なのは様。私は!?!」

「だったらジルちゃんと仲良くして!」

「で、ですがサーヴァントとしてアサシンとマスターを一緒には・・・」

「むう。さつきから喧嘩ばかりして!ジルちゃんと仲良くしないキャスターさん何て嫌いだもん。」

「きら—————!?!」

ピシリと固まるキャスターさん。

「べ—————。一緒に洗いつこしよ?おねえちゃん。」

「うん。でもジルちゃんもキャスターさんと仲良くしてね。それとさつきみたいなのは止めてね?」

「はーん」

」。

「キャスターさん!? 立ったまま気絶してる!？」

「ちよっ! 足元からヤバイ感じで光りながらサラサラ消えかけてる!?! 美由希! なのは呼んで!?!」

幕間・それぞれの午後

さて、何やかんやで情操教育の為、聖祥大付属小学校に転入することになったアシンンであるが、ここで疑問に思うのは、高町ジルことアシンンに学校の勉強が出来るのか？という事だろう。

頭の回転が早いアシンンであるが、彼女もまた過去の人物。ある程度の現代知識は有しているが、流石に現代のそれも割と偏差値の高い聖祥大付属小学校にいきなり入れる訳がない。

その為、転入試験を受ける為にもかなりの量の勉強をすることになったアシンンのだが、

「やだ——!!もうべんきようや——!!」

「ああもう！駄々こねてんじゃねーですよ！休憩はまだ先！」

「や——！遊びたいの！」

と現在、高町家の居間で勉強を教えることになったキャスターに駄々を捏ねていた。

キャスターは嫌がったものの

『ちゃんとこの機会に仲良くなって！じゃないと・・・』

という自身のマスターからの、令呪をちらつかせながらの指示に根負けし今に至る。

「こんの我が儘娘！試験まで日が無いんですからキリキリ覚えやがれ!!」

「べんきょうなんて、きらいだもん。私たちはサーヴァントだからいいもん。」

「うちはニートは許しません!」

「キャスターだって、じたくけーびいんじゃない!」

「私は家政婦の仕事してんですよ!!」

涙目になりながらキャスターと口喧嘩するアサシンであるが、以前と少し見た目が変わっていた。左目と右頬の傷跡が綺麗に無くなっている。

そう。現在の彼女は例の完成した人形を使い、生活していた。

「つたく。こつちが徹夜して人形を完成させたんですからそつちも試験頑張ってくださいまし!」

「体も動きが少し重いよう。」

「サーヴァントの身体能力をそのままにして、小学校の体育なんざ出来るわけが無いでしょうが!?!大体その状態でも土郎さん並なんですから、十分一般人から見たら化物です!」

先日、完成した人形の体の試運転がてら、高町家の道場にて、御神の剣士と手合わせをしたアサシンだが、

「いや、いい経験になった。」

と、高町士郎に言わしめるほどの動きを見せた。

型も何も無い独自の構えに、これから伝説の殺人鬼と戦うと気合いをいれて対峙した三人は些か拍子抜けした。

しかし、いざ動けば音も気配も無く、瞬時に間合いを詰め、身軽さを最大限に活かして死角に回り、急所を的確に狙って襲い掛かるアサシンに対して、士郎が本気を出し、三本中二本をアサシンに取られるという結果に終わった。(木刀が両者破損のため一引き分け。)

もつとも戦ったアサシンと見ていたキャスターからは、

「おとうさん人間?」

「いくらか動きが落ちたといえ、サーヴァントが正面から挑んだのを、何で数分間しるんですか? 代行者か何かですか貴方?」

「はっはっは、酷いな二人とも。」

なお、恭也は惜しくも(最後の方はいくらか着いてきていた)三本共取られ、美由希は瞬殺(首・心臓・腹部に其々木刀を当てられた)されている。

因みに、実際にアサシンに強襲されたらどうなるかというのを一度夜になって試している。

高町家の敷地内で、アサシンが自身の宝具の一つを一部効果を除いて使った状態で、敷地内からアサシンに捕まる前（剣士組とキャスターには木刀で切りつける）に脱出するというものだ。

アサシンに襲われた時のコメントは以下の通り、

桃子によると、

「いきなり抱き付かれてビックリしたわ。」

「えへへ♪おかあさん（マスター）ほめてほめて。」

「でも、危ないことに使っちゃダメよ？」

「はーい♪」

なのはによると、

「な、何?!?何が起こったの!」

「おねえちゃんビックリした?ビックリした?」

「全然周りが見えないしビックリしたの。」

キャスターによると、

「あんの幼女、マジで襲ってきましたね。ですがギリギリ防げましたよなのは様♪」

「だ、大丈夫なの!?!」

「・・・なかなかやるね、キャスター。」

「模擬戦だったからいいですが、これをなのは様に使ったら楽には殺しませんよ？」
「おねえちゃんにつかうわけ無いじゃない。」

美由希によると。

「多分普通の人なら、死んだって事に気付けないと思う。」

「みゆきおねえちゃん、すきだらけだったよ？」

「うぐう!!」

恭也によると、

「くそっ！防げなかったとは不覚！もう一度だ!!」

「・・・え？」

士郎によると、

「いや、勉強になるね。これを修行に組み込むのも有りかもしれない。」

「・・・」

とコメントしている。

そんな先日 の出来事を思い出して、二人で頭を抱える。

「キャスター・・・私たち何か自信なくしてきた・・・」

「あの人は例外ですから・・・それに本当にあの宝具の能力を使えば、普通は身動きなんてまともに取れませんよ。」

「……ふつうの人なら……ね……」

「……動けそうですね。」

流石にそれは無いと言い切れないのが恐ろしい。

「まあそつちはいいですから、さつさと続きして下さいませ。なのは様と学校に通うんでしょ？」

「うん……がんばる。」

ムムム……と机のテキストとにらめっこを始めるアサシン。

「べんきょうばかりはイヤだけど、子供たちみんながべんきょうできる世の中つてスゴいよね。キャスター……こわかない。」

「ああ、ソコはここを……此れで分かりますでしょ？まあ確かに裕福な時代ではありま
すね。」

「ああ、そつか。こうすればいいのか。子供たちなんて掃いて捨てるほどいるのにね。」

「あなたたちの成り立ちは聞いてますから同情はしますけど……あんまりそんな事言う
んじゃないですよ。」

顔を曇らせて言うキャスターにキョトンとした表情をするアサシン。

「世界はそういうものだよ？私たちは、それをとてもよく知ってる。」

「それでも、です。確かに救われない事ばかりですけれども——あの方たちのような

人々が少しでも居てくれるなら、世の中まだまだ捨てたもんじゃ無いって思えるんですよ。私は。」

「そうだといいね。」

アサシンは小さく呟いた。

海鳴市立図書館。そこに三人の少女が来館した。

「珍しいわね、なのはが調べものするなんて。」

「うん。少し気になった事があるから。」

今日は珍しく塾も習い事もなかった三人は、なのはの希望によりここ海鳴市立図書館で時間を潰す事にした。

「じゃあ、私も何か探してくるわ。」

「うん、後でね。なのはちゃん。」

「うん。後でね。」

そうして、別れた後なのはは歴史関連のコーナーに向かった。

「手掛かりは、『狐』と『反英雄』か……」

そう、ここに来た理由は一つ。自身のサーヴァントの正体を掴むためだ。

「こうして調べると沢山あるの。」

西洋東洋問わず、狐と人の話は多い。特に日本では文化・信仰の対称となっている。

アジア圏で特に有名な狐と関わりのある歴史上の人物と言えば、

「九尾の狐・・・中国の夏の妹妃・殷の妲己・周の褒姒。それに日本にも・・・でもキャスターさんは一本だし。」

・・・違うよねと、次を探す。そもそも、『白面金毛九尾の狐』等と呼ばれ恐れられたそれらのイメージと、いつも自分の側で『なのは様♪』と言って抱き付いてきたり、撫でてくれたりと明るくて優しいキャスターとが、どうしても繋がらない。

——それに中国のお話だ。キャスターとは違う。

——そう頭を切り替える。

「そもそも、あの格好が日本か中国か分かりにくい。」

肌露出多目の和服？らしきいつもの姿を思い浮かべる。間違いなく西洋の英雄で無
いことだけが確かだ。

もしかすると歴史上の人物ではなく、創作の人物なのかもしれない。そう思つて童話
などを探してみる。

「ゾリリ……多分違うよね。」

何故選んだ。

「！これかも！」

そうして、彼女は一冊の物語を選び出した。

——それは日本に伝わる哀しい物語。

——過ちを悔い、

——人に近づき、

——償い続け、

——最期に人に討たれたその哀れな狐の物語を。

（なのはちゃん何してるんだらう？）

児童書のコーナーで、『ごんぎつね』を両手で掲げ持つ友人を遠くから眺めるすずか。
（私は、ライダーに関する本でも探そうかなあ・・・）

もつとも本人直筆の航海日誌を持ち、寝る前に本人から冒険譚を聞くすずかにとって
は、二番煎じも良いところだが。

ただ、英雄とは後世の人物評価によって変わってくることも多い。かのヴラド三世
が、吸血鬼に落とされたように。それほどまでに世界の風評というのは恐ろしいのだ。

だから、一般的な彼女へのイメージを知ろうと、本を探していた。

「あ、あった。」

探していた本が上の棚に見つかったので、脚立を持つてくる。不安定な脚立の上に立
ち上がりながらハードカバーの重たい蔵書を取ろうとした時、

「!? きゃあー!」

思った以上の重さにバランスを崩し床に体が落ちそうになる。

（落ちる!!）

思わず目を瞑るすずかを

「おっと。危ないですよ? お嬢さん。」

そんな声に目を開けると自分を支えてくれている、しつかりとした体格の優しそうな

男性がいた。

「ありがとうございます。」

「いえ、礼には及びませんよ。」

脚立から降りてお礼をするすずかは、改めて目の前の男性を観察した。

がっしりとした大きな体の持ち主ながら、その顔立ちと眼は優しく、知性を窺わせる。腰ほどに伸びた髪をゴムバンドか何かで括ってポニーテールにしており、手には様々なジャンルの参考書を手にしている。

ふと、広く美しい草原と山をイメージした。

「どうかしましたか?」

「あ、いえ、その学者さんみたいだなんて。」

そんなすずかの言葉に微笑んで

「そうですね。些か教師のような事をした事もあります。今は家庭教師兼ヘルパーと
いったところでしょうか。」

「あ、本当に先生だったんですか。」

納得するすずかに、本を差し出す。

「大航海時代の本ですか。若いのに中々勤勉ですね。しかし、高い所の本は無理せずに職員の方を取って貰うことをお勧めしますよ。」

「はい。気を付けます。」

素直なはずかの態度に好感を持ったのか微笑みながら頷く。

「さて、私はこれで。生徒を待たせていますので。」

「はい。本当にありがとうございます。」

そうして、男性は軽くお辞儀をすると何冊もの分厚い本を軽々と持ちながら、テーブルの方に向かって行った。

「んー面白そうな物は無いかしら？」

一方アリスは歴史関連のコーナーに居た。何故か自分の友人達が歴史関連のコーナーを中心に見ていたので気になったのだ。一人だけハブられた気がした訳じゃない。無いと思ったら無い。

「・・・うわ、自分のお腹淨めて戻してから死ぬって・・・」

割と凄惨な死に方が多い英雄達の物語を読み進める。

「映画でやってたわね。300人で何万人も相手にするやつ・・・どんな化物よ」

きつと身体も血潮も脳も、筋肉で出来ていたに違いないと思いつながら次の本を読む。

「自分の歌を聴かせるために、劇場に閉じ込めるとか。」

とある暴君の逸話に呆れたりと割と楽しみなが読み進めていく。

「次は・・・インドのマハーバーラタね。しかし、何でこうも無茶苦茶なエピソードが多いのかしら？特にギリシャとインド。」

席に座り、読みながらふと思いつく。

「そういえば、家の倉庫にも骨董品みたいなのが色々あったわね。」

今度、探検がてら入ってみよう。と心に決めて今は手元の神話に集中しよう。今からクルクシェートラの戦いが始まったのだから。

少女達は三者三様のゆつたりとした午後を過ごすのだった。

三人娘と転入生

「「はあ・・・」」

朝のホームルーム前、聖祥大学付属小学校のとあるクラスに三人の溜め息が重なった。学年でも家柄よし器量よしの仲良し三人組、アリサ・バニングス、月村すずか、高町なのはである。

何時も賑やかな三人の重苦しい雰囲気は誰かが気にしてはしていたが、いざ聞かせるに行く猛者など現れなかった。・・・たった今登校してきた一人を除いて。

「三人とも。どうしたの?」

ウエーブのかかった茶色のロング、意思の強そうな光を宿したクリツとした焦げ茶色の瞳。制服の下に着込んだタートルネック。尊敬する偉人はフランシスコ・ザビエル。クラスで三番目位の可愛らしい容姿の少女。

「あ、白野ちゃん。おはよう。」

名を岸波白野といった。

「おはよう。なのはちゃん。で？元気ないね皆。何かあったの？」

小首を傾げる姿は可愛らしく、何処か小動物を思わせる。その雰囲気になんか気が楽になる。

「おはよう。ちよつと最近色々あってね。」

「おはよ。というかあんたの兄さんはどうしたのよ？」

普段一緒に登校する彼女の兄についてアリサが尋ねた。

「ああ、兄さんならこないだ放課後に昇降口で倒れてたのを助けた後輩の女の子からお弁当渡された後、その姉妹三人に追い回された挙げ句に、エジプトの留学生に連れられてたよ。」

「また、ラブコメしてんのね伯野の奴。」

「でも、優しいもんね。アリサちゃんもこの間……」

「ちよつ!?!すずか!?!それを言うならあんたとなのはだつて!」

「にやはははは。」

元気になった三人に周りが安堵する一方、漏れ聞いた話に岸波兄は爆発すれば良いのに、といった声も聞こえた。

「で、何があったの？」

「うん。実はね。」

すずかの話によると・・・最近、警備の人を初めとして家族とも呼べる人が増えたのだが、夜に騒がしかったので様子を見に行ったら

「三人で抱き合ってたの。」

「うわあ・・・」

「何というか・・・」

「なのはちゃんと同じ趣味だったんだ・・・」

「にやあ!? 違うよ白野ちゃん!」

慌てて否定するのだが、三人の視線は冷たい。

「でも、この間アリサちゃんとすずかちゃんの手を取ってジロジロ調べた後、『服を脱い

で』って言ってたよね?」

「ち、違うよ!? あれはその・・・調べものしてたの!」

「それで脱がされそうになるこっちはたまったもんじゃないっての! 訳を言いなさいよ 訳を!」

「うん。あれは引いちやうよなのはちゃん・・・」

「うにやあ・・・」

因みに原因は、二人の家に霊脈があると知ったのはなりに、二人がマスターかどうか調べる為であったりする。結果腕にも手にも無く、白であると安心しつつも、ちよっ

と残念にも思っていたのはである。

「まあまあ二人とも。世の中には下着のみを脱がそうとしてくる人も居るし。」

「え!? そんな変態が居るの?」

「・・・うん。まあ・・・」

一体何があつたのか、遠い目をしながら白野は、すずかに先を促す。

「で、この間はお姉ちゃんが恭也さんと何故か喧嘩してね。暫く落ち込んでたんだけど今朝、急に元気になって『ちよつと北欧に行つてくるわ! これで名誉挽回よ!』って出ていったの。」

「北欧? 何しに行ったのかしら?」

「さあ? 一応護衛の人も着いていったけど(リニス大丈夫かな?)。後、おみやげに期待してなさいって。」

「その・・・大丈夫なのかな。お兄ちゃんは私とお母さんで叱つといたけど。」

因みにアサシンも尋問に参加しようとしたが、流星に灯油を持ち出してきたため止められている。

「大丈夫だよ。よく分からないけど、またお姉ちゃんが迷惑かけたんだよね? もつと落ち着いて欲しいよ。」

「元氣なお姉ちゃんなんだね。でも、家の同居人に比べたら・・・」

「?どうしたの白野ちゃん。」

「ん?何でもないよ。」

「すずかの話聞いたあと、アリサがため息をついた。」

「すずかも大変よね。うちもさあ・・・」

「アリサの話によると先日謎の大爆発があった夜に大怪我をした猫を二匹拾ったそう
うだ。」

「けど全然意識が戻らないし、時々うなされてるみたいなのよ。」

「骨折・火傷・疲労等々怪我の見本市のような状態の二匹は、バニングス家の手により
死は免れたものの依然として意識不明。現在も手厚い看護を受けているとの事。」

「へえくそうなんだ。」

「心配だね・・・」

「可哀想・・・」

「今度、皆でお見舞いに行こうという話になった頃、教室に息を切らせて男子生徒が
入ってきた。」

「あ、兄さん。生きてたの。」

「助ける薄情者。ホレ、白野にもって。」

「おお、桜のお弁当♪」

名を岸波伯野。妹と同じ名前の読みをする名前を持つ兄である。妹と比べると特に目立った所の無いクラスで三番目位の容姿の生徒だ。尊敬する偉人はフランシスコ・ザビエル。

「朝からもてるわね伯野。」

「ああ、アリサちゃんか。おはよう。朝から死にかけるとは思わなかったよ。」

「ふうん。」

何処か刺々しいアリサに気付かない伯野がのんびりと答える。

「兄さん。いい加減にしないと後ろから刺されるよ?」

「何でだ。それにお前に言われたくない。」

そんな話をする兄弟の側で

(二人とも自覚が無いからたちが悪いよね。)

(まったくよ……)

(本当なの。)

ひそひそと話す三人娘。

「それで?なのははどうしたのよ?」

「うん。実はね……」

と、なのはが机の上に花見にでも使うような大きな重箱をのせ、中身を見せる。

「一段目は……稲荷寿司ね。」

「二段目は……色んなおかずだね。」

「三段目はデザートやフルーツ……」

三段にぎつしりとお弁当が詰まっていた。

「何か……色々込められてそうだね……愛とか。」

「重すぎるの……」

「というか怖いんだけど。何で重箱？」

妙なオーラを放つ稲荷寿司を見て引く三人娘。

「量が多すぎでしょ。なのは一人で食べれるの？」

「ううん。実はこれ私一人の分じゃなくて……」

そこにチャイムが鳴り朝のホームルームの時間を知らせる。全員が着席し、担任が来るのを待つ。

「ホームルームを始める。日直、礼。」

「おはようございます。言峰先生。」

『おはようございます。』

担任の代わりに入ってきたのは、一応学校の職員の一、言峰であった。

「げ。何で居るのよ。」

「ふむ。諸君らの担任教諭が急病の為、暫く代行を勤めさせてもらう。」

死んだ魚のような目をして、ニヤリと嗤いながら出欠を取る。

「さて、伝達事項を伝える前に転入生を紹介する。」

その言葉に全員がざわめく。

「静かに。では、入ってくるが良い。」

扉を開いて入ってきたのは、銀髪をざんばらに纏めた髪型。アイスブルーの瞳。何処か雰囲気を纏った少女であった。

「自己紹介を」

「ん。はじめまして。私たちは、高町ジルです。」

ペコリとするジルにクラスがざわめく。可愛らしい容姿もだが、問題なのは名字だ。

『高町』

つまり、この少女は・・・

「彼女は、このクラスの高町なのはの妹に当たる。高町、面倒を見るように。」

「は、はいー！」

どよめくクラスを眺めながらなのは自身の友人を見る。

『どつういふ事よ』

と、案の定こちらを睨んでくる金髪の友人に乾いた笑いを返し、『後でね。』と返した。
——顔を真つ青にした、もう一人の友人には気付かずに。

「で? どういう事よ。」

休み時間になり、ジルに皆が質問する中なのははアリサに捕まっていた。

「え、えくと私の妹なの。」

「何でいきなり妹が増えるのよ。」

「よ、養子になってね・・・。」

「・・・なのは・・・あんた何か隠してない?」

「な、何も隠してないよ!」

目を彷徨わせるのはを見てため息をしながら、アリサはジルに目を向ける。

「ねえねえジルちゃんは何処から来たの?」

「ロンドン。」

「ジルちゃんは何が好きなの?」

「ハンバーグとか美味しいもの。」

「好きな人はいるの？」

「おかあさん（マスター）とおねえちゃん達が好き。」

「フランシスコ・ザビエルについてどう思う？」

「・・・だれ？」

「ところで眼鏡かけてみない？」

「何で？」

何だか受け答えをスムーズにしているように見えるが、アリサには何だかガチガチに緊張しているように見えた。

「ちよつと皆。緊張してるじゃない。特にバカ二人は何を聞いてんのよ。」

そう言つてテキパキと解散させると改めてジルに向き合う。

「ん。助かった。」

「にやはは。ジルちゃんお疲れ様。」

「ううん。だいじょーぶだよ。」

（へえ。中々良い子そうじゃない。）

へにやつと表情を崩しながらなのはに答えるジルを見て自身の警戒を解く。

「アリサ・バニングスよ。アリサでいいわ。」

「ヨロシク。私たちは高町ジル。」

「私たち？まあいいわ。よろしくねジル。」

「ええと・・・こちらこそ？でいいのかなおねえちゃん。」

「あつてるの。」

何とか高町家で心配されていた、他人への挨拶等は出来ていて少し安心するのは、しかし、

「すずかちゃん。どうしたの？」

「え？何でもないよ。」

少しいつもより下がった位置にいるすずかが、答える。

「すずかは相変わらず引つ込み思案ね。」

「そうかな・・・ええと月村すずかです。よろしくね。」

「・・・よろしく。」

何処かぎこちなく挨拶を交わしたすずかと怪訝な顔をしたジルを見て首を傾げるアリサとなのはであった。

「何て言うか、なのはより幼い感じがするのに結構頭良いのね？」

「勉強すごく頑張ったんだもん。このくらいとーぜんよ。」

昼休みの屋上にて、昼食を食べながらえっへん。と胸を張るジルに感心したような声を出すアリサとすずか。

(キャスターさんもすごく頑張ったの・・・)

そして、耳と尻尾をぐったりとさせながら自分を膝の上に乗せて充電していた従者を思い出すのは。

『なのは様もフォロワー頑張ってくださいまし・・・』

とは後ろから囁いた従者の言葉である。

「しかし、食べるわね。重箱の三分の二はジルが食べちゃったわ。」

「お腹すいてたもの。」

「ああ、ほら口に付いてるわよ。」

「ん。ありがと。」

大量のお弁当は、ジルとなのはにより片付けられていた。かなりの量であったが、殆どはジルの口に入っていた。

「あ、あのジルちゃんは どうしてなのはちゃんの家に来たの？」

ふいに、すすかがジルに尋ねた。

「え？おかあさん（マスター）に喚ばれたからだよ？」

「そ、そうなんだ。」

「呼ばれた？イギリスから？何それ桃子さんイギリスに知り合いがいたの？」

「にやははは・・・」

何かを納得したような顔のすすかと、それを見て怪訝な顔をするアリサを笑ってごまかすなのは。すると今度はジルがすすかに口を開いた。

「私たちからもスズカにしつもんしていい？」

「え？うん。何かな？」

「どうして私たちを怖がってるの？」

固まったすすかに言葉を続ける。

「今日始めて会ったばかりのみんなは、目がこーきしんや期待に満ちてたけど一人だけ、スズカだけが私たちを怖がってたの。ねえ？どうして？」

無邪気にすすかへと近付き、目を覗き込むジル。そのアイスブルーの目を見てしまっ

たすずかは、闇夜の奥底を覗き込んだような得たいの知れない錯覚に陥った。

「ねえ？ 私たちの何を怖がってるの？」

「ヒッ!?!」

そつと胸の中心——心臓の辺りを指でなぞられ、小さく悲鳴をあげたすずかに更に近づき、抱き付くようにして耳元で囁く。

「はくじょうしないと——食べちゃうよ?」

抑揚の無いその幼い声。しかし、その言葉の意味は裏も表もない、文字通りの意味だと理解し、すずかは本気で青ざめ震えた。

「何してんのよコラ!!」

「すずかちゃん大丈夫!?!」

その言葉に、さつきまでの雰囲気嘘のように霧散させてジルがすずかから離れ、すずかは大きく息を吐いた。

「どうしたのアリサ?」

「どうしたもこうしたも無いわよ!?!いきなりすずかに抱き付いたりしないの!」

腰に手を当てて叱るアリサをキョトンとしながら見つめるジル。

「大体、すずかはおとなしい子だから。いきなりなのは妹ができて、人見知りしてただけよ!」

「そうなの?」

「う、うん。そうなの。ゴメンねジルちゃん。」

「ふうん。そうなんだ。こっちこそごめんなさい。」

ペこり、と素直に謝罪したジルを見て漸く場の空気が戻る。

「もう。喧嘩しちやダメだよジルちゃん。」

「うん。わかった。」

「何というかよく分からない子ね、全く。」

「あはは・・・そう、だね・・・」

その後は、たわいもない話をしながら昼休みの時間を四人で過ごし、予鈴が鳴った。

「どうしたのジルちゃん? 早く行く。」

「すぐに行くから先に行つて。」

「どうして?」

首を傾げるなのはに「いいから」とジルは三人を先に行かせた。

暫くして、誰もいなくなった屋上に。

「全く、初日から問題起こさないでくださいよアサシン。」

「しかたないじゃない。はじめて会ったばかりの私たちをけいかいしていたんだから、敵マスターかも知れないし。」

「霊体化して様子を見に来ていたキャスターが現れ、弁当箱を回収した。」

「月村家にサーヴァントですか。貴女の媒介を持つてた以上、有り得なくは無いでしようね。ですが、恭也さんがその事を知らないってのは、おかしくないですか？」

「私たちに隠してる・・・とか？少なくともスズカの腕には令呪は無かったよ。」

「腕以外に出ている可能性も有りますが・・・まあ単純に忍さんから私達サーヴァントの事を聞いているだけかも知れませんが・・・此方は暫く様子を見ましようか。」

「そうだね。おねえちゃんの友達だもんね。」

「簡単に二人で相談しあった後、ふとキャスターが尋ねた。」

「・・・学校はどうですか？アサシン。」

「とても楽しいよ。みんなやさしいし。」

「そうですか。そろそろ戻りなさいな。なのは様が心配されてる頃ですから。」

「そう言つて、キャスターは再び霊体化してその場を後にした。それを見届けたアサシンも教室に向かう。」

「まあ、おねえちゃんの友達なら問題ないとおもうけどね。」

だが、もしも彼女が桃子やなのはの敵となる可能性が、少しでもあるというなら。

「マスターなら、ころしてあげればいいし。」

それに、とても美味しそうだから。その時はたつぷりと恐怖に塗れさせてから、その心臓を頂こう。

『アサシン』としての顔を覗かせながら、少女は無邪気に囁う。

チャイムが鳴るなか、暗殺者は高町ジルとして再び学園生活に戻るのであった。

「で、何で私が恭也さんと忍さん家に来てるんでしょーか？」

「何というか・・・ジルだと不安だしな。キャスターならガラクタ・・・もとい聖遺物か
どうかを鑑定出来るだろ？」

「ぐすん・・・」

後日、月村家の応接室に二人の男女がいた。言うまでもなく高町恭也とキャスターの二人である。

目の前のテーブルには、ところ狭しと様々な箱やガラクタ、骨董品が並べられていた。それをキャスターは手に取り、

「まあ、レプリカでもアサシンみたく召喚される場合が有りますから、相性とかの問題だ
と思いますけどねえ・・・恭也さんの為にセイバー召喚する為の媒介を集めたけれど、結
局自分に令呪が出なかつたと・・・英霊召喚舐めてます？」

「ぐすつ・・・」

「やめてやれ・・・忍のライフはゼロだから。」

向かい合うソファアの隅で体育座りしている忍に耳と尻尾を揺らしながら呆れたよ

うに話す。

「悪竜の鱗片に錆び付いたグラディウス・・・聖遺物ですね。血の付いた暴君の短刀・・・ポイツと。円卓の破片とかよく見つけましたね。それから聖旗片にマントの切れ端・・・何ですかこれ？大理石の斧剣・・・見なかつた事にしましょう。あはは、どれもこれも一級の聖遺物なのに令呪が出ないとか。それから・・・」

「うわあああああああん！恭也あ！」

「内容は兎も角頑張った。頑張ったから泣くな。」

傍らの段ボールに仕分けしていくキャスターの言葉にかなり参っていたのかマジ泣きする忍。

「とうかですね。こんな喚ばれた日には、キャスター的にマジ勝ち目無い云々以前に、町がヤバイんで止めていただけませんか？」

「ぐすん。腹立つから意地でも喚んでやるもん。」

「やめんか。」

恭也に頭を叩かれようやと普段の忍に戻る。それを呆れたように見ながらキャスターは作業を続けた。

「そもそも自分でサーヴァント召喚しなくとも、例えば・・・すずかちゃん辺りにして頂けばっ。」

「……あの子は、只でさえ普通と違う血筋のことを嫌つてるから、やらせたくないわよ。」

一瞬、耳をピクリとさせながらも、作業の手を止めずにキヤスターは話を続ける。

「そうですか。……随分と妹思いですねえ。」

「勿論よ。大切な家族だもの。」

「そうですよね。私にもなのは様子が居るので分かります。大切な方を思う気持ちは本当
に。」

軽く腕を伸ばして、少し冷めた紅茶に薄く紅を引いた口を付ける。

「そう言えば、すずかちゃんは今日はお出かけでしたか?」

「ええ、アリサちゃんの家に行つてるわ。」

「おや。なのは様とアサシンもお呼ばれましたけど何かあったんでしようか?」

「何でもアリサちゃんが、この間怪我した猫を拾ったらしくてそのお見舞いらしいわ。」

「……所で忍さん?この異様にただっ黒いオーラの本は?」

「あ、それ骨董屋さんにオマケで貰ったの。何でもゾロアスター教の——」

さて時は少々戻って場所は変わり、バニングス邸にて、

「元氣ないね・・・」

「ずっとこの調子なのよ。時々魘されてるんだけど、どんな怖い目に遭ったのかしら・・・」

「かわいいそうなの。」

「ひどいことするね。」

アリサの部屋でなのはにすずか、ジルの4人が集まり籠の中で毛布に包まった2匹の猫を見守っていた。

猫のあちらこちらに巻かれた包帯などの治療の跡が痛々しい。それを見て同情し、憤るアリサ。心配するなのは。悲しむすずか。取り敢えず友達を悲しませた犯人を探してヤル気マンマンのジル。

「猫ちゃん拾ったのは、例の事件の日だったんだよね？何か関係があるのかなあ？」

「未だに原因が分からない大轟音に謎の未確認飛行物体でしょ？何か間違いだってニュースが流れてたけど、きつとこの海鳴で何かが起こってるのよ！」

「そうなのかなあ・・・(ライダーとは関係無い・・・よね。多分・・・)」

「うん。」

一旦、猫たちの籠から離れてオヤツが置かれたテーブルの席に座る。

「そもそも、あの猫の件もそうだけど、この海鳴市も私たちの通う学校も変な事件が多いのよ。」

「どんな事件なの？」

ジュースのストローに口を付けながらなのはが尋ねた。

「購買の似非神父に聞いた話だから眉唾なんだけど・・・何でも私たちが学校に通う直前からなんだけどね。夜の学校に女の人の幽霊が現れるんですって。」

「にやあ！おばけ!？」

「そうなの!？」

「ふーん。」

「?ジルはお化けとか平気なの?」

「うん。私たちがお化けをこわがるわけじゃないもの。」

いきなりの怪談に怖がっていたなのはだったが、ジルの言葉に自分のサーヴァントを思い出して気を取り直す。

(うん。キャスターさんとジルちゃんが居るから何があっても大丈夫・・・あれ?サーヴァントが霊体ってことは・・・お化けてって本当に居るって事なの?)

「?何かなのはが百面相してるけど、まあいいわ。それでねその女の人なんだけど、人間

とは思えないような速さで学校を走ったり突然消えたりしたんだって。」
「本当に出たんだね。それで?」

「で、その幽霊は今も時々出てきてるんだけど、うちの学校であった怪奇現象が無くなるっていうの。もしかしたら学校中をその幽霊が除霊しているんじゃないかって。」

話を聞いていた全員が首を傾げた。除霊をする幽霊というある意味自己否定する幽霊とは一体何なのか。

「変な幽霊さんだね。」

「でも助かったの。」

「そうよね。でその幽霊さんなんだけど、青い着物を着ていて狐の耳と尻尾が付いてるらしいの。」

「ぶっ!!?」

ピンポイントで心当たりがあるのはが、思わず飲んでいたジュースを噴出した。

「うわっ!!? 何すんのよなのは」

「な、なのはちゃん!?!」

「おねえちゃん、大丈夫?」

「ご、ごめんねアリサちゃん・・・げほっ、げほっ。」

何とか落ち着いたなのはが謝り、続きを促す。

「うちの学校関連だとあとは、いじめっ子達が最近震え上がってる事とかかしら?」
「どうして?」

学校のいじめっ子が大人しくなったなら良いことでは無いのだろうか?と疑問に思ったらしくすずかが尋ねる。

「それがね。いじめをしたら逆にボコボコにされるんだけど、確かに顔を見たはずなのにボコボコにした人の事だけを誰も覚えてないんですって。」

「なにそれ怖い。」

「・・・(ジルちゃん?)」

「・・・ふいつ」

何故か気まずそうにジュースを飲みながらそっぽを向いたジルに嫌な予感を感じたなのは、後でもう一人と共に話をしなければならぬと決める。

「あとはそうね。パパに聞いたんだけどこの町で悪い事してた人達の拠点が吹き飛ばされたって話があるの。」

「ふ、吹き飛ばされた!」

「ええそれでね。その犯人は、吹き飛ばした悪い人を証拠と一緒に頑丈なロープで縛り上げて行くらしいんだけど、悪い人たちが貯め込んでいたお金や宝石を根こそぎ略奪してるんだって。」

「さんぞくみたいね?」

ジルの疑問にアリサが答える。

「ジル惜しいわ。何でも犯人は一人で、しかもかなり美人で、海賊の格好してるらしいわよ。で、この海賊さんなんだけど財宝だけが目的じゃないらしくて、他にも何か探してるらしいの。」

「美人の海賊さんかあ・・・恐いけど会ってみたいね!」

「現代を生きる謎の女海賊って呼ばれて・・・すずか?何か顔が青くない?」

「すずかちゃん頭痛いの?」

「・・・どうしたのすずか?」

顔を青くして頭を抱えたすずかに気付いた3人が声を掛ける。

「大丈夫・・・ちよつと貧血起こしたただけだから。」

そう言えば最近やけに羽振りが良かったなあ・・・と思いながら溜め息をつくすずか。帰ってから容疑者Rとどう話をしようかと悩む。そんなすずか達の様子に疑問を抱くアリサ。

「ねえ、あんた達・・・何か隠してない?」

「隠してないよ!?!」

「隠してないの!?!」

「お菓子お代わり。」

「話を聞きなさいよジル!と、言うわけであの子達を怪我させた事件やこの海鳴のよくわからない事件の謎を解明すべく……」

机の真ん中のお菓子を取り敢えず、ジルの前に寄せてから、机に『部活動申請用紙』を置いた。

「私達は、ここに聖祥小学校探偵部を設立するわ!」

「はい?」

「モグモグ……何をやるの?」

突然のアリサの行動に、思わず目を丸くする二人を置いて、ジルが尋ねる。

「具体的には、この海鳴の怪現象を調べるの。」

「あぶなくない?」

「大丈夫よ。ちゃんと男手も予定してるし。」

部員欄を見ると『庶務』として、

『岸波伯野』

『岸波白野』

と書かれていた。

「男の子は伯野君だけなの。」

「白野ちゃんは・・・確かに時々イケメンだけど・・・」

そこまで言って、ずずかふとアリサの言葉に疑問を抱いた。

「アリサちゃん『予定』って？確か二人とも新聞部じゃなかった？」

「ああ、まだ聞いてないから。でも、新聞部には聞いてOK貫ってるから大丈夫よ。」

「うわぁ・・・」

「確かに二人とも断らなそうだけど・・・」

用意周到な友人に呆れるのはとずずか。よく見ると既に自分たちの名前も記入済みであった。

「(伯野君と一緒に良かったのかな?)」

「(・・・わざわざ自分で部活作って、引き抜いてまで一緒になりたかったんだね。)」

「(私たちはカモフラージュ?)」

「(うーん違うと思うよ?でも、もう周りにはアリサちゃんが・・・っていうのはバレバレなんだけどなあ。)」

ひそひそ話をするのは達に怪訝な顔をするアリサ。

「何話してるのよ?」

「何でもないよ?頑張ろうねアリサちゃん!」

「何でもないの!頑張ろう!」

「何でもないよ？あと、お代わり。」

「食べるの早いわよ!？」

ともかくもこうして、(約二名自分達の知らない所で)海鳴市の様々な謎を解明すべく、聖祥小学校探偵部なる物が組織されるのであった。

そんな風に話し合ったり、猫を撫でたり名前を考えたりしていたとき、

「ん?。」

「どうしたのよなのは?。」

なのはは自身の魔力がいつもよりかなり消費された事に気付いた。

「何でもないよ。」

と、そこへなのはに電話が掛かってきた。

「もしもし?。」

『あ、なのは様なのは様♪ご歓談中の所、申し訳ございません。貴女の愛妻、キャスターです。今よろしいですか?』

「・・・どうしたの?。」

『おっと、愛妻とかはスルーですかなのは様。いえ、ちよつと炎天を連発したので・・・大丈夫でしたか?』

「何かあったの？」

『いえいえ、ちよつと海鳴市と周辺都市崩壊の危機を未然に防いだけけです。』

「本当に何かあったの!?!」

予想の斜め上を行く事態のようだ。

その声を聞いて、流石に周りがギョツとなる。

その中の一人。すずかの頭に語りかけてくる声があった。

〈すずか・・・聴こえますか?〉

〈リニス!?何かあったの?〉

最近リニスから教えてもらつた念話で、何が起こつたのか尋ねる。

〈私は猫の集会で外にいたのですが・・・いきなり窓が開いたと思ったら、本の様なもの
が地面に投げ付けられてそれを追うように出てきたキヤスターがその本を凄まじい魔
力の炎で焼き尽くしてました。〉

〈それって・・・〉

〈ええ、昨日見かけた嫌な感じがする本で間違ひなかつたと思います。〉

〈お姉ちゃん・・・〉

〈今、外に追いかけてきた所を首根っこ掴まれて、地下に連行されています。私は無実だ
と云つてますが・・・〉

へたしか、ゾロアスター教関連だったよね・・・ギルティだよ!!」

と、なのはも会話を終えたらしく電話を暫く眺めた後、周りの友人達を見回す。

「・・・忍さんにお兄ちゃんやノエルさん達が、大事なお話するから、すぐかちゃんは、今日私の家に泊まるようにして。」

「え〜と。なのはちゃんお世話になります。」

「あ、いいな。私も行きたい。」

「お泊まり会？」

「準備しなきゃ！お母さんに連絡するね。」

四人が準備や連絡の為に慌てて部屋を出ていく。

四人の賑やかな話し声が遠くに消えていった。

その、誰も居なくなつた部屋で、

「・・・起きてる？」

「うん。」

二人の女性の声が聞こえた。

「まさかあの化物の攻撃で、死にかけて私達を拾ってくれたアリサちゃんの友達が、例の

女の子だったとはね。」

「驚いたわね。それとあの姉妹のなのはちゃんだっけ？あの子も凄い魔力持ちよ。スカウトしたいくらい。」

声は籠から聞こえた。

「でも、気付いたでしょ？妹だって言う女の子。」

「ええ、あの女と同じ感じがした。多分あの時間いたサーヴァントってヤツよね。」

「でも、何かしら？アイツと違って何か・・・すごく嫌な感じがするのよ。」

「体が動くようになったら調べてみないとね。」

先程まで目を閉じて眠っていた筈の猫達が、体を起こして人の言葉を話していた。

「この家を拠点として傷が癒え次第に、計画の障害となりうる存在を調査せよ・・・か。」
「お父様に顔向け出来ないわ。勝手に調査をして、二人揃って返り討ち・・・大怪我して今や人型になることすら儘ならないなんて。」

「この世界では『好奇心猫を殺す』とか言うらしいわよロッテ。本当に死にかけたけど。」
「笑えないわよアリア。これじゃ計画所じやないわ。」

アリアと呼ばれた猫の自嘲するような言葉に、ロッテと呼ばれた猫が呆れたように応えた。

「兎に角、せめて歩けるようにならないとあの子の所に偵察にも行けないわ。」

「……でも、さ……もしかたアイツと出会ったら？」

その言葉に何かを思い出したのか、二匹の体が小刻みに震え始める。

「それでも、お父様の悲願の為よ……」

「そんな事分かつてるわよ。けど、私には正直アイツと出会って逃げ出さない自信がないわ……」

「……ええ、管理局で何度も新人がこうなるのを見てきたけど……まさか私達が、こうなるなんてね……」

余程の恐怖を体と精神に刻まれたかのように震えながら二匹は続ける。

「取り敢えず、今は休むことよね。そして情報を集めなきゃ。」

「そうね。あの女の子達の事も、サーヴァントとか言う化物じみた使い魔の事も。」

用意されていた水を舐め、キャットフードを少しばかり口にして二匹は再び目を閉じた。

「所で……このネームプレートは、どっちがどっちなのかしら？」

『『ARIA社長』と『にゃんこ先生』？何かしら……雌猫的に不快な感じね。』

「何かのキャラクターの名前かしら？」

後日。起き上がった二匹にそのキャラクターを見せた所、必死に飛び掛かれて名前を変更した金髪少女が一人居たとかないとか。

「全く、忍さんにも困ったものですね。」

月村家から帰宅するキャスター。たつぷりと諸悪の根源を拷問……もとい歴史教育をした帰りである。続きは恭也達に任せ、帰路につくキャスターの手の鞆にはさすがの荷物が入っている。

「さて、アリサちゃんも来ていますので急いで帰りませんと。」

帰り道で夕飯の献立を思い浮かべながら、別な事も考えていた。

(しかし、忍さんもまた『大切な人の為なら嘘が付ける』方でしたか……恐らくはさすがちゃん辺りが……全く、どうしてこうなったんでしょうか。)

思わず額に手をやり考え込む。

(いまだなのは様に話して無いなら、隠し通すつもり……血筋の事もそうですが、なのは様は気にされないと思いますけれど……それを告白されるにはまだ、勇気が足りないんでしょねえ。それと気になるのが……)

気付かれないように後ろを見る。巧く姿を隠した山猫が見えた。

（先程からずっと後を付けてくる……明らかに只の山猫では無いですね……何者でしょうか？）

攻撃しようかと思つたが、特に殺気を感じなかつたので泳がせておく事にする。

「出来ることなら、なのは様と敵対しないで欲しいんですが……本当に……。」

そうあつて欲しいと切に願ひながら、帰路を急ぐのであつた。そして、

「……。」

キヤスターを尾行して観察するリニスもまた、考えを巡らしていた。

「……すずか……アレは本当に只のサーヴァントなんでしょうか……。」

動物を素体とした使い魔故に気付いた感覚。確かにライダーにも残つた野性の感覚が警戒を促した。だけど……

「恐らく強さはライダーの方が上なのに、何でしょうか……。」

——本能がアレはヤバイと告げている。

足を止めて遠ざかるキヤスターを見送る。

突然現れた三体目、アサシンに恐い目に遭わされたらしいすずかを、安全が確認出来るまでは警護する為にライダーは、最近はずかを霊体化して警護しつつ、空いた時間で願ひを叶える本について調べている。リニス自身も町で本について調査したりすず

かの警護を代わったりしながら日々を過ごす。

最も最近は、すずかもアサシンに対して（少し余所余所しいが）普通に接しているよ
うなので少しばかり安心してはいる。

「どうか・・・味方であれば心強いのですが・・・」

今夜すずかが泊まると言う高町家を、キャスターとは別の道から目指して壁を走りな
がら山猫は呟くのであった。

主と従者

——ご主人様の機嫌が悪いです。私何かしましたか？

重苦しい空気を発するのを見てそんな事を考えながら、差し出されたご飯茶碗にご飯を盛り付けるのは高町家の家政婦こと、キャスター。そして、お茶碗を受け取るのは高町家の末娘ジルこと、アサシン。既に全員食事を終えているが、彼女だけが続けた。

「アサシン……貴女なのは様に何かしましたか？この間のお泊まり会からあんな感じなんです。」

「何もしてないよ？」

いつも通りな態度で食事をするアサシンに首を捻るキャスターになのはが声をかけた。

「キャスターさん。」

「は、はい。何でしょうか？あ、もしかしてお味噌汁の味がお口に合いませんでしたか？実は最近出汁とお味噌を色々試してみました。やはり、飛魚出汁がベストかなとも思っていました。本枯れの鰹節の出汁と白味噌もまた個人的には……」

「違うの。」

と、じと目のなのはから質問が飛ぶ。

「夜のうちの学校で何をしているのかな？」

「え？えーと。なのは様？そのお話はどこから……」

「学校で噂になってるの!!狐耳の青い着物着た女の人何てキャスターさんぐらいじゃない！私に内緒にするなんて！」

拗ねた様子なのはに驚きながらも、キャスターはなのはを宥める。

「実はですね。なのは様に快適な学園ライフを楽しんで頂く為に、定期的に除霊や仕掛けをば……」

「そうなんだ。でも、私にも声をかけたりしてくれても……」

「いえいえ、真夜中ですし夜更かしは美容の大敵ですから。それに結構危ないですし。士郎さんと恭也さん。時々アサシンも混じってましたから。」

「……ちよつと待って？何してるのお父さん達？」

食卓に座る父と兄に視線を向ける。

「言ってなかったか……いや、修行の序で見学をと思っただが、実体のあるやつらもいてな。」

「ああ、つい手合わせをしてしまったんだ。」

「え？いくら学校のお化けでも、キヤスターさんなら十分楽勝なんじゃないの？」

唯一参加していない美由希がキヤスターに尋ねる。

「いや、流石に有名な七人は手強かったですよ？トイレの人とか、二宮さんとか。特に人体模型に至っては八極拳使って来ましたし。下手なサーヴァント並でしたよ？」

「うん。骨格標本がつかう槍とのれんけーも出来てたし、人間に出来ないきどうからのコーげきは読みにくかったね。」

「そんなに強いのか!?あの人体模型と骨格標本!!」

キヤスターとアサシンの感想に思わず美由希は突っ込みを入れてしまう。

「ああ、あの動きと強さは見事だった。」

「俺と父さんだけでは厳しかったかもしれない。」

「え、下手なサーヴァント並を厳しいで済むの？」

「流石に全身が石で出来た二宮さんは、お二人には無理でしたがね。」

「すごかったよね。なかまが日本中から減っていつてることを嘆いて狂戦士化してたもの。」

「無くなっているのは残念よねえ。でも成仏されたの？」

「ええ。負の怨念を取り払いましたので。しかし流石に、お二人が吹き飛ばされた時には目を疑いました。」

そんな風に食卓で談笑するが、自分の知らない所で冒険じみたことをしていたことに不満なのは、さらに頬を膨らます。

「ううゝ…何かズルい！ズルいの!?!」

「ズルいつてなのは様…先程も申しました通り、とても危険ですのしかたないのですよ。それになのは様、夜更かし出来ないじゃないですか。」

「頑張つて夜更かしするもん。」

「しなくていいんです！危ないんですからなのは様は、どうぞ安全な場所で…」

「だって、私の為にしてくれてるんでしょ？だったら私も行きたい。それにキャスターさんがいるから大丈夫だもん!!」

珍しく我が儘を言うなのはに困った様子でキャスターが宥める。

「お気持ちは大変ありがたいですし、本当ならなのは様の言うことを聞きたいのですが、お怪我されては危険です。」

「でも！」

「なのは様がもう少し大きくなったら…ね?」

「…わかった。」

シユンとしながらもキャスターの言うことを聞き大人しくなる。それを見ながらふと、美由希が先程のキャスターの台詞から気になる事を尋ねた。

「ところで、除霊は分かったけどさつき言ってた仕掛けって?」

「例えばですね。なのは様の内申点アップの為になのは様が、授業中当てられやすくなったりとか、なのは様に近付こうとした不屈き者を呪ったりとか、体育の授業で軽く身体強化したくらいですかね。」

さらつと告げられた言葉になのはが反応したが、気付かずにキャスターは得意気に続ける。

「ふっふっふ。これで出来る良妻の内助の功!あとは今仕込んでるやつですが・・・えつと、なのは様?何故に根性棒を構えていらっしやるのですか?」

やたらと黒いオーラを放ちながら、ゆらりと立ち上がったなのはが、何処からともなくスラリと根性棒を抜き、構える。思わず顔をひきつらせて後退りを始めたキャスターに一步、また一步と近付いていく。

「キャスターさん・・・気持ちは有りがたいの。でもね?ありがた迷惑とか自重って言葉知ってる?」

〈準備完了しましたマスター。〉

「だから、何で喋るんですかその不思議棒!?!それより落ち着きましたようなのは様!?!息を吸って・・・」

「私も知らないの。購買部で色々改造されてるし。それはそうとキャスターさん?」

しかし、キャスターの言葉を遮り、光が無い目と棒の先端をキャスターに向ける。

「・・・少し、頭冷やそうか？」

「いえいえ！十分に冷えてます！むしろなのは様が冷やして下さいまし！というかその台詞は早すぎます！」

外へと逃げたキャスターを追い掛けてなのはも外へと向かった。直に捕まるであろう。

「うわ、本当に何なんだろうねあの棒。何か光ったよ？」

「なのは・・・よっぽどストレス貯まっていたのか？」

「それを避けたキャスターさんも凄いが、なのはも随分身体を動かせるようになったな。朝のトレーニングが良く効いているようだね。」

思い思いに鬼ごっここの感想を言い合う高町家の面々。

「もう、なのはもキャスターちゃんも落ち着きが無いわねえ。」

「ん〜。でも、おねえちゃんは何だかんだ言いながらキャスターが大好きだし。大丈夫だと思っようお母さん（マスター）。」

「そうね。ジルちゃんもよく見てるわね。」

「えへへ……ほめてほめて。」

ソファアに座った桃子の膝の上で猫のように甘えるジルを優しく撫で付ける。

「おかーさんー。」

「あらあら。」

目を閉じ気持ち良さそうにするアサシンを見ながら、桃子は考える。

ただ偶然、アサシンに選ばれ契約した。その証足る令呪も左肩に刻まれている。

アサシン——ホワイトチャペルという地獄と当時の社会と時代が産み出した最悪の悪霊。只々優しい母と救いを求める無垢な心と悪意に対しての残忍さを併せ持つ、幼き殺人鬼。

膝の上で甘える彼女『達』の経緯や成り立ちを実は桃子は夢に見ていた。

初めて視たときは吐き気を押さえられなかった。

二度目に視たときは、加えて気が狂うかと思つた。

三度目からは、それらを必死で抑えながら彼女達の成り立ちを日々窺いながら一つ一つ見た。

夜中に飛び起きる度にそれを察知したキャスターが、落ち着くまで側で宥めてくれた。

『サーヴァントと契約すると契約したサーヴァントの過去や生い立ちを見ることかある

んです。』

よく眠れるという温かな薬湯を手渡しながらキャスターは続けた。

『英霊や冒険譚……何て言えば聞こえが良いですが、真つ当な人生と最期を迎えれた英雄なんて殆ど居ませんからね。悲劇・愛憎の果て・裏切り・敗北・没落・幽閉・毒殺・自決・処刑……私は討伐でしたが……ましてやアサシンの場合は、地獄と言ひ換えても良いでしょう。』

不思議な甘さと苦味がある薬湯を飲みながら話を聞く。

『桃子さんはお優しいから救いたいと思われるかも知れませんが、決して深く情を掛けられませぬよう。彼女達を救おうとすれば、きつと彼女は桃子さんを台無しにしてしまうでしょうから。』

キャスターは顔を曇らせて桃子にそう進言した。だけど、だけどだ。桃子が部屋に戻ると毛布にくるまったアサシンが、待っている。桃子の服にしがみつぎ、

『ごめんなさい。ごめんなさい。捨てないで。』

——そう、必死に泣き付いてくる彼女達をどうして放っておけようか。一度、愛娘を失うかもしれないことをあれほど後悔した自分が。

目を閉じて軽く眠ったアサシンの髪を撫で付けながら思う。やはり、彼女もまた自分の娘であり家族の一人だ。例え、キャスターの言った未来が待っているとしても。家族

の、娘のためならば甘んじて受けよう。

“ちよっ!?なのは様ストップ!ストップです!”

“キャスターさん!覚悟!!”

“ああ、光が!ピンクの光が!本当に何なんですかその棒!?イヤアアアア!!”

遠くで爆音と悲鳴が聞こえてきた。・・取り敢えず二人ともに夜中は外で騒いではいけないということをしつかりと伝えなければならぬだろう。

庭に居るであろう二人に向けて、目が覚めて不機嫌そうになつたジルを腕に抱き抱えたまま桃子は歩き出した。

「で?いきなり飛び付いてきたかと思つたら何事だい?」

「何でマフィアやら秘密組織やらの事務所を襲つてるのライダー?」

月村邸、ライダーの部屋でベッドに腰掛けながらラム酒を呑むライダーの膝に頭をのせて、すずかが尋ねた。

「そりや例の本探しの為さね。何かこそそして怪しかったからね。もしかしたらと思つてたのさ。」

「だからって金塊やお金や宝石を奪うこと無かつたじゃない。」

「手間賃だよ、手間賃。タダ働きなんて冗談じゃない。それにだ。無駄足って訳でも無かったさ。」

「何か解ったの？」

ライダーの膝から起き上がり姿勢を正した時にリニスが入ってきた。

「やはり、ライダーが襲った集団に次元世界の人間が居たようですね。武器はデバイスで間違いないです。」

「例の管理局って奴かい？」

「殆どは出来の悪い自作だったりですから、恐らく地球の武器等を密輸する次元犯罪者辺りかと。」

「やれやれ、いつの時代もどこの世界にも居るんだねえ、そう言う手合いは。だがまあ情報もちつとは手に入るかもだね。」

新しいグラスにラム酒を注いでリニスに渡す。ラム酒の香りが部屋に広がる中、軽くグラスを合わせて呷る。

「ケホッ。よくグイグイ呑めますね。」

「よく効くだろ？酒は強い方が旨いからね。」

「肝臓悪くしますよ？すずかはああならないで下さいね？」

「うん。」

とは言うものの甘い香りや、部屋の灯りで妖しく輝くグラスに少しばかり興味があるお年頃だったりするのだが。それを見透かしたのか、やはりライダーのマスターですね。と呆れながらグラスに氷を入れるリニスに、良いじゃないかと笑い新しいグラスにミルクを注ぎすずかに渡すライダー。

こんなゆつたりとした空気が好きか？ は好きだ。いつかは自分もグラスにお酒を入れて二人と心行くまでお酒とお喋りを楽しみたい。

その為にも先ずはこの体を。そして、普通の女の子になりたい。

「そーいや忍は大丈夫だったのかい？」

「流石に反省したみたいです。今日は皆さんと集めた聖遺物や骨董品を片付けてましたよ。あの庭の森にわざわざ場所を作って『森の中で静かに佇む剣つてシチュエーションが素敵じゃない？』とか言って突き立ててましたから元気になったみたいですよ。」

「・・・大丈夫なのかいそれ？ 『アレ』から出てくる物は流石に宝具使つてどうなるかって所だけど、普通に倉庫に閉まつとけばいいんじゃないかね？ というか聖遺物をインテリアにしてんのかい。」

呆れた顔のライダーに苦笑いしながらグラスに口を着けたりニスが答える。

「私も伝承を見る限り相手にしたくないですね。余りに大きくて場所を取るのです、折角だからインテリアにしたみたいです。忍曰く、『大丈夫！ 問題ないわ！ こんな家の敷地

内の森にわざわざ入ってくる人なんて居ないわよ。』だそうですよ。」

「ならいいんだがねえ。」

まだ、願いを叶える本の手懸かりは掴めてないけど自分にはこんな頼れる仲間が居るのだから。焦らずに、けど必ず手に入れるのだ。

「頑張ろうね皆。」

「?おう。任せなよ。」

「そうですね。頑張りましょう。」

〈お任せください。〉

やる気を出して、グラスのミルクに口を付けるすずか。しかし、その手に着けた購入部で偶然安売りしていた手袋らしき物を見て、固まったりニスに気付くのは、ミルクを飲み干した暫く後だったという。

この日、アリス・バニングスは機嫌が良かった。

新しい部活も申請が受理され、心配していた二人も参加してくれる事になったからだ。・・・まあ後輩の保健委員が参加した事と顧問が神父になったのは（猛抗議するも学校側に却下された。）少々計算外だったが。

兎も角習い事も無いこの日、折角なので前々から興味があつた倉庫を探検することにした。

「自分の家なのに忍び込むってワクワクするわね。」

「にやゝ…（何で私達まで…）」

「にやあ（仕方ないわよ。）」

その頭の上と腕に抱かれた猫二匹が、声をあげる。

其々に『ろって』『ありあ』と書かれたタグが付けられている。

因みに彼女達に名前を付ける際、ネーミングセンスの問題で大いに抗議、抵抗されたアリサが悩んでいた際に突如頭に閃いた（聴こえたとも言う。）名前を着けた。本人は『これが天啓ね！』と喜んでいたが、真実は何と無く罪悪感で顔を背けた双子の猫のみぞ知る事である。

「こうしてみると色々有るわね。」

流石にお金持ち。倉庫は蔵と言い換えてもよい程に美術品や高価な調度品に溢れていた。

お目当ての一画には美術品と並び骨董品が片付けられていたのを床の一角を占拠して次々に広げる。

「みゃー（ブルジョワめー）」

「にゃー（お金持ちね。本当に。）」

「あ、これ格好いい。あ、これもカワイイ！」

眼は肥えているが、鑑定眼等無いアリサにとって目の前のもすれば博物館行きか、研究室行きの価値がある骨董品も自分の好みに合うか否かの判断しか付かなかつた。

因みにそんな彼女と部屋を見て好き勝手言う姉妹であるが、現在は治療中とは言えど端から見れば、快適なブルジョワ飼い猫生活を満喫してたりする。

「この耳飾りも模様が彫ってあって格好いいし、こっちは金の耳輪？綺麗ね。あ、これすずかに……」

「にゃあく（あーあ散らかしちゃって。）」

「みやあ（全く仕方ないわねえ。）」

アリサの出したものを前足や口を使って出来るだけ片付けようとする猫姉妹。

と次々箱を開けていくアリサに

「何をしていらつしやるのですかな？お嬢様？」

いつの間にか音も立てずにアリサの後に立った、バニングス家の家令筆頭、鮫島が声をかけた。

「全く、お嬢様……倉庫の品に興味があるのならば、先ずは我々にお声をかけてくださいませ。」

「……はい。」

「あの中には、貴重な物も危険な物も有るのです。お嬢様に万一の事があれば、私は旦那様になんとお詫びすれば宜しいのですか。」

「反省してます。」

倉庫から摘まみ出されたアリサと猫二匹は、アリサの部屋で叱られていた。倉庫の無断侵入と勝手なセキユリテイ解除、並び倉庫を散らかした事に一つ一つ叱られるアリサは段々小さくなっている。

『あの御老人何者よ？ 気配感じなかつたわよ？』

『あの隙の無い身のこなし……かなり高いレベルの武芸を習得してるわね。』

アリサの横で座る猫二匹がそんな会話をしながら、鮫島を観察している間にもアリサへの説教は続き夜は更ける。

後日、気に入った骨董品を父にねだり、アリサはそれを御守り代わりに持ち歩くようになる。

それが、彼女と猫姉妹にどのような出会いと結末をもたらすのかはまた別なお話。

番外編・高町家のクリスマス

クリスマス。

それは日本では子供達が最も楽しみにしている日。

夜に眠って目が覚めたら、枕元にある不思議なプレゼントに歓喜するのはどの子供達でも同じである。

それは、不思議な超常存在二体と生活する高町家でも例外では無い。

「ふあ……」

昨夜は家族や友人達とクリスマスパーティーを行ったり、プレゼント交換をしたりと楽しい夜を過ごした少女、高町なのはもこの日は起きて目を擦りながら枕元を確認する。

「やった！サンタさんからのプレゼントなの♪」

枕元には、二つのラッピングされた箱。早速リボンを解いて中身を確認する。

「綺麗……」

一つ目の箱には、女の子らしいアクセサリーが入っており、早速合わせてみたりとなのははご機嫌である。

「もう一つは……ん？」

もう一つの箱に入っていたのは見事な人形であった。細かい部分まで造り込まれており、表情もパーツにより付け替えることが出来る。また様々なポーリングをとることが可能なアクションフィギュアと呼ばれる逸品である。

問題はこのアクションフィギュア。どっかで見たようなキツネ耳と尻尾に青い派手な着物姿であった。

「なんでキャスターさんのフィギュア!？」

早朝から突っ込みを入れる羽目になったのは、リビングに居るであろうキャスターを問い質すべく扉を開けた。……キッチンと机の上に、自分が格好いいと思ったポーズで飾った辺り気に入っているようだが。

「……よいしょ……よいしょ……あ、おねーちゃん。おはよー。」

「ジルちゃん。お早うなの。ジルちゃんはサンタさんに何を貰ったの?」

自室の外に偶然いたジルに挨拶した所で、妹分には何がプレゼントされたのか気になったのは聞いてみることにした。

「ふふん。私たちはぬいぐるみ貰ったの。」

「わー。大っきなミツ……むぐっ!？」

ジルが引き摺っていた袋から出したネズミのぬいぐるみを言葉にしようとした瞬間、

ジルに口を閉じられた。

「むぐつむむむ!!」

「おねーちゃん。その名前は抑止力が動くから言っちゃダメ。わかった?」

コクコクと首を縦に振って了解の意志を伝えると、ジルは口から手を離れた。

“ハハツ”

『何!? 今何か物凄い悪寒が!』

．．．家の外から甲高い笑い声が聞こえた気がしたが、リビングからキャスターのやたら慌てたような声に掻き消された。

「プハっ．．．ところでジルちゃん。さつきから気になってたんだけど．．．その大つきな袋何?」

白く何やら大きな物が入った様な袋を、自室から引き摺っていたジルは頬を膨らませた。

「あのね。昨日サンタさん来るかなーって待ち構えてたの。」

「そうなんだ! 私も途中まで起きてたけど寝ちゃったの。」

「うん。私たちも途中で寝ちゃったけど起きたらもう枕元にプレゼントがあつたの．．．夜なら先手取れるから捕まえようと思ったのに．．．」

頬を膨らまして悔しがっている辺り、本気で捕まえる気だったらしい。

「あはは・・・でもジルちゃんもプレゼント貰えたからよか『!?』——『!?』・・・あれ?」

なのはの耳に、ジルが引き摺っていた袋から何やら音が聞こえた。後何かもぞもぞと動いている。

「あ、あのねジルちゃん?何コレ?」

「それでね?また寝ようとしたら私たちの部屋の扉が開いて不審者が入って来たの。『コレで最後・・・』とか言いながら袋から何か出そうとしたからつかまえて縛って袋に入れといたの。」

そう言いながらジルが開けた袋の中には

「ん——!ん——!」

黒っぽいサンタ服を着た白い髪の小さな女の子が、両手両足を縛り上げられ、猿轡をされながら涙目で助けを求めている。

「にやあああああああああああああああ!?!」

早朝から街になのはの悲鳴が響き渡った。

騒ぎを聞きつけて現れた桃子に助けられた少女が懐き、毎年クリスマス頃になると高町家にケーキを食べに現れるようになり、とある事件に巻き込まれる事になるが……それはまた別なお話。

無印

夢と将来

——不思議な夢を見た——

真夜中の森の中で、

『お前はこんなところに居ちやいけない。』

不思議な格好をした子が、ナニかと戦っている夢を

『あるべき所へ…帰るんだ!!』

だけどナニかは激しく暴れて、結局その男の子は吹き飛ばされて倒れてしまった。

男の子は、暫く呻いていたけど気を失ったのか動かなくなってしまうました。

「不思議な夢…」

目をこすつて辺りを見回してベッドの中であることを確めた。

「あの子は大丈夫なのかな。」

夢が気になりつつも着替えて部屋を出てリビングに向かう。今日はいつものランニングはお休みの日です。キャスターさん曰く、

『乙女にとって美容に気を使うことも鍛練の内と申します。ご安心下さいませ、このキャスター必ずやなのは様を傾国の美女にして差し上げますので♪と言うわけで身体を休めるときはしっかりと休めましょ?』

だそうです。別に傾国の美女になりたくないのになあ。

「おはようなのは。」

「おはよう。お父さん、お母さん。」

リビングに居たお父さんとお母さんに挨拶をする。今日もお父さんとお母さんは、元気でラブラブです。

そんな二人を見てから、冷蔵庫のペットボトルを持って家の道場に向かう。

朝から道場の外にまで激しい竹刀の音が響き渡る。

道場の中を覗くと、息を切らしたお姉ちゃんと道場の真ん中でお兄ちゃんとジルちゃんが、激しく打ち合っていました。

「まだまだあ!」

「遅い……!」

一瞬お兄ちゃんの姿がぶれたと思うとジルちゃんの後に見え、竹刀を降り下ろしました。だけど、

「よみどおり。」

それを読んでいたジルちゃんが、しゃがんでお兄ちゃんに足払いをかけ、たまらず倒れたお兄ちゃんの上に乗って、

「私たちの勝ち。」

「くっ！・・・参った。」

「うん♪」

首筋に当てた竹刀を外し、起き上がったお兄ちゃんと一礼をして竹刀を片付け始めました。どうやら朝の鍛練はこれで終わりみたいです。

「おはようなのは。」

「お水ありがとね。」

「おねーちゃんおはよ。」

お兄ちゃんもお姉ちゃんもジルちゃんも元気です。

皆で母屋のリビングに戻ると、もう一人の私の家族が帰ってきてきました。

「藤原さんのお豆腐とお揚げを切らしてたなんて、お味噌汁が美味しくならないじゃないですか・・・あ、おはようございますなのは様♪」

「おはようキャスターさん！」

私のサーヴァント、キャスターさん。呪術の達人である、狐の耳と尻尾が特徴の女の

人です。どうやら、朝から商店街のお豆腐屋さんに行つてたみたいですよ。『お豆腐の藤原』さんは海鳴最速の……」

「なのは様、それ以上いけない。」

「? わかつたけど、心の声に突つ込まないでほしいの。」

我が家は、皆がそろつたら朝御飯です。食べながらでもお父さんとお母さんは、相変わらず新婚ホヤホヤみたいにラブラブで、お兄ちゃんとお姉ちゃんも仲良しです。

ジルちゃんは、お父さんやお兄ちゃんと同じぐらいの量のご飯を平らげて、私は……

「はい、なのは様♪ あ〜〜ん♪」

「にやはははは……はあ……」

とても、寧ろ過剰なぐらい愛されています。

身支度を整えて学校へ行くバス乗り場までは、いつもキャスターさんが見送りに来てくれます。

「それでね、今日は不思議な夢を見たんだ。」

「不思議な夢……ですか?」

今朝見た夢をキャスターさんに話すと何か考え込んでいました。暫くして珍しく真剣な表情をして、

「なのは様・・・それは今朝見た夢なのですね？」

「うん。何かあったの？」

「いえ、なんでもないです。」

そうこうしているうちにバスが近付いて来たのを見ると、キャスターさんはいつもの優しい表情で手に持った大きなお弁当をジルちゃんに渡しました。

「はい。じゃあ落とさないように。後、一人で食べ過ぎないでくださいよジル。」

「うん。努力する。」

「・・・貴女一人で我が家のエンゲル係数、どれだけ上がってると思ってるんですか？少し自重して下さいませ。」

そのままくるつと私の方を向くと

「取り敢えずなのは様、夢については仕事が終わりに次第に私の方で調べてみます。・・・何やらあったようですしね。」

そう言えば、今日は随分パトカーが走っています。

「ま、なのは様はお気になさらず学校を楽しんで下さいませ♪大丈夫大丈夫！」

そういつてバスに乗る私とジルちゃんを送り出してくれました。アリサちゃんやすずかちゃんと後ろの座席に座ってふとバス停を窓から見ると、いつものように姿が見えなくなるまで手を振ってくれていました。

「・・・と言うわけで。世の中には様々な職業がある。将来的に自分がどの様な職に就きたいのか・・・今から考えてみるのも良いだろう。」

ジルちゃんが転入した位から何故か、私たちのクラスで教鞭に立つことが多くなった。言峰先生が授業中そんな事を話しました。

「進路についてや他にも悩みがあるのなら、何時でもカウンセリングに来るがいい。相談にのろう。無論、将来聖職に就きたいというのであれば歓迎しよう。」

「・・・だれが行くかってのよ。」

・・・アリサちゃん、聞こえるから。

「おなかすいた。」

・・・ジルちゃんは平常運転でした。

「ふむ。空腹ならば購買部に来るがいい。海鳴商店街の人気店、翠屋からシュークリーム等を仕入れ始めたところだ。」

あ、ちゃんと悩み？じゃないけど相談は聞いてくれるんだ・・・じゃなくて!?

「家の店からも仕入れてるんですか!？」

「無論だ。これも地域活性化活動の取り組みの1つでな。泰山の麻婆豆腐を始めとした

商店街の名物メニューを取り扱い始めた所だ。」

知らなかったの。お父さんたちそんなこともしてるんだ。

「因みに高町夫妻には、購買部限定愉悦コラボスイーツ『激辛麻婆シュー』の製作にもご協力頂いた。」

「何してるのお父さんとお母さん!？」

「何を血迷ったの翠屋!？」

「激辛の時点でスイーツじゃないよ!？」

「幾らですか!？」

『買うの!？』

思わず椅子から立ち上がって皆で突っ込みを入れてしまいました。すると言峰先生は、急に真剣な表情になり、

「高町、バニングス、月村、そして岸波兄妹。」

「な、なんですか?」

厳かに私たちに告げたのです。

「授業中だ。静かにしたまえ。」

「誰のせいだと思ってるんですか!!」

「それにしても将来の夢かあ。」

お昼休みに屋上でお弁当を食べながら、さっきの授業で先生が言っていたことを思い返す。・・・色々あったけどそれは家に帰ったら問い質すことにします。

「アリサちゃんとすずかちゃんはもう決まってるんだよね?」

「でも、ふんわりとした感じよ? 私は、いっぱい勉強してパパとママの会社を継ぐこと・・・って感じかしら。」

「私は機械とか好きだから・・・工学系とか・・・他には貿易か・・・海洋考古学かなあ。」
「海洋考古学?」

「うん。探したいものがあるから。」

アリサちゃんとすずかちゃんが必要な将来の夢を語ってくれました。

「しょーらい・・・か・・・考えたことなかったけど私たちは、翠屋かな。」

「あ、桃子さんの後継ぎってこと？」

「うん。一緒に居られるならそれでいい。」

「甘えん坊よね。でも何だかジルらしいわ。」

少しずつですが、私とジルちゃんは翠屋で接客のお手伝いしてます。時々手の空いたキャスターさんも手伝ってくれますが、そうするとお客さん（男の人）が増えるから不思議です。

「私は」

「まあなのはは、キャスターさんとかつつくとして・・・」

「そうだね。」

「ちよつと待って？おかしいよねその未来像？」

何だかおかしなことを言い出した親友二人におもわず突っ込む。・・・何でそんな意外って顔をしているのかな二人とも？

「だって・・・もう商店街だと若奥様とか言われてるし、本人全然否定しないもの。」

「うん。なのはちゃんを三代余裕で養えるだけの財産は余裕で有るって、こないだ本屋さんでゼ〇シイ買いながら言ってたよ。」

「いつの間にか外堀が埋つてた!? 違うからね!」

「さすがキャスター。やり方が汚ないね。」

私が取つておいた肉団子を食べながらジルちゃんがそんな感想を言う・・・楽しみにしてたのに。

「にしてもよ。何でそんなにお金があるのに家政婦やつているのかしら?」

「やっぱりなのはちゃん目当て?」

「やっぱり怪しいわ。あの女。」

ジルちゃんとおかずの取り合いをしている間にも二人がそんな話をしていました。

「と、とにかくね。翠屋を継ぐことも将来のビジョンの一つではあるんだけど、でも本当に私がやりたいってことが何なのかわからないんだ。私は取り柄があんまり無し。」

「・・・贅沢。」

「? ジル何か言つた?」

「べつに? 何でもないよ。」

何だかジルちゃんの元気が無いけれど大丈夫なのかな?

「兎も角! 自分で取り柄が無いとか言つてんじゃないわよ! 私より理数系と歴史の成績

良いくせに！」

「そうだよなのはちゃん。なのはちゃんしか出来ないことだつてあるよ。」

「そうだね。ありがとう二人とも。」

私にしか出来ないこと……いつか見つかるのかな？

「ふむ。ここが、例の場所ですか。」

公園のボート乗り場。普段はデートをするカップルや親子連れで賑わう場所は今、大騒ぎとなっていた。

たったの一晩で小屋は壊れ、ボートは過半数が沈み、栈橋は砕かれ、回りの木々もへし折られ、無惨な光景が広がっていた。

警察の鑑識が調べを進める周りには多くの野次馬に囲まれていた。

（……確か、これが始まり……でしたかね？ かしなのは様には、出来れば平和に過

ごして欲しかったのですが。」

そんなことを考えながら、野次馬に紛れて散策をするキャスター。周りに目をやると、木の上や人混みから離れた所に、

(いつぞやの山猫も来てますね、あとは……妙な猫がもう一匹。使い魔でしょうか……おや?)

もう一匹、自身の感覚に引つ掛かった物を感じて茂みの方へと向かうと、向こうからガサゴソと茂みを掻き分けて

「くう。」

一匹の子狐が姿を現した。

「……何してるんですか?」

「くう。何だか妙な感じがしたから来てみた。」

よく、なのはとのランニングの途中に立ち寄る神社の子狐、久遠が尻尾についた葉っぱを払いながら答える。

「そうですか。何か良くない魔力と危険な感じがしますから貴女も気を付けて下さいね。また、暴走されたら今度こそ討伐されますからね?」

「わかつてる。もう大丈夫。」

こくん。と頷く久遠。またなのはが知らない所で色々やっているらしいキャスターもそれを見て安心したように息をつく。

「あ、そうだ。」

「どうかしましたか?」

「関係が有るか分からないけど、こんなの拾った。」

一度茂みに戻った久遠が、拾った物を口に啜えて戻ってくる。

「くう。」

「きゅ〜」

・・・所々怪我をし、赤い宝玉を首に付けたイタチのようなモノを。

それを見てたつぷり十秒程フリーズした後、キャスターが口を開く。

「・・・お腹壊しますよ?」

「きゅー!?!」

その言葉が聞こえたのか、最後の力を使って逃げようとするイタチ。そこへ。

「何か聴こえたの。」

「あ、なのはちやんも？」

「あ、二人ともあそこ！」

「キャスター？」

パタパタと音を立てながら四人の救い手が現れた。

「あれ、キャスターさん!?!それに久遠ちやんも。」

「キヤー☆お帰りなさいませなのは様♪こんな所でお会いできるなんて……ですが、今日は塾なのでは？」

「えっと、近道になるからこっちに來たの。久しぶり久遠ちや……にやああああ!?!」
「くう。」

と挨拶をする久遠の口元のイタチを見て、流石に驚く三人。

「こ、こら!?!その子生きてるじゃない!ペツしなさい!」

「狐さん食べちゃダメだよ?離してあげて?」

と、言われて久遠はやつとイタチを地面に下ろす。流石に力尽きたのか、イタチはぐったりとして動かなくなった。

(くう。別に食べようとした訳じゃないのに。)

(あー…まあいきなり見たら狐の捕食シーンでしたからね・・・)

こつそりと落ち込む久遠を慰めるキャスター。

「ど、どうしよう!?!」

「取り敢えず手当てして病院に連れていかなきゃ!」

と、慌てる三人に。

「じゃあ手当てするね?」

鈴を転がすような声で、ジルが腰のポーチを探りながら声を掛ける。

「ジルちゃん手当て出来るんだ。」

「あれ? ジル、あんたさっきまでポーチなんて着けてたっけ?」

(そう言えば、ジルちゃん『外科手術』のスキルが有るんだっけ?)

感心したようなすすずかと頭を捻るアリサと、頭でジルのスキルを確認するなのはを横目に、目当てのものを取り出す。

—— 血塗れの医療用メスと古い縫合針と糸を。

直後に三人にジルは止められ、さつきより心なしか青くなり身体を震えさせるイタチを連れて病院に急ぐ事になる。

「さつきは解せぬっていうんだっけ？」

四人と二匹の後ろを走りながら、ジルは首をかしげるのだった。

問い掛けと魔法少女

「フェレットですか。」

「そう。あまり見たことない種類なのだけどね。」

動物病院にて、院長とキャスターが診察室で話をしていた。目の前には手当てを受けて包帯と点滴を受けるフェレットが眠っている。

「よつぼどひどい目に遭ったのかしら？ ストレスでほら……」

「キュー……キュー（女の人怖い刃物怖い獣怖い女の……）」

「何やら驚かされてますね、可哀想に……。一体何処の誰がこんな酷いことを……。そうは思いませんかなのは様。あれ……。なのは様？」

先程まで居たはずのフェレットを連れ込んだ少女達はと言うと。

「もふもふだあ……」

「すずか、そろそろ交代しなさいよ！」

「次は私なの！」

「くう……」

治療中のフェレットは置いといて、成り行きで取り敢えず着いてきた久遠を、待合室

で思い思いに抱き上げてモフツていた。どうやら小学生の彼女らにとってはフェレットへ子狐のようである。

「ちよっ……なのは様は普段からモフリ放題なのに……やはり若い狐の方が……」

「久遠ちゃんは今遠ちゃんでも毛並みが艶々もふもふしてて気持ちいいの。」

「キイー！妬ましい!!こうなったら本数を増やすか私が増えるかして……」

(あれ？なのはの家に動物つていたかしら?)

二人の会話を聞いて首をかしげるアリサ。そこへ獣医が治療室から戻ってきた。

「取り敢えず、フェレットは大丈夫よ。今日一日は家で預かるわね。」

「「ありがとうございます!」」

「どういたしまして。……もう一人の子は？」

「あくあの子は医者嫌いなので……外に居ますよ。」

それでも、様子が気になったのか窓や入口から此方を時折覗いていたが。

「そうだ!ジルから物騒なの取り上げなきゃ!」

「ええと、アリサちゃん？」

「何よキャスターさん？」

「皆様今日は塾では？」

慌てて時計を確認した三人はもう一度先生に頭を下げて、外で野良猫と遊んでいたジ

ルを回収して走って行った。

「さて、私も久遠を神社に送って帰りますか。」

「くう。」

ひよいと久遠を抱えて出口に向かう。

「では、私たちはこれで・・・」

「うん。お会計済ませてからね?」

「デスヨネー。」

かくして、フェレット治療費＋猫缶（ジルが使用）の代金を支払うキャスターであった。

なのはがジルと共に帰宅し、夕食や風呂をすませたあと（両親に麻婆シチューについて問い質したがはぐらかされた。）キャスター含む三人はなのはの部屋に集まっていた。

「アリサちゃん家もすずかちゃんのものもダメだった」

「まあ、犬屋敷と猫屋敷ですからねえ。」

「やつぱり、うちで飼っちゃダメかな?」

「やはり、飲食業を営まれますから・・・あまり動物は宜しくないかと。」

「狐が居るから今更だと思おうよ？」

「よしその幼女、表に出やがれ。」

保護欲が刺激されたのかフェレットの先について相談しようとする目の前で喧嘩する我が家のサーヴァント達を誘ったが、相談相手を間違えたかなとなのはが思い始めた頃である。

『この声が聞こえる方・・・助けて下さい。』

「にやあ!？」

「おや。」

「・・・?！」

そんな声が頭に聞こえた。

「この声!?!公園で聞いたの!！」

「そうなんですか?なのは様?！」

「うん。公園でも何か物凄く必死に『誰か本当に助けて下さい!できれば今すぐ!!』って

聞こえたの。」

「・・・何か物凄く不憫そうな方みたいですね?！」

「幸運値がEとかなんじゃない?！」

そう話をする二人の横で直ぐにパジャマから普段着に着替えたなのは。

「行ってみるね！」

「お、お待ち下さいませ!？」

駆け出そうとしたなのはをすかさず抱き止めるキャスター。なんで!とでも言いだげに自分を見るなのはの我儘を聞きたくなるのを抑えて話をする。

「明らかに危険そうだったのに一人で!!しかも丸腰とか何を考えていらつしやるのですか!？」

「根性棒があるもん。」

〈No Problem.〉

「あ、丸腰じゃ無かったんですねー。・・じゃねーです。過剰防衛ってご存知ですかなのは様?つか本当に何なんですかコレ!？」

取り敢えず根性棒を取り上げてベツトに放り投げる。

「何するの!?!キャスターさんひどい!！」

「ぐっ!?!で、でも危険なことをしようとするマスターをたしなめるのもサーヴァントとして、そして妻としての勤め。お許しくださいまし。」

こほん。と一つ咳払いをしてから自身の服を普段着から蒼い呪術師の服へと変えてなのはに向き直る。

助けに行こうとしたとき、キャスターさんが私服から本来の姿に戻って私に問い掛けました。

「マスターが、こうして見ず知らずの誰かが困っていても、その手を差し出すことができないこと。それはマスターの美德であり、特別な所だと思えます。」

「キャスターさん？」

呼び方がいつもと違うことに戸惑う私に、今まで見たこと無いくらい真剣なキャスターさんは続けます。

「それはとても素敵な事です。——ですが、今回はその助けを求める手段を見ても一目瞭然、日常から外れた尋常ならざる事態です。もしかすると巻き込まれることにより、なのは様が本来しなくてもいい怪我や、嫌な思いをされるやもしれません。ですからマスターは安全な場所で見知らぬ誰かに任せるのも有りかと存じます。私やジルに丸投げするのも有りです。」

いつもなら、私が危険な事をしそうなときは全力で止めたり、知らないうちに終わらせてしまうこの人が、このときだけはどこか迷ったような目をして私に話をしていまし

た。

「・・・私はマスターの普通で、平穩で、安全な暮らしを守りたいので、サーヴァントなんて物以上に変な事には、あまり関わって欲しくないですし、危険な事はして欲しくないのです。・・・ですが、私はあくまで従者。御主人様の選択肢に従います。」

——でもきつと。

「お尋ねいたします。この声の主を助けに参りますか？」

——その質問は私が、『助けに行く』と答えるに決まっていると分かっています。

——だから、そう答えた時に一瞬だけ哀しい目をしていたんだと思います。

「仕方ありませんね。……まあ、そんなところがいいんですけどね。もう、なのは様つたらイケタマなんですから♪でもでもそれはアタシだけに向けて頂けたらなーと。」

そう言いながら、先程までの雰囲気霧散させたキャスターは、なのはの靴や上着を準備して着させてからひよいとなのはを抱き上げた。

「さて、参りますかなのは様。」

「え？キャスターさんも来てくれるの？」

「何を仰るのですかなのは様。そんなの当たり前じゃないですか。」

キョトンとしながらキャスターは告げる。

「なのは様が行かれるというならこのタ——じゃないキャスター。例え剣林弾雨の直中だろうが、屍山血河の中だろうが、黄泉の國だろうが、那由多の果てだろうが、お付き合いますよ。」

「ありがとうキャスターさん。」

「いえいえ。ですが本当に危なくなったら逃げて下さいね？」

「分かったの。」

そう答えるのはは、キャスターが窓を開けたことに疑問を抱く。

「あれ？何で窓を開けるの？そして何で私を抱き上げてるの？」

「え？ですから急ぎますよね？」

窓辺に足をかけながらキャスターが確認する。

「じゃあ跳んで行きましょうか。」

「え？きやあ!？」

なのは抱えたまま飛び上がり、夜の街を駆けるのであった。

「・・・あれ？私たち忘れられてる？」

〈ですね。〉

部屋で先程までの流れを空気を読んで、気配遮断しながら見ていたジルが、ベットに投げ出されたままの根性棒を拾い上げる。

（それにしても、あんなキャスターはじめて見た。迷ってるみたいな・・・それだけの事態？）

普段とは違うキャスターの行動に首をかしげるジルだが、

「取り合えず、おかあさん（マスター）に報告してからおいかけよっか？」
〈そうですね。〉

急ぎ足で自身のマスターの下へと向かうのであった。

屋根から屋根へ、ビルの壁を駆け上がり、電柱を足場に夜の街を駆け往く。凄まじい速度で後ろに流れる夜景を見ながら、なのははキャスターにしつかりとしがみついた。

「うわあ！スゴイスゴイ！」

「私とて、サーヴァントの端くれ。これくらいのことは出来ますよう。寒くないですか
なのはは様？」

「大丈夫なの！・・・キャスターさんあっち！」

身体を魔力で身体強化し、なのはを抱き上げた状態で足場から足場へと高速で飛び移る。結果、僅か数分足らずでその場所へと降り立つ。

「ハハハ・・・」

「昼間の動物病院ですね。しかし特に変わったことは・・・!？」
途端に周囲を何かが覆い、辺りが静寂に包まれる。

瞬間、なのはを抱えたままのキャスターがその場から飛び下がったと同時に病院が内側から破壊され、周囲に瓦礫を撒き散らした。

「あれは!？」

「キャスターさん!あの子が!？」

中から現れた3体の黒い化物を見てキャスターが声を上げると同時になのはが、同じく中から飛び出したフェレットを見つけた。

「なのは様は、フェレットを確保してください。あれは私が何とか致します。」

なのはを下ろし、鏡と呪符を取り出してキャスターが指示を出す。相手もこの現状で最も脅威となるキャスターを敵として定めたらしくキャスターに向き直り、牽制で放たれた炎天から距離を取る。

なのはがフェレットを抱いて下がったのを横目で確認し、

「ではでは、ササーツと片付けて私の凄い所をなのは様に見て頂きましょう・・・そんなわけで・・・」

目の前の獲物を見据え、構え直す。

「バリバリ呪うぞっ!」

叫びと共に戦いの火蓋が切って落とされた。

「キャスターさんスゴイ・・・」

なのは安全と思われる場所まで下がり、戦いを眺め見惚れていた。

三対一にも関わず、呪符と鏡を駆使して舞うように戦いながら相手の化物を圧倒する姿に改めて頼もしさを感じてしまう。

呪符が化物を凄まじい炎で焼いたかと思えば、今度は風が切り刻む。かと思えば宝具だと言っていた鏡で攻撃を受け、素早いカウンターで殴り返しながら距離を取る。

・・・時々「泣き叫べ!」とか「もんどり打てい!」とか「カツキーン♪」とか妙な掛け声が聞こえて来るのが緊張感を削いでいたが。

「あ、あれは使い魔!」

「フェレットが喋った!」

腕の中に居たフェレットが喋ったことに驚き、思わず手を離してしまう。地面に降り立ったフェレットは、なのはに構わず話し掛ける。

「もしかして、君がああの使い魔の主人の魔導師なのかい!」

「え!?!魔導師?魔導師じゃないけどキャスターさんのマスターは私なの。」

その言葉に何かを考えるような仕草をしたフェレットは、決意を込めてなのはに赤い

宝玉を差し出した。

「君に頼みがある！」

(・・・まあ、この程度なら余裕です。)

目の前の化物に鏡を叩き込みながらキャスターは、戦力を分析する。

近接戦闘に向かないキャスターとは言えどサーヴァントの端くれ、この程度の相手に遅れを取ることは無い。目の前の化物は、鏡による容赦無い殴打と強力な呪術によりかなり削られ弱っていた。

このまま圧倒すべく前に出ようとしたキャスターの背後から凄まじい魔力が巻き上がったのはそんなときである。

振り返れば、慣れ親しんだ主人の魔力で桃色の光の柱が聳え立っていた。

それを見届けたのは

「こいつはスゴイじゃないか。」

離れたビルの屋上で上機嫌に笑う紅い海賊。

「これ程の魔導師が……」

その隣に佇む灰色の女性。

「……なのはちゃん？」

紫の髪を持つ少女。

「何て魔力よ！」

「こんなことが……！」

屋敷を抜け出そうとした飼い主を眠らせて来た双子の猫。

「……おねえちゃん？」

夜の街を駆ける銀髪の黒い少女。

「この街で何が起こっているのでしょうか？」

戸惑う、皮鎧を纏う青年。

それぞれの思惑を抱えた者達と蒼い月が見守る夜

「レイジングハート！セット・アツプ！」

力強い声を響かせて、光に包まれて。

この日、一人の白い魔法少女が誕生した。

初陣・前編

月村家の自室にて三人で寛いでいたところ、突然

不思議な声を聞き、ライダーとリニスを連れて外に出て声の聞こえた場所に向かうと
昼間に訪れた病院が破壊されており、三体の化物がすずかもよく知る人物、キャスター
と交戦していた。

ならば、助けを求める声の主は？と離れた場所で状況を見守っていると。

「——親友が、魔法少女になった。何を言ってるのか分からないと思うけど私も分らない。ともかく……」

「すずか……現実逃避はその位で。」

「……そうだね。」

リニスの声で止まりかけていた頭をハッキリさせる。今は戦いに集中しようと再び
ライダーが、何処からか取り出した望遠鏡を覗き込む。

「いやいや、面白くなってきたじゃないか。」

「……楽しそうですねライダー。」

不謹慎などでも言いたげに顔を曇らせるリニスに、月村家から持ち出したワインの瓶に口をつけながらライダーが答える。

「いいじゃないか。あんたも愉しめよりニス。で？あのお嬢ちゃんのアレはあんたの所の魔法だろ？」

「そうですね。恐らくは救援要請をした人物に貸与でもされたのか……さすが程で無いにしろかなりの魔力持ちのようです。」

「はっ！流石はキャスターのマスターってか。さて、どうするスズカ？手え貸してやるかい？」

飲み干した瓶を棄ててマスターを見やる。

「……もし、なのはちゃんピンチになったら、あの化物を攻撃して。」

「スズカは行かないのかい？ピンチに颯爽と現れる大親友ってさ。あのお嬢ちゃんなら、スズカもマスターだって分かったら喜びそうだがね。」

ライダーの言葉にすずかは頭を横に振って答える。

「そうしたら、きつと魔力の量とかで私の体の事とかもなのはちゃんにバレちゃうでしょ。だから駄目だよ。」

「気にしないと思うけどねえ。」

「ライダー。」

軽口を叩くライダーをさすがが睨み付ける。それすらも面白がるライダーと苛立ち始めたすずかの間にはリニスが割って入った。

「二人ともそこまです。ライダーはなのはちちゃん達の近くで待機していなさい。」

「あいよ。んじや行つてくるか。」

さつさと霊体化して、その場を後にしたライダーにリニスは溜め息をつき、すずかに向き直る。

「ごめんなさいリニス。」

「気にしないで下さいすずか。私から後でライダーには話をしておきます。」

あの性格には困り者です。と頭を抱えるリニスを見ながら、すずかは再び前の戦場に向き合う。

「・・・大丈夫かな？なのはちちゃん。」

「まさか、封印砲・・・あの子砲撃型!？」

フェレットの声を何処か遠くに聞きながら、胸の奥の熱の塊を両腕に集める。

(やっぱりの感じ似てる・・・なら、やれる!!)

杖のロックオンが完了すると同時に引き金を引き、

桃色の砲撃が氷漬けのロストロギア異相体を飲み込んだ。

「やった・・・のかな?」

砲撃の反動で倒れこんだのはが起き上がり着弾点を見ると爆煙が少し晴れて、『二つ』の青い宝石が浮かんでいた。

「あれは・・・」

なのはが宝石に目を向けた瞬間、

〈上ですマスター!!〉

手元からの声に咄嗟に顔を向けるとポロポロになりながら逃れた一体が襲い掛かって来ていた。

「あ……」

瞬間、頭が真っ白になり棒立ちになったなのはを救ったのは、
「やらせません!!」

一瞬間で間に入り、鏡で一撃を防いだキャスターと、

「……おねえちゃんをいじめたな?」

空中で体勢を立て直した異相体に銃弾じみた速度の
メスを投げつけ、滅多刺しにして

「ころしてあげる!!」

振り向いた瞬間に大振りのナイフで切り刻んだ、銀髪の少女——なのは達を追いかけたきたジルことアサシンであった。

「なのは様!?!お怪我はございませんか!?!」

「おねえちゃん!? 大丈夫・・・夫?」

異相体が消滅し、寶石に変わったのを確認して二人がなのはに駆け寄る。

「怖かった・・・キャスターさん、ジルちゃんありがとう。」

「いえ、それよりもな・・・」

「おねえちゃんその格好どうしたの?」

「人の台詞遮らないで下さいまし!」

「二人とも喧嘩しないで!? これは・・・」

「ごめん! 僕が巻き込んだばかりに・・・」

そこへ近付いてきたフェレット。ジルはそれを見て目を丸くし、キャスターは目を細めてフェレットを睨む。

「あ、あの?」

「キ、キャスターさん!? 落ち着いて・・・」

「よくも私のなのは様を・・・」

キャスターが、口を開きかけた時、

「おねえちゃん!? フェレットが喋った!!」

「うわあ!?!」

目をキラキラさせたジルに掴み上げられた。

「なにこれ！なにこれ！何で喋れるの？」

「私も分からないの。」

「は、離して……」

ジルに握り締められ次第に青くなっていくフェレット。

「キャスター！これ飼いたい！」

「えー駄目ですよ。何か弱ってますし。つーか何度も人の台詞遮るんじや……」

「ちゃんと私たちが面倒見るから！」

「聞けよ。大体これは……」

「やだー！飼いたい、ちゃんと躰とかするから！」

「あーもう！人の話を聞けっつてんですよ！士郎さんと桃子さんの許可得なさい！」

「き、キュ……」

「その前に助けてあげて!？」

力一杯抱き締められたフェレットが、羞恥と圧迫により紫色になっているのを見かねたのが助けに入る。

渋々といった感じでジルが下ろすとフェレットは、息を整え始めた。

「ごめんね？」

「ゲホッ！い、いえ、此方こそ……」

「・・・窒息って人によつては快樂をおぼえるんだつて。」

「覚えないよ!?! 覚えないからね! 何でそんな残念そうなのかなあ!?!」

そんなジルとフェレットを見て、なのははキャスターと顔を合わせる。

「もしかして、苦勞性なのかな?」

「若しくは突つ込み体質かM?・・・まあ良いです。何か殺がれましたし。」

「いきなり睨むからビックリしたの。」

「うう・・・ですが、私とてなのは様がピンチになったら平静ではいられませんよ。」

少し落ち着いたキャスターは、思い出したかのように袖口から青い菱形の宝石を二つ取りだした。

「さて、先ずはコレをどうにかしましょ? なのは様」

〈ジュエルシード、No. 18・20・21封印〉

キャスターが回収した二つと、アサシンが仕留めた一つをなのはが持つ杖に吸い込まれた。

「お疲れ様ですなのは様。」

「おねえちゃん後で貸してね。」

なのはを気遣うキャスター、なのはの杖に興味津々なジル。

「ところでなのは様？そろそろその格好と先程の砲撃について説明して下さいませ。いや勿論、とてもお似合いですので今すぐ抱き締めてお持ち帰りした上で、撮影会は決まってるのですが。」

「うん。キャスターさんが平常運転なのは分かってるんだけど、何を言ってるの？」

「・・・デジカメのメモリー32Gじゃ足りませんね。後でコンビニ寄って買い足さなければ・・・」

「あ、聞いてない。」

ブツブツ言いながら思考に更けるキャスターに呆れるなのはに手元の杖——レイジングハートが明滅しながら提案する。

〈マスター利き手を彼女に向けてください。〉

「え？こう？」

〈シユート。〉

「・・・それにしても、時間の余裕さえ有れば撮影機材一式を新調してましたのに・・・みこおとおお!!?何するんですかなのは様!!?顔狙いましたか今!!?」

「び、誤解なの!」

顔を掠めた光弾に冷や汗をかきながら、慌てるのはにキャスターが詰めかかる。

〈今のが基本の射撃です。〉

「オイコラ。今のあなたの仕事ですか駄杖?」

〈『マイ』マスターの話を聞いてください駄狐。〉

「は?何言ってるんですかポンコツ?…ねえ、なのは様?『ワタクシの』なのは様にこんな危険物を与えた身の程知らずのフェレットモドキはどちらに?やっぱマジで呪う。TSとかどうですかね?」

「二人とも何でそんなピリピリしてるの!」

なのははキャスターが戦っている間の事を説明した。フェレットから、杖——レイジングハートを託された辺りからキャスターが眉を顰め始めた。

「全くもう。なのは様は人が良すぎです。」

「でも……」

「そこでアサシンに可愛がられてるフェレットモドキが、『僕と契約して魔法少女になってよ。』的な悪徳マスコットだったらどうするんですか!」

その視線の先ではアサシンとフェレットが戯れていた。

「私たちは高町ジル。好きな食べ物ハンバーグとハツ。」

「何で僕の心臓辺りを見ながらそんな自己紹介するのかな!? 自己紹介が恐すぎるよ!」
その様子を見て

「・・・大丈夫じゃないかな。何か悪い子じゃないみたいだし。というか止めなくていいの?」

「いいんじゃないですか? それは兎も角、今日日流行りの魔法少女とは名ばかりの『マジカル』』とか言いながらグロ展開する奴やら、少女でもプリティでもねえ筋肉な奴やら、友達になる為にとか言いながらその相手を動けなくして砲撃をブツパしたり、部下の頭冷やす為に砲撃をブツパするような奴やらにされたらどうするおつもりですか!」

「よ、よくわからないけどそんな酷い事しないもん。」

「魔王だの悪魔だの言われたらどうするんです!？」

「何を危惧してるのキャスターさん!？」

何か遠回しにデイスられたような気がしたが、気のせいだと思うことにする。

「兎に角! 契約というものは危険なんです! 迂闊に契約したが最後、変なものに付きま
とわれたりしたら・・・何で私の鏡を私に向けるんです?」

「深い意味は無いの。うん。確かに危険だったけど、でもあの危ないのを倒せし、封印
出来たよ。」

「確かに結果オーライかも知れませんが・・・まあ、諸事情はそこでアサシンに可愛がら

れてるフェレットモドキに帰ってから聞きましようか。」

フェレットは、今度は普通にジルの腕に抱かれていた。

「はい！勿論説明します。」

「宜しい。アサシン。取り調べ手伝ってくださいな。」

「じんもんするのね？わかった。」

「え!?!いや、全部話しますから!!」

慌てだしたフェレットを無視する。

「じゃあ、帰りましようかなのは様。」

「うん！」

「あ、そう言えばお母さん（マスター）からキャスターに伝言で『後でお話聞かせてね?』
だって。」

「なのは様・・・私、今夜は帰りたくないです。」

「皆心配してるし、明日も学校だから早く帰ろ?」

「・・・そうですねー。」

肩を落とし、まずは家でそれはそれは素敵な笑顔で自分達を待っているであろう桃子をどう説得するか、考える。

（しかし・・・一瞬だけ感じた気配は一体?）

なのはを助けに入った時、アサシンの介入とほぼ同時に消えた気配。そして、いくつも感じた視線。

「アサシン……貴女は気付きましたか？」

「うん。一瞬だけだったけどね。他にも居るのかも。どうでしょうか？」

「まあ、まずは家でフェレットの話聞いて方針を決めてからですけど。」

先を歩くなのはの頭を見る。

「——マスターに危害を加えたり、邪魔をするならば、誰だろうと惨たらしく殺すだけです。」

「そうだね。」

(女の人怖い。)

「何の話してるの?」

「何でも無いですよなのは様。」

「なんでもないよ。おねえちゃん。」

そう答えてから、何事もなかったかのようにキャスターは携帯を取り出して高町家に連絡を入れるのであった。

おまけの小話・フェレットと餌くその巻

帰り道の途中。キャスターがスマホを取りだして高町家への電話を済ました後（段々顔が青くなり震えていたが）、今度は別な場所に向け始めた。

「フェレット用の餌が必要ですから、知り合いに聞いてみますね。」

「桜ちゃんの家？」

「ええ、ペットショップマキリです。息子さんが最近、普通の動物とかも仕入れ始めましたし。」

なのはと会話しながら目的の人物と会話する。

「あ、もしもし御隠居？ええ私です。急なんです、家でフェレット飼うことになりましたし

て、ええ、そうなんですよ。それでですね？フェレットを餌に出来そうなの．．．もといフェレットの餌に出来そうなのっていませんか？」

「今なんか変な言い間違いしませんでしたか!?!」

聞き過ぎせない会話に思わず突っ込むフェレット。

「あ、両方有りますか。」

「「あるの!?!」」

「じゃあ、取りに伺いますので．．．よろしくお願いしますね。では．．．よし、これで餌の確保はバッチリですね。」

「何!?! 一体何を確保したの!?!」

なのはがしがみついて聞き出そうとするが、「はて？強いて言うならミルワーム的な物じゃないですか?」とはぐらかすキヤスター。

「ミルワームって?」

「小動物の餌にする幼虫ですよ。芋虫的な。」

「にやああああ!?! 虫を食べるの!?!」

「で、出来れば普通の餌で大丈夫ですから!」

「出来ればつてことは食べれるの!?!」

「えーと、一族的にサバイバルの一環で．．．ああ! 離れないで!?! 緊急時だから!?!」

(おいしいのかな?)

その後、なのはとフェレットの懇願により普通の餌を注文することになる。

「ふむ。これがいいかの。」

「何してんだ爺さん?」

「いや何、翠屋の小娘から小動物の餌と小動物を餌に出来るものを頼まれてのう。」

——ギチギチギチギチギチギチギチギチギチ——

「……何に使うんだこれ?と云うか虫かこれ?そもそも、聞き間違えてないか爺さん。」
「さてのう?確かに言うつたんじやが……家で交配して偶然出来たものじやが、ミルワームの一種として売れんかのう?」

「明らかに餌にされるどころか相手を餌にしそうじゃねえか。取り敢えず、桜ちゃん達が怖がるから部屋に持ってくるなよ?危ないし何か見た目が教育に悪そうだ。」

——『予約・高町家』と書かれた箱の中に入れられ、固形の餌と共に高町家へと渡される準備を整えられたソレは顎を鳴らしながらその時を待つのであった。

初陣・後編

「いやいや、もう少しで無駄に姿を晒す所だったよ。中々やるねあの二人。」

「お疲れ様ライダー。」

戦場になった動物病院から遠く離れたビルの屋上で、すずかとりニスがライダーを迎えた。

ライダーは、キャスターから気づかれにくいぐらいのギリギリの位置で待機、なのはが撃ち漏らした一体を仕留めようかと現界しかけた瞬間にアサシンが介入したために直ぐさま霊体化し離脱した。

姿を見られてはいないが存在を感知された可能性があることにすずかは、若干表情を曇らせる。また、化け物が倒れた後に現れた宝石については、

「サーヴァントがキャスターだけならまだ一つくらい強奪出来たんだがなあ、アサシンも来たら難しいね。」

「ジルちゃん？」

「アイツ相手に夜は仕掛けたくないね。アサシンの真名は知ってんだろスズカ。昼なら兎も角なあ。」

「私はアサシンもキャスターもやり合いたくない相手ですね。どちらも色々危なすぎます。」

「そうだね・・・そう・・・かなあ？ジルちゃんは確かに怖い・・・いやでも・・・うん。」

真剣な表情の二人に、改めて高町家のサーヴァント二人への警戒心を強めるはずか。

・・・もつとも普段の姿——なのはが絡むと色々残念な自称良妻な家政婦と、初めて会ったときは別として食べるの大好きな色々幼い友人——を見て来ているはずかとしては首を傾げざるを得ないのだが。

「でだ。アイツらが集めていった化物から出てきた宝石だが、『ジュエルシード』とか言うらしい。」

「なっ?! ジュエルシード!? 発掘されたのですか!？」

ライダーからの報告、その内容を聞いて驚くりニス。

「何か知ってるのりニス?」

「え、ええ。ですが、アレほどのロストログアがこの管理外世界に何故・・・重要性から考えても輸送中に事故でも起こらない限り地球には・・・まさか・・・」

『まさか』の可能性を思いつくりニス。かつての主が、とある目的の為に必要とした物の一つ。当時は発掘されていなかった為、御蔵入りした計画。

「……いや、それは考えすぎですね。さすが、あのロストログアはかなり危険な物です。恐らく、この鳴海市近辺に同様な物が散らばっていると思われます。」

「そんな!？」

「いいねえ。暇潰しにや持つて来いだ。」

軽口を叩くライダーを横目にせずかは考える。

(なのはちゃんはきつとこの件に首を突っ込むだろうし、キャスターさんもジルちゃんもなのはちゃんが参加するなら出て来るよね……バレたりしたら……でも、放つて置けないし。)

悩んだ末に決心したはずかは、二人に告げる。

「ライダー、リニス、あのね……」

「……んう?あれ?私なんでこんなところまで?」

所変わって、机に突っ伏して眠っていた少女、アリサは目を擦りながら辺りを見回した。

「確か・・・誰かに呼ばれたような・・・夢だったのかしら？」

自分の部屋で宿題をしていた時、頭に直接誰かの助けを呼ぶ声が聞こえ、そこへ向かうとしたような・・・

と、足元を見ると屋敷で飼っている大量の犬達に負けずに生活する、双子の猫が佇んでいた。

「何か知ってる？」

「にやあ？」

「みやあ？」

「まあ、知るわけないわよね。」

やはり、夢だったのだろう。そう納得したアリサは首をかしげる愛猫を抱き上げて寝室に向かうのであった。

（まさか、いきなり外に出ようとするとは思わなかったわ。）

（本当ね・・・咄嗟に眠らせてしまったわ。）

（多分夢の中の出来事だと思ってくれてる筈だけど。）

アリサがベッドで眠った横で姉妹は、顔を見合わせた。

(一応、お父様には連絡したから近い内に誰かしら派遣してくると思うのだけど。)

(それが来るまで如何するか・・・よね。)

(しかし、今回のロストロギアといい、『あの子』といい、あの化け物といい、よくまあ危ない物が集まるわよねこの街。何か呪われてるのかしら?)

(しらないわよ・・・)

ロツテの言葉にため息をつくアリサ。

(取り敢えず、私達はリハビリがてらにロストロギア回収と情報収集すれば良いのかしら?)

(そうですね。取り敢えずはそう動きましょうか。)

簡単に方針をまとめた二匹に、

「・・・むにゃ・・・わたしも、さんか・・・くうく・・・」

妙な寝言を呟くアリサに苦笑する二匹であった。

「キャスターちゃんから連絡があつたわ。もうすぐ帰りますつて。」

家の受話器を置いた桃子が告げると、リビングに居た高町家の面々は安堵の溜め息をついた。

「そうか、しかし一体何があつたんだ？」

「キャスターちゃんが言うには、少し厄介なことが起こつたみたいよ？」

階段を駆け降りてきたジルが、マスターである桃子になのはとキャスターが出掛けたので追い掛けるという簡単な説明だけをして、本来の姿に戻り家を出てから一時間程経っていた。

「兎も角、なのはとキャスターが帰ってきたら問い質さないと。幾ら、キャスターが同伴とは言えなのは達が夜間外出するのはまだ早い。」

「恭ちゃん心配し過ぎじゃない？大丈夫だよ。」

「そうではなくてだな、平気で夜間に出掛けるというのが、問題で……」

そんな話をしている間に時間が経ち、

『餌にケージは分かるけど……キャスターさんそつちの箱本当は何が入ってるの？』

『さて？御隠居はオマケのミルワームって言つてましたけど……雁夜さんが目を逸らし

たのが気になりますね。』

『何か・・・ビチビチギチギチ言ってるよキヤスターさん?』

『小動物用の餌なんですから言うんじやないですか?・・・多分。』

『そうなのかなあ?』

『いや、ですから僕はそっちの固形ペットフードで十分なんです。・・・本当に。』

〈箱の中に生体反応有り。二体居るようですが、データに該当する生物ありません。〉

『本当に何?!』

『えっ!? (ま、まさか新種?! くっ 『逃げろ』 って色んな人の声が頭の中で聞こえてくるけど・・・新種を前にして逃げるわけには・・・そうだ、この好奇心から逃げちゃダメだ 逃げちゃダメだ逃げちゃ・・・)』

『逃げちゃダメ。逃げちゃダメ。逃げちゃ・・・』

『アサシン・・・フェレットの耳元で何してるんですか?』

よくわからない会話をしながら帰って来た面々を迎えるべく、土郎と桃子は玄関に向かった。

「おかえり、なのは。ジルちゃん。」

「お母さん! たいまいま!」

「ただいまお母さん (マスター)。」

「心配したぞ二人とも。」

「うん。ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

玄関に出て来た両親を見て駆け寄ったなのはとジルは、素直に頭を下げた。

「こんな夜遅くにどこに出掛けてたんだ？・・・というかその荷物なんだキャスター？」

「まあ少々色々有りまして。」

「あ！キャスターさん、それもしかしてなのは今日拾ったっていうフレット？あ、もしかしてこの子が心配で出掛けたのかな。可愛いね！抱かせて!？」

集まって来た恭也と美由希も、それぞれキャスターに話し掛ける。

「それにしても、二人とも怪我も無く無事でよかったわ。」

「キャスターさんとジルちゃんが助けてくれたの。」

「お姉ちゃんはんばつてたよ。」

「あら、そうなの？でも二人ともあんまり危ないことはしちやダメよ。」

そう言つて娘二人の頭を桃子は優しく撫でた。心地よさげに目を細めるジルと同じく気持ち良さそうにしていたのはだつたが・・・

『風は空に・・・星は天に・・・』

「・・・え？」

嫌な予感がして、音が聞こえた方に首を向ければ、

『不屈の魂はこの胸に！こゝ、この手に魔法を！レイジングハート！セット・アップ!!』
 「と、まあこんな可愛らしいなのは様を見れたので、私的には駄杖と契約したこと以外は
 大満足でしたが……」

「ま、魔法少女？」

「な、なのは。この変身は大胆じゃ無い？」

何やらスマホの画面を土郎達に見せているキャスターの姿があった。

……つまりは、先程の台詞から変身シーンまで家族に見られたわけであり……

理解した瞬間に羞恥で顔をトマトみたいに真っ赤にしたなのは、慌ててキャスター
 の手からスマホを奪うべく飛び掛かった。

「じゃあああー!? な、何してるのキャスターさん!？」

「え? 何と申されましても……強いて言うならなのは様の勇姿の鑑賞とついでに説明!？」
 「順番がおかしいし、そもそもいつの間撮ってたの!？」

「なのは様を愛でる以上の優先事項なんてございませぬ!! それにこの時は、シャッター
 チャンスの予感をピン!と感じて即行で相手を氷天で氷漬けにしてから撮影しました
 ので問題ないです!」

「結構シリアスな戦闘中だったよね!? 何してるの!？」

腰に手をやり、胸を張ってドヤ顔しているピンクの狐に何でこの人は格好いい時と残念な時のギャップが激しいんだろうと頭を抱えるなのは。

「もしかしてなのは様・・・ギャップ萌?」

「・・・キヤスターさん・・・少し頭・・・」

「申し訳ございません。ですが、やはり直に見て頂いた方が理解して頂きやすいかと思ひまして。」

瞳から光を消したなのはが、0.5秒で手元にレイジングハートを取り出したのを見て一瞬で姿勢を正し、真顔に戻るキヤスター。ソレを見たフェレットがなのはとレイジングハートの相性とその才能に戦慄し、冷たい汗を流したとか何とか。

「ふーん・・・本当に?」

「Excellenty(その通りです)。ですのでその眼はやめて下さいまし。怖い、怖いですからなのは様。小学生がして良い眼じゃないです。」

「・・・真面目にしてれば格好いいのに・・・」

「?何か仰いましたか、なのは様?」

「何でも無いの!!」

少し顔の赤いなのはに首を傾げるも、手元から杖が消えたことに安堵の溜息を吐くキヤスター。

「なのは、キャスター・・・色々説明してもらおうぞ？」

「うん。分かっているの。」

先程の映像でまたしても日常からかけ離れた事件になのはが巻き込まれたことを察した土郎や恭也達に二人が頷き、キャスターがフェレットを拾い上げる。

「では先ず、こちらが・・・」

「は、初めまして！ユーノ・スクライアと言います。」

「喋った!？」

フェレットが、人の言葉を喋り挨拶したことに驚く高町家。

「キャスターちゃん。この子は？」

「このフェレットに化けてるのが、今回の事件の参考人かと。ま、詳しくは今から話してもらおうって所ですね。」

「そうか、君にも色々聞かせてもらおうよ?」

「はい。勿論です。」

土郎に頷き答えたユーノは、ふと視線を感じて顔を向けた。そこには、「いいですか、嘘偽りが有れば即座に性転換させますからね?物理的に。」

「じゃあ私たちは、心臓をもらうね?」

「も、ももも勿論包み隠さず総てお話し致します!!」

「やめんか二人とも。」

凍るような目つききのキャスターと無邪気に提案するジルの頭を後ろから軽く叩きながら、恭也が呆れたようにツツコミを入れる。

「もう・・・キャスターさん。ちゃんと一緒に説明してね？」

「分かつてますって、なのは様。あ、でもその前に先程の姿で撮影をば・・・」

「あ・と・で!!」

いっそのこと令呪を使うべきかと、自分に後から抱き付いているサーヴァントに頭痛を覚えつつ、リビングに向かうのはであった。

海鳴市のとある一軒家、その一室になのは達と同じぐらいの年齢の少女がベッドに腰掛けていた。何かの本を読んでいた少女だが、ふと顔を上げるとその視線の先に背の高い時代錯誤な皮鎧を身に着けた偉丈夫が現れた。

「只今戻りました。」

「おかえり、先生。どやった?」

「思った以上に危険な状況のようでしたが解決したようです。ただ、事件はこれで終わりという訳では無いですね。それに私以外のサーヴァントも確認しましたよ。」

「事件も気になるけど、先生以外のサーヴァントやて!? 会ってみたいなあ。」

目の前で報告を受ける少女は、好奇心に満ちた目を輝かせるが、男は苦笑して宥める。「相手によりますね。マスターと思われる少女は『キャスター』と呼んでましたが。」

「キャスターちゅーことは、魔術に関わって名を上げた人物ってことやな。どんな人やったん?」

「そうですね。露出の多い着物を着て、狐の耳と尾を持ったかなりの美人でしたよ。」

「うわー!リアル狐耳の美女とかほんまに会ってみたいわ。せやけどその条件が重なる人物言うたら・・・なあ先生?そのキャスター、かなり危険なサーヴァントやない?」

若干不安げに目の前の男に問う。

「そうですね。実際のステータスは、見て頂かないとですが、かなり動きのいいサーヴァントでした。加えてもう一人何ですが・・・」

「は!?!二体もおったんかいな!」

驚く少女。男はすまなげに答える。

「ええ、ですが……申し訳ないことにもう一人については何故か、容姿も何も思い出せないのです。」

「……なんやて?」

「恐らくは、スキルか宝具か……何かしら自身の情報を隠す物を持ったサーヴァントがいるようです。」

「なんやそれ……どないしよか……」

思わず自室のベッドに寝転がり、天井を見上げる少女。暫くそうした後に静かに口を開いた。

「何にせよ、その人らの目的を知らなアカンか……」

「ええ、機を見て彼女達に接触してみます。サーヴァントは兎も角、マスターらしき少女は悪い子では無さそうですね。」

「女の子?」

「そうですよ。マスターと同じぐらいの年頃かと。」

「ほんまに?」

頷く自身のサーヴァントを見て、指示を下す。

「ほな、お願い。キャスターのマスターと機を見て接触して、この海鳴で何が起こつるか聞いてくれる?」

「わかりました。必ずや。」

一礼をする青年に苦笑しながら少女は話を変え、たわいも無い会話を続けるのであった。

夜遅く、自分の部屋のベッドに倒れ込んだのは。

先程まで、フェレットから事情を聞いていたがさすがに疲れてウトウトしていたのを見かねられて部屋に戻された。

恐らく居間ではまだ、キャスターや両親達が話をしているのだろう。

(あ、そうだ・・・アリサちゃんとすずかちゃんに・・・フェレットをうちで預かる・・・事にしたって・・・メール・・・しなきゃ・・・)

最早半分以上眠りかけている頭で、ふらふらしながら携帯電話を取り出す。

(あれ?メールが来てる・・・)

知らないアドレスからのメールであり、普段ならば見もしなかったであろうが、この時はぼんやりとした思考のままソレを開いた。

(どういう意味・・・なんだ・・・ろ・・・)

題名も無く、ただ一言だけ書かれた言葉。

『光あれ』

その意味を確認する間もなく眠りについたなのは手元で、携帯が一度震えメールを削除した。

こうして、始まりの夜は静かに更けていくのであった。

幕間・アサシンの食卓

香ばしく焼き上がったトーストには、マーガリンと甘いジャムをタツプリと付けて食べる。

ボールに入ったサラダからは、今度店で使う予定だというドレッシングがかかった部分を取り、新鮮な葉野菜の食感を楽しむ。

程良く茹でられたソーセージにフンワリと焼かれたオムレツには、お気に入りのケチャップをたっぷりかけるのが彼女——アサシンの好みである。

食パンを平らげて、お替わりの食パン（三枚目）をパン焼き機にセットしていた所で、「……何してるのジルちゃん。」

声をかけられて振り返ると、寝ぼけ眼なのは目が擦りながらこちらを見ていた。

「んぐ。おはよーおねーちゃん。」

「お早うジルちゃん。……いや、そうじゃなくて。」

「こつちおねーちゃんのおね。」

分けていたトレイの上のお皿をなのはの前に並べて、牛乳を注ぐ。

「あ、ありがとう……。じゃなくて！」

言われるがままに席に座りかけていたなのは、ジルに突っ込む。

「何で、私の部屋で朝御飯食べてるの!？」

何か良い匂いがすると思つて目を覚ましたら、何故か人の部屋で食パンを焼き上がった端から食べている妹分は食パン（三枚目）を囓りながら首をかしげる。

「今日はキャスターが起こしに来られそうにないから、代わりに起こそうかと思つたの。」

「朝御飯食べてるよね!?!起こしてないよね!?!」

「匂いで起きるかなつて思つて。」

「普通に起こそうよ!?!確かに起きたけど!」

「朝から元気だねおねーちゃん。」

モキュモキュと食パンを食べながら、なのはに受け答えするジルは、なのはの分の食パンと自分の分を焼きながら話す。

「それにリビングは今、ちよつと使えないの。」

「何かあつたの?もしかしてジュエルシード関連!?!なら私も行かなくちゃ!」

「うーん・・・そうじゃなくてね。」

「違うの?」

クピクピと牛乳を飲みながら困つた様子のジルに尋ねる。

「簡単に言うとかキヤスターとユーノガリピングを半壊にして……」

「ご飯にしよう。」

「……げんじつとーひ?」

ジルにおかずを与えて黙らせたなのは黙々と朝食をとるのだった。……伊達に長くあのキヤスターのマスターを勤めているのでは無いのである。

「おかしいなあ……物語だと確かに人を困らせたけど……」

「一応言つとくけど、キヤスターの真名は『ごんぎつね』じゃないからね?」

「え!?……あ、うん!も、勿論だよ!にやはははは……」

一瞬間言葉に詰まったなのは、目の前のジト目から逃れるべく話を変える。

「それにしてもジルちゃん食べ過ぎなんじゃ無い?お腹痛くなるよ?」

「んー。これから忙しくなりそうだし、食べれる時に食べとかなないと魔力が持たないも。おねえちゃんも食べないと身体が持たないよ?それにまだ六分目ぐらいだから大丈夫。」

「え、六分目……?」

モシャモシャと大量のサラダを食べながら答えるジルの前のトースト(五枚目)や山盛りの朝食に目を向けるのはが何とも言えないような表情を浮かべた。

「只でさえサーヴァントに常時魔力供給してるのに自分も魔法使うんでしょ?休めると

きに休むのは基本だよ。」

「いや、そうなんだけどその量が一体どこに……いいや、私も食べないと。」

ちなみに、なのは達の為に日々腕を上げるキャスターの料理や、サーヴァントを維持する影響か食欲の増したなのはや桃子、そしてジルの食べっぷりに釣られた高町家の乙女が約一名程ジル曰く「おいしそう」になり始めているのはまた別なお話である。

「ふえもふぁー、ほんほにほえーふぁん……」

「もう、ジルちゃん飲み込んでから話して。」

「んぐ。」

なのはから差し出された牛乳で飲み込んでからジルの、改めて口にした。

「でもさー、おねーちゃん本当に戦うつもりなの？別に封印とかだけなら、ユーノやキャスターでも大丈夫なんじゃない？」

「勿論だよ！困ってるユーノ君を放つては置けないし、街が危ないもん。それに私にもお手伝い出来るもん。」

「……あのね、おねーちゃん。」

軽く溜め息をついてジルの、なのはの目を覗き込む。

「『お手伝い』程度の気分で戦うつもりならやめた方が良いよ？」

「ええ？」

アイスブルーの瞳と冷たい言葉に固まるのはを無視してアサシンは続ける。

「昨日は余裕だったと思っただのかも知れないけど、もう少して怪我する所だったじゃない。」

「そ、そうだけど私にも魔法が有るし、これから少しずつでも勉強すれば……」
そう言い返そうとしたのはが、瞬きをした一瞬、

「はい。一回死んだよおねえちゃん？」

いつの間にか食事用のナイフをなのはの後ろに回り込んだジルが、首筋に当てていた。

「じ、ジルちゃん……?」

首筋に金属の冷たさを感じ、思わず固まるのはがそちらを向こうとすると、

「ね?おねーちゃんは隙だらけなんだよ。」

「え!?!」

元の位置に戻っていたアサシンが、手の中でナイフを弄んでいた。

「単純な相手ならまだしも、格上の相手が出て来たらおねーちゃん瞬殺されるだけだよ。」

「うう……」

「それに相手次第では、キャスターや私たちだってやられちゃうかも知れないんだから。」

「そんな!」

思わず身体から力が抜けて項垂れるのを見て、やり過ぎたかなと思ったジルは、頬を掻いた。

「……だからね、おねーちゃん。戦いに出るなら気を引き締めて。私たちやキャスターが居たとしても戦いの中で何が起こるか分からないもの。」

「うん……ごめんジルちゃん。」

「まあもし本当に危なくなったら、私たちがおねえちゃんを連れて離脱するように言われてるんだけどね。」

「誰に?」

「うん。おかあさん(マスター)から。」

注いだ牛乳を飲み干してジルは、桃子からの命令を伝える。

『『必ずなのはと一緒に無事に帰って来なさい』って。令呪一つ使って言われてるの。』

「えっ!?!お母さん……令呪使ってまで……」

三つしか無いサーヴァントに対する絶対命令権を使ってまで自分達の無事を祈る桃

子の気持ちになのはは、胸が温かくなるのを感じた。

「そっかあ……ありがとうお母さん、ジルちゃん。」

「……私たちとしてはおねーちゃんには、お家に居て欲しいんだけどね。まあ、とにかく頑張ろおねーちゃん。」

「そうだね！頑張るの！」

気合を入れた様子なのは見て満足したジルは、すっかり空になった自分の食器をトレイに載せて部屋を後にするのであった。

「全くもう。キャスターちゃん反省してね？」

「た、たいへんもうしわけございませんでした……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

半壊したりビングに着いてみれば先程より、若干片付いた部屋と自分のマスターの前で震えながら正座するキャスターとフェレット。

「おかあさん（マスター） おねーちゃん起きたよ。」

「あら、ジルちゃん有り難うね。」

それを無視して無事だったキッチンに食器を片付けたジルは、とてとてと桃子に近付いて甘える。

「うん。反省してねキャスターさん。」

「な、なのは様!?! 私悪くないで・・・はっ!?!」

「あら? キャスターちゃん・・・やっぱりもう少し私とお話が必要かしら?」

「なのは様あ!?! ヘルプ! ヘルプミー!!」

そつと扉を閉めたなのはは、慌てて着いてきたジルと共に学校の支度をすべく阿鼻叫喚のリビングを後にするのであった。

「英雄つて一体・・・」

「おかあさん（マスター）のアレは対人宝具の領域。」

青い顔をしたジルの顔が印象的であったという。

探索初日

「じゃあフェレットは、なのはの家で飼うことになったのね。」

「良かった。私の家もアリサちゃんの家もダメだから、心配してたんだ。」

通学バスの中で出会った親友二人に、フェレットことユーノを飼うことにしたと説明すると二人は安堵の表情を浮かべた。

「今度遊びに行くときに抱かせなさいよ。あ、後あの子狐の久遠だっけ？あの子も！」

「あの子も可愛かったよね！モフモフしてて。」

「あの子は、神社で飼われてるの。」

（フェレットへ子狐なのかな？）

レア度、モフモフ具合、可愛らしさ、フェレットでは太刀打ち出来ないのだろうか？そんな事を考えていたジルがふと気付くと、昇降口に辿り着いた所では、先に親友二人を教室に行かせ別な場所に向かった。

「おねーちゃん、教室に行かないの？」

その後をとてと着いていきながらジルがなのはに尋ねた。

「うん。ほら、ユーノ君ぐったりしてたから何か元気になる物が無いかなんて思って。」
「男の子には、お兄ちゃん部屋の本棚の裏とかにあつたような本を見せたら元気になるってキャスターが言つてたよ?」

「そんな本があるんだ!?とどうかお兄ちゃん部屋の部屋で何してるの?」

「探検ごっこ。因みに美由希お姉ちゃん部屋の部屋には男の人同士が・・・」

「朝から購買部の前で何の話をしているのかね?」

「気付くと購買部の前に居た二人に言峰が声をかけた。」

「おはようございます言峰先生。買い物に来ました。」

「うん。元気になる物が欲しい。あ、おねーちゃんロールケーキ食べたい。」

「まだ食べるの!?!しかも、私が買うの!?!」

そんな二人の反応を愉しみながら、言峰は商品ディスプレイを手で指し示す。中には何かの結晶、瓶に入った薬品、焼きそばパンやカレーパン等の食べ物、菱形の宝石、根性棒と同じ感じがする道具類などが取り揃えられていた。

「ふむ・・・ならばこれにしたまえ。どの様に疲れていてもきつと体に稲妻が走り元気になるだろう。」

「何か赤黒いし密閉されてるのに目が痛い・・・つてちよつと待つて下さい。」

うっかり見逃しそうになってしまったが、よく見るとガラスケースの中に見覚えのあ

る青い菱形の宝石が

『ジュエルシード：300,000円』

の値札付きで置かれていた。

「な、何でジュエルシードが!？」

「おねえちゃんのレアな写真で大体30枚分……」

「……待つて。ジルちゃん今何て言ったの?」

「あなた何者?」

「ふむ?生徒が必要としている物を取り揃えているのが購買部ではないかね?」

「そろえるにしても限度がある。」

「そうだね。(誤魔化されたの。)」

なのはを庇うように、前に出たジルが質問を投げる。氷のような視線を嗤って受け流しながら言峰は口を開いた。

「何、安心したまえ。私はあくまでも、今回は生徒が必要とする物を用意する事が仕事なのでな。……事実、根性棒を使った経験は昨夜、役に立ったのではないかね?」

「な!？」

「つつ!？」

昨夜の事を知っている。という事に驚くなのはと、一層警戒を増すジル。

「まあ最もその準願望機は海辺で犬が偶然拾った物だがな。君達が必要とするならば君達に売ろう。それ以外にも君達の役に立つであろう物を用意した。何れも未熟な君達の助けになるだろう。買っていくかね？」

「あなたは信用できないけど、取り扱ってる物は使えそうだね。おねーちゃんどーする？」

「え？えつと」

2人からの視線を受けてなのは財布を確認した。中には翠屋でのお手伝いで手に入れたお小遣い千円札が数枚。

「アイテムは買いたいし、ジュエルシードも欲しいけどとても足りないの。ジルちゃんも同じぐらいだよね？」

「えーと、私たちは……」

ジルが財布を確認したのを見ると一万円札が数枚と五千円札が一枚と千円札が複数枚入っていた。

「私たちも足りないね。後でキャスターに相談してみよ。取り敢えずジュエルシードは取り置きして？」

「良いだろう取り置いておこう。」

「……ねえジルちゃん？」

「なあに？」

コテンと首を傾げたジルになのはが疑問をぶつける。

「お店のお手伝いで貰えるお小遣いは、多くても五千円札なのに……何で一万円札があるの？」

「……コレとコレとコレ下さい。」

「温めますか？」

「誤魔化した!?!後言峰先生温めなくて良いですから!」

必死に誤魔化すジルに対するなのは詰問は、チャイムが鳴るまで続いたという。

ユーノ・スクライアにとって誰一人頼れる人がいないこの管理外世界・地球で高町なのはとその家族の協力を得ることが出来たのは実に心強い事であった。

自身が発掘したロストログア・ジュエルシード。その運送中に起きた事故により、この街近辺にそれがばらまかれた事に責任を感じて一人で来たものの、暴走していた一個を捕まえただけで行動不能になり、あわや子狐に捕まったりとしながらも、現地の少女高町なのはとその強力な使い魔に助けられ彼女の家族達も交えて話をしたのが昨日の

いた。

当初、力が戻り次第に出て行くという自分に対して

「独りぼつちは寂しいもん。私も力になりたい！」

と、言ってくれたのはや、

「私としては、なのは様が危険な目に遭うのは反対ですが……ご家族の納得も得られますし、何よりご主人様が行くと言うのならお供致します。」

「おねーちゃんがやるなら私たちも手伝う。お母さん（マスター）だめ？」

その使い魔達、

「子供達だけでやろうとするんじゃない。大人にも頼りなさい。」

「そうね。どれくらい助けになれるか分からないけど、皆でやればきつと大丈夫よ。」

「俺も色々街を探してみる。忍にも頼んでみるか……」

「私も見つけたら連絡するね。」

そう言つて、危険を承知してなお協力を申し出てくれた高町家の面々に頭が下がる思いであつた。

そういう話をしている内に、眠そうになつたのはが部屋に行つた後、気になつていた彼女の使い魔、『サーヴァント』について聞き、啞然とする。

聞けば、この星の歴史・物語・神話等で英雄とされた人物の英霊を呼び出し、クラス

という枠に当てはめてそれを使役するという——それも自分と年の変わらぬ位の少女が、そんな規格外な存在を従えているという事に高町なのはの才能とその術に畏怖すら感じた。

その一方で英霊召喚の魔法の可能性にもスクライア一族として興味が尽きない。

例えば——目の前の二体——狐の特徴を持つ美女と銀髪の自分とそう変わらない背格好の少女（いつの間にかなのはからレイジングハートを借りて話し掛けていた。）は、果たしてどんな逸話を持っているのか。

例えば——過去の偉人を呼び出す事は次元世界の我々にも出来るのか。

例えば——彼の聖王や霸王を召喚すれば——どれ程考古学や古の魔法や技術が解明されるのか。

何より伝説や神話、物語の英雄達と直に話が出来るなんて、考古学者ならずとも胸が躍るではないか。ユーノの頭の中で「会いたい英霊リスト」と「聞きたいことリスト」が膨大に作り上げられていた。

もつともそんな規格外を平気で二体も所持するこの家も大概普通じゃ無いなーともこつそり思っていたのだが。

——そう思ったことに罰が当たったのか。

翌朝、朝食を頂いていた時に興味本位で蠢く箱をキャスターと共に開き、中から牙を鳴らして襲い掛かってきたクリーチャーのような蟲を必死に迎撃し。（何故か自分の方のみ襲い掛かってきた。）

その余波でメチャクチャになった室内で、なのはの母親である桃子にキャスターと二人揃って叱られた挙げ句、魔力の枯渇と精神的ダメージのダブルパンチで寝込んでいた所に、人が近づく気配を感じて顔を上げ、銀色の髪を確認したところで、白いスプーンのような物に乗った白と赤の何かを口の中に入れられ・・・

「はっ!? 此処はどこ・・・痛い痛い痛い! 何か口の中が灼けるような痛みを!」

「ん? やつと起きた。」

気が付けば可愛らしい白いワンピースを着てポーチを提げた銀髪の少女、高町ジルに抱えられて外を歩いていた。

「あ、アサシンさん? 此処はどこ・・・というか何をしたんですか!」

「んー、ジルでいいよ。放課後だから、お外にジュエルシード探しに決まってるじゃない。後は、魔力不足だったから、購買で売ってた激辛麻婆豆腐を使ったの。」

言われてみれば魔力はかなり回復していた。因みにジルがやたらとおめかししてい

るのは、ユーノと出かけるという話を聞いた桃子が、何故か気合いを入れて支度を手伝った為である。

「本当に回復してる……というか、口が物凄く辛くて痛いんですが……」

「それは私たちも知らないよ……本当に麻婆豆腐で魔力回復するかどうかのモルモットだったもん……」

「今何て言いました!?!」

後半にボソリと聞き逃せないことを口にしたジルを問い質そうとするユーノだったが、サラリとかわされた。

「まあ、そんな小さな事は置いといて今はジュエルシードを探さないとね。」

「小さくはない……い、いや、そうですね!ま、まずはジュエルシードを総て見つけなにとー!」

互いにきりつと表情を引き締める。若干ユーノの表情が青いのは、生来の生真面目さと責任感故であろう。

……決して、ポーチの中の密閉された容器に入った赤黒い物を見たからではないと信じたい。

と、ジルが立ち止まりある一点を見つめる。

(!?僕には何も感じられないけど……超常の存在たる彼女には何か感じ取れたのか!?)

ユーノを抱いたまま、ジルは真剣な表情で其処へと向かった。

所変わって、なのはは自室にて自身の新たな相棒レイジングハートと共にバリアジャケットの調整を行っていた。

ジルとユーノは、なのはとキャスターを置いて先に町へと探索に出掛けている。：：若干彼が、口から泡を吹いていたようにも見えた気がしたが何とかなるだろう。

契約時、咄嗟にマスターであるなのはがよく着る服装を元にバリアジャケットを作製したレイジングハートであるが、やはり細部などが不十分であったためにこうしてなのはと調整を行うことを提案した。

そこはなのはも女の子。自身の新たな服をアレンジしたり可愛くしたり、勿論実践の事も考えながらも楽しみながら作業をしていた。

〈そろそろ休憩しましょうマスター。〉

「そうだね。んー！つかれたー。」

〈お疲れ様です。〉

休憩に入ろうかとした時、ふととあるデータが目に入った。

「ねえ、レイジングハート。このデータは？」

「へこちらはマスターが持つ『魔法使い』のイメージを元にしたデザインです。……個人的にお勧めはしません。」

「そんなのもあつたんだ。」

「緊急時でしたので着なれていて防御力の高い方を選択しましたが……。」「ふーん……。あれ？これってもしかして。」

「デザインを見て自分の持つイメージに納得するなのは。そこに、へ……。折角ですから、着てみますか？」

「えっ？」

「えへへへ……」

鏡に写る姿は先程とは全く変わっていた。

——雪駄を履き、黒いニーソと大きく露出した足。

——大きくはだけた肩。

——腕には着物のような袖口。

——大きな帯とこれまた露出した胸元。

——なにより、頭とお尻に着いた狐の耳と尻尾。

「恥ずかしいけど……キャスターさんモードって所かな？」

〈マスターよくお似合いです。とても元が駄狐の服とは思えません。〉

レイジングハートが応える。

——彼女にとって一番見慣れて着なれた服が制服ならば。彼女にとつてもつとも身近で見慣れた魔術師と言えば、キャスターである。

くるくると鏡の前で回転してみたり、キャスターのポーズを真似してみたりとご機嫌になったなのは。

「……ほん。」

と、一つ咳払いをしてから台詞とポーズを決める。

「コーーーン！……にやははは。なーんて……」

と、くるつと振り返って

——たまたま通り掛かったのか、部屋の扉前でフリーズしていたキャスターと目があつた。

「……」

「……」

想定外な事態にフリーズした二人。最初に動き出したのは……

「……こっつ——」

「き、キャスターさん!?!」

吐血しながら崩れ落ちたキャスターであつた。

「キャスターさんしつかりして!」

「ふ、ふふふ……流石なのは様……よもやこの身を可愛らしさだけで滅ぼそうとは……」

何か一部が光りながら砂のように散ろうとしながらも、とても満ち足りた表情でなの

はの顔に震える手を添えながらキャスターはかすれた声で呟く。

「な、なんか不味いかんじで光ってるの!」

「だめね。だって、私の願いはもう．．．叶ってしまったのだから——」

「え!?!ちよつと、キャスターさん!?!」

「ん?おねーちゃん．．．?」

「．．．今度は何ですか．．．」

ジルの腕の中でユーノは、疲れ果てた様子で口に駄菓子を啜るジルに尋ねる。

腕に提げたビニール袋には、先程ジルが向かった駄菓子屋で購入した大量の駄菓子が詰まっていた。

先程から、興味を持った物に反応してあつちこつちと動くジルを宥め賺して疲れ果てていたユーノは、何故か自分にくれたやたらと甘いゼリーを啜る。

(ああ、灼けた口が癒やされる．．．あれ?もしかして)

自分のために買ってくれたんだらうか、と思いをかけようとしたが、当の彼女はすつかり探索に飽きていた。

「見つからないねー。つまんない。」

「まあ、この街のどこに落ちたかまでは分かりませんし。虱潰しに探すしかないですよ。」

「見つかった物と言えば、お菓子に付いてた金の天使と何か星が入ったオレンジ色のボール位だし。」

「・・・何か、別のロストログア見付けてませんか?」

色んな意味で話がややこしくなりそうな物をポーチに仕舞い込んだジルはふと、何かを感じた。

「何・・・?」

一瞬遅れてユーノもソレに気付く。

「これは、ジュエルシードの反応!」

「ふう。まったくもう、危うく消滅する所だったじゃないですか。気を付けて下さいま

せなのは様。」

「・・・あんなので消滅しないで欲しいの。」

何とか持ち直したキャスターに疲れた表情でなのはが呆れたように突っ込む。

「耐久値Eの私にあんな宝具クラスの威力の可愛さ防げる訳ないじゃないですか。何ですかあれ、約束された勝利ですか？ 天地開闢ですか？ 一に還つちやうんですか？ 効果絶大じゃないですか。モニター前の紳士淑女な皆様も今頃吐血してますよ。」

「何の話!?! モニター前の皆様って誰!?!」

「取り敢えずどこかの世界でスマホやらPCやらがお釈迦になっているのは間違いないですよ。血で。」

「何で!?!」

未だ混乱しているのか、尻尾をパタパタと振りながらよく分からないことを語るキャスターになのはが突っ込んでいた時である。

『あー、あー、マイクテスマイクテス・・・おねーちゃんとキャスター聞こえる?』

『にやあ?! ジルちゃん!』

習ったばかりの念話で突然話し掛けてきたジルの声になのはは驚き、キャスターは眉をしかめた。

『何の用ですかジル!?! 折っ角今から私のコスプレをしたなのは様と、R-15タグの壁

を壊す予定ですのに!』

『何する気だったの!?!』

『ずるい! キャスターずるい! おねーちゃん私たちの格好は!?!』

『ジルちゃんはジルちゃんを何を言い出すの!?!』

『あの、ジルさんそれより本題を……』

隣にいるユーノから宥められてようやく本題に入る。

『む……神社にジュエルシードの反応があったから早く来てね。』

『わかった! すぐに行くね。』

『チツ! 仕方ないですねえ、なのは様その格好のまま参りましょ……ってなんでそっちに着替えてるんですかあ……』

「は、恥ずかしいもん! 一緒に格好は嫌じゃ無いけど……恥ずかしいよ。」

いつの間にか姿を白いバリアジャケットに戻したなのは、顔を赤くして首を振った。

『そんなあ!?! じゃあ何が嫌なんですかあ!?!』

『自分のねんれーを考えて無いかっこーが嫌なんじゃ無い?』

『ぶち殺すぞ腹ペコロ。ってか格好に關しては貴女も露出は一緒にしようが!』

『べくだ! 私たちは年そーおーだもん。レイジングハート、私たちの格好も追加して

ね。』

〈畏まりましたサブマスター。〉

『いつの間にサブマスターになつてゐるんですか!? 後お二人ともあの格好は目のやり場に困るんですが……はっ!』

思わず本音を交えて突っ込んでしまったユーノに対して、極寒の冷たい感情が籠もつた念話が届く。

『ユーノ君……』

『えつちいのはいけないと思うよ?』

『ムツツリフェレットが……なのは様近寄らないように』

〈F〇〇K!〉

『ご、誤解です! そんなつもりじゃないんです!?!』

ユーノ・スクライア。生真面目故に苦勞人である。

始まりは些細な事。

お気に入りの神社での散歩中に見つけた小さな石。

それは、早く、強くて大きな身体が欲しい。そんな自分の願いを容易く叶えた。本能的に理解した。コレを集めれば自分はもつと強くなれる。

探しに行こう・・・その前にここに近づく人間と小さな獣を食べてから。

次第に近付いて来る匂い。舌なめずりをして待ち構える。

・・・段々と霧が出て来た。益々好都合だ。霧に隠れ、強い自分の爪と牙で奴等を食い破ろう。

身体を沈め、何時でも飛びかかれる体制を取り次第に濃くなる霧の中で息を整えよう

として――

石畳の上でのたうち回る事になった。

――匂いを嗅ごうとすれば、鼻が灼ける。

――周りを見渡そうとすれば、眼球が灼ける。

――息をすれば、肺と口内が焼け爛れる。

体全体を襲う痛みに耐えかねた獣は、ただただ石畳を転がり必死に暴れる。既に周りは白い霧に覆われ、一寸先すら見通せない。

そうして、漸く気付く。

——この霧は、自然な霧では無い。

——悪意を持った何者かの為の狩場である。

最早、獣に戦意は無く痛みに何とか身体を立て直してこの場からの離脱を試みようとし——

『まあ逃げれないし、逃がさないけどね?』

前から、遠くから、耳元で、後ろから——同時に聞こえた声と共に霧の向こうから飛んできた刃物——古い医療用メス——スカルペスが両前足と後ろ脚にゾブリと音を立て深く突き刺さる。

『ま、待って下さいジルさん何を!?!』

『だって直接殺して中からえぐり出した方が楽だけど、お母さん（マスター）に買って貰った服が汚れるのはやだもん。』

『な・・・』

『だから、こうやって動けなくして失血死させた方が良いじゃない？』

『殺す必要は有りません!!』と、兎に角この霧も解除して下さい！僕が結界を張りますし、拘束しますから！』

次第に晴れる霧と引いていく痛み。しかし、身体を魔力で縛られた獣には最早抗う気力も無かった。

ユーノ・スクライアは、目の前で起こったことを信じられず・・・いや、理解したくなかった。

ジュエルシードの暴走体が、現地の生物を取り込み暴れる。それは、大きな被害を——場合によっては人を襲って——起こすはずであった。

それを最小限の被害で食い止めた。本来ならばそれは喜ばしいことだろう。ただ、そのやり方は余りにも残酷だった。

彼女、高町ジル——否、アサシンのサーヴァントが行ったのは相手を『霧』で包んだ事。ただそれだけである。

それだけで、相手もがき苦しんでのたうち回り、次第に動かなくなっていく。その事に恐怖を覚えた。

「何をしたんですか!?あの霧は、一体何ですか!?!」

背筋に冷たい物が流れるのを感じながら、霧を解除して暴走していた獣が、動けなくなつたことを確認していたジルに問い掛けた。

「え? 私たちが居た当時の倫敦の霧。」

「霧ですって!?!あんな兵器じみた霧が在るわけ……」

「だってそれが私たちの『宝具』の一つだもの。」

十八世紀から二十世紀にかけての当時のロンドンでは、産業革命により深刻な公害が発生した。特に石炭を使った暖房器具、火力発電所やディーゼル車などから発生した亜硫酸ガス等の大気汚染物質は冬のロンドンの冷たい大気の層に閉じこめられ、滞留した。そして濃縮されたpH2——強酸性の高濃度な硫酸の霧がロンドンの人々を襲った。

「り、硫酸の霧……」

「そう。それが私たちの結界宝具『暗黒霧都』ザ・ミスト。」

ユーノは、昨日得たばかりの知識を思い起こす。

宝具とは、サーヴァント達の象徴にして切り札。

目の前の幼い少女のクラスは『アサシン』。

(つまり、彼女—ジルさんの正体は今から比較的近い時代に、霧に包まれた街で暗躍し

た『暗殺者』?」

そこまで考えてユーノは、首をひねる。目の前のどう見ても訓練された様には見えな
い少女が、何故『英霊』として『暗殺者』に数えられているのか? この世界の歴史には
まだ詳しくない彼には判らないことだらけである。

——少なくとも、自分より遙かに強く無垢で有る事と。

——味方以外に対して純粹に残酷で在ること以外は。

「本当にえげつないですよねソレ。」

「あ、おねーちゃんとキャスターだ。」

「ジルちゃん!? 大丈夫!?!」

「よゆうだよ。」

振り返れば白い姿になったのはと、キャスターが立っていた。

「つて何か物凄く血だらけで弱ってる!?! ジルちゃん、やり過ぎだよ!?!」

「仕方ないじゃ無い。私たち他にナイフしか武器無いもん。」

「取り敢えず、なのは様はジュエルシードを封印しちゃいませうか。それから手当て
して上げませうか……しかし……なのは様の戦闘経験にはなりませんでしたねえ。」

キャスターは考える。なのはが戦うこと——危険な目に遭う事は出来るだけ避けた
いというのが彼女の本音である。今朝方ジルがなのはに話した(刃物を向けたことに関

しては制裁を加える予定)通り、戦った経験が(自分に根性棒を向けた事を除き)ほぼ無い彼女がジュエルシールド捜索に加わるというのは、サーヴァントとして止めなければならぬだろう。

しかし、残念なことに本人が行くと言っているのである。ならばなのにも戦闘経験値を積ませ、『万が一』にも大怪我などをしないようにしたい。そこは、地球原産戦闘民族高町家の血を引くのはならば、戦闘経験を積ませれば大丈夫だろう。

「・・・キャスターさん、何か失礼なこと考えなかつた?」

「ん?何でも無いですよー?」

疑わしそうな目でこちらを振り返ったなのはに提案をすることにした。

「戦闘訓練?私とキャスターさんで?」

「はい!まあ、なのは様はまだ戦闘経験が浅いどころではないですので、私と軽く戦ってみませんか?モチロン手加減は致しますとも。」

ジュエルシールドを封印し終え、怪我した獣をお馴染みの動物病院に預けた後に立ち寄った公園で和やかに提案するキャスターの言葉になのは戸惑う。

「で、でもキャスターさんが怪我したらどうするの?」

「あ、今のなのは様の実力で私に怪我を負わせることはまず有り得ません。つか、生身でサーヴァントに勝つか人間辞めるか、余程な切り札が無きや無理です。……まあ、高町家は前者に該当しそうですが。」

「危ないよ！私の魔法凄く威力が有るんだよ!？」

キヤスターに止めさせようとするのはだが、

「うん。まず今のおねーちゃんじゃ勝てないから。安心して撃つて良いと思うよ。」

「ジルちゃんまで!」

ユーノを抱えていたジルが口を挟んだ。

「マスター折角です。あの狐に身の程を教え込んでやりましょう。」

「で、でもレイジングハート……」

「マスターこんな言葉が有ります『弾幕はパワーだぜ』と。」

「いや、誰の言葉?でも……うん、わかった!キヤスターさんやろ!」

「さて、エロフェレット。結界は大丈夫ですね?」

「結界は大丈夫……って何ですかその呼び名!？」

タツと音を立ててなのはから距離を取ったキヤスター。鏡を浮かべてからなのはに人差し指を動かして掛かってこいとばかりに挑発する。

「因みに私に勝てたらご褒美あげちゃいます。私と添い寝でもデートでも自主規制

「な事でもバッチコイです！あ、因みに負けたら罰ゲームです。」

「それって……」

「勝つても負けてもおねーちゃんは罰ゲーム？」

「外野シヤラップ。さてさて、なのは様如何なさいます？」

「ならキャスターさん。もし、私が勝ったら真名教えてくれる？」

「私の真名ですか……うーん……」

なのはのリクエストに少し躊躇うキャスターだったが、

「そうですね構いませんよ？」

「本当!?!なら頑張るの!」

レイジングハートを起動させ、杖を構えるなのはにキャスターは目を細める。

「まあ『勝てれば』の話で御座いますが……ね？」

「負けないもん!」

言うや否や砲撃を放つのはであったが……

「つと。はい、なのは様の魔力美味しく頂きましたー。つか、そんな大振りで見えみえな攻撃が私相手に通じるとでも思いましたか？躲してもよかったですけど……」

「な、何ソレ!?!」

〈鏡の前に展開された術により、殆どのダメージを削減された上に魔力を幾らか吸収さ

れました！」

レイジングハートと念話でタイミングを合わせて放った、不意打ちの砲撃を鏡を使った術を展開し、難無く防いだ上に魔力を吸収したキャスターに驚くのは、キャスターは微笑みを浮かべる。

「うふふ驚きましたかなのは様？ 『呪層・黒天洞』防衛と同時に、相手の魔力を吸収する私の主戦力です。それでも私、サーヴァントの中では弱い方ですが、昨日今日魔法を使い始めた小学生に負けるわけ無いじゃ無いですか。」

「流石キャスター。やることが汚い。」

「す、すごい……」

すっかり観客となったジルとユーノが見守る。

「そんなわけで大人しく罰ゲーム『お姫様だっこで学校送迎』を受けて下さい。あ、商店街も通ります。」

「にやああああ!? れ、レイジングハート！ 全力全開で！ 何としてもキャスターさんに勝つので!! 力を貸して!!」

「了解しました全力でサポート致します！ マスターをそんな恥辱に晒させません！」

兎に角、今の自分を使える全てを必死にぶつけようとするのはを見て、その姿に笑みを浮かべるキャスター。コレならばなのとはにとって良い戦闘経験になる模擬戦にな

るだろう。

「では、反撃です♪まずは回避と防御から学んでいきましようか？」

サッカーと嫉妬と痴話喧嘩

ジュエルシードの探索が始まって数日経った休日、絶好のお出かけ日和な天気の中、高町士郎がオーナーを務めるサッカーチーム「翠屋JFC」の試合日である。

それを応援しに来たアリサ、すずかであるが、

「……」

「あー、もう落ち込んでんじゃ無いわよなのは。」

「そうだよ元気出して。」

「キュー。」

隣でどんよりと落ち込んでいるのはを励ましていた。肩にはフェレットことユーノが乗り慰めている。

「だって……」

「もう済んだことなんだし、仕方ないでしょ？」

「でも……」

「うん。私達も気にしてないよ。」

「キューキュー」

肩をポンポンと叩いて慰めるはずか。

「キャスターさんにお姫様だっこされて学校送迎されてたことなんて。」

「そうよ、今更気にしないわよ。」

「は、恥ずかしいんだよ!」

神社での戦闘後、しつかりとぼろ負けしたなのはを待っていた罰ゲーム『お姫様だっこで学校送迎』という羞恥プレイもかくやな事を行われたたのはのである。

お迎えに至っては、喜色満面といった感じで迎えに来たキャスターの、

『お夕飯の材料をというっかかり買い忘れていました♪』

という一言により、よりにもよって人が多い夕方の商店街をキャスターに抱き抱えられたまま回るといふ事まで行われた。

この羞恥を拭うべくレイジングハートと訓練し、再度キャスターに模擬戦を行うも再び敗北。再度お姫様だっこを繰り返した結果……

「そりやまあ学校と商店街で噂にもなるわね。」

「でも今更じや無いのかなあ? あ、でもほら雑誌の『街で見かけたベストカップル』のコーナーに写真付きで載ってたのはすごいよね!」

「うにやあああああああああ!?!」

「キュー(なのは……)愁傷様……)」

のんきに話し合う二人の横でごろごろと芝生の上で頭を抱えて転がるのは。因みにジルも模擬戦に参加してなのはに勝利。求めたのは『私たちの格好をする。』であり、高町家にて桃子が『偶然偶々お店の子用にデザインしていた可愛い服』と共になのはとジルの撮影会が開かれたのは余談である。（因みに、家族会議によりスカートの着用が求められたが、『おねーちゃんの変身だって、あんまり変わらない』と拒否された。）

因みに本日のジルは、

「偶にはお母さん（マスタ―）と一緒に良い。」

と、翠屋でキャスターと共にこの後の食事会のお手伝い（メイド服着用）をしている。

「でも、嫌じゃあ無いんでしょう？」

「嫌じゃ無くても、恥ずかしい物は恥ずかしいの！」

（複雑だなあ・・・）

顔が真っ赤になっているのはの様子に嘆息するアリサとすずか。流石にこれ以上弄るのはと話を変えた。

「まあ、今日は折角なんだし気晴らししましょうよ。」

「・・・うん。全部忘れるの・・・」

「（なのはちゃん苦労してるなあ）えっと、相手のチームは・・・え？」

「うわ、何あれ？金ピカのユニフォームって何よ？」

翠屋JFCの本日の対戦相手が、丁度到着したのをみれば、やたらと派手なバスから遠目にもキラキラした金色のユニフォームを着た小学生達が降りてきた。

「えっと強豪チームの『ゴールデンJFC』だつて。」

「何その名前？あ、土郎さんと話してるのが監督かな？」

アリサが見た先には、土郎と話をする派手な男がいた。顔は遠くてよく見えないが、金髪で派手な豹柄のスーツを着た如何にも夜の街に居そうな男が、何の冗談か休日の昼下がりのグラウンドで高笑いをしながら挨拶をしている。

「変なの。」

「格好が何かホストみたいね。」

「えーっと、各地からスカウトされてきた精鋭を、一級の設備や備品が整えられた環境で、効果的かつ効率的に育成された強豪チーム。それをスカウトから育成、スポンサーまでやってるのがあの『ゴールデンP』って人らしいよ。」

「凄いね。」

「確かに凄いけど何その名前？バカなの？」

「さ、さあ？」

藁半紙に刷られた試合のお知らせに書かれたチーム紹介を読むすか達は、思い思いの感想を口にした。

「対する翠屋JFCは、人体の動きとチームプレイを極限まで極めたチームで、ディフェンスに定評がある。菜の花会を新たにスポンサーに付け、資金力も充実している。最早現実離れた強さを持つクラブ同士の戦いはプロも注目している・・・だって。」

「人間よね？」

「に、人間だよ・・・小学生の子達は・・・多分。」

日々の鍛練を絶やさず行い、最近に至ってはジルの『暗黒霧都』から生身で脱出出来るようになった父（キャスターとジルをして呆然とさせた）に心身共に鍛えられた小学生が、果たして普通の領域に収まるかは疑問で有るが。

「このスポンサーの菜の花会って、最近になって力を付けてきた会社だよね。」

「噂だと会社のトップは絶世の美女だとか言われてる所よね。何でそんな会社が士郎さんのチームのスポンサーやってるのかしら？」

（あれ？そう言えばキャスターさんが、家でよくやり取りしてる会社がそんな名前だったような？）

父のチームに関わるスポンサー企業に、家の狐の影を感じて若干不安を覚えるのが、友達とそんな話をしていた時である。

「・・・あれ？」

「どうしたのよすずか？」

目の良いはずかがふと、その男の隣に立つバインダーを持ったジャージ姿の小学生を見つけた。

「あそこに居るの、白野ちゃんじゃないかな？」

「え？本当？」

「何でこんな所に居るのよ？」

「分からないけど・・・もしかしてマネージャーをやつてるとか？」

「白野が？よし、確かめてみるわね。」

アリサはこつちに呼ぶべく電話をするのだった。

「三人とも来てたんだ・・・ああ、そうか対戦相手の監督は高町さんだったっけ。」

「お父さんなの。」

「で、あんたは何してんのよ？」

電話の指示通りにトコトコ歩いてきた、栗色の髪をまとめた少女、岸波白野は首を傾げる。

「雑用係兼マネージャー？」

「何で疑問系？」

「いや、だつて朝起きたら『行くぞ白野よ。』つて強引に兄さんと一緒に連れて来られたんだよ。」

「あ、伯野君も来てるんだ。」

「そう。兄さんは桜と補給とかの手伝いしてる。．．．あ、家のA．．．Pからで『飴をやるう。』だつて。」

「何で上から目線なのよ。つてかゴールデンPつて何よ？」

「だつてゴールデンだし。」

「あ、でも美味しい！」

只の飴玉とは思えない程に芳醇な香り漂う造形も見事な飴玉は、上流家庭のアリサに
すずか、一流のパティシエを母に持つなのは達の舌を唸らせるほどの味わいであった。

四人が飴を堪能しているとゴールデンJFCの方から白衣を着た長い髪の少女が、駆け
てきた。

「白野先輩、そろそろミーティングです。！先輩方おはようございます！」

「桜ちゃん！おはよう！」

「桜も大変ね。」

「いえ、私は好きでやっているので．．．」

と、優しいげに微笑むのは一年後輩にあたる保健委員、間桐桜である。先日高町家で騒

ぎになった原因とも言える某ペットショップを実家に持つ姉妹の長女は、なのはに頭を下げる。

「高町先輩、先日は申し訳御座いませんでした。」

「ううん！キヤスターさんが悪いから気にしないで！」

「はあ、また何かしでかしたのあの人？」

「・・・本当に大変だねなのはちゃん・・・」

互いに頭を下げ合うのはと桜を見て呆れた表情のアリサと、何故か同情の眼差しを向けるすずか。

「桜、そろそろ戻ろうか？」

「あ、そうですね。伯野先輩にお任せしますし、早く戻りましょう。」

「ふくん。大変そうね？な、何なら私が手伝いに行くわよ？」

（アリサちゃん・・・テンプレートなの。）

（素直じゃないよね。）

素直じゃない友人を微笑ましく見守っていた。

「は？何を言ってるんですか、先輩何て居ても役に立つわけ無いじゃ無いですか。」

目の前の桜と全く同じ声のアリサの後から掛けられた。

「全く一々やるのが姑息ですね、アリサ先輩？ちまちまとセンパイの好感度を手に入

れよう何て、幾ら自分の家柄しか魅力がないとは言え、恥ずかしくないんですかあ？ま、女としての魅力もスキルも私のが上ですから、最初から相手になんかしてませんけど、いい加減さつさとあきらめてもらえます？」

「な、なんですつてえ!!」

顔を真つ赤にさせたアリサが振り向けば、桜と全く同じ顔と声の黒いコートを羽織った少女が、指揮棒の様な物を弄りながら立っていた。

「BB：アンタには本当一度先輩と後輩の上下関係つてのを判らせないといけないみた
いねえ!!」

桜の双子の妹、BB。放送委員会と小学校の八割を手中に収めているとも言われる少女。因みに本名不詳である——は、アリサの言葉をサラツと聞き流した。

「あ、なのは先輩にすずか先輩もいらしたんですかあ。」

「こ、こんのおく!」

「ア、アリサちゃん落ち着いて!?!」

「び、BBちゃんも今日の試合見に来たの?」

掴みかかろうとするアリサを羽交い締めにしたすずかを手伝いながら、なのはが話を
変える。

「ええまあ。と言つても私はサッカー何かには興味無いんです。私放送委員やってます

から、次のBBちゃんねる（お昼放送）で裏方で必死な岸波センパイ達の姿でも流そう
と思つて……」

「ふくん。あそこで、アンタの妹分がカメラ壊してオロオロしてるみたいだけど？」

「……はい？」

若干落ち着いたアリサの言葉に全員が視線を向けた先には、

「……どうするのよリップ。」

「だ、だつてメルト、このおか：じやないお姉様から借りたカメラ凄く柔らかくて：」
「そんな言い訳知らないわよ。学校の備品なんだし、貴女が一人で怒られなさいよ？ 全
く、いい加減に自分の力加減を覚えなさい。」

「そんなあ……」

まるで粘土を潰したかのように壊れたビデオカメラを抱えて、ペタンと座り込んだ幼
い顔立ちの少女と、高いヒールの靴を履いたツンとした冷たい表情の少女が居た。

「どうしよう……これじゃああの人の活躍を撮影できない……」

「伯野も白野も試合には出ないわよ？ 昨日聞いたじゃない。」

「……あの人が出ない……？……許せない、ユルセナイ！」

手元のスクラップから手を離し、フラリと立ち上がった少女が、ゴールデンJFCに
向けて手を向けようとし、

「な、に、をしてるんですか貴女達はー!？」

駆け寄った桜とBBにより止められた。

「あれって桜ちゃんの下の妹さん達だよね？」

「うん。確か、空手部のリップちゃんとクラシックバレエ部のメルトちゃんだよ。」

「それにしても本当にそっくりな姉妹よね。」

「キュー……(女の子って怖い……)」

四人で喧嘩する姉妹を見ながらそんな感想を言い合うなのは達。

「うーん。あの子達のそっくりさん……だよねえ?それにしては……兄さんにも聞いてみようかな……」

一人首を傾げた白野の眩きは、試合のアナウンスに掻き消された。

すずか視点

その後、強豪チーム相手に接戦で勝利した翠屋JFCのメンバーは、翠屋にて食事を開く事に。私達も一緒に着いていって昼食を取ることになりました。

「ふーん。ふおんなほほが……」

「こらジル! 食べたまま話そうとしない!」

「ムグムグ。」

「キューー！」

「あ、こらキューー！ジタバタしないの！」

「あはは、ユーノ君は元気だね。」

翠屋でお手伝いをしていたジルちゃんは、桃子さんお手製のメイド服を着て食事しながら私達の話を聞いています。・・・家のライダーも食事は摂るけどお酒の序で感じてだし、ジルちゃん程では無いんだよね。多分食事で足りない魔力を補ってるんじゃないかってライダーは言ってたけど・・・食べ過ぎじゃ無いかなあ？

そんな私達のテーブルにも大量のパーティーサイズメニューが置かれていて・・・目の前のミートソーススパゲッティ（多分六束くらい）から自分の分（三束くらい？）を取り分けて食べながらジルちゃんは疑問に思ったことを口にしました。

「ング。でも、よく勝てたね。まあどっちも反則な動きしてたみたいだけど。」

「うん・・・まあ・・・」

「常識って何だったかしら？」

「キュー（アレ、魔法使って無いんですよね？）」

「キャプテン〇とイ〇ズマ〇レブンをリアルにしたらそんな感じになると思うよ？」

「私は〇IANTKIL〇INGのが好きよ？エ〇アの〇士とかも良いわね。全部集め

てるし。」

「今度貸してね？」

「伏せ字の意味あるのかなあ？」

普通サッカーで聞こえないようなボールの風切り音に有り得ない体勢からのシュート、目を疑うようなジャンプ力、そして裂けるゴールネット。サッカーって何だっけと考える観客も多かったと思います。

「・・・いちおー言つとくけど、すずかのドッジボールも大概だからね？」

「そうね。」

「え!? そんなこと無いよ。」

確かにこの間、体育で行われたドッジボール大会で気が付いたら何故か、ドッジボール部の人達と戦ってたけど・・・

「えっと、『海鳴の山猫』『カチューシャ付きの獣』『人類種の天敵』だっけ？」

「後、『センターラインの乙女』とか『ドミナント』とか『最初の紫の鳥』とか言われているわね。」

「いつの間に私にそんな異名が!？」

うーん、最近はやライダーやリニスと一緒にトレーニングもしてるけど、そこまで動いてたかなあ・・・かなり自分に制限付けてたんだけどなあ。

さて、そんなにごやか(？)な談笑をする私達のテーブルで一人、会話にも参加せず、ストローを口に咥えて行儀悪くむくれている少女が1名。

「なのは行儀悪いわよ？」

「だって・・・」

顔をしかめたなのはちゃんの視線の先には、

「お、お姉さん！僕シユート決めました！」

「あら！凄いじゃないですか！沢山食べていって下さいね？」

「は、はい！」

「お姉さんこつちにコーラ下さい！」

「ずりい！オレにも！」

「きれいな人だねー」

「いいなあ、スタイル抜群だよ！」

店を手伝うキャスターさんの姿が有った。何だか、選手の子達とマネージャーの子達の視線を独り占めしてます。流星は傾国の美女です。でも・・・

「・・・むー・・・」

ああああああ、なのはちゃんの機嫌がどんどん下がってます。アリサちゃん私に「何とかして」みたいな目線送られても困るよ・・・。ジルちゃんは何か若干涙目でなのは

ちゃんに料理をよそつてるし。

「お、おねーちゃん、これ美味しいよ？一緒にたべ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なのはちゃん！眼が怖いよ！というか、普段人前でいちやつかれるのはあれだけ恥ずかしがってたのに、こうなると嫉妬しちゃうんだ!?

「ぐすつ・・・そうだ、おねーちゃん私たちのハンバーグ半分こするから・・・」

「えっ!?・・・ありがとうジルちゃん。・・・ごめんね?」

「いいよ。キャスターが悪いもん。」

ジルちゃんが好物を半分こするという、ジルちゃんを知ってる人にとつては有り得ない事態に、流石のなのはちゃんも戻つて来たみたいです。ジルちゃんナイス・・・

「おねーさん！結婚して下さい!」

〃ガスツ!!〃

ハンバーグにフォークが!?!其処の男の子何言ってるの!?!

ああああああ!なのはちゃん落ち着いて!?!アリサちゃんが怯えてるし、フェレット君ガタガタ震えてるし、ジルちゃん泣きそうだから!

「うふふふふありがとう御座います♪」

「~~~~~!!」

「ガッ！ガッ！ガッ！ガッ！ガッ！」

何を言ってるんですかキヤスターさん!? って怖い、恐い、コワイ、なのはちゃん、眼が怖いよ!? ハンバーグがミンチに戻ってるよ!? 半分こしたジルちゃんが可哀想な．．．「うわくん！おかしさん（マスター）！おねーちゃんが．．．おねーちゃんがあ！」

ジルちゃん!? なのはちゃん、サーヴァントが泣いて逃げ出す様な事をしないで!? というか、それはサーヴァントとしてどうなのジルちゃん!?

「でも残念でした♪私にはく既にお仕えしている方が居ます．．．の．．．で．．．」

あつ！やつとこつちに気付いた！固まってるで貴女のマスター何とかして下さい！

「あ、あのくなのは様？一体どうされましたか？」

「．．．ふんだ。キヤスターさんのバカ。」

「なのは様あー!? わ、わたくし何かしましたかあ!？」

慌ててこつちに來たキヤスターさん。最早なのはちゃんのご機嫌取りに必死ですけど、頬を膨らませたなのはちゃんの機嫌を直すのは大変です。

「怖かった．．．なのはって嫉妬が激しいのね．．．」

「そうだね．．．」

「きゅー（女の子怖い．．．）」

アリサちゃん頑張ったよ。ユーノ君まだ震えてるけど大丈夫かなあ？ジルちゃんは、厨房の桃子さんの所に行つたまま帰つて来ないし・・・なのはちゃん痴話喧嘩してる場合じゃ無いんじゃないかなあ。

手元の紅茶に口をつける。

「・・・お砂糖入れなきやよかつたな。」

何故か、何時もより凄く甘つたるく感じる紅茶を飲みながら、私は目の前で喧嘩する二人を眺めるのでした。

さて、そんなちよつとしたトラブルがあつたものの食事は和やかに進み、お開きとなつた。

「二人は午後から用事が有るんだよね？」

「うん。私はお姉ちゃん達とお出掛け。」

「私はパパとお買い物よ♪」

帰り支度をするアリサとすずかと談笑していたのはであったが、ふと視界の端に居た翠屋JFCの男の子がポケットに何か青い物を仕舞うのを見た。

(もしかして……)

チームメイト達と挨拶を交わし、マネージャーの女の子と帰ろうとする男の子が持っていたのは、ジュエルシードではないのだろうか？そう思ったが、

「?どうしたのよなのは?」

「……うん。何でも無い、きつと気のせいなの。」

「そう?なら私達も行くわね。ジルと仲直りしなさいよなのは?」

「またね、なのはちゃん。ジルちゃんにも宜しくね。」

「うん。また学校でね!」

手を振って親友を見送るなのは。そう、きつと疲れてて見間違ったのだろう。……と
思った瞬間、

「あれ?なのは様宜しかったですか?」

「にやあ!」

いきなり後ろから現れたキャスターに、覆い被さるように抱き締められて思わず変な
声を出してしまう。

「キャスターさん!」

「まあ先程なのは様を構えなかった分と思つて、なのは様は胸の感触を味わつて下さいますし。」

「うにやあああああ……」

背中辺りの柔らかい感触に顔を赤らめているのはを見て、満足げな表情を浮かべるキャスターは、そのままなのはの耳に口を寄せる。

「で、なのは様宜しかったのですか？あのマセガキ、どうもポケットにジュエルシードを入れていたように見受けられましたか？」

「……やっぱり、気のせいじゃ無かったの。」

「……後悔は後先に立たず。年上の女房は質に入れても即ゲットと申します。……如何致しますか？あのマセガキに一撃喰らわせて気絶させてから奪つてもよし、私が魅了して献上させてから気絶でもよし、取りあえず気絶させてから考えるでもよし、方法は選り取り見取りです。」

「強盗だよね!後、そんなことわざ無いと思うの!？」

「うふふ……気のせいです。」

取りあえず、なのはを抱き締めて誤魔化すキャスター。

「まあ後を付けるにしても、こういうのに向いたアサシンはまだへそを曲げてますし、ユーノは彼女に連れて行かれたので私達だけで尾行致しましょう。」

「うう・・・ジルちゃんには後でちゃんと謝る・・・」

「それが宜しいかと。・・・なのは様、今回は嫌な予感が致しますのでご警戒を。」

「嫌な予感?・・・どんな?」

「え?えーと、・・・乙女の第七勘?」

〈乙女(笑)〉

なのはからの質問に一瞬眼を泳がせたキャスターの台詞に、なのはの胸元から笑い声
が上がる。なのはと目を鋭くしたキャスターの視線の先で、赤い首飾りの待機状態と
なっているレイジングハートが明滅していた。

「・・・なのは様。このビー玉をジュエルシードと交換して貰うってのは如何ですかね?
恋愛成就とかの安っぽい金属タグ付けて。」

〈貴女の尻尾とでも交換すれば宜しいのでは?地方の土産屋のキーホルダー位の価値は
有るでしょうし。〉

「あ?」

〈あ?〉

「にやああああ!?!二人とも喧嘩しないで!?!」

「はい!なのは様♪」

〈イエス、マスター。〉

従者と愛機に頭痛を覚えながらもなのは、暫く経つてから少年とマネージャーの少女の後を付け始めるのだった。

——同時刻、街には休日という事も有り多くの人が出歩いていた。そんな中、一組の男女が歩いてた。

一人は肩くらいに切り揃えられた髪の少女。足が不自由なのか車椅子に座り、膝に置いた買い物袋を落ちないように抱えている。

もう一人は、ラフなポロシャツに上着を羽織った背が高く、ガツシリとした体格の外国人であり、少女の車椅子を慣れた手つきで押しながら、肩に大量の食料が入ったエコバッグを掛けながらも平然と歩いている。

車椅子ということもあるが、可愛らしい少女と偉丈夫ながらも優しい顔をした長髪長身の美男という組み合わせは非常に周りの目を集めていた。

「うーん。やっぱり先生と買い物行くと、楽なんやけど・・・目立つなあ。」

「そうですね。やはり、日本で外国人というのは、少々目立つようですよ。」

先生と呼ばれた男の言葉に、少女は呆れたように溜め息をついた。

「・・・コレや。先生はもう少し、自分の容姿をやな。」

「と、言われても私はそれ程大した容姿では無いのですよ。事実、私のかつての生徒たちの方が若いですし容姿も端麗でしたよ。色恋沙汰も山ほど有りましたしね。」

「先生？謙遜も過ぎたら憎たらしなるで？先生の周りが規格外なだけで、先生も十分イケメンの分類やで。」

事実、少女が軽く周りを見渡しただけでも何人もの女性が見て顔を赤らめていたし、自分に対する嫉妬混じりの視線も幾つか刺さっていた。

「しかし、今日は沢山安く買えましたね。焼き立てのパンにチーズ。トマトにナスに牛肉・・・忘れてはならないオリーブオイルに赤ワイン。」

「お米もなく。先生のギリシヤ料理は美味しいしなあ。せやけど先生？ワインを水で割るのは正直どうなん？」

「ですから、古代ギリシアではワインを水で割るのは普通だと言ってるじゃないですか。まあ、現代のワインは割らなくても美味しいのですがね。」

「納得いかんわー。」

文化の違いにぶーたれる少女の様子に苦笑する男であったが、ふと足を止めた。

「ん？どないしたん？」

「いえ、向こうの方にキャスターとそのマスターを見かけたので。」

「え!？」

「何でしょうか？前に居る二人組の子供達の後を付けているようですね。」

「どこどこ……つて遠いなあ!?!よう見つけたな先生。」

「まあ……眼は良いですからね。」

「あく伊達に『弓兵』を名乗つとらんからなあ。」

キャスターとそのマスターと思しき二人は、大分距離を取って、信号待ちをしているジャージを着た男女の後を付けているようだ。

一体何故、と思っていた男は、そのジャージを着た男の子がポケットから青い石——凄まじい魔力が内包された——を取り出し、隣の女の子に渡そうとしたのを見て顔を強張らせる。

同じくそれを見たキャスターと少女が、互いに顔を頷かせて近付き、声を掛けようとし——

——その瞬間、青い石が凄まじい光を放った。

大樹と後悔と

「な、何とか結界は間に合いましたが．．．」

アスファルトは捲れ上がり、ビルは崩れ落ちる。

ガラスが割れて辺りに散乱し、車は拉げる。

異世界の遺物、ジュエルシードの暴走は巨大な樹を生み出し、街を侵食した。

いつもの昼下がりの街並みは一瞬で、まるでSF映画のように余りにも現実味の無いモノと化す。

（ユーノから聞き出していて正解でした．．．なのは様に余計なトラウマを与える訳には
いかないですからね。）

寸での所でユーノと同じ結界を張ったキャスターにより、抱えられて近くのビルの屋
上に退避したなのは、呆然と変わり果てた街を見渡す。

「そんな．．．」

「マスター！ 気を確かに！」

「キャスターさん．．．だつて街が！」

「落ちていて下さいマスター！ 結界は張っています！ 人的被害も有りません！」

「……ほんとう? ……あ、本当だ……」

顔を青くしたなのはが周りを見ると、ユーノが張っていたのと同様の結界が張られていた。その事に安堵すると同時に身体を震わせる。

「もし、結界が間に合わなかったら私の所為で……」

「間に合わなかったとしても! それは決して、なのは様の所為ではありません! それより今はたればの話ではなくジュエルシードです!」

「……うん。」

レイジングハートを起動させ、白いバリアジャケットを身に纏ったのはは、キャスターに向き合う。まだ、顔は青ざめているが自分が今成すべき事を理解した眼をしている。

(お強い方です。この年齢にも関わらず……)

「キャスターさん、どうすれば良いの!？」

「そうですね……」

気を落ち着かせたなのはがキャスターに尋ねると、キャスターは周りを見渡す。先程までの場所にジュエルシードと男女の姿は無い。

「……先ずは術の基点を見付けましょう。恐らくはあの二人と共にジュエルシードが、この樹々の何処かに居るかと思われます。ふっふっふ……この私の第七感(フォック

スセンス)にかかれれば何処に逃げてでも無駄無駄無駄つてもんです。」

「分かった。レイジングハート・・・お願い！」

〈畏まりました。〉

「え、ちよつなのは様・・・私の出番・・・」

なのはを中心に魔法陣が展開、と同時に街中に光の雨が放たれる。しばらく目を閉じて集中していたなのはだが、

「・・・見つけた！」

目を見開く。巨木の中に二人の男女が寄り添うように気を失っていたのを見た。その方向を見てキャスターは舌を巻く。

「・・・流石なのは様。初の探査魔法だというのにお見事です。しかし、また遠い所に・・・オマケにシールドまで張られてますねえ。」

「うん。でも、私とレイジングハートなら！」

〈問題御座いませぬ。貴女はそこで指でも啣えて見ていなさい。〉

「チイツ！」

「こんな時まで喧嘩しないで!？」

なのはの言葉に合わせて、レイジングハートが姿を槍のような姿に変える。

足を開き、構えたなのはは、膨大な魔力を練り上げる。

狙いをレイジンググハートが調節し、術をサポートする。

「いつけえええええ！」

気合いに満ちた声と共に放たれた空を切り裂くような魔力の砲撃は、邪魔な木々を引き裂き、狙い変わらず術の基点に命中。暴走したジユエルシードを抑え込み、封印した。

「うーん……私の出番全く無かったですねえ……なのは様、今日もお疲れ様でした。さてさて、早く家に帰りましょう。」

キャスターは大きく伸びをしてからなのはに声を掛けた。

「うん……」

「なのは様？反省も葛藤も大事ですが、余り御一人で悩まないで下さい。」

「……あのね？キャスターさん……」

結界を解こうとしたキャスターが、結界の中で壊れた町並みをじっと見つめるのはに声を掛けると、ボソリとなのはが呟く。

街を破壊した木々こそ跡形もなく消え失せたが、道はアスファルトが捲れ上がり、車は拉げ、多くのビルはひび割れ、幾つかは倒壊を起こしていた。

改めて魔法という『力』が引き起こした惨状を前にすると表情は晴れない。

「私ね、『魔法』なら何でも出来るって思ってた。」

ポツリ、ポツリと街を見ながらなのはが呟くのをキャスターは傍らで聞いていた。

「昔、キャスターさんが私を助けてくれた時のように悪い人達をやっつけて、ケガをしたお父さんを治してくれたみたいに。奇跡みたいな事が出来るんだって思ってたの。」

そう言つて、首に掛けられた待機状態のレイジングハートをそつと握り締めた。

「私も魔法が使えるようになって、私にも困っているユーノ君のお手伝いが出るって思っていた。けど、そんな気持ちじゃ駄目なんだ。一歩間違えたら、こんな事が起きてしまう力を私は使ってるんだ。ーだから、」

街を目に焼き付けながらなのはは話す。

「私、もつと頑張ろうって思う。魔法の訓練も。ジュエルシード探しも。ユーノ君の『お手伝い』じゃなくて……」

「なのは様……」

段々と空は赤くなりつつある。

「もう二度と、こんな事が起きないように全力で。」

結界を解除し、ジュエルシールドを発動させた二人が目覚まし周りを見渡して、首を傾げながら帰っていくのを見届けてから二人は夕暮れの街を歩き帰路に付いた。ゆつくりと並んで歩いていると、そつとキャスターの手をなのはが繋いできた。少しばかり驚いてなのはを見るキャスターだったが、

(……少しばかり手が震えていらつしやいますね。まあ、無理もありませんか。)

「……さて、今日はなのは様のお好きな物をお作りしますね。何が宜しいですか？愛妻料理の定番肉じゃが？カレーライス？オムライスでも？」

「うん……あ、ハンバーグがいいかな。ほら、ジルちゃんに悪いことしちやっしたし。」

「気にすること無いですよ。つかお昼も食べてましたよね？」

「だって私が半分こしたの駄目にしちやっしたし……」

「あく、なのは様達が来る前に常連さん達にハンバーグで餌付けされましたから、確実に二個以上の量食べてますよ？」

「お客さんもジルちゃんも何してるの!？」

道を歩いて暫くすると、向こう側から一人の少女が腕にフェレットを抱いて歩いてきた。それを見てなのははキャスターの手を解いて少女の所へ向かう。

「あ、ジルちゃん！さつきはごめんね！」

「ん。別にだいじょーぶ。」

「さつきまで桃子さんに泣き付いて・・・痛い痛い締め付けないで下さい!!」

ようやくと機嫌を直したジルとジルに捕まっていたユーノである。

「なのは、ジュエルシードは大丈夫だった？ごめんね手伝えなくて。」

「あ、うん。私がジルちゃんに悪いことしちゃったのが原因だから・・・キャスターさんが居てくれたし大丈夫だよ。」

なのはとユーノがそんな会話をしていると、ジルがなのはの腕を引いてきた。

「じゃあ、おねーちゃん私たちと帰ろ？」

「・・・そうですね。ジル、なのは様をお願いしますか？」

「任せて。」

「キャスターさん？ジルちゃん？」

ジルに手を引かれて歩くなのはが、怪訝な顔で二人の顔を見る。いつも通りに見えるが何処か緊張しているようにも見えた。

「どうかしましたかなのは様？少しばかり、用事を済ませてから帰りますから御心配無く。」

「う、うん。じゃあ後でね？・・・そうだ、ジルちゃんお店でお客様に食べ物貰っちゃ・・・」

「気のせい。」

「いや、だつてキャスターさんが……」

「キャスターの見間違ひ。お客さんにハンバーグなんて貰つてない。」

「……私ハンバーグなんて一言も言つてないよね？」

「……おねーちゃんの気のせい。」

その場でののは達を見送り、その姿が見えなくなつてからキャスターは一つ溜息を吐くと、そのまま高町家とは別な方向へと足を向けた。

なのは達と別れて30分ほど町を歩き、人気の無い町外れの工場跡の中へと入り込むとふと足を止め、

「よつと……さしてこれでよし。」

懐から札を取り出して、周囲に展開し結界を張り口を開く。

「……そろそろ出て来られては如何ですか？乙女をストーキングとは良い趣味とは言えませんよ？」

「・・・別段そういう趣味は無いのですが・・・」

キャスターが振り向くと、何も無い場所にどこからともなく一人の男が姿を現した。長い髪を後ろで束ね、革鎧を身に纏う好青年とキャスターは静かに向き合う。

「それで？ 一体何の用ですか？ こちとら早く帰って御夕飯の支度にご主人様とイチャコラしたりと忙しいのですが？」

「そうですね。先日からこの街で起こっている不可解な事件について知っていることを教えて貰おうかと。」

「行き成り現れた見知らぬサーヴァント相手に、はいそうですか、とこちらの事情を話すとても？」

会話をしながら相手を伺うキャスターであるが、相手の男はにこやかに礼儀正しい姿をしているながらも、その体に一切の隙は無かった。

（ちっ！ 厄介な・・・相当な手練れじゃ無いですか・・・）

「今回は、私のマスターも巻き込まれましたので是が非でも話してもらいます。・・・こちらとしても手荒なことは致したく無いのですが、仮に貴女達が私利私欲の為にあれ程の事件を起こしているならば容赦しません。」

そう言つて、目を細めるとその場から下がって間合いを大きく取ると同時に手に弓を構え、矢を番えた。

キャスターも同時に札と鏡を出現させて構えを摂る。

『アーチャー』のサーヴァント・・・」

「キャスターのサーヴァント、改めて問います。事情を話して頂けますか？それとも、ここで私と戦いますか？」

「何を勝つ事前提で話を進めてるんですか？とつちめて貴方のマスターの事とか話してもらいますよ？」

互いの殺気と魔力により空気が張り詰め、今にも弾けそうになった一瞬。

「だめ——————！！」

互いの中間に白い影が飛び込んできた。

「何っ?」

「・・・は?」

両者とも更に間合いを離し、乱入者を見る。特にキャスターは誰が飛び込んで来たのかを理解し、顔を引きつらせる。

「二人とも止めて！何で喧嘩してるの!？」

「おねーちゃん危ないから!？」

白いバリアジャケットを身に纏ったなのは、必死に止めようとしたらしいジルが腰にぶら下がっているが、飛ばれては流石に止められなかったらしい。

「な、なのは様!?!何をなさっているのですか!？」

「こつちの台詞なの！怪しいと思つたら何で危ないことしてるの!？」

かなり憤慨しているらしいのはに言い返されるが、流石に見過ごせず反論する。

「その危ないことに何でマスターが突っ込んで来るんですか!?!アサシン！貴女がついていながら!？」

アーチャーの射線から庇える様に動き、なのはの前に立つキャスターの言葉に、飛んできたなのはの腰に掴まったままのジルは、私の所為じゃ無いとばかりに睨みつける。

「止めたもん！止めたけど飛ばれたから仕方ないじゃない！そもそも、キャスターが境界なんか張るから気付かれたんだから!？」というかおねーちゃん本当に下がって!あれアーチャーのサーヴァントだから!？」

「サーヴァント同士がぶつかつてこの辺一帯に被害が出ないわけじゃないでしょうが!張るのは当たり前で貴女がそれとなくなのは様を誤魔化して・・・」

「やっぱり!二人して私ばかりのけ者にして!？」

「私たちはのけ者にしてないもん！キヤスターのせいだもん。」

「アサシン！自分だけ逃げる気ですか!？」

「キヤスターさん!？お話なの!!」

キヤスターの直ぐ後ろに降り立ったなのは、キヤスターの方に向き合う。

「ですから危ないって言うてるでしょうが!」

「マスターは私だから言うことを聞いて欲しいの!後、ちゃんと話し合いをすればいいの!」

「んな事できる訳が・・・大体なのは様は・・・!!」

「・・・キヤスターさんだっっていつもいつも・・・!!」

「あの・・・お二人とも?」

「何なの!？」

「何ですか!？事情云々でしたらこのフェレットにでも聞いて下さいまし!」

静観していたアーチャーが声を掛けるが、二人の凄まじい剣幕に押されてそのまま投げ渡されたユーノを受け取ってしまおう。

「・・・どうしましょうか?」

「少し待っててね?」

「ええ、それは構わないのですが・・・待ってるのもあれですし自己紹介でもしましょう

か？」

喧嘩を始めたのはとキャスターの横で、アーチャーとジルとユーノは取り敢えず自己紹介を始めた。

その後、見かねたアーチャーが仲裁に入るまで喧嘩は続いたという。

「ここが管理外世界『地球』・・・」

真夜中のビルの屋上に一人の少女が佇む。

「ここに母さんの捜し物が有る。」

〈頑張りましょうマスター。〉

夜風にツインテールにした長い金髪を揺らしながら、黒い服に身を包んだ少女は決意

を秘めた眼で街を見下ろしていた。

「そうだね。バルディツシユ。」

——少女は知らない。

この街に生涯忘れ得ない出会いと出来事が有る事を。

お茶会と会談

皆さんこんにちは。月村すずかです。

今日は我が家は朝から大忙しでした。それは今日、家でアリサちゃんになのはちゃんにジルちゃんとお茶会を開く予定でその準備があつたからです。

場所のセッティングから、紅茶の茶葉・お菓子や軽食の準備等々・・・
・・・そう特にお菓子や軽食の準備・・・

「足りる・・・かなあ？」

「これで足りない可能性が有ると言うのが・・・」

ノエルとファリンが心配して見つめる先には、大量生産された多種多様のクッキーやサンドイッチ、スコーン等の山。

私とアリサちゃんとなのはちゃんなら、過剰と言える位多いです。

・・・そう、ジルちゃん対策です。普通の量だとペロリと平らげちゃうジルちゃんと一緒ならこの位は必要なんです。・・・足りないといけない眼を向けてくるので罪悪感が凄いので・・・翠屋ではジルちゃんに餌付けするのが流行ってるみたいですけど、その気持ちはよく分かる気がします。先日とうとう桃子さんにバレて、大目玉を食らった

らしいですけど。

「サーヴァントというのは、どれも大食らいなんでしょうか？」

「流石英雄ですね……」

「ジルちゃんだけ……だと思……う……」

「お嬢様。ライダー様の酒量とつまみの量は御存じで？」

「……」

ノエルの視線からそつと目を逸らす。その先にあつたのは大量の空き瓶に空き缶、おつまみの入っていた袋……で、でもなのはちゃんのカヤスターさんが、沢山食べるなんて話聞いたこと無いからあの二人だけが特別なんだと思う。

その後、ライダーにこの後の事を話し合うために準備を二人に任せてライダーの部屋に行くこと、

「お酒ください……」

部屋の前から既にお酒の匂いがします。これはマスターとして物申さないといけません。

「ライダー入るよ……う……」

「おや、スズカお早う。どうだい？一杯？」

匂いだけで酔いそうな濃いお酒の匂いがする部屋の中、テーブルに付いてウイスキー

をロックで空けている美女、ライダー。ケタケタ笑いながらお酒を私にすすめてきました。・・・小学生にお酒を薦めないで。

「また朝からお酒?」

「いや?夜からさね。」

呆れた。また朝までお酒を飲んでたみたいです。兎に角部屋の窓を開けて換気をし、お酒の匂いを追い出します。

「現代は旨い酒が多いから良いねえ。つい飲み過ぎちまう。」

「だからってリニスまで巻き込んで・・・」

「良いじゃないか、大人の女のたしなみさ。」

ライダーの対面でテーブルに突っ伏して眠っているリニスの前には、空き瓶と手には氷が溶けたグラスが握られています。

「ウイスキーとワインを各二本空けるまでは良かったんだがね。ブランデーとか日本酒とかスピリタスとか色々空け始めたら潰れちまったよ。」

「飲み過ぎ!?!後、チャンポンはダメだよ!?!」

飲酒は自分の酒量を弁えようよ!普通に飲む量じゃ無いよ!?!そうこうしていると、テーブルで眠っていたリニスが唸りながら薄ら目を開けました。どうやら話し声で起こしちゃったみたいで・・・

「……ううゝああ、あ、……頭が……お早うございますか……いつの間にか3人に増えて……ああ、プレシア……河の向こうでアリシアが可愛らしく手を振つて……こつちに来ちやダメ？ははは、何を言つてるにや……」

「誰かお水とお薬いー！？」

リニスが、よく分からないけど見えちやいけない物が見えているようなので私は厨房に走るのでした。

「こんな事で今日大丈夫なのかなあ……」

突如現れた新たなサーヴァント、アーチャーとの遭遇から数日、なのはの部屋でなのはとキヤスターが話し合っていた。

鏡台の前で椅子に座ったキヤスターの膝に座り、髪を櫛で整えて貰っているのはは、自身も櫛でキヤスターの尻尾を梳きながら問い掛ける。

「キヤスターさん。大丈夫なの？」

「ええ、アーチャーとの会談の結果次第ですが、悪いようには成らないかと。彼と同盟を

組めば、サーヴァントが合計で3体。ジュエルシードだろうと問題無いでしょう。」

取り敢えず喧嘩を終えた後、すっかりやる気を殺がれたらしいアーチャーの

「後日話し合いの場を設けましょう」

との言葉により、兎に角決まったアーチャーのサーヴァントとの話し合い。上手く協力を仰ぐ事が出来れば、ジュエルシード探しも捗ることは間違いない。

「でも、やっぱり私も一緒にいた方が……」

不安げな顔のなのはを安心させるために頭をそつと撫でる。

「大丈夫ですよなのは様♪私に万事お任せ下さいまし。」

「……うん。わかった!」

髪を整え終わったなのはは、キャスターの膝から降りた。

「うふふ……つと、そういうえば今日はどちらにまでジュエルシード探しに行かれるので? 終わりましたら後程合流致しますね。」

バタバタしていき先を聞いていないことに気が付いたキャスターが、片付けをしながらかなのはに尋ねた。

「違うよ。今日はジュエルシード探しはお休みで、アリサちゃんとジルちゃんと一緒にすずかちゃんのお家に遊びに行くの。」

「……え。今日ですか？」

そのなののは言葉に、一瞬固まったキャスター。やや置いてなののはに話しかける。

「そ、そうですか。えつとなのは様？やっぱり私も一緒に着いていても……」

「キャスターさんはアーチャーさんとお話でしょ!?!何かあつてもジルちゃんもユーノ君も一緒に居るから大丈夫なの!」

アーチャーとの会談をすつぽかそうとしたキャスターになのはが突つ込む。

「えくと、そうだ!ジルをアーチャーに会わせれば良いじゃないですか。」

「無理だよ!?!ジルちゃんクラスの話し合いすら気配遮断して居眠りしてる位なんだよ!?!いつも私が起こしてるんだから。それにお茶会とクッキー楽しみにしてたの。」

「いや、何で気配遮断してるアサシンに気付けるのですかなのは様……」

サラツととんでもない事を、何でも無いように口にしたなのはに思わず問い掛けるキャスターに、当のなののは少し考えるように首を傾げる。

「慣れ?かなあ。でも、お父さんとお兄ちゃんも何か慣れてきたつて言つてたよ。感覚の修行になるつて喜んでたし、お母さんは勘かしら?つて言つてお話から逃げて隠れてたジルちゃん捕まえてたの。」

「……全アサシンが泣きますよ?慣れと勘でサーヴァントのスキルを看破しないで下さいまし。」

「理不尽。アサシンとして、いかんのをひよーめーする。」
「あ。ジルちゃ．．．ん？」

丁度其処になのはを呼びに来たらしいジルが、テレビで覚えた言葉を話しながら部屋に入ってきた。その腕にはなのはやジルと同じく可愛い服を着せられた．．．

「ユーノ君．．．」

「．．．見ないで．．．」

「何でフリフリでピンクな服を？」

「お母さん（マスター）が用意してた。可愛いでしょう？」

桃子によってドレスアップされたユーノを抱き上げたジルは、ご満悦のようだ。

「いや、ユーノ君はオスだし．．．」

「だめかな．．．？」

「いや面白いから良いんじゃないですか？」

「．．．不幸だ．．．っていうか僕は本当は．．．」

「だって私たち自慢のペットだもんね。」

「いや、もういいです．．．」

「よしよし。」

どんよりとうなだれるユーノが可哀想になったのか、なのはが宥める。

「それより、おねーちゃん早くすずかの家に行こーよ。お腹空いて来ちゃった。」

「いや、ご飯食べに行く訳じゃ無いからね?・・・ジルちゃん・・・本当に食べた物何処に消えてるの?」

「?魔力に換えてるよ?省ーエネは大事だもん。」

「省エネと言う言葉を辞書で調べて来やがれ腹ペコ幼女。」

「後、打倒腹ペコ王。」

「いや、誰?」

『むっ!?何者かの挑戦を受けました。騎士として受けて立ちましょう。お代わりを所望します!』

『なんでさ!?!』

「誰!?!」

「如何しましたかなのは様?」

「あれ?今なんか・・・あれ?」

一瞬何か凜々しい声と戸惑う声が聞こえた気がしたが、自分以外聞こえなかったようであり、なのはは首を傾げた。

「まあいいです。本当に何かありましたら必ず呼んで下さいまし。」

「うん、それは勿論なんだけど・・・キャスターさん、私もジルちゃんみたいに食べ過ぎ

たりしてないかなあ？不安になって来ちゃった。」

「おねーちゃん失礼。」

頬を膨らませるジルを無視して恥ずかしそうに聞いてくるのはを、キャスターは苦笑を漏らして抱き上げる。

「うふふ……ご安心下さいませ。なのは様は、私の維持に魔法の訓練にトレーニング：消費カロリーの尋常じゃないですから沢山食べても問題御座いません。つてか標準的だと思えますよ？」

「よかった……」

「まあ確かに抱き心地が良くなっていますが、私的には丁度よろし……」

余計な一言を呟きかけたキャスターの側頭部に、レイジングハートが曲がるほどのフルスイングで叩き込まれたの言うまでも無い。

「つて事があったの！酷いよね！」

「いや、キャスターさんも悪いけど、あんたはあんたで何傷害事件起こしてるのよ？」

キヤスターを昏倒させた後、恭也に連れて来て貰い友達と合流した月村家のお茶会の席で、憤慨するのには思わず突つ込むアリサである。

「ムグムグ・・・キヤスター割とじよーぶだから良いんじゃないかな？」

「うーん、そうかなあ？・・・ジルちゃんペース早いよ。でも、ユーノ君の格好は可愛いと思うよ？」

「でしよー♪」

「キュ〜（ぐすん。）」

サクサクサクサクと小気味良くクッキーを食べるジルにすずかは困った様に笑う。テーブルにはクツキーにサンドイッチといったものからなのは達が持参したケーキ等が並べられていた。

「というかジル、お茶会なんだから紅茶を嗜みなさいよ！」

「モグモグ・・・んぐ。仕方ないなあアリサは。」

「・・・何その顔、メツチャ腹立つんだけど？」

「フフン。アリサは私たちが、何処の生まれか忘れたの？仕方ないから私たちが、美味しい紅茶の味わい方を教えて上げる。」

「あくそう言えば、あんたイギリスから来たのよね。じゃあ教えてもらおうね。」

ジルは自分のティーカップに紅茶を入れると角砂糖の入った容器を開け、ティーカッ

プに一つずつ入れていく。

一つ

二つ

三つ

四つ

・
・
・

十五

そうして、紅茶にミルクを掛けてからかき混ぜ・・・

「紅茶はミルクたっぷり、砂糖増し増し、蜂蜜少しがベスト!」

「謝りなさい! 英国と紅茶に関わる全ての人に謝りなさいよ!」

紅茶の匂いがミルクと蜂蜜に掻き消された甘い香り漂うティーカップに思わずアリスは突っ込む。

「紅茶の香りがしないよ・・・何かドロツとしてる?」

「あ、甘過ぎると思うの・・・」

「そうかなあ?」

「病気になるわよ・・・砂糖が溶け切れてないし。」

「でも、サイトで大絶賛してくれた人がいたよ? 『私も地球の茶道で試してみるわ』って

言つてたもん。」

「誰よ!?! つかあんたはまた変なサイトに登録して?!」

士郎と桃子になのはとお揃いの携帯電話を買つて貰つてから、妙なグループと交流をするジルである。

「とうか太つちやうよジルちゃん。」

「そうだよ、体に良くないよ?」

そうなのはとずか心配そうな顔をされるが、当の本人はクッキー片手に首を傾げた。

「私たち（サーヴァントだから）いくら食べても太らないよ?」

この時、テーブルでクツキーを貰つていたユーノの耳にピキリ・・・と空気になった音がした。

ふと、女の子達の顔を見れば笑顔のまま口元が引き攣つており・・・

「モグモグ・・・あれ? 如何したの三人とも怖い顔して・・・何で席を立つて、や、やめ!?! おねーちゃんくすぐった・・・離して・・・やー!?!」

次の瞬間には、ジルが怒れる乙女三人に取り押さえられ、くすぐりの刑に処される。

（女の子って・・・）

スカートのまま暴れる少女達の方を見ないように反対側を見れば、

「にやー」

「ニヤーゴ」

「にやー」

「ミヤー」

「ナー」

「にやーお」

「ほれ、お前もネコ耳になれ。」

「みやう」

「にやー」

「ニヤー」

「グルル」

「にやー」

「ニヤー」

自分をガン見している猫の群れ。何故舌舐めずりをしているのか・・・考えたくない。
(僕もあつちの話し合いに参加したかったなあ・・・)

いつの間にかテーブルの周りを猫達に囲まれ、白いネコにネコ耳を付けられながら空を仰ぐフレット、ユーノ・スクライア。

少女の悲鳴が響いてはいるが、今日も平和であった。

商店街の一角にある喫茶店『翠屋』。街でも評判の味とサービスを提供する店である。忙しいピークを越え、暇が出来た時間、テーブル席に四人の男女が席に着いていた。

「初めまして、オーナーの高町士郎と申します。」

「初めまして、妻の高町桃子と申します。」

「これはご丁寧に、アーチャーのサーヴァントです。……真名を名乗れない事、どうかお許し下さい。」

「いえ、お気になさらず。事情は理解しております。」

「忝い。」

「……どうしてこうなった……?」

アーチャーとの会談の場所……それは何故かここ、翠屋であった。

時間を少々遡る。

機嫌を損ねたのを見送り、待ち合わせ場所に向かえば、既にアーチャーは待っていた。

アーチャー曰く、『マスターに教えて貰った話題の喫茶店』とやらに足を運べばそこは翠屋。

流石に不味いと他の場所を薦めようとしたところ、偶然表に出て来た高町夫妻と目が合い……今に至る。

「先日は娘が……」

「いえ、こちらも……」

と、頭を下げ合う夫妻とアーチャーを横目で見ながら頭を抱えるキャスター。

（なんとというか、今日厄日ですか私？ 只でさえなのは様が心配だと言いますのに……）
「キャスター大丈夫ですか？」

「うっさいです。ほっといて下さいまし。」

「もう、キャスターちゃん？ そんな態度はダメよ？」

「ふむ……なのはの一撃が響いているのかもしれないな。」

「まだ小学生にもかかわらず、サーヴァントにダメージを与えるとは……実に将来有望な少女ですね。鍛え甲斐が有りそうです。」

素直になのはを評価するアーチャーと士郎はすっかり意気投合してしまっていた。

昨夜、高町家全員が集まった際に士郎はアーチャーの話の聞いて是非会ってみたいと考えていた。セイバー・アーチャー・ランサー、俗に三騎士とも呼ばれるクラスのサー

ヴァントは、キャスターやアサシンとは違い『武』で史に名を残した英雄が当て嵌まる事が多い。故に現代に生きる武人としては、話をしてみたかったらしく今も眼を輝かせている。

対するアーチャーも、士郎と桃子の人柄を見て好ましい物を感じ取り、すっかり警戒を解いていた。

「士郎さんと桃子さんでしたか、貴方方の様な人に出会えるとはとても喜ばしい。特に士郎さん。貴方とは是非一度、試合を試してみたい物です。」

「貴方ほどの方にそう言っ頂けるとは、武人として誉れですな。是非お願いします。」
「あらあら士郎さんたら、まるで子供みたい。でも、アーチャーさんは、弓矢を使われるのでは？」

「ええ、最も得意とするのは弓ですが、武芸全般いけますよ。生前は様々な生徒達に教えた物です。」

「あら、先生だったのですか？」

「そうですね。実に様々な生徒達に教えたものです。今も家庭教師のまねごとをしています。」

和気藹々と語り合うアーチャーと高町夫妻。そして、頭を抱えるキャスター。

「あゝ士郎さんに桃子さん？そろそろ話し合いの方を・・・」

「あらあら！私だったらつい・・・」

「はっはっは！母さんも人のこと言えないな！」

「もう！貴方つたら。」

「実に仲が宜しいですね。」

「ハア・・・万年新婚カップルですからね・・・さて、そろそろ始めましょうかアーチャー。」

「ええ、始めましょう。」

そうして、夫妻は「後はごゆつくり」と席を外し、キャスターはジュエルシードに関わる今までの流れを説明した。時折、頷いたりしながらアーチャーは話を静かに聞き、質問を混ぜて元のメモ用紙に簡潔にまとめしていく。そうして先日 of 樹木の事件まで話を終えた辺りで一息入れる事にした。

「成る程。確かに危険な物ですね。一つが暴走しただけであありませんか。」

「全くです。おまけに時空管理局とやらの到着はまだ先の様ですし。」

「ふむ・・・」

コーヒーで一息入れながらキャスターもアーチャーも顔に皺を寄せる。ジュエルシードだけでも頭が痛いというのに時空管理局なるあらゆる権力を集めた組織の存在。「権力集めた独裁的組織。オマケに自分で平和と正義を掲げるなんて腐ってくれつつ言ってるようなもんですからねえ・・・大方出遅れてきた分際で、上から目線で物言っ

て手柄だけかつ攫おうとしてきますよ。」

「いささか思考が捻くれすぎですが、考えられますね。加えて、我々サーヴアントとマスターも目を付けられるでしょうしね。」

キヤスターの管理局に対する評価に苦笑しながらも、アーチャーもそれには同意見だったらしく頷く。加えて管理局が自分達サーヴアントにどう出るかも考える。

・・・懐柔か脅迫か・・・必ずマスターに接してくるだろう事は目に見えていた。

「まあ、マスターに何かしてくるようなら○を○○○てから、呪術と物理の両面で末代まで崇めますが。」

「ま、まあ中にはしつかりと職務に就く方もいるでしょうけどね。ですがマスターに危害を加えるならそれは同意しますが。」

キヤスターに若干引きながらアーチャーも対応については同意する。

「・・・判りました。取り敢えず私は貴女達に協力しましょう。ジュエルシードは放つておく訳にはいきませんからね。」

「宜しいのです？マスターに聞かずに勝手に勝手に決めて？」

「今回の件に関してはマスターから一任されていますからね。それに我がマスターなら、放つてはおかないでしょうから。」

「助かりますアーチャーさん。どうぞ宜しく致しますね？」

互いに握手をするアーチャーとキャスター。こうして、互いの陣営は手を結ぶことになった。

「そう言えば、アーチャーさん貴方のマスターは？」

「実は今日もここに来たがつてましたよ。ですが流石に連れて来るわけにもいかないの
で、課題を与えて置いてきました。」

「そうですか。」

まあ、普通は他所のサーヴァントに自分のマスターの情報を漏らすわけ無いかとコー
ヒーを啜るキャスター。その耳に翠屋のドアベルが鳴る音が聞こえた。

「お客さんですか・・・つてアーチャーさん？」

「い、いえ何でも無いです・・・」

笑顔を引き攣らせたアーチャーの表情を怪訝に思い、入り口を振り返ると

「いらつしやいま・・・せ？」

困惑したような美由希の声と共に、入つて来たのは4名と一匹の大型犬を連れただお客
様。翠屋には盲導犬が入つても大丈夫なのでそれはいい、お客様の一人は車椅子だが、
バリアフリー化してあるからそれも問題無い。

問題が有るとすれば・・・四人が四人共黒のスーツにボルサリーノ帽を被り、犬も含
めた全員がサングラスを掛けている事。

「すみません、四人と一匹ですけど大丈夫ですか？」

車椅子に座ったマフィア（仮）のような格好をした女の子（声で判断）の声に我に返った美由希は、兎も角キャスター達のテーブルから離れた席に案内をする。

「すつかり遅なつてしもたわー。」

「……主。本当にこの格好は目立って無いのですか？」

「大丈夫やて、シグ……これがこの世界における尾行時の正装なんやから。何としても先生のデート現場を目撃せんとな！」

「でも、ここに来るまでの間に物凄く人目に付いてましたよ？お巡りさんにも職務質問されたじゃないですか？」

「あーそれより早く何か頼もうぜ？」

「……」

「……あの、アーチャーさん？もしかして彼方……」

「……聞かないで下さい……あれ程言ったのに……」

和気藹々とケーキや飲み物、持ち帰り用のシュークリームを頼みながら時折チラチラと此方を伺ってくる不審者集団。特に赤毛の女性と金髪の女性から棘々した視線を受けながら、キャスターはアーチャーを訪ねるが、アーチャーは頭を抱え込むのであった。

魔法少女と新たな出会い

迂闊な発言をしたジルに怒れる乙女達が制裁を加えた後、

「グスン・・・おねーちゃん達にお嫁に行けない体にされた。」

「何を人聞きの悪い事言ってるのよ!?!なのはじゃあるまいしそこまでしてないわよ!」

「・・・二人ともお話が必要なの?」

態とらしく嘘泣きをするジルへと突っ込むアリサに引き攣った笑みをなのはが浮かべる。

「まあまあなのはちゃん落ち着いて?お願いだから。」

「まったくもう・・・あれ?ユーノ君は?」

震えだした二人を見たすずかに宥められ、頬を膨らませながら席に着いたなのははふと、先程まで居たはずのユーノがテーブルに居ないことに気が付いた。すると、

「キユーノ!?!」

「あつ!おねーちゃんあそこ!」

「ああ!?!猫ちゃん!離して!って何かデジャヴを感じるの!」

「ってか何でユーノいつの間にかネコ耳付けてるの!?!」

「た、確かに気になるけど今はそれどころじゃ無いと思うよ!? 可愛いけどー!」

視線の先には一匹の猫に啞えられたフェレット——フリフリの服にネコミミを付けた——が、月村家敷地内の森に入るところで有った。

「た、助けに行つてくるね!」

「あ、おねーちゃん私たちも行く!」

なのはとジルの二人が慌てて追いかける為、に駆け出し、森へと入った。

「ちよつと二人とも!?!」

「と、取り敢えず私達は待つてようよ。」

アリサもそれに続こうとするが、さすがに止められる。

「そ、そうね。先ず落ち着いてから恭也さんに伝えて探しに行きましょう。」

「え? あ、うん。そうだね・・・で、でも大丈夫じゃ無いかなあ? ジルちゃんも居るし。」

「普段のあの子見てて、大丈夫な要素があんまり無いんだけど?」

若干挙動不審になったすずかに一瞬間を浮かべたアリサだが、気のせいだと思いう一度なのは達が入った森に顔を向けた。

「本当に大丈夫かしら?」

一方森に入り、ユーノを啜えた猫を追い掛けるのはとジルは枝を除けながら猫を追い続けた。

「ま、待つて〜。ユーノ君は美味しくないと思うの〜。・・・あれ？でも久遠ちゃんにも啜えられてたし・・・」

「そこは否定してなのは！猫さん僕は美味しくないですから！」

「・・・？」

追い掛けるジルは、ふと妙な事に気が付いた。相手の猫は、何故か自分達から常に一定の距離を保ち、時折こちらに気を向けている。

(誘い込まれてる?)

そうして猫に誘導された先で、少し開けた場所に有った一本の木の根元に転がっていた青い宝石を見て3人は声を上げた。

「「ジュエルシード!?!」」

思わず足を止めたなのは達を見届けた猫は、ユーノを離し草むらへと姿を消した。

「こんな所に有るなんて。」

「おねーちゃん。何か怪しくない？」

「そうかなあ？」

(アサシンには怪しまれましたが・・・どうやら上手く行きましたかね？庭で偶然ジュエルシードを見付けた時にはどうしようかと思いましたが、これで一安心ですね。)

少し離れた木の上に登り、なのは達の様子を伺っていた山猫ーリーニスは一息吐いた。

(リニス。そっちは大丈夫？)

そこにすずかからの念話が届いた。

(大丈夫ですよすずか。ちゃんと二人にジュエルシードを見付けてもらいました。)

(よかったあ。森でライダーが見付けた時にはどうしようかと思っただけど、これで大丈夫だよね。)

(大丈夫かねえ？)

偶々、敷地の森で見付けたジュエルシード。一時は如何するか月村家一同であっても無いこーでも無いと話し合った挙げ句、こうして偶然を装い回収して貰う事にした。前日に散々ライダーに飲まされ、未だに二日酔い気味だが何とか任務達成でき、ほっとする。

安心したらしいすずかの声を聞いたりニスは、目の前でデバイスを取り出したのはを見届けた後に立ち去ろうとし――

(え・・・?)

(リニス?どうしたの?)

——その場所に接近する少女を見て、呼吸すら止める事になる。

「見付けた。バルドイツシュ。」

〈yes sir〉

なのは達の耳にそんな声が聞こえた。振り返れば、そこには宙に浮く一人の金髪の少女。長い髪をツインテールにしてまとめ、黒いレオタードの様な衣装に革のベルトを巻き、マントを付け、その手には黒く光る斧を握り締めた少女はなのは達とジュエルシードを見つめていた。

「あの子、もしかして・・・!?」

「私以外の魔法使い・・・レイジングハート!」

〈了解しました。〉

「見ておねーちゃん・・・あの子格好が破廉恥だよ。・・・恥ずかしくないのかな?」

レイジングハートを起動させながら思わず、といった感じでなのはがジルを振り向けば、私服からいつもの黒い革のやたら露出した服で首をかしげていた。

「・・・え? いや、ジルちゃんがそれを言うの?」

「私たちはせくしいなアサシンだからいいんだもん。」

「何その理論!?!」

薄い胸を堂々と張って答えるジルに頭を抱えるなのは。一方金髪の女の子は、行き成り目の前で言い争いが始まり、困惑した顔で二人の顔を見比べている。

「私達・・・? えっ? でもそつちの白い子は・・・?」

「わ、私は違うの!!」

「おねーちゃんは、変身がせくしいな魔法少女だから大丈夫。仲間。」

「だから! 私は違うの! 大体ジルちゃんの格好もあの子と大差無いの!」

「えっ?」

「あんな痴女と一緒にしないで。」

「えっ? えっ?」

「ジルちゃんはスカートくらいちゃんと・・・!」

「貴女方ちつとはシリアスにできませんかねえ!?!」

ユーノからも魂の籠もったツツコミが入った。

「わ、私は真面目にやってるの！」

「とうかフリフリのドレス着てネコミミ付けたユーノに言われたくない。」

「誰が！着せたと！思ってるんですか!？」

ユーノ・スクライア。これまでの気持ちを込めた渾身の一言である。

「・・・何？ユーノは、お母さん（マスター）の用意した服に文句が有るの？」

しかしそれも、スツと目を細めたジルの殺気の前に雲散霧消する。

「そ、それは無いです！無いですからそのナイフを仕舞って下さい！ネコミミはさつき

二足歩行のネコが・・・」

「そんな非科学的なのいるわけ無いじゃない。」

「そうだよユーノ君。現実を見ようよ。」

「貴女達がいいますか!？・・・じゃなくて二人ともあの子が！」

「あつ。」

ナイフでピタピタと頬を叩かれるユーノの言葉に二人が振り向けば、

「・・・バルディッシュ・・・ちじよ？つて何？この格好最初からリニスが設定してくれ

てたし、動きやすくて気に入ってたんだけど・・・変なのかなあ？」

へその単語はs i rの年齢的にお答えできませんが、マイスターが様々な書籍を参考に

して設定されましたので変では無いかと。」

「うん分かった。単語は今度母さんに聞いてみる。」

「……それは（卒倒しかねませんから）止めた方が……それよりもsir、ジュエルシールドは宜しいのですか？」

「えっ?……あ。」

なのはと少女の目が合った。

「……」

そして、そのまま二人して木の根元に放置され、若干黄昏れた様子のジュエルシールドに目をやった。

「……」

「……」

「と、とにかくそのジュエルシールドは私が貰う。」

「ええ!? あ、あの……」

そう声を掛け、近付こうとしたのはに対して金髪の少女は無言のまま斧状のデバイスを向け、周りに雷で出来た球を幾つか浮かべる。

——近付いたら撃つ。

その敵意に少し怯みながらも、言葉を続ける。

「あの、あなたもジュエルシードを探してるの？」

「・・・近付かないで。」

「いや、その・・・お話しただけなの。・・・あなたも魔法使いなのか・・・何でジュエルシードを探してるのとか。」

そう、なのはが言葉を続けようとした時、

〈フアイヤ。〉

主人の意を受けた黒いデバイスが、少女の周りの雷球をなのに向けて放った。

(ごめんね・・・)

まさか魔法の無いと言われていた管理外世界で、自分と同じ魔導師に会うとは思わなかった。本当は攻撃なんてしたくなかったけど、自分の目的のジュエルシードを狙っているなら仕方ない。

そう思いながら金髪の少女は、自分の放った攻撃がなのに向かって行くのを眺め、

——当たる前にその全てが横からの投擲により撃ち落とされたことに驚愕し、目を

見開いた。

「くっ!?!」

ついでとばかりに自分に向かって飛んできた小型の刃物に、驚きながらも手に持つ得物——バルディツシュと呼ばれたデバイスの柄で弾きながら距離を取り、反撃用に魔法を組み上げる。この年齢にしてこの高速並列思考と行動は、彼女の積み重ねた努力と才能を窺わせる。

「死ね。」

「キヤア!?!」

〈s i r!?!〉

ただし、それも突如として目の前に現れ肉切り包丁で頭蓋骨をかち割らんと振り下ろした白い髪の少女の放つ殺気に凍り付く。

「ジルちゃん、ダメー!」

「おねーちゃんはじつとしてて。こいつ殺す。」

（この子!?! そうだ、さっきまで気配が消えて・・・つつ!?!）

咄嗟にバルディツシュを振るい防いだものの、柄を握る自分の手が余りの衝撃に痺れ、愛機に刻まれた刃傷を見て背中に冷たいものが走る。

加えて、森に霧が掛かり始める。

〈警告! 幻術・・・更に硫酸の霧です!〉

!?!?!

目と、肺に鋭い痛みが走り始め、声にならない音を立てつつも広範囲に雷を撒き散らしながらその場から離脱を開始する。

(一体何が起こっているの!?)

『キャスターさん！キャスターさん！』

「のわっ!？」

「如何しましたかキャスター?」

その頃、翠屋でアーチャーと話し合っていたキャスターは、なのはからの念話を受けた。

『ど、如何したんですかなのは様!?!』

『い、今すぐ来て欲しいの!?!すぐかちゃんのお家の森でジュエルシード見付けて、ユーノ君がネコ耳で、金髪の女の子が魔法使いで破廉恥で、ジルちゃんが殺そうとしてて……!?!』

『はい!?!何がどうなったらそうなるんです!?!つか、落ち着いて下さいませなのは様!?!』
『ジルちゃん追い掛けるからキャスターさんも来て!』

『なのは様!?!』

と、なのはからの念話は一方的に切られてしまった。

「どうしたのキャスターちゃん?」

「なのは様からだっただけですが・・・ちよつと私急いで行きます!!」

心配げな顔の桃子と士郎に伝え、店のスタッフスペースに入って直ぐに霊体化しキャスターはなのはの下へ向かった。

(アサシンがいるなら無事だと思つてましたが・・・あの子の性格本当に厄介ですね。)

アサシンことジルは仲間と認めた相手、正確に言えばマスターである桃子の家族とその仲間には大人しい。

だが、それに手を出す敵に関しては普段とは打つて変わつて残忍性を見せる。

(早まらないで下さいよアサシン・・・)

一方、月村家の森では霧の中、必死に逃げ惑う金髪の少女の姿が有つた。四方を霧に囲まれ、どこから襲われるか分からない恐怖と痛みに必死で耐えながら、足を止めないように逃げる。

(何とか反撃して、ジュエルシードを・・・!)

〈硫酸の霧に対する対抗プログラムを構築します。sir今暫く・・・〉

『させるわけ無いじゃ無い。』

「!!?うわああああ!!」

突如、自分の後ろで、隣で、前で同時に聞こえた声に

反射的にバルドイツシュを振るい、

「えいつ。」

そんな舌つ足らずな軽い声を出し、軽くバルドイツシュを躲したジルに腕をとられた少女は、

「ガッ!?!」

背中から凄まじく硬い石で出来たオブジェに叩きつけられた。

「へえ?やっぱりおねーちゃんのリージングハートにそっくり。」

〈離せ。〉

背中への痛みに耐え、ふらつく頭を上げれば何時の間にか自分の手から奪われたバルドイツシュを無邪気に弄ぶ黒い革の服を着た少女が立っていた。

「そうだ!私たちがこの子の代わりにあなたを使つて上げる。」

〈断ります。私の主は後にも先にもフェイトだけです。〉

「ふうん。」

途端に機嫌が悪くなったジルは、手に持つバルディツシユの金色の宝玉部分をフェイトと呼ばれた少女の背後に有ったオブジェに叩きつける。

〈#m5p3@&!!?〉

「や、やめて!やめて!」

痛みを堪えて起き上がったフェイトは、そのままジルに飛び掛かるが、軽く突き飛ばされて再び叩きつけられる。

「まあいいや。折角だから貴女の大事なもので殺して上げる。」

へぐ、何を……!?!sir!早く逃げ……!」

「……うつ……え?」

愛機の声に顔を上げたフェイトが見たものは、

——こちらを冷めた目で見下ろす少女。

——その掲げられた右手で必死に声を上げる愛機。

——それがそのまま、自分に向かって振り下ろされ——

それをデバイスで受け止める白い背中だった。

「ま、間に合ったろ・・・怪我は無い？」

「・・・」

「えっと・・・」

「あ、うん。大丈夫だよ・・・」

「よかったの。」

「・・・おねーちゃん・・・」

呆然と見惚れていたフェイトにほっとしたような笑顔を向けた後、クルリとジルにと
なのははジルに向き合い。

「・・・ジルちゃん・・・本当に何をしてるの?」

聞くものがゾツとしそうな程、怒りを含んだ静かな声でジルに問い掛けるのは。

「だ、だっておねーちゃんをそいつが・・・」

「何を、しようと、したの?」

「ヒイツ!?!」

結構長く一緒に暮らし始めて尚、見たこと無いほどになのはが切れている事を理解したジルは思わず手に持つバルディッシュを投げ捨てる。

「ちよ、ちよつと痛め付けようとしただけ・・・」

「殺そうとしてたよね?」

「だ、だつてだつて・・・」

「いつ、私が! そんな事してつて言つた!?! まずはこちらと話し合つて解決をしようよ!」
涙目になりながらジルは反論する。

「わ、私たちはお母さん(マスター)におねーちゃんを守るように言われてるんだからおねーちゃんを攻撃した敵をやっつけたり、殺したりするのは当然だもん。」

「お母さんは、そんな事望んでないの!」

「そんな事無いもん! マスター(お母さん)のサーヴァントとして間違つて無いもん!」

(・・・『サーヴァント』? 『マスター』? この女の子が使い魔?)

目の前で言い争いをする二人の会話から少しでも情報を集めようとするフェイトが、気になる単語について考え始めたとき、地団駄を踏み始めたジルが、キツとフェイトの方を睨みつけた。

「じゃあ『殺さなければ』良いんでしょ!?!半殺しにして連れて帰る!」

「!?!グッ!!」

「やらせないの!」

動こうとして痛みを感じたフェイトを見て庇うのはから離れたジルは、魔力を使い始める。

「ふんだ。おねーちゃんがそこで庇ってもかんけー無いもん。今は『夜』じゃないけど『雌』と『霧』の2条件は達成してるから殺せなくても半殺し位には出来るんだから!」

「!?!ジルちゃんその『宝具』は駄目!!」

ジルの狙いに気付いたなのはが止めようとするが、冷静さを欠いたアサシンは止まらない。霧の中、フェイトを標的に捉え、情け容赦なく自身の持つ二つ目の宝具を発動させる為の詠唱を始める。例えば桃子に念話を入れて令呪を使って止めて貰うまでよりも早く宝具は発動するだろう。

「此よりは地獄、わたしたちは——」

「そこまでだ悪ガキ。」

突如として一帯に響き渡る轟音。そしてジルが周囲に展開した霧を爆風が吹き飛ばした。

「キヤア!?!」

「!?!何が・・・」

何が起こったのかと混乱するなのはとフェイトの耳に連続して濁いた銃声が聞こえ、

顔を上げれば

「ジルちゃん!!?!」

両腕と、両脚を撃ち抜かれ崩れ落ちるジルの姿。

「ちつとばかりおいたがすぎるよアサシン? 霊核をぶち抜かれてないだけ有り難いと思
いな。」

その声に振り向けば、森からこちらに歩いてくる一人の女性。

「まあこれで前に家の上官殿にやらかした落とし前と、そつちのガキにやらかした事で
ブチ切れてるダチの分の借りはチャラにしてやるよ。」

燃えるような紅く長い髪、貌に大きな傷を持ち、両手にクラシツクな拳銃を構えてい
た。

「ジルちゃん! ジルちゃん!」

「うええええ．．．いたいよう．．．」

「ジルちゃん! 待ってて、今．．．!」

「だ、駄目!!」

思わずなのは、血を流すジルに駆け寄ろうとしたが、足元に銃弾を打ち込まれ牽制
される。

「おいおい、目の前の相手から目エ逸らすなんざ随分と余裕じゃ無いか? 舐められたも

んだねえ。」

「貴女、何なんですか!？」

「・・・おねーちゃん逃げて。そいつ・・・」

「あん? 目の前の獲物を逃がす海賊が居るか?」

(海賊?)

傷付いたジルを見てなのは、相手を見る。

サーヴァントであるジルを容易く行動不能に追い込む。

—— そんな事ができるのは同じ存在だけ。

加えて先程の轟音。そして、周りの抉れた地面、へし折れた木々。

—— まるで砲撃でも撃ち込まれたかのような。

此方をニヤリとした表情を浮かべて見ている女性の格好は、家のテレビでやってた映画に出てくる船乗りのような格好。

『クラシックな二丁拳銃』

『海賊』

『砲撃』

『船乗り』

—— 該当するサーヴァントは

「・・・『ライダー』のサーヴァント・・・!?」

「おや、喋り過ぎちまったか。・・・如何にも。」

なのはにとつては『魔術師』、『暗殺者』、『弓兵』に続く四体目のサーヴァント。
『騎兵』のクラスを持つ女海賊は

「・・・で、そいつが判るお嬢ちゃんは・・・」

くるり、と煙を吐く拳銃をなのはに向け

「アタシの敵って事で良いのかい？」

ニタリとした笑みを浮かべた。

オマケ『その頃のアーチャー主従』

「では、私も向かいます。」

「アーチャーさん……どうか宜しくお願いします。」

「承りました。」

頭を下げる高町夫妻に頷き返し、スタッフスペースを借りるべく動いたアーチャーは、ふと先程注文した商品を堪能していた黒服達のテーブルの近くに行き足を止めた。

「よし、コレ食べたならそこに行ってみよか。」

などと話し合う車椅子の少女達に上手く聞こえる程度の音量でポツリと呟く。

「……これは独り言です。今日私は家を出る時に危険度も分からないというのに付いて来たがる教え子に、課題を出して来た筈なんですが……」

「……えつと……せんせ？ やっぱ気付いて……」

ビクリと手を止めた一堂が冷や汗を流す。関西弁の少女がアーチャーを見るととて、もう、そう歴戦の戦士ですら手足が震える程のきれいな笑顔を浮かべていた。

「万が一にも有り得ないでしょうが、私が帰った時までには終わっていないければ……まして、外でサボって遊んでいた日には……『特別コース』を用意しなければなりませんね。あ、土郎さん私もスタッフスペースお借りしてよろしいでしょうか？」

「え、ええどうぞ。」

「すみません！お会計お願いします！早急に！」

慌てて帰り支度を始めた黒服達を後ろにアーチャーは、キャスターと同じく霊体化して向かうのであった。

ソレを見送り、美由希は目の前のアーチャーのマスターと思われる少女のお会計をしながら思う。

「あれ？課題が終わっても外で遊んでたことに変わりないから……結局、特別コースは用意されるんじゃないか……？」

「……もうだめやあ……おしまいやあ……」

「あ、主!?気を確かに！」

「そ、そうですね！ケイ……んん！先生もキッチンと話せば分かって……」

「いや、無理じゃねーか？」

「……だろいな……」

「……イヤやあ……英雄育成コースはイヤやあ……」

「主……」

目の前で車椅子の少女が真っ白になった。

騎兵

さて、少々時間を遡る。

「離しなさいライダー！フェイトが！」

「だから、落ち着けて言ってるんだろ。」

硫酸の霧に包まれた森に、今にも飛び出さんとするリニスの首根っこを押さえながらライダーはもう片方の腕で酒瓶を叩る。

「これが落ち着いていられますか!?このままではあの子が殺されるかもしれないじゃないですか！」

「だからってなあ……そもそも、先に仕掛けたのはあんたの教え子じゃないか？」

「だけど殺す必要は無いでしょう!？」

「なんつーかそういう所が甘いよなあリニス。お上品な試合やってる訳じゃないんだ。返り討ちに殺されたって文句は言えないよ。」

「ですが!!」

睨み付けるリニスからの視線もどこ吹く風、というようにラムを呑みながら目先の戦いを見守るライダーだったが、

「それにだ。あたしらはスズカのサーヴァントと使い魔だ。……立ち位置を間違えんじゃないよ。」

「っ！」

視線に殺気を交え、リニスを一瞥し黙らせる。

「とは言え、一応上官殿に報告はしようかね。」

「……そう……ですね……」

躊躇うリニスを横目にライダーはすすかへと念話を繋いだ。

『スズカ。ちよつと良いかい?』

『ちよつと待つてライダー!……よし、後は……』

『……何してんだいスズカ?』

『アリスちゃん、森に行こうとしたから眠らせてたんだよ。……ってそれよりライダー!何が起こつてるの!?!何か霧が出て来てるんだけど、これつてもしかして……』

どうやらすずかの場所からも異常が見えているらしく、大いに慌てている。

『眠らせ……まあいいさ。霧はシノブから話に聞いたアサシンの宝具だろうよ。状況としては、何故カリニスの昔の教え子がジュエルシード目的で参戦。んで、アサシンに襲われてるみたいだね。』

『襲つ!?!ジルちゃん何してるの!?!』

『知らないよ。スズカの友達のこと。ナノハだっけ？に攻撃してみたんだから、振り返りにしようとしてるみたいだね。』

『ええ!?!な、なのはちゃんは大丈夫なの?』

『無事だよ。』

念話の向こう側でホッと安心した様子が伝わってくる。

『よかった・・・それでリニスの教え子って子は?』

『まだ大丈夫だろうけど、アサシンに狙われてるからなあ・・・このままなら死ぬね。』

『ッ!』

『それは大丈夫とは言わないよ!?!』

そんな話を向こうで聞いていたはずかとリニスが焦っているのを感じたライダーだが、報告だけして再び瓶の酒を呷る。

(リニスの元教え子とジユエルシード・・・これが偶然な訳無い・・・何かしら関係があるんだらうけどねえ。)

暫くした後、すずかから意を決した様な声で話しかけられた。

『あのねライダー・・・その子、助けられないかな?』

『すずか・・・!』

『構わないけど・・・良いのかい?少なくともあたしの姿は晒すことになるよ?自立たな

その時の事を、今でも覚えている。

突然の轟音。

響く銃声。

血溜まりに沈むジルちゃん。

そして、額に突き付けられた冷たい銃口。

突如として現れたサーヴァント、ライダー。森に全くそぐわない赤い姿の女性は、不敵な笑みを浮かべたまま口を開いた。

「おや？聞こえてなかったかねお嬢ちゃん？」

「え、あ……」

「んー？やり過ぎちまったかねっ!？……つと悪いね、さつきからうちの上官殿達からの念話がうるさくてねえ。」

答えられる訳が無い。もしそうだと行ってしまえば、次の瞬間には頭を撃たれるかもしれないのだから。

「それと、余計な真似すんじゃないよ、そのフレット？自分とお嬢ちゃんの頭の風通しを良くしたいなら別だがね？」

「くっ!?!」

何か行動しようとしたらしいユーノ君が、動きを止めたのを感じた。

・・・どうしよう・・・

「とりあえず武器を捨てて、頭の後ろに手を置きな。」

私はレイジングハートを待機状態に戻そうとし・・・

「・・・おねーちゃんを離せBBA。」

突如罵声が飛んだのはその時だ。

「ジルさん!?!」

「・・・もう一発ぶち込んでやろうかクソガキ？」

地面に転がったまま、何故かケンカ売り始めたジルちゃん。さつきまで大怪我して泣いてなかった!?

「べーだ。オバサンみたいなのを『BBA』と言うので御座るよ。』ってネットで『黒☆髭』さんとか『ペロロンチーノ』さんとかが言ってたもん。・・・所でユーノBBAってどんな意味?」

意味判ってなかった!?しかもそこでユーノ君に振るの!?

「え!?えつと多分、ババ・・・ああああ!?ジルさん駄目ですよ!スミマセンこの子には悪気は無いんです!・・・たぶん・・・きつと?」

「よーしソイツ共々縛り首にしてやるからそこ動くな。」

更に舌を出して挑発をするジルちゃんを擁護するユーノ君。・・・ジルちゃんは悪気たっぷりだと思うの。

そんな二人に青筋立てたライダーさんは、私から目を離し、

その一瞬

森の奥から放たれた閃光のような矢が、私に向けられた銃を弾き飛ばすと、同時にライダーさんの頭を砕かんとばかりに振り下ろされた鏡。そしてばら撒かれたお札。

「チッ!?!」

振り下ろされた鏡を、虚空から引き抜いたサーベルで迎え撃ったライダーさんは、大

きくその場から飛び退いたのです。

「しくじりましたか！ってそれより……なのは様なのは様なのは様あ！御無事ですかあ
!？」

「キャスターさん！って待つて待つて!!?くるし……ムグウ!？」

私の目の前に着地したキャスターさんは、そのまま私を豊かな胸に抱き締めながら
キツとライダーさんを睨みつけ、

「コンの蛮族が！よくも私の超絶的に可愛いなのは様の御尊顔に銃口突き付けやがりま
したね!?!森ごと灰燼に帰してやりますからマジ覚悟しやがれ！」

そう宣ったのです。

確かに来てくれたのは嬉しいし、安心したけど……

恥ずかしいし苦しいから離して欲しいの！

……

……

……あつ、でも柔らかい……

「よーどー作戦大成功。」

「作戦だったんですかアレ!?!」

なのはに抱き着くキャスターさんを眺め、地面に転がりながら、ちよつとドヤ顔でそんな事を言うジルさんに頼まれ、腰のポーチからメスと針と縫合糸を運ぶ。

「イタタ・・・だつてそろそろキャスターが来るかなつて思つてたから。」

「な、成る程。それで敢えて自身を危険にさらしてライダーの注意を引いたと・・・」

「因みに間に合わなかつたら、ユーノに頑張つて貰う予定だった。」

「無理ですから!?!」

僕の抗議を可愛らしく首を傾げて誤魔化そうと・・・いや、本当に無理ですからね? 何処にサーヴァントを何とか出来る魔導師がいると言うのですか。噂に聞く古代ベルカの騎士達でも無理でしょう。

「何とかすれば良いと思う。」

「いやいや、今フェレットですしね? 万全でも無理だと言うのにどうしろと・・・?」

「何かこう・・・アニメみたいピンチに目覚めて、サーヴァント召喚したり?」

「何処の主人公ですかソレ・・・」

そんな都合の良い事が・・・

『ウフフ・・・お待ちしてますね安珍様?』

「うわあああああ!!!?」

「いきなりどーしたのユーノ!?」

いきなり声が聞こえたような気がして周りを見回したけど・・・気のせい?・・・気のせいですね。疲れてるのかなあ・・・主に目の前の子が原因で。

「い、いえ、何でも無いです。それより、身体は大丈夫ですか?」

「持つててよかった外科手術スキル。」

メスや針を使って、何とか怪我した箇所を縫合するジルさん。『医者だったかもしれない』という彼女の逸話から得たスキルらしいですが、手足をやられているため時間が

掛かっています。

「むずかしい……」

「そりやあそうですよ！早く下がって回復しましょう。」

そうこうしている内に、ある程度治したらしいジルさんは、起き上がり腰のナイフと肉切り包丁を引き抜いた……って、怪我したばかりなのに！

「ジルさん無理は……」

「ヤダー！リベンジする！あのオバサン絶対ゆるさないんだから！」

「彼の言う通りです。下がりなさいアサシン。」

その声に駄々をこねるジルさんも振り向くと、そこには弓矢を手にしたアーチャーさんが立っていました。

先程、ライダーの拳銃を弾き飛ばして助けてくれたのはどうやらアーチャーさんの様です。

「アーチャー、邪魔するの？」

「今の貴女では彼女相手は厳しいでしょう？怪我の影響もあつて魔力不足の筈です。」

「へーきだもん。」

膨れっ面で抗議するジルさんにアーチャーさんは、呆れたような顔をしました。

「……所であそこで怪我をしていた少女ですが、あれは貴女の仕業ですかアサシン？」

「だって、あの金髪が先に掛かってきたんだから。えっと、せいとうぼうえい？だもん。」
「とは言え、やり過ぎです。」

「そんな事無いもん。それに偶にはアサシンらしいことしたいんだもん。」

ジルさんの我が儘っぷりに頭を抱えたアーチャーさんでしたが、ジルさんに再度下がっているように伝え、僕にジルさんを見ているように言ってライダーのもとへと向かい・・・あれ？僕ジルさんの世話係にされてる？

「むっ」

「まあジルさん、今は下がりましたよ。」

ジルさんは平気だと言ってますが、目の前に居る他の三騎と比べて不利なステータス。加えて今は怪我の治療に魔力を回している筈で、戦闘なんて出来る筈がありません。

「キャスターさんもアーチャーさんも居ますし、きっと大丈夫ですよ。休んで魔力を少しでも回復しないと。」

「そうだけど・・・ん？」

その時、ふと何か思い付いたように僕を見るジルさん・・・何か嫌な予感が・・・

「・・・」

「・・・」

「……………」

「……………」

「……じゆるり」

に、逃げ……アッ!? ムグツ——!?

「おやアーチャーさん、もう良いんですか？」

「……………」

「ええ、彼女はユーノ君に任せて来ました。……それより……」

キヤスターの胸に（強制的に）顔を埋められたなのを見てアーチャーは、呆れたような顔をした。

「キヤスター。苦しそうにしていますからその辺で。」

「……………!……………!」

「チツ。アーチャーまで居やがんのかい。」

「ええ。お初に。」

苦しそうにバタバタしているのを、抱き締めながらライダーと対峙するキヤスターの隣にアーチャーが並び立つと、ライダーは舌を鳴らす。

(キヤスターだけでも面倒だつてのに……)

一見隙だらけでいちやついているように見えるキヤスターだが、視線を決してライダーから離しておらず、一挙手一投足に対応し、なのはと共に離脱出来るようにしていた。

「それで、何時まで抱き締めているのですかキヤスター?」

「私が居ない間にナニされてたか解ったもんじゃ無いでしょう!?ですからこうして確かめて……ハッ!?もしや服の下にお怪我を!」

「くくぷはっ!何もされてないから降ろして!あとそれ以上やったら令呪つかうの!」
キヤスターが名残惜しそうに地面になのはを降ろした。

「おねーちゃん、後で私たちも!」

「ジルちゃん!無事だったんだ!」

地面に降ろされたのはに抱き付くジルにキヤスターが首を傾げる。

「アサシン……何か魔力かなり回復してませんか?肌もツヤツヤしてますし……」

「あっ!ステータスも元に戻ってるの!」

「裏技使ったの。」

「すごい！そんなのあるんだ！」

〈流石サブマスター。我々に出来ないことを平然とやってのけましたね。そこに痺れる憧れる！〉

その『裏技』により・・・向こうでさめざめと泣く魔力空っぽのフェレットが居たのを何とも言えない表情でキャスターとアーチャー、そしてライダーが眺めた。

「まさか、この場で魔力供給して戦線復帰して来るとはね。・・・大丈夫なのかいアレ？」

「ええ、私も予想外でした。普段どういう教育をしてるのですかキャスター？」

「・・・知りませんよ、大方マンガとかアニメで得た知識でしょうけどね。後で自分のマスターにアサシンがしたたま怒られるのは確定でしょうけど・・・それよりも」

3人の視線が倒れた金髪の少女へと向いた。

「さて、どうしたもんかねえ。こっちとしちゃあ、サツサとあそこで伸びてる金髪のお嬢ちゃん回収して帰りたいんだがね？」

「そうですか。ですが、こちらとしてもこの街で起きている一連の事件に関わっていると思われる少女を簡単に渡すわけにはいきません。」

「ええ、それに其方も何やら訳ありみたいですし・・・貴女のマスターから何から洗い浚いしやべつてもらいましようか？そうすれば、主従共々半殺しで済ませて上げます。」

「・・・ボコボコにする。」

アーチャーとキャスターそしてアサシン、サーヴァント三人からの鋭い眼光を、ライダーは笑って受け流す。

「おやおや、面白い冗談だねえ？上官殿を売れと？悪いが、アタシは雇われ海賊とは言え、報酬分の仕事はきっちり果たすのさ。」

「海賊？」

「キャスターさん！アーチャーさん！あの人ライダーのサーヴァントなの！」

〈『女海賊』で検索・・・該当有り・・・『アン・ボニー』『メアリ・リード』『シャーロット・デ・ベリー』『アルビダ』『チン・シー』等の可能性が有り。〉

キャスターの後ろから、なのはとレイジングハートが情報を渡す。

「ライダー？流石はなのは様！お見事です！さすなの！相手の真名に繋がるヒントになりますから、しっかりと情報を集めて整理することはサーヴァント戦では大事ですよマスター。」

『後、稀にですが伝えられた性別が違う人も居ますからご注意ください。』

『ジルちゃんみたいに？』

『まあ、アサシンは特殊な例ですが似たような感じですよ。』

『つまり私たちはとてもレア。要課金。』

『ジルちゃん何の話?』

念話も交えて話し合う高町家組の横でアーチャーも考察を続ける。

「そうですね。武装、服装から観て近代・・・大航海時代頃の英雄でしょう。それにライダーとして現界したと言うことは恐らく宝具は『船』・・・船が逸話となるような大規模な海戦か航海を為した英雄・・・」

アーチャーからの指摘に、ライダーは笑みを深める。

「流石は神世の英雄様だねえ。とは言えそちらも大分分かり易いね。ギリシヤ式の軽装・・・何より人と馬の尾を持った弓兵の適性持ちと来りゃあ大分絞れるがね。」

アーチャーから視線をずらす。

「それに、アサシンとキヤスターに関しちや直ぐ判るさ。霧の街の連続殺人鬼に・・・悪名高い九尾の狐、何で一本しか無いのかは知らないがね。」

ライダーの言葉にも表情を変えないアーチャーとアサシン。ライダーを睨み付けるキヤスター。

「その三騎を相手にするつもりですかライダーさん?それはいささか無謀でしょう。」

「ハッ!そつちこそアタシを舐めてんのかい?」

キヤスターの台詞を鼻で笑い飛ばし、サーベルと拳銃を構える。

「アタシは元々、軍艦専門の海賊でねえ。弱い者イジメは性に合わないのさ。三人がか

りなら丁度良いだろ。」

三対一を問題無いと言い切るライダーになのはは驚愕した。三騎とも決して弱いサーヴァントでは無いにも関わらずこの余裕。

そしてそれを裏付けするように、ライダーの魔力が膨れ上がる。

(この人、一体——!?)

「チツ! やつぱりこうなりますか! マスター下がって!!」

「さあ! あの金髪賭けて派手に殺り合うとするかねえ!」

直後、ライダーの背後を歪ませて現れた砲門が一斉に火を噴いた。

(ほ、本当に何してるの・・・というか何してくれてるのライダー!?)

月村邸の一室で、窓をびりびりと震わせる轟音を聴きながら、すずかは頭を抱えた。

もつと穏便に話し合いとかをしてくれるかと思いきや、真逆の武力行使。撃つわ銃口突き付けるわと、人の友人達に何してくれてるのかと思わずリニスと念話で抗議すれば、

『いや、何もしやしないけどさ。先ずはこの子とアサシンの武装解除させなきゃだろ?』

だから先ずは先手を打って攻撃して主導権を……つか宝具発動防がなきやお嬢ちゃん死んでたよ?』

との返答。

(ノリノリで悪役やってたじゃない!?絶対自分が戦いたかっただけでしょ!?)

リニスと共に念話で抗議していた所でキャスターにアーチャーが襲来。そして今や敷地の森の木々を吹き飛ばし、轟音を響かせながらの大乱闘に発展。先程から魔力も削られて行く度に轟音が轟く。

……少なくともあの辺が更地になり、姉が後始末で数日徹夜は確定だろう。

その上、見覚えの有るピンク色のビームやら光弾やらが見える事も、彼女が頭を抱える原因である。

「何でなのはちゃんまで参戦してるの!?危ないから逃げようよ!」

もう最初からリニスに行って貰った方が良かったかとも思うが後の祭である。

「……どうしてこうなるの……ライダーのばかあ……」

自然と口から独り言が零れた。

「・・・『ライダー』だと？それはどういう事だ？」

——その声に、思わず固まり背筋に冷や汗が流れる。

「話を聞かせて貰うぞ、すずか。」

振り向いた先に鬼が居た。

オマケな番外編　なのは／えくすてりあ

※時間軸は未来だと思いいねえ。

とある休日。高町家はなのはの自室にて少女達が集まっていた。その手には携帯ゲーム機が握られていた。全員集まってプレイするのは発売したばかりのゲームソフト。

『Fate／EXTELLA』ねえ……」

「うん。気になったから買ったんだけど……皆もなんだね。」

「そりゃあ、見知った顔が出て来るゲームがあれば気になるわよ。つか今日は白野達は何？」

「最近また出番で忙しいから無理って言ってたよ。今回こそザビエル実装されると思ってたのに……って何か二人とも嘆いてたけど。」

「何の話よ?というかこのゲームに何であの二人とサーヴァント出てんの?」

「判らないけど結構面白いよ。」

「まあそうなんだけどさ。」

アリサが顔を向けた先には、揃ってカチャカチャプレイする中、一人だけ頬を膨らまして部屋の隅で拗ねていたジルことアサシン。

「それで?ジルはなんで拗ねてんの?」

「私たちだけ出て無い……」

「仕方ないよ……」

さすががそう落ち着かせようとしますが、アサシンは駄々を捏ね始めた。

「ズルイ!キヤスターもセイバーもランサーもライダーもバーサーカーもルーラーも出てるのに!私たちだけ出て無い!」

「仕方ないやん。先生も出てないし……」

そう言つてはやても慰めようとするが、

「アーチャーは地味だから別に良いの!」

「上等やコラア!表に出んかい!」

「落ち着いてはやて!」

「止めんといて!先生直伝のパンクラチオンを今こそおおおお……!」

い目を向ける。

「多分・・・」

「原因ってアレだよね？」

なのはの背中にこっさり貼られた妙な気配を放つ呪符を、何とも言えない気持ちで眺めるアリサ達であった。

乱闘と大爆発と少女の出会い

interlude

響く砲撃音をどこか遠くに感じるほどに、その人物が今ここに居る事が信じられなかった。

〈生きて、いたのですかマイスター。〉

何故、どうやって、思考が混乱する位に倒れ伏した少女に手当をする女性、リニスへ驚きを覚えながら少女のデバイス——インテリジェンスデバイス・バルディツシュは、己が製作者に語り掛ける。

「・・・」

バルディツシュの言葉には答えず、手当を終えたりニスは膝に頭を乗せたままの少女の金色の髪を撫で付ける。

へマイスター。どうかマスターに力をお貸し下さい。それにマスターもアルフもマイス

ターがお戻りになればきつとお喜びに……」

バルディツシュの言葉に髪を撫で付けていた手が止まる。

「……戻る？この子達に何も出来なかつた私が？」

リニスの口から零れた台詞に驚愕の余り思考停止する。

「救うことも変える事も出来ず、諦めて、見捨てて、逃げ出した私が？」

「マイスター……そのような事は……」

そのままリニスは、少女を地面に横たえ立ち上がる。

「それに、今の私には……」

森の向こう側にある洋館の方に顔を向けたリニス。その表情は何かを断ち切ろうと決意を固めたようにバルディツシュには見えた。

「……フェイト達の武運と健勝を祈ります。」

そのまま、リニスは振り返る事無くその場を後にした。

へ・・・へ

バルディツシュは、そのまま記録を閲覧出来ぬように己がメモリーの奥底に封印する。

《自分は誰とも会わなかった。》

主が戸惑うこと無いように。

主を泣かすこと無いように。

彼女が去り際に流した涙を誰にも見せないように。

i n t e r l u d e o u t

(何て強さなんだろう。)

目の前で繰り広げられる光景に、アサシンによる魔力供給（強制）によりダウンしたユーノは倒れ伏したまま、目を奪われた。

機敏に動き回り、鏡形の宝具を攻防一体に用いながら呪符による攻撃や牽制に回るキヤスター。

地面を音も立てずに疾走し、メスを投げ付け、手のナイフで斬り掛かるアサシン。

森の木々を盾にしながらも、一切足を止めずに枝葉の隙間を縫うように矢を放ち続けるアーチャー。

そして……

「ホラホラ如何したあ!?!さっきまでの威勢は何処に行つたんだい!」

「な、何なんですかこのバ火力!?!」

恐るべきは、それらの三騎を相手に怯むどころか、真つ向から圧倒的な火力で迎え撃つライダー。

背後から現れる大量の砲門から放たれる砲弾でキヤスターを防戦に回らせ。

片手に握られたクラシックな拳銃でメスを叩き落とし、アサシンを牽制し。

業物と思われる装飾のされたカトラスでアーチャーの矢を切り払う。

それらをこの混戦の中、的確に使い分ける技量と度胸と戦闘経験。

此こそがライダー。

神代ならぬ大航海時代において人類史を二度動かすという偉業を成し、英霊の座に招かれた女である。

その戦闘の余波だけで、月村家の敷地の森を更地に変えそうな勢いで木々を薙ぎ払い、地面を打ち砕き、草花を焼き払いながら破壊し焼き尽くす、まるで地獄の如き光景。そのすさまじさにユーノは息を呑む。

「これが、サーヴァント同士の戦い「バインド」！い……？って何で参加してるのかな？」
動き回っていたライダーの身体をピンクの魔力が巻き付き拘束、その一瞬を逃さず三騎が仕掛ける。

「はっ！甘いよお嬢ちゃん！」

しかし、一瞬でバインドを破壊したライダーは軽業師のような動きで強襲を躲し、逆に拳銃で牽制。なのは達が知らぬ事ではあるが、リニスによりバインドの効率的な破壊法を学んでいたライダーにとって、リニスのソレと比べれば遙かに容易いことであった。

「くっ?! 躲されたの!」

「いやいや、良いタイミングだったよお嬢ちゃん！いいねえ……ちよつとからかう位のつもりだったが喰らいがいがあってもんだ!」

「やらせますか!!」

なのはにターゲットを移したライダーにアーチャーが矢を放ち、キャスターがなのはを庇いに入る。隙を見てアサシンが斬り掛かるが、逆にライダーに蹴り飛ばされ地に転がる。

「グスツ。痛いよう・・・あのオバサン強い。」

ライダーに蹴り飛ばされたアサシンが、泥だらけで起き上がろうとするが、それを見逃すライダーでは無い。ライダーの背後の砲が角度を調節しアサシンへと狙いを定める。

「ジルちゃん危ない!」

なのはが、大量の光弾をライダーに向けて連射を行い、ライダーの注意を逸らす事で間一髪アサシンは砲撃から免れたが、

「うそ、効いてないの!?!」

躲す気すら見せないライダーに当たる寸前、なのはの光弾は全て打ち消された。それを見て驚愕するなのはにアーチャーが、何が起こったのか看破する。

「・・・恐らくは対魔力スキルですね・・・一定以下の魔術的攻撃は無効化されるでしょう。」

ライダーの対魔力スキルはD。なのは達の魔法で言うところのシューター級位で有れば大抵無効化出来る。

「ず、ズルイ!? そんなスキル、キャスターさんも持つて無いのに!」
 「ええ、実に反則的なスキルです。」

真剣な表情で頷くアーチャーであるが、ここに彼のマスターや家人達が居れば、

対魔力：B
 『アンタが言うな。』

とでも口を揃えて言ったであろう。

さて、サーヴァント三騎と一人に圧倒的に対して火力で勝るとは言え、状況はライダーに不利で有る事は変わらない。

生前から、船上での敵味方入り混じつての乱戦には慣れているとは言え、相手がそれぞれ一騎当千の英霊であれば如何に豊潤な魔力供給があるとは言え・・・

『不味いかねえ・・・リニス。そっちはどうだい?』

不敵な笑みを浮かべながら念話を繋げれば、暫くして返事があつた。

『・・・ええ・・・大丈夫です。気を失っているだけでケガも応急処置は済みました。』

『・・・そうかい。』

アサシンに殺され掛けた金髪の少女の所へと向かつていた相方からの念話に、目標で

ある少女の救助は出来た事を確認。 . . . かなり気落ちした声に後で朝までラム酒を飲むフオローする事にする。

『取り敢えず、陽動は成功。後はこの場を . . . 』

『き、きやあああああああああああ!?!』

『『スズカ!?!』』

突如として、マスターの悲鳴が二人に響いた。

突然、それまで余裕の笑みを浮かべていたライダーの表情が一変した。

「悪いねえ。上官殿の事情が変わっちゃった。ちつと退かせて貰うよ。」

「我々から逃げられると?」

弓に矢を番えたまま、アーチャーが口を開く。キャスターは呪符を構え、アサシンは宝具『暗黒霧都』を展開し始めた。

「おうさ。海賊には逃げ足つてのも大事なのさ。」

ライダーの背後が大きく歪む。先程までとは比較にならない魔力を放ちながらその姿を晒し出す。

「・・・お船・・・なの？」

それはなのには見慣れない、現代では映画や港町でしか見れないであろう、少し小さな古びた帆船。しかし、宝具と言うには余りにも、言ってしまうえば粗末な船である。強いて特徴を挙げれば、船首の下に尖った杭のような物、そして何より・・・

「みこっ？何でしょうかこの匂い？油？・・・やばっ！」
「遅えよ。」

ライダーの言葉と同時に、突如として燃えだした船は船首をキャスター達に向けて急加速しながら突進、

ミサイルが着弾したような大爆発を引き起こした。

閃光と爆風に包まれる森、ライダーはその場を霊体化して後にした。

「序でに『姐さんの華麗なる略奪』ってな。」

その手にこの後の交渉材料を手にしながら。

もはや更地を通り越してクレーターが出来上がった月村家の敷地。衝撃波により月村邸の窓ガラスは悉く割れ、壁面に罅が入り、被害総額と後始末を考えて当主が泡を吹いて気絶した頃。

「大丈夫でしたか皆さん。」

キヤスターの術が間に合わぬと判断したアーチャーの機転により、アーチャーの両脇に抱き抱えられたなのはキヤスター、背中にぶら下がったアシンとユーノは何とか最小限のダメージで済んだ。

「た、助かりましたアーチャーさん……」

「うにゃあ……」

「アーチャー！もう一回もう一回！」

「きゆう……」

アーチャーのやった事は単純に、船の帆と舵を矢で破壊し、動きを抑えた上でスキルにより上乘せ強化した身体能力で四人を抱えて全力で離脱する事。さらになのはプロテクションとキャスターの術によりダメージを抑える事に成功した。(それに、彼女が本気では無かった様ですし。)

派手な爆発であったが、恐らく本来は衝角をぶつけた上で爆発させるものだろう。それをせず、自分達を逃がした理由……それを考えていると、地面に降ろしたキャスターがクレーターを見ながら声を上げた。

「こんな昼日中の住宅地で壊れた幻想……!? 正気ですかあの女!?!」

「いや、恐らくあれは『火船』では?」

「んなコト言ってる場合じゃ無いです! ああ、やつぱり! あの女のこの為には大爆発を!」

遠くから二種類のサイレンが鳴り始め、此方へと向かって来るのをキャスターの聴力が察知した。

「成る程……追撃所では無いですね。」

「に、逃げますよなのは様! 警察と消防は忍さんや恭也さん達に任せましょう!」

「えっ……えっ!?!」

余りの衝撃に未だ呆然としていたなのはを小脇に抱え、帯から取り出したスマートフォンで恭也と忍に連絡を入れる。

「キャスター、ジュエルシードあのオバサンに持って行かれたみたい！」

「あの海賊女……アサシン、逃げますから霧も出しといて下さい！」

「うん。」

頭に気絶したユーノを乗せたアサシンが、宝具『暗黒霧都』を発動させ目眩ましを行い、全員でこの場を後にした。

「どうしよう……」

霧に包まれ始めた森で、身を隠しながら一連の流れを見ていた金髪の少女は顔を青くしていた。

目的であったジュエルシードは持ち去られ、圧倒的な暴力を振るう超常的な存在に心が折れかけていた。

『今の内にさっさと帰りな。』

顔に傷のあつた超常存在が去り際に声を掛けていったが、立ち上がれないほど打ちのめされた。

(アルフと一緒にダメ……)

どう考えても捕まるか、無惨な死体となる未来しか見えない。

「どうしよう……これじゃあ母さんの役に立てない……」

だからこそ、彼女は願った。

(力が欲しい……せめて、あの超常の存在を何とか出来るような力が。)

本来ならばただ叶うことも無い願いを。

——そう、本来ならば——

少女を先の爆風から守った石柱——館の住人が購入したは良い物の本来の目的に使

えず、とは言え家の倉庫に入れとくのも勿体ないからと、オブジェとして敷地に突き立てていたギリシヤ土産。

とある大英雄を奉っていた古い神殿の支柱を加工した、という謂われの巨大な大理石の剣斧。引き抜かれること無く突き刺さっていたソレが。



少女の目の前に現れたステンドグラスを砕きながら、顕現する鈍色の巨人の手により引き抜かれた。

右手の甲の痛みと共に現れた三画の模様。

繋がりに、流れていく自身の魔力。

ただ其処に在るだけで、全身の細胞が敵対を拒否する程の圧力。

少女の運命すら切り開く狂戦士との出会いだった。

おまけ 後始末と支払い方法

『……只今入りました速報によりますと、海鳴市の住宅地で大規模な爆発が発生しました。死傷者が出ているかは判っていません。警察では、最近海鳴市で発生している連続無差別テロ事件との関連を……』

「どどどどどどうしようどうしようどうしようキャスターさあん！すすすすずかちゃん家がぁ!？」

「おおおお落ち着きましようなのは様!?大丈夫大丈夫ですから！ほら泣かない泣かないで下さいまし!?尻尾もふって落ち着きましよう！」

全速力で高町家に帰還した一同が一息吐いた所で、アサシンが着けたテレビから流れたニュースになのはが慌ててキャスターに泣き付いた。

『なお、現場では黄色い有毒ガスが発注しており、肌や眼、肺に強い痛みを感じ病院に運ばれた警官や消防団員がいるとの情報も……』

「ジルさん……」

「ワザとじゃないもん。……でも一緒におかーさんに説明してね？」

「えっ!？」

普段はとても優しいマスターとのお話を考えてしまい、ガクブルと震えながらユーノ

を握……抱き締めるアサシン。

『……街の住民からは頻発するテロによる被害に不安の声も……』

真剣にニュースを見ていたアーチャーが、頭を抱える。

「しかし、困りましたね。少なくとも被害を補填する方法を考えなければ……」

「うーん。監督役とか居ませんし、代わりの月村さん家も今回の騒ぎでそれ所じや無いですし、落ち着いてから寄付って形で……」

そんな話をしていた横で、アサシンが思い付いた事を口にした。

「……キャスター……がんばって……」

「えっ!? 私が払うんですか!?!」

驚愕するキャスターにアサシンが頷く。

「だってキャスター色々やって貯金してるもん。」

「あれは高町家の家計に負担を掛けないための私と貴女の生活費と、なのは様との結婚資金と、なのは様とのマイホーム購入資金とか、なのは様とのハネムーン資金とか、なのは様とのドライブ用新車のローンとか、なのは様の学校への寄付金とかその他諸々だったの!?!というか貴女の食費と学費払ってるの私なんですけど!?!」

「半分以上言ってることがおかしいの!?!って新車って何! 私聞いてないの!?!」

「ご安心下さいませなのは様! 温泉旅行までには納車されますから。」

「そこじや無いの！そもそもキャスターさん免許・・・」

「それはそれ、これはこれ。私たち、みせーねんしゃだもん。」

「よしぶつ殺。マスター！こいつらとつちめて有り金巻き上げてやりましょう！」

「落ち着いて欲しいのキャスターさん!?あと免許は!?」

憤慨するキャスターにアサシンも負けじと胸（平ら）を反らす。

「おかしとか買っておさいふからっぽだもん！」

「ジルちゃん自慢できな・・・からっぽなの!?!」

「えっ!?!ジルさんあの万札は!?!」

アーチャーは申し訳なさそうに頭を下げる。

「我が家は生活費と医療費がかつかつで・・・あと教育費が多少。」

「その教育費が一番嵩みすぎとんやけどお!?!明らかに同学年より進みすぎとるしギリ

シヤ語とか必修科目ですらないも有るんやけどお!?!」

『教師権限です。』

『先生の馬鹿ア!?!』

『半馬です。』

『そういうことちゃうわあああああ!』

『主!?!』

ユーノも同じく頭を下げた。

「僕も今はあまり……というかこつちの世界だと使えないので……一族の所に戻つてから何とかお支払いを」

『ご安心下さいませ安珍様。私が何とか致しますので取り敢えず、焼けた鐘とかを探して喚んで頂ければ……』

「いや、その前に貴女は誰ですか!？」

『喚んでくれまへんと骨抜きますえ?』

「増えた!？」

「あれ?ユーノがオカシクなった?」

「んー?やっぱり貴女の所為では?」

「ちよつと魔力供給しただけだもん。」

そんな三人を暫く齒軋りしながら睨み付けていたキャスターだったが、

「くつ……社会不適合者共に支払い能力は無さそうですし……ううつ、なのは様との結婚資金があ……」

「ごめんなさいキャスターさん……後、最後のは要らないと思うの。」

何でですかあとなのはに縋りながら落ち込むキャスターを見ていたジルはふと思いついた。

「おねーちゃん。レイジングハート貸して?」

「え? 良いけど・・・何するの?」

なのはからレイジングハートを受け取ったジルは、ボソボソと小声で相談した後のはに返した。

「おねーちゃん、へんしんして?」

「変身? えつとレイジングハート、セットアップ。」

そのままなのはがピンク色の光に包まれ・・・

「な、なのは様・・・ゴフツ?!」

「えつ? に、にやああああ?!」

変身した姿は、いつもの制服を元にしたデザインでは無かった。

肩と胸元を出し太ももを大胆に晒した着物・・・

キャスターの衣装を蒼を白にした恰好である。

・・・しかも狐耳と尻尾付きで。

『『バリアジャケット・キャスターデザインver. 2』』

〈駄狐の衣装ということ以外素敵ですマスター。〉

「ジルちゃん! 何したの!?! ってキャスターさんは何で鼻血出して倒れてるの!?!」

「さ、流星に急にその恰好は私には刺激的過ぎて・・・」

「いや、キャスターさんの恰好だからね!」

鼻血を押さえながらよろよろ立ち上がるキャスターであったが、ジルの方を向くと笑顔になった。

「良いでしょう。なのは様の太ももに免じてアサシンはこれでチャラで。」

「太ももに免じて!」

「ん。ちなみに今日はさいせつていふかだつて。」

「素晴らしい。後でお小遣いあげます。」

「何で!?! つてジルちゃんにお小遣い渡してるのつてもしかして・・・」

「因みに紐パン。」

「倍プツシユで。」

「けいやくせいりつ。」

「売られたの!」

和やかに握手する二人を見て、絶対後でお母さんに言い付けるのと誓うのは。

そこへ、アーチャーが声を掛ける。

「それでは、私はなのはさんに何か教えましょう。」

「・・・成る程、それならアーチャーさんもチャラで良いですよ。」

暫く考えたアーチャーは案を出した。

「そうですね……例えば……英検対策何て如何でしょうか？」

和やかに提案するアーチャーになのは目を丸くした。

「えっ？英（語）検（定）なの？」

「ええ、英（霊）検（定）です。」

ある意味小学生が取るにはポピュラーな資格である。両者が共に思った。

「うーん。なのは様位の年齢なら3級位ですかね？」

「成る程……3級（BとCランク）位なら確かになのはさんなら直ぐ取れるでしょう。」

「それもそうですね。なら1級目指しましょうか、なのは様？」

「うん！頑張るの！」

「……解りました。ならば私が責任を持って貴女を1級（SとA+ランク）を取れるように指南しましょう。」

後に数多の英雄的魔導師を幾人も教導し、育成した伝説のエースオブエース。

この日、教導の師を得る。

